

一般県道米子岸本線(坂長バイパス) 地方道路交付金工事に係る
埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ

鳥取県西伯郡伯耆町

大殿下ノ原遺跡
坂長米子道端ノ上遺跡

鳥取県米子市

諏訪東土取場遺跡

一般県道米子岸本線(坂長バイパス) 改良工事に係る
埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ

鳥取県西伯郡伯耆町

坂長村上遺跡
坂長道端中遺跡

2007

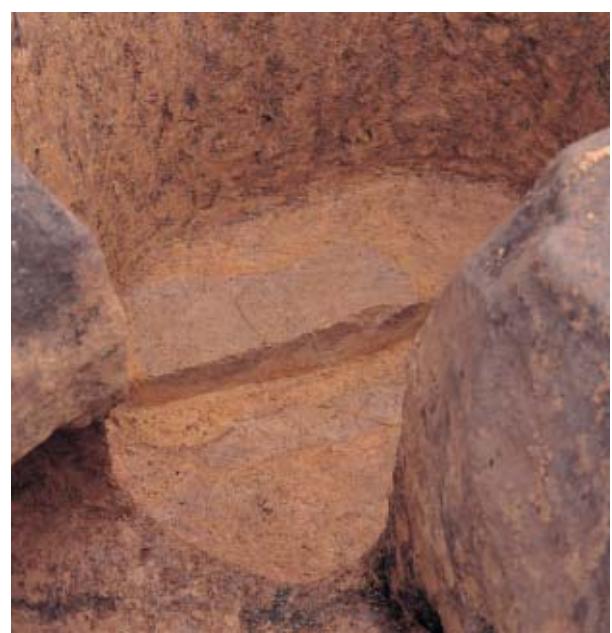
財団法人 鳥取県教育文化財団



1. 大殿下ノ原遺跡 SB - 09検出状況（東から）



2. 大殿下ノ原遺跡 SB - 09
P 4柱のあたり検出状況（東から）



3. 大殿下ノ原遺跡 SB - 09
P 4柱のあたり土層断面（南から）

巻頭図版 2



1. 坂長村上遺跡・坂長道端中遺跡 SI 1床面検出状況(南から)



2. 坂長村上遺跡・坂長道端中遺跡 SI 2完掘状況(西から)



1. 坂長村上遺跡・坂長道端中遺跡 出土円面硯（外面） 2. 坂長村上遺跡・坂長道端中遺跡 出土円面硯（内面）



3. 坂長村上遺跡・坂長道端中遺跡SI 2出土鍬・鋤先

巻頭図版 4



1. 坂長村上遺跡・坂長道端中遺跡出土尖頭器



2. 坂長村上遺跡・坂長道端中遺跡 尖頭器出土状況（東から）

序

近年、鳥取県では妻木晩田遺跡、青谷上寺地遺跡をはじめとする古代の重要な遺跡の発見が相次いでおり、当時の集落の姿や暮らしの様子が具体的に語られるようになります。

先人が残した素晴らしい遺産を後世に伝承することは、現在に生きる私たちの重要な責務です。

さて、西伯郡伯耆町において一般県道米子岸本線(坂長バイパス)の改良工事が着々と進められているところでありますが、当財団は、鳥取県からの委託を受け、この事業に先立ち埋蔵文化財の発掘調査を実施いたしました。

そのうち、平成17年度に調査を行った大殿下ノ原遺跡では奈良・平安時代の大型建物跡、平成18年度の坂長村上遺跡・坂長道端中遺跡では縄文時代草創期の尖頭器や飛鳥～平安時代の建物跡が検出されるなど、この地域の歴史を解明するための重要な資料を確認することができました。

また、発掘調査終盤には現地説明会を開催し、多くの方々に来場いただいたところですが、このたび、調査結果を報告書としてまとめることができました。

この報告書が、今後、郷土の歴史を解き明かしていく一助となり、埋蔵文化財に対する理解がより深まる 것을期待しております。

本書をまとめるにあたり、鳥取県西部総合事務所県土整備局、地元関係者の方々には、一方ならぬ御指導、御協力を頂きました。心から感謝し、厚く御礼申し上げます。

平成19年3月

財団法人 鳥取県教育文化財団
理事長 有田 博充

例　　言

1. 本報告書は、平成17年度「一般県道米子岸本線（坂長バイパス）地方道路交付金工事に係る埋蔵文化財発掘調査」、および平成18年度「一般県道米子岸本線（坂長バイパス）改良工事に係る埋蔵文化財発掘調査」として実施した大殿下ノ原遺跡、諏訪東土取場遺跡、坂長米子道端ノ上遺跡、坂長村上遺跡、坂長道端中遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本報告書に収載した遺跡の所在地は、以下のとおりである。
大殿下ノ原遺跡：鳥取県西伯郡伯耆町大殿字下ノ原2608ほか
諏訪東土取場遺跡：鳥取県米子市諏訪字東土取場1564ほか
坂長米子道端ノ上遺跡：鳥取県西伯郡伯耆町坂長字米子道端ノ上1086ほか
坂長村上遺跡：鳥取県西伯郡伯耆町坂長字村上1076ほか
坂長道端中遺跡：鳥取県西伯郡伯耆町坂長字米子道端ノ中2403ほか
3. 本発掘調査では、大殿下ノ原遺跡・諏訪東土取場遺跡650m²、坂長米子道端ノ上遺跡1752m²、坂長村上遺跡・坂長道端中遺跡6438m²を調査した。
4. 本報告書における方位は公共座標北を示し、座標値は、世界測地系に準拠した公共座標第V系の値である。また、レベルは海拔標高を表す。
5. 本報告書に掲載した地図は、岸本町（現伯耆町）発行の1/2,500地形図「岸本町全図8・9・16・17」、および国土地理院発行の1/50,000地形図「米子」を縮小し、加筆して使用した。
6. 本発掘調査にあたり、ローム層の堆積環境や火山灰の比定について鳥取大学名誉教授赤木三郎氏に現地指導を頂き、併せて石器の石材鑑定をお願いした。また、出土遺物を整理・評価するにあたり、鉄関連遺物の分類・抽出をたたら研究会委員穴澤義功氏に、瓦の分類・評価を帝塚山大学森郁夫氏に、土器の胎土分析を岡山理科大学白石純氏にお願いし、白石氏には玉稿を賜った。なお、鉄関連遺物観察表、および第68・69図鉄関連遺物構成図(第5章第3節)は穴澤氏による。記して深謝いたします。
7. 本発掘調査における遺跡の航空写真、現地における基準点測量および方眼測量、自然科学分析としてテフラ分析・植物珪酸体分析・花粉分析を業者に委託した。
8. 掲載した遺構図面は文化財主事が作成し、整理作業員が净書を行った。
9. 遺物の実測、净書は文化財主事、および整理作業員が行い、各段階で文化財主事が検討を行った。
10. 遺構、および遺物の写真撮影は文化財主事が行った。
11. 発掘調査によって作成された図面、写真などの記録類、および出土遺物などは鳥取県埋蔵文化財センターに保管されている。
12. 本報告書の作成は、高橋浩樹、高橋章司、加藤裕一、坂本嘉和、河合章行の協議に基づいてを行い、編集は高橋浩樹と坂本が行った。なお、文責は目次に記載した。
13. 現地調査、および報告書の作成にあたっては上記の方々のほかに、多くの方々からご指導、ご助言いただいた。明記して深謝いたします。(五十音順、敬称略)
池田　武　伊藤　創　岩田文章　内田律雄　大橋泰夫　角田寛幸　川上　豊　北　浩明
木田　真　佐伯純也　酒井雅代　下高瑞哉　杉本良巳　玉木秀幸　根鈴輝雄　野口良也
野田久男　東方仁史　柳本照男　山口　剛　山中敏史

凡　例

1. 遺跡の略称は、大殿下ノ原遺跡と諏訪東土取場遺跡はドトリバ、坂長米子道端ノ上遺跡はミチバタ、坂長村上遺跡と坂長道端中遺跡はムラカミとした。

2. 遺物の注記にはすべて遺跡略称、および遺構番号を記載している。参照の際には凡例末尾に記載した新旧遺構対照表をご覧いただきたい。

3. 遺構の略称は、下記のとおりとした。

S I : 竪穴住居跡、および竪穴建物跡 S S : 段状遺構 S B : 掘立柱建物跡 S D : 溝状遺構
S K : 土坑

4. 大殿下ノ原遺跡で検出した掘立柱建物跡については、過去の諏訪東土取場遺跡と大殿下ノ原遺跡の調査で検出した分からの通し番号とし、その表記方法は、(財)米子市教育文化事業団が調査を行った際に採用した表記方法に準拠した。

5. 本報告書における遺物の掲載番号、および縮尺は次のように記す。

番号のみ：土器・土製品 1/4 S：石器 1/3、2/3 F：鉄製品・鉄滓 1/2、1/3

C：青銅製品 1/2

6. 本文中、挿図中、遺物観察表中、および写真図版中の遺物番号は一致する。

7. 遺物実測図のうち須恵器は断面を黒塗り、それ以外は白抜きで表した。また、奈良時代～中世の土器底面にある糸切り痕のうち、Ⓐは回転糸切り、Ⓑは静止糸切りであることを示す。

8. 土器実測図に用いた [] は赤色塗彩された部分を表す。

9. 官衙に関連する用語については下記の文献に基づいた。

山中敏史ほか 2003 『古代の官衙遺跡 I 遺構編』 独立行政法人文化財研究所 奈良文化財研究所

山中敏史ほか 2004 『古代の官衙遺跡 II 遺物・遺跡編』 独立行政法人文化財研究所 奈良文化財研究所

10. 遺構・遺物の時期決定には主に下記の文献を参照した。

清水真一 1992 「因幡・伯耆地域」 『弥生土器の様式と編年 山陽・山陰編』 木耳社

巽淳一郎 1979 「III-2 土器類」 『伯耆国跡発掘調査概報(第5・6次)』 倉吉市教育委員会

角田徳幸 2003 「第5章まとめ 第3節奈良・平安時代の施設群」 『史跡出雲国府-1-』 島根県教育委員会

中森 祥 2005 「伯耆における9・10世紀の様相 - 西伯耆を中心に - 」 『第4回山陰中世土器検討会 資料集 平安時代前期の土器様相 - 中国地方を中心に - 』 山陰中世土器検討会

玉木秀幸 2006 「伯耆の土器様相」 『第5回山陰中世土器検討会資料集 山陰における中世前期の諸様相 - 伯耆・出雲を中心として - 』 山陰中世土器検討会

新旧遺構対象表

大殿下ノ原遺跡		坂長米子道端ノ上遺跡		坂長村上遺跡・坂長道端中遺跡							
新遺構名	旧遺構名	新遺構名	旧遺構名	新遺構名	旧遺構名	新遺構名	旧遺構名	新遺構名	旧遺構名	新遺構名	旧遺構名
S B-07	S B 3	S K 1	S K 1	S D 1	S D 16	S D 9	S D 4	S D 17	S D 14	S K 7	S K 9
S B-08	S B 2	S K 2	S K 2	S D 2	S D 17	S D 10	S D 5	S D 18	S D 15	S K 8	S K 13
S B-09	S B 1	S K 3	S K 4	S D 3	S D 18	S D 11	S D 8	S K 1	S K 1	S K 9	S K 7
		S K 4	S K 3	S D 4	S D 1	S D 12	S D 9	S K 2	S K 2	S K 10	S K 8
		S K 5	S K 5	S D 5	S D 2	S D 13	S D 10	S K 3	S K 3	S K 11	S K 10
				S D 6	S D 6	S D 14	S D 11	S K 4	S K 4	S K 12	S K 12
				S D 7	S D 7	S D 15	S D 12	S K 5	S K 5	S K 13	S K 14
				S D 8	S D 3	S D 16	S D 13	S K 6	S K 6		

目 次

序

例言・凡例

第1章 調査の経緯と経過	高橋浩樹	1	
第1節 調査に至る経緯		1	
第2節 調査の経過		2	
第3節 調査体制		4	
第2章 位置と環境	坂本	5	
第1節 地理的環境		5	
第2節 歴史的環境		5	
第3節 遺跡周辺の地名		10	
第3章 大殿下ノ原遺跡・諏訪東土取場遺跡		11	
第1節 遺跡の立地と土層堆積	坂本	11	
第2節 遺構と遺物	加藤・坂本	11	
1. 概要	11	3. 土坑	17
2. 掘立柱建物跡	12	4. 遺構外出土遺物	18
第4章 坂長米子道端ノ上遺跡		19	
第1節 遺跡の立地と土層堆積	坂本	19	
第2節 遺構と遺物	加藤・坂本	19	
1. 概要	19	4. 棚列	24
2. 竪穴住居跡	22	5. 土坑	25
3. 掘立柱建物跡	24	6. 遺構外出土遺物	25
第5章 坂長村上遺跡・坂長道端中遺跡		29	
第1節 遺跡の立地と土層堆積	坂本	29	
第2節 旧石器時代～縄文時代の調査	高橋浩樹・河合	34	
1. 概要	34	2. 出土石器	36
3. 段状遺構	48	4. 掘立柱建物跡	49
5. 集石遺構	49	6. 溝状遺構	49

7. 土坑	51	9. 遺構外出土遺物	55
8. ピット出土遺物	54		
第4節 近世、およびその他の遺構・遺物		高橋浩樹・河合	88
1. 概要	88	3. 土坑	92
2. 溝状遺構	88	4. 遺構外出土遺物	94
第6章 自然科学分析			97
第1節 坂長村上遺跡・坂長道端中遺跡におけるテフラ分析	97	株式会社 古環境研究所	97
1. テフラ分析	97	2. 花粉分析	100
第2節 坂長村上遺跡・坂長道端中遺跡における土壤分析	104	株式会社 古環境研究所	104
1. 植物珪酸体分析	104	2. 花粉分析	108
第3節 坂長村上遺跡・坂長道端中遺跡における須恵器、瓦の胎土分析		岡山理科大学自然科学研究所 白石 純	112
第7章 考察			117
第1節 坂長村上遺跡出土の縄文時代草創期資料について		河合	117
第2節 奈良・平安時代における施設群の検討		坂本	128
第8章 総括		高橋浩樹・坂本	137

図版

挿図目次

第1章 調査の経緯と経過		第31図 グリッド配置図、および石器出土地点	
第1図 調査地位置図	1	35
第2図 調査地周辺グリッド図	2	第32図 出土石器	37
第2章 位置と環境		第33図 古代・中世遺構分布図	39
第3図 遺跡位置図	5	第34図 S I 1	40
第4図 周辺遺跡分布図 (1)	7	第35図 S I 1 出土遺物 (1)	41
第5図 周辺遺跡分布図 (2)	9	第36図 S I 1 出土遺物 (2)	42
第6図 調査地周辺小字図	10	第37図 S I 1 出土遺物 (3)	43
第3章 大殿下ノ原遺跡・諏訪東土取場遺跡		第38図 S I 2	45
第7図 調査区土層柱状図	11	第39図 S I 2 出土遺物 (1)	45
第8図 調査区位置図	11	第40図 S I 2 出土遺物 (2)	46
第9図 遺構分布図	13	第41図 S I 2 出土遺物 (3)	47
第10図 SB-09	14	第42図 S S 1	48
第11図 SB-09出土遺物	15	第43図 S B 1	50
第12図 SB-07	16	第44図 集石 1・2	51
第13図 SB-08	16	第45図 S D 1・2・3	52
第14図 SK 1	17	第46図 S D 4・5・6・7・8・9・10	52
第15図 SK 2	17	第47図 S K 1・2・3・4・5・6・7	53
第16図 遺構外出土遺物	18	第48図 S K 8	54
第4章 坂長米子道端ノ上遺跡		第49図 ピット出土遺物	54
第17図 包含層出土遺物	19	第50図 II層出土土器・土製品 (1)	57
第18図 調査区土層断面図	20	第51図 II層出土土器・土製品 (2)	58
第19図 遺構分布図	21	第52図 II層出土土器・土製品 (3)	59
第20図 S I 1	22	第53図 II層出土土器・土製品 (4)	60
第21図 S I 1 出土遺物	23	第54図 その他当該期の土器・土製品 (1)	
第22図 SB 1	24	60
第23図 SA 1	24	第55図 その他当該期の土器・土製品 (2)	
第24図 SK 1・2・3・4・5	26	61
第25図 遺構外出土遺物	27	第56図 瓦類 (1)	67
第5章 坂長村上遺跡・坂長道端中遺跡		第57図 瓦類 (2)	68
第26図 遺跡周辺土層柱状図	29	第58図 瓦類 (3)	69
第27図 調査区土層断面図	30	第59図 瓦類 (4)	70
第28図 III・IV層出土遺物 (1)	32	第60図 鍛冶関連遺物グリッド別重量図	73
第29図 III・IV層出土遺物 (2)	33	第61図 II層出土鍛冶関連遺物 (1)	75
第30図 V・VI層堆積状況図	34	第62図 II層出土鍛冶関連遺物 (2)	76

第63図	II層出土鍛治関連遺物 (3)	77	第83図	坏、高台付坏、高坏の時期別による 胎土比較 (K_2O-CaO 散布図)	114
第64図	II層出土鉄製品 (1)	77	第84図	瓦の時期別胎土比較 (K_2O-CaO 散布図)	114
第65図	II層出土鉄製品 (2)	78	第85図	須恵器と瓦の時期別胎土比較 (K_2O-CaO 散布図)	115
第66図	III・IV層出土鉄関連遺物	79	第86図	須恵器と瓦の時期別胎土比較 (Rb-Sr散布図)	115
第67図	青銅製品	79	第87図	坂長村上遺跡・坂長道端中遺跡と 大井窯跡群の胎土比較 (K_2O-CaO 散布図)	115
第68図	鉄関連遺物構成図 (1)	86			
第69図	鉄関連遺物構成図 (2)	87	第7章 考察		
第70図	近世、およびその他の遺構分布図	88	第88図	坂長村上遺跡出土尖頭器実測図 ..	118
第71図	SD 11・12・13・14・15	89	第89図	坂長村上遺跡出土資料と各石材成分 組成比較図	119
第72図	SD 16・17	91	第90図	有茎尖頭器実測図	122
第73図	SD 18	92	第91図	尖頭器実測図	123
第74図	SK 9・10・11	93	第92図	縄文時代草創期関連資料分布図 ..	125
第75図	SK 12・13	94	第93図	飛鳥時代～平安時代遺構分布図 ..	128
第76図	遺構外出土石器	95	第94図	坂長下屋敷遺跡周辺遺構変遷図 ..	129
第6章 自然科学分析			第95図	長者屋敷遺跡遺構配置図 ..	132
第77図	土壤サンプル採取地点	97	第96図	遺跡周辺地形図 ..	133
第78図	火山ガラス比ダイヤグラム	98			
第79図	B地点における花粉ダイアグラム ..	103			
第80図	II～IV層における植物珪酸体分析 結果	107			
第81図	II～IV層における花粉ダイアグラム	111			
第82図	器種別の胎土比較 (K_2O-CaO 散布 図)	114			

挿表目次

第3章 大殿下ノ原遺跡・諏訪東土取場遺跡					
第1表	掘立柱建物跡一覧表	12	第10表	鍛治関連遺物重量組成	73
第2表	SB-09(第10図)土層堆積一覧 ..	15	第11表	鉄製品数量組成	73
第3表	SB-09柱穴計測表	15	第6章 自然科学分析		
第4表	SB-07柱穴計測表	17	第12表	火山ガラス比分析結果	98
第5表	SB-08柱穴計測表	17	第13表	屈折率測定結果	98
第5章 坂長村上遺跡・坂長道端中遺跡			第14表	坂長村上遺跡・坂長道端中遺跡 V・VI層における花粉分析結果 ..	102
第6表	S B 1柱穴計測表	51	第15表	坂長村上遺跡・坂長道端中遺跡に おける植物珪酸体分析結果	106
第7表	瓦類グリッド別出土量	65	第16表	坂長村上遺跡・坂長道端中遺跡に おける花粉分析結果	110
第8表	平瓦重量比率	66			
第9表	鍛治関連遺物重量比率	72			

第17表	坂長村上遺跡・坂長道端中遺跡胎土分析試料および分析値一覧表	116	第20表	坂長下屋敷遺跡周辺遺構一覧表	136
第18表	坂長村上遺跡出土資料分析値一覧表	119	第21表	長者屋敷遺跡遺構一覧表	136

第7章 考察

第19表	鳥取県内における縄文時代草創期資料	121
------	-------------------	-----

図版目次

巻頭図版

1 - 1	大殿下ノ原遺跡 S B - 09 検出状況 (東から)	
1 - 2	大殿下ノ原遺跡 S B - 09 P 4 柱のあたり検出状況 (東から)	
1 - 3	大殿下ノ原遺跡 S B - 09 P 4 柱のあたり土層断面 (南から)	
2 - 1	坂長村上遺跡・坂長道端中遺跡 S I 1 床面検出状況 (南から)	
2 - 2	坂長村上遺跡・坂長道端中遺跡 S I 2 完掘状況 (西から)	
3 - 1	坂長村上遺跡・坂長道端中遺跡 出土円面硯 (外面)	
3 - 2	坂長村上遺跡・坂長道端中遺跡 出土円面硯 (内面)	
3 - 3	坂長村上遺跡・坂長道端中遺跡 S I 2 出土鍬・鋤先	
4 - 1	坂長村上遺跡・坂長道端中遺跡 出土尖頭器	
4 - 2	坂長村上遺跡・坂長道端中遺跡 尖頭器出土状況 (東から)	

図 版

1	長者原台地周辺空中写真 (1)
2	長者原台地周辺空中写真 (2)
3 - 1	調査地周辺の地形 (1) (西から)
3 - 2	調査地周辺の地形 (2) (南から)
4 - 1	調査地周辺の地形 (3) (東から)

4 - 2	調査地周辺の地形 (4) (上が北)
第3章	大殿下ノ原遺跡・諏訪東土取場遺跡
5 - 1	S B - 07・08・09 完掘状況 (上が北)
5 - 2	S B - 09 完掘状況 (東から)
6 - 1	S B - 09 P 1 (南東から)
6 - 2	S B - 09 P 2 (北西から)
6 - 3	S B - 09 P 4 遺物出土状況 (北から)
6 - 4	S B - 09 P 6 (南から)
6 - 5	S B - 09 P 9 (西から)
6 - 6	S B - 09 P 10 (北西から)
6 - 7	S B - 07 P 1 (南から)
6 - 8	S B - 08 P 5 (南から)
7 - 1	S K 1 完掘状況 (東から)
7 - 2	S K 2 完掘状況 (北東から)
7 - 3	遺構外出土土器
7 - 4	S B - 09 出土鉄関連遺物
第4章	坂長米子道端ノ上遺跡
8 - 1	調査地全景 (北東から)
8 - 2	谷部土層堆積状況 (北から)
8 - 3	S I 1 完掘状況 (西から)
9 - 1	S I 1 P 8 (南から)
9 - 2	S I 1 P 2 内礫出土状況 (南西から)
9 - 3	S B 1 完掘状況 (北から)
9 - 4	S A 1 完掘状況 (北東から)
10 - 1	S K 1 完掘状況 (西から)
10 - 2	S K 2 完掘状況 (北から)
10 - 3	S K 3 完掘状況 (東から)
10 - 4	S K 4 完掘状況 (北から)

- 10-5 SK 5 土層断面 (南から)
 10-6 SK 5 完掘状況 (西から)
 10-7 SI 1 出土土器 (1)
 11 SI 1 出土土器 (2)
 12 遺構外出土土器
 13 遺構外出土瓦・鉄製品
- 第5章 坂長村上遺跡・坂長道端中遺跡**
- 14-1 調査地全景(上が北西)
 14-2 調査区土層堆積状況 (東から)
 15-1 石器出土状況(西から)
 15-2 尖頭器(S 6 先端)出土状況 (東から)
 15-3 尖頭器(S 6 基部)出土状況(南から)
 15-4 尖頭器(S 2)出土状況
 15-5 ナイフ形石器 (S 1) 出土状況
 16-1 古代・中世の遺構全景(東から)
 16-2 SI 1 床面検出状況 (南から)
 17-1 SI 1 土層堆積状況(東から)
 17-2 SI 1 検出面土器出土状況(南から)
 17-3 SI 1 P 3 (南から)
 17-4 SI 1 P 4 (南から)
 18-1 SI 2 完掘状況 (西から)
 18-2 SI 2 焼土検出状況 (西から)
 18-3 SI 2 P 1 (西から)
 18-4 SI 2 土器出土状況 (東から)
 19-1 SB 1 検出状況 (南東から)
 19-2 SB 1 完掘状況 (南東から)
 19-3 SS 1 完掘状況 (西から)
 20-1 SB 1 P 1 (南から)
 20-2 SB 1 P 2 (西から)
 20-3 SB 1 P 4 (南から)
 20-4 SB 1 P 9 (南から)
 20-5 集石 1 (南から)
 20-6 集石 2 (南から)
 20-7 SD 1 完掘状況 (西から)
 20-8 SD 2・3 完掘状況 (西から)
 21-1 SD 4・5・6・7・8・9・10
 完掘状況(南東から)
 21-2 SK 1・2・3 完掘状況 (南から)
- 21-3 SK 4 完掘状況 (南西から)
 21-4 SK 5 完掘状況 (南西から)
 22-1 SK 6 完掘状況 (南西から)
 22-2 SK 7 完掘状況 (南から)
 22-3 SK 8 完掘状況 (南から)
 22-4 SD 16・17 完掘状況 (西から)
 23-1 SD 11・12・13 完掘状況 (南から)
 23-2 SD 14・15 完掘状況 (北から)
 23-3 SD 18 完掘状況 (南から)
 23-4 SK 9 完掘状況 (北から)
 23-5 SK 10 完掘状況 (東から)
 24-1 SK 11 磕出土状況 (北から)
 24-2 SK 11 土層断面 (東から)
 24-3 SK 12 検出状況 (西から)
 24-4 SK 13 検出状況 (北東から)
 25 III・IV層出土土器・土製品 (1)
 26-1 III・IV層出土土器・土製品 (2)
 26-2 SI 1 出土土器・土製品 (1)
 27 SI 1 出土土器・土製品 (2)
 28 SI 1 出土土器・土製品 (3)
 29 SI 1 出土土器・土製品 (4)
 30-1 SI 1 出土鉄関連遺物 (1)
 30-2 SI 1 出土鉄関連遺物 X線写真 (1)
 31-1 SI 1 出土鉄関連遺物 (2)
 31-2 SI 1 出土鉄関連遺物 X線写真 (2)
 31-3 SI 2 出土土器 (1)
 32-1 SI 2 出土土器 (2)
 32-2 SI 2 出土移動式竈
 32-3 SI 2 出土被熱石
 33-1 SI 2 出土鉄関連遺物
 33-2 SI 2 出土鉄関連遺物 X線写真
 33-3 SI 2 出土鉄斧
 33-4 SI 2 出土鉄斧 X線写真
 33-5 SI 2 出土鍬・鋤先
 33-6 SI 2 出土鍬・鋤先 X線写真
 34-1 SS 1 出土土製品
 34-2 SS 1 出土土器
 34-3 SB 1、SK 1・3・5 出土土器

- | | | | |
|------|----------------------------------|-------------------|--------------------------------------|
| 34-4 | S K 8 出土土器 | 52-1 | II層出土鉄製品 (1) |
| 34-5 | S B 1、SK 1、P 1・13出土
鉄関連遺物 | 52-2 | II層出土鉄製品X線写真 (1) |
| 34-6 | S B 1・SK 1・P 1・13出土
鉄関連遺物X線写真 | 53-1 | II層出土鉄製品 (2) |
| 35 | II層出土土器・土製品 (1) | 53-2 | II層出土鉄製品X線写真 (2) |
| 36 | II層出土土器・土製品 (2) | 53-3 | III・IV層出土鉄関連遺物 |
| 37 | II層出土土器・土製品 (3) | 53-4 | III・IV層出土鉄関連遺物X線写真 |
| 38 | II層出土土器・土製品 (4) | 54-1 | 青銅製品 |
| 39 | II層出土土器・土製品 (5) | 54-2 | 青銅製品X線写真 (1) |
| 40 | II層出土土器・土製品 (6) | 54-3 | 青銅製品X線写真 (2) |
| 41 | II層出土土器・土製品 (7) | 54-4 | S K 9・11出土土器・磁器 |
| 42 | II層出土土器・土製品 (8) | 54-5 | S D 13・16出土鍛冶関連遺物 |
| 43 | 古代・中世土器 (1) | 54-6 | S D 13・16出土鍛冶関連遺物X線写真 |
| 44 | 古代・中世土器 (2) | 55-1 | 旧石器時代～縄文時代草創期の石器 |
| 45 | 瓦類 (1) | 55-2 | 石斧 |
| 46 | 瓦類 (2) | 56 | 砥石 |
| 47 | 瓦類 (3) | 第6章 自然科学分析 | |
| 48 | 瓦類 (4) | 57 | 坂長村上遺跡・坂長道端中遺跡の
花粉・胞子 (1) |
| 49 | 瓦類 (5) | 58 | 坂長村上遺跡・坂長道端中遺跡の
植物珪酸体 (プラント・オパール) |
| 50 | II層出土鍛冶関連遺物 | 59 | 坂長村上遺跡・坂長道端中遺跡の
花粉・胞子 (2) |
| 51 | II層出土鍛冶関連遺物
X線写真 | | |

第1章 調査の経緯と経過

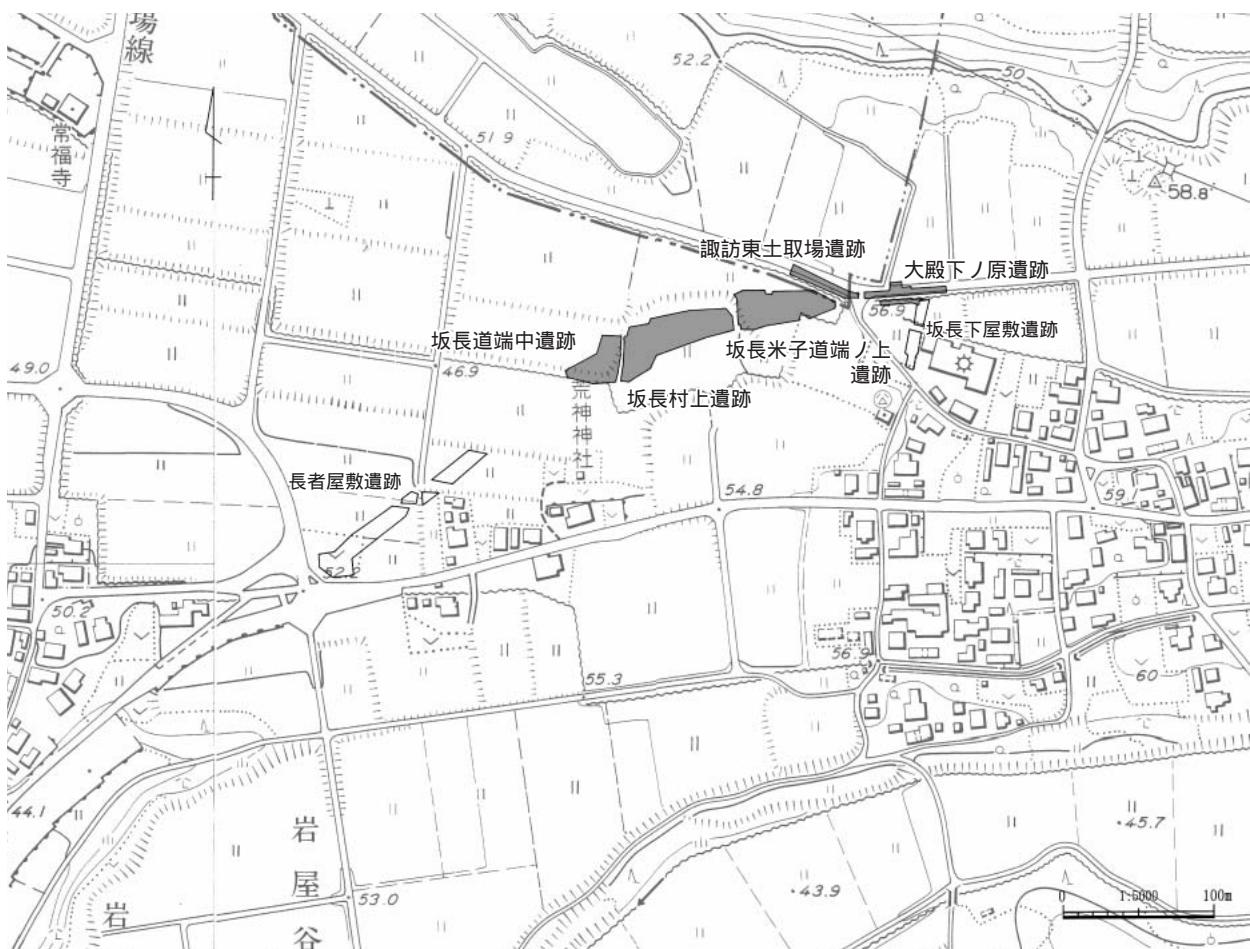
第1節 調査に至る経緯

大殿下ノ原遺跡、諏訪東土取場遺跡、坂長米子道端遺跡は、平成17(2005)年度に一般県道米子岸本線（坂長バイパス）地方道路交付金工事に伴い、坂長村上遺跡、坂長道端中遺跡は、平成18(2006)年度に一般県道米子岸本線（坂長バイパス）改良工事に伴って調査を実施した遺跡である。これらの遺跡は鳥取県米子市諏訪、西伯郡伯耆町大殿、同町坂長地内の道路ルート上に存在する。

調査した遺跡群は日野川左岸の通称「長者原台地」上にある坂中集落の北西側に広がる水田等の耕作地帯に位置しており、その東隣には坂長下屋敷遺跡が、谷を挟んだ南西側には長者屋敷遺跡が所在しており、今までの調査によって会見郡衙に関連すると考えられる遺構が確認されている^(註1)。

道路建設工事に先立ち、鳥取県西部総合事務所長から道路ルート上における埋蔵文化財の有無の照会を受けた伯耆町教育委員会が、国および県の補助金を受けて平成16(2004)年度に坂長米子道端ノ上遺跡、坂長村上遺跡、および坂長道端中遺跡について試掘調査を実施した。その結果、古代を中心とする遺構や遺物が検出され、遺跡の存在が確認された^(註2)。また、大殿下ノ原遺跡と諏訪東土取場遺跡の一部は平成16・17年度に財団法人米子市教育文化事業団によって発掘調査が実施されており^(註3)、古代の遺構が確認されている。

これらの結果を受け、鳥取県西部総合事務所県土整備局と鳥取県教育委員会事務局文化課は協議



第1図 調査地位置図

第1節 調査に至る経緯

を行ったが、現状保存は困難との判断にいたった。そのため、鳥取県西部総合事務所長は文化財保護法第94条に基づく発掘通知を鳥取県教育委員会教育長に提出し、事前発掘調査の指示を受けたため、発掘調査を財団法人鳥取県教育文化財団に委託した。そこで、財団法人鳥取県教育文化財団理事長は鳥取県教育委員会教育長に文化財保護法第92条に基づく発掘調査の届出を提出し、財団法人鳥取県教育文化財団調査室岸本調査事務所が調査を実施した。

(註1) 富長源十郎ほか 1982 『長者原遺跡群発掘調査報告書』 岸本町教育委員会

森本倫弘ほか 2006 『長者屋敷遺跡 坂長下屋敷遺跡』 財団法人鳥取県教育文化財団

(註2) 伯耆町教育委員会 角田寛幸氏、ご教示。

(註3) 高橋浩樹 2006 『諏訪東土取場遺跡 大殿下ノ原遺跡』 財団法人米子市教育文化事業団

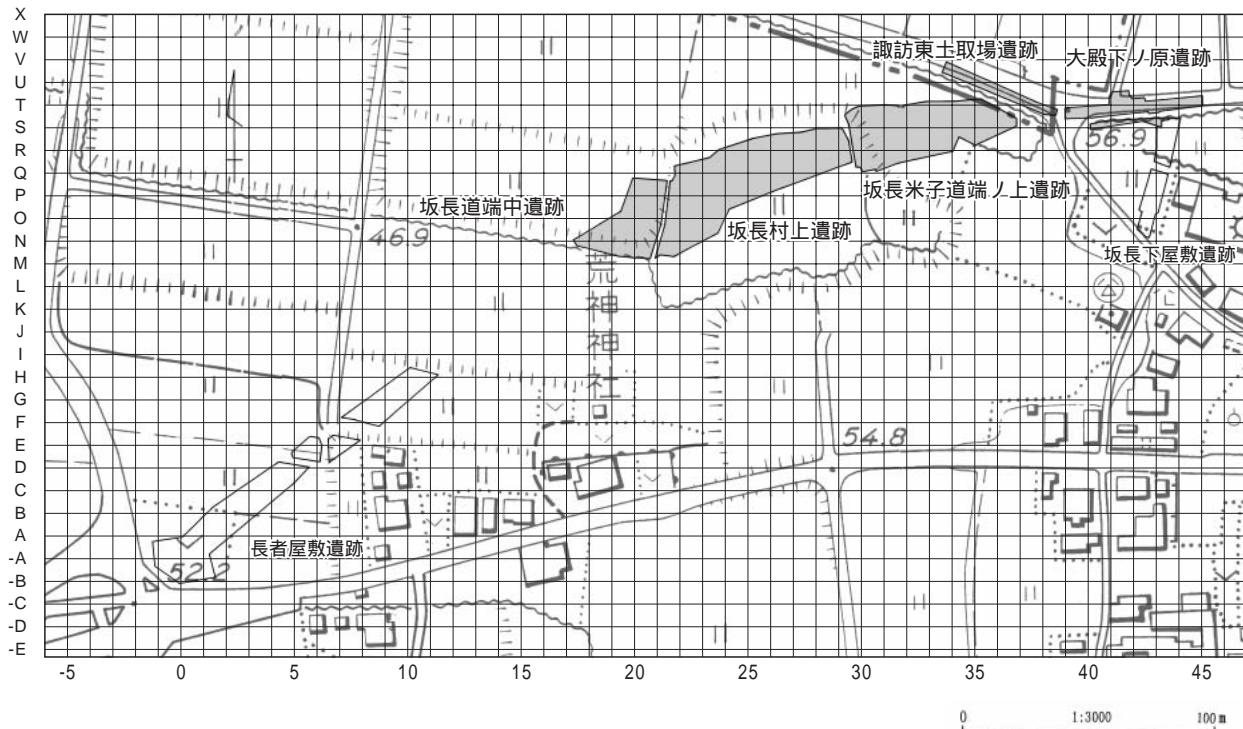
第2節 調査の経過

本報告書に記載の遺跡は、平成17(2005)年度、および平成18(2006)年度に調査を実施したものである。平成17年度には坂長米子道端ノ上遺跡、大殿下ノ原遺跡、諏訪東土取場遺跡の3遺跡、平成18年度には坂長村上遺跡、坂長道端中遺跡の2遺跡の調査を実施した。

坂長米子道端ノ上遺跡

坂長米子道端ノ上遺跡の調査は平成17年9月13日に着手した。9月13日から16日にかけて重機による表土剥ぎを行い、その後、9月20日から発掘作業員の稼動により遺構検出作業を開始した。9月21日には業者委託により4級基準点と公共座標第V系に基づく9m間隔の方眼杭を設置した包含層出土遺物はこの方眼杭に基づいて、グリッド毎、層毎に一括して取り上げた。

調査は、調査区際にトレーナーを掘削し、堆積状況を確認しながら行った。調査区西半の斜面部では、包含層や遺構が良好な状態で存在したが、調査区の東半では圃場整備等により著しく削平を受けていた。



第2図 調査地周辺グリッド図

検出した遺構は古墳時代前期の竪穴住居跡1棟、時期不明の掘立柱建物跡1棟、柵列1基、土坑5基であり、須恵器、土師器、軒平瓦などが出土した。

調査は11月1日に終了した。

大殿下ノ原遺跡・諏訪東土取場遺跡

大殿下ノ原遺跡と諏訪東土取場遺跡の調査は平成17年11月10日に着手した。11月10日から17日にかけて重機による表土剥ぎを行い、その後、11月18日から発掘作業員の稼動により遺構検出作業を開始した。

調査は、財団法人米子市教育文化事業団が実施した北側隣接地の調査結果を勘案しながら行った。調査地は耕作や道路工事による搅乱が著しく、ごく一部で古代の包含層を確認したが、大部分は旧耕作土や道路工事の際の造成土を除去すると最終遺構面であるローム層となっていた。

検出した遺構は古代の掘立柱建物跡3棟、土坑2基であり、須恵器、土師器などが出土した。

調査は平成18年1月17日に終了した。

坂長村上遺跡・坂長道端中遺跡

坂長村上遺跡と坂長道端中遺跡の調査は平成18年4月14日に着手した。4月14日から26日にかけて重機による表土剥ぎ等を行い、4月26日から発掘作業員の稼動により遺構検出作業を開始した。4月27日から28日にかけて業者委託により4級基準点と公共座標第V系に基づく9m間隔の方眼杭を設置した。包含層出土遺物はこの方眼杭に基づいて、グリッド、層毎に一括して取り上げた。

調査は、調査区を横断するトレンチを4本設定し、遺構面を確認しつつ面的に進めていった。古代～中世の遺構の調査終了後、7月27日に航空写真撮影を実施し、その後、下層の調査を行った。

9月28日には記者発表を行い、9月30日に現地説明会を開催した。当日は、天気にも恵まれ72人の参加を得た。

古代の包含層から尖頭器が出土していたため、予定範囲の調査が終了した段階でローム漸移層にサブトレンチを入れたところ、新たに尖頭器が出土した。そのため、当該期の遺構・遺物の有無を確認するためにローム漸移層、およびローム層の調査を行った。その結果、遺構は確認できなかつたが、旧石器時代～縄文時代草創期の石器が新たに出土した。

調査は11月30日に終了した。

検出した遺構は飛鳥時代～平安時代の竪穴建物跡2棟、段状遺構1基、掘立柱建物跡1棟などであり、ナイフ形石器、尖頭器、須恵器、土師器、円面硯、瓦、鉄関連遺物などが出土した。

第3節 調査体制

調査は、以下の体制で実施した。

平成17(2005)年度

○調査主体

財団法人鳥取県教育文化財団

理 事 長 有田 博充
事 務 局 長 中村 登

財団法人鳥取県教育文化財団調査室

室 長 田中 弘道（兼・県埋蔵文化財センター所長）
次 長 國弘 博之
文 化 財 主 事 山杵 雅美
事 務 職 員 谷垣真須美 小谷 有里

○調査担当

財団法人鳥取県教育文化財団調査室 岸本調査事務所

所 長 國田 俊雄
文 化 財 主 事 森本 倫弘 加藤 裕一 坂本 嘉和

平成18(2006)年度

○調査主体

財団法人鳥取県教育文化財団

理 事 長 有田 博充
事 務 局 長 中村 登

財団法人鳥取県教育文化財団調査室

室 長 久保穰二朗（兼・県埋蔵文化財センター所長）
次 長 國弘 博之
文 化 財 主 事 西川 徹
事 務 職 員 岡田美津子 船曳 朋子

○調査担当

財団法人鳥取県教育文化財団調査室 岸本調査事務所

所 長 國田 俊雄
文 化 財 主 事 高橋 浩樹 坂本 嘉和（坂長村上遺跡・坂長道端中遺跡担当）
加藤 裕一 河合 章行（坂長第7遺跡担当）
高橋 章司（坂長第8遺跡、坂長下門前遺跡担当）
調 査 員 祝原 幸治（坂長第8遺跡、坂長下門前遺跡担当）

○調査協力（平成17～18年度）

財団法人米子市教育文化事業団 西部土地改良区 伯耆町教育委員会

有限会社エムジーエス 米子市教育委員会（五十音順、敬称略）

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

本遺跡群は鳥取県西部、米子市諏訪、西伯郡伯耆町大殿、および同町坂長に位置する。日野川左岸の標高50m前後の河岸段丘上に立地し、地形は北にいくほど低くなる。この河岸段丘は大山火山噴射物によって形成されたと考えられる凝灰角礫岩からなる。噴射物は大山外輪山が形成された当時、日野川を越え、左岸地域に及んでいたと考えられ、一時日野川を堰き止めていたと推察されている。それが、やがて日野川下流からの頭部侵蝕が始まり、侵蝕基準面が低下することによって、現在の河岸段丘が形成されたと考えられる。一般に壯年期の地形を示す。遺跡の背後には標高226mの越敷山を擁する起伏した丘陵地帯が広がっており、前方には米子平野を眺望することができる。伯耆町大殿付近から米子市青木周辺にかけて手指状に広がる河岸段丘、ないしは丘陵地帯を一般に「長者原台地」と称している。長者原台地上には本遺跡群をはじめ、長者屋敷遺跡・坂長下屋敷遺跡、諏訪遺跡群、福市遺跡、青木遺跡、諸木遺跡など数多くの遺跡が分布している。

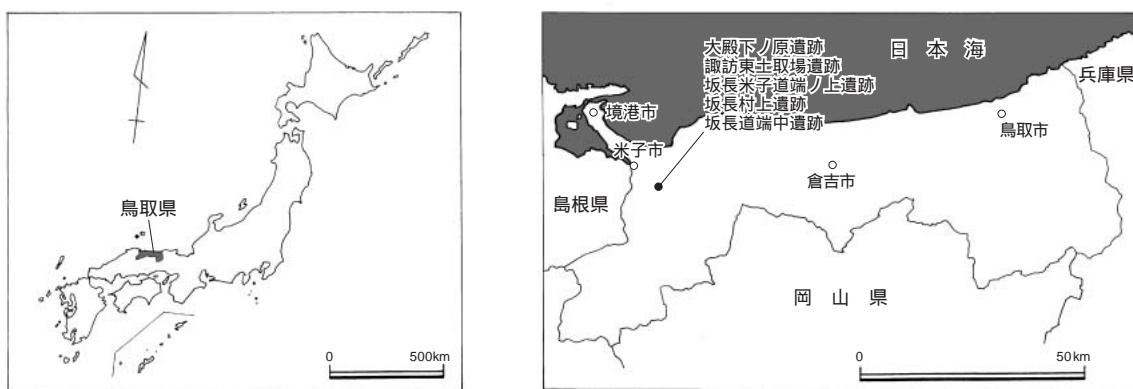
第2節 歴史的環境

旧石器時代

長者原台地上の諏訪西山ノ後遺跡(24)でナイフ型石器が2点出土し、1点はローム層中から出土している。ナイフ型石器は泉中峰遺跡(79)、小波原畠遺跡(80)でも出土しており、泉中峰遺跡では玉髓製の縦長剥片を素材とし、一側縁に刃つぶし加工を施している。

縄文時代

草創期に遡る可能性がある遺物として貝田原遺跡(61)、奈喜良遺跡(20)で安山岩製の有舌尖頭器が表採されている。早期では上福万遺跡(73)で、集石遺構・土坑・ピット状遺構が多数検出されている。日野川右岸では久古北田山遺跡(64)、須村遺跡(66)、林ヶ原遺跡(69)で押型文土器が出土している。前期～中期にかけては低湿地遺跡で動植物遺体が出土し、当時の生業の一端を窺い知ることができる。陰田第9遺跡(9)ではシカやイノシシなどの獣骨が多量に出土しており、解体痕が認められるものもある。目久美遺跡(8)では貯蔵穴からドングリ、トチ、クルミ等が出土している。中期



第3図 遺跡位置図

第2節 歴史的環境

では林ヶ原遺跡で墓の可能性がある土壙が確認されている。後・晚期には遺跡数は増えるが、集落の様相は必ずしも明らかではない。日野川右岸の久古第3遺跡(60)では晚期の竪穴住居跡が検出されている。

弥生時代

稻作の伝播により、中海沿岸の低湿地遺跡で水田跡が検出されている。前期では目久美遺跡、後期では池ノ内遺跡(7)、前期末から後期にかけての長砂第2遺跡(4)が知られている。前期の遺跡では宮尾遺跡(28)、諸木遺跡(29)で環濠が検出されている。清水谷遺跡(17)でも前期末から中期前半の環濠が存在するが、環濠内からは竪穴住居跡等は確認されていない。中期になると日野川中流域では下山南通遺跡(70)、長山馬籠遺跡(71)で集落が形成される。林ヶ原遺跡では木棺墓が確認され、供獻土器が出土している。中期後葉以降は丘陵上での遺跡数が増加し、妻木晚田遺跡(83)に代表される拠点的な集落が形成される。遺跡周辺では越敷山遺跡群(45)、青木遺跡(22)などがあり、越敷山遺跡群では鉄器が多数出土している。浅井土居敷遺跡(37)では後期の土坑から径5cm程の環状の青銅器が出土している。青銅器ではその他に久古第3遺跡で銅劍の可能性がある青銅器片が出土している。

古墳時代

主要な前期古墳には前方後方墳の普段寺1号墳(35)、方墳の2号墳、円墳の石州府29号墳(72)、方墳の日原6号墳(19)などがある。今のところ当地域において前期に遡る前方後円墳は確認されていない。普段寺1・2号墳からは三角縁神獸鏡が出土している。中期古墳では法勝寺川右岸の三崎殿山古墳(26)が著名である。全長108mの前方後円墳で、円筒埴輪が出土したと伝えられる。法勝寺川流域ではその他にも画文帶神獸鏡が出土した浅井11号墳(36)、宮前3号墳(32)といった前方後円墳が築造されている。後期に入ると多数の古墳群が形成され、日野川右岸の石州府古墳群(72)や加茂川流域の東宗像古墳群(18)などが知られている。東宗像5号墳で横口式箱式棺が、6・7号墳で竪穴系横口式石室が採用され、九州地方との関連性が窺われる。また、日野川右岸の吉定1号墳(63)では割石小口積みによる持送り式の横穴式石室を採用している。長者原台地上でも古墳群が形成されはじめ、大寺原古墳群、長者原古墳群(53)などがある。

この時代の集落遺跡は福市遺跡(21)、青木遺跡が位置する日野川左岸の丘陵上に多く分布する。久古第3遺跡では後期の竪穴住居跡、掘立柱建物跡が確認されている。

古代

白鳳期に創建された古代寺院として大寺廃寺(52)がある。東を正面とし、北に塔、南に金堂を並列させ、背後に講堂を置く法起寺式の伽藍配置が採用されている。金堂には瓦積基壇が築かれており、塔からは三段舎利孔を持つ心礎が確認されている。出土遺物として高さ1mを越える石製鳴尾が知られ、現在、伯耆町大殿の福樹寺境内に保存されている。また、創建時の瓦として複弁八葉蓮華文軒丸瓦、重弧文軒平瓦が出土し、同一文様の瓦が金田瓦窯(39)から出土したと伝えられる。大寺廃寺から500mほど離れた長者原台地上には塔心礎が残っており、奈良時代末から平安時代初期の瓦が散布していることから坂中廃寺(51)の存在が示唆される。伽藍配置等の詳細は明らかではない。

『和名類從抄』によると律令制下において周辺地域は伯耆国会見郡にあたる。坂中廃寺に近接する長者屋敷遺跡(48)、坂長下屋敷遺跡(49)では大型の掘立柱建物跡が確認され、会見郡衙の施設であ



1 錦町第1遺跡	17 清水谷遺跡	33 田住古墳群	49 坂長下屋敷遺跡	61 貝田原遺跡	77 尾高城
2 久米第1遺跡	18 東宗像古墳群	34 宮前遺跡	50 大殿下ノ原遺跡	62 口別所古墳群	78 尾高御建山遺跡
3 米子城	19 日原古墳群	35 普段寺1号墳	51 謎訪東土取場遺跡	63 吉定1号墳	79 泉中峰・前田遺跡
4 長砂第1・2遺跡	20 奈喜良遺跡	36 浅井11号墳	52 坂長米子道端ノ上遺跡	64 久古北田山遺跡	80 小波原畠遺跡
5 長砂第3遺跡	21 福市遺跡	37 浅井土居敷遺跡	53 坂長村上遺跡	65 畠原遺跡群	81 井手脇遺跡
6 水道山古墳	22 青木遺跡	38 天王原遺跡	54 坂長道端中遺跡	66 須村遺跡	82 今津岸の上遺跡
7 池ノ内遺跡	23 橋の口第4遺跡	39 金田瓦窯	55 坂中廢寺	67 真野ブヤ遺跡	83 妻木晚田遺跡
8 目久美遺跡	24 謎訪西山ノ後遺跡	40 両部太郎窯	56 大寺廃寺	68 藍野遺跡	84 晩田遺跡
9 陰田遺跡群	25 別所新田遺跡	41 萩名遺跡群	57 長者原古墳群	69 林ヶ原遺跡	85 向山古墳群
10 奥陰田遺跡群	26 三崎殿山古墳	42 田住松尾平遺跡	58 坂中第5遺跡	70 下山南通遺跡	86 上淀廃寺跡
11 新山遺跡群	27 天萬土居前遺跡	43 朝金古墳群	59 岸本大成遺跡	71 長山馬籠遺跡	87 今在家下井ノ上遺跡
12 古市遺跡群	28 宮尾遺跡	44 朝金小チヤ遺跡	60 岸本古墳群	72 石州府古墳群	
13 吉谷遺跡群	29 諸木遺跡	45 越敷山遺跡群	61 岸本遺跡	73 上福万遺跡	
14 橋本遺跡群	30 後塔山古墳	46 手間要害跡	62 岸本要害跡	74 日下寺山遺跡	
15 福成石佛前遺跡	31 天万遺跡	47 荒神上遺跡	63 岸本下ノ原遺跡	75 日下墳墓群	
16 福成早里遺跡	32 宮前3号墳	48 長者屋敷遺跡	64 久古第3遺跡	76 尾高浅山遺跡	

第4図 周辺遺跡分布図（1）

第2節 歴史的環境

る可能性が高い。遺跡周辺では官衙に関連する遺物が多く確認されている。特に陰田遺跡群(9)では陰田小犬田遺跡で「館」「多知」「田知」と記された墨書き土器、木簡、円面硯が、陰田広畠遺跡では「里宅」または「里長」と判読される墨書き土器が出土している。長者原台地上の諫訪西山ノ後遺跡(24)では胞衣壺が出土しており、中には和銅開珎3枚、刀子、鋤先、墨挺が納められていた。また、近接する樋の口第4遺跡(23)では石帶の可能性がある石製品が出土している。日野川東岸の上福万遺跡では「奈口」と記された墨書き土器が出土し、久古第3遺跡では土馬やミニチュア土製品などの祭祀具がみられる。岸本大成遺跡(55)では朱墨とみられる赤色顔料が付着した転用硯、京都産とみられる緑釉陶器が出土している。

古代山陰道は歴史的、地理的環境から大寺廃寺、坂中廃寺、長者屋敷遺跡を通って伯耆町岩屋谷、南部町諸木、天万を抜ける南側のルート、もしくは米子市諫訪、青木、古市を抜ける北側のルートが想定されている。ただし、発掘調査による明確な確認には至っていない。

中世

平安末期の遺物として大山寺の鉄製厨子がある。厨子には承安元年(1171年)の大山寺火災の翌年に伯耆の豪族紀成盛が大山權現御神体と厨子を奉納したことが記されている。紀成盛については伯耆町坂長に「紀成長者之塔」と記された石碑があり、この地に居宅を構えたという伝承が残る。平安期には律令制の基礎をなしていた班田制が崩れはじめ、各地に荘園が発達する。日野川右岸には久古牧(荘)が存在したとみられ、室町時代の觀応2年(1351年)には伯耆守護山名時氏がこれを大山寺西明院に寄進している。また、応永2年(1416年)には大山寺文殊堂に奉納されたと伝えられる懸仏には墨書きで「奉懸御正躰一口久古御口口口(牧力)・・」と記されている。大永4年(1524年)には出雲の尼子経久が伯耆に侵攻し、山名方である行松氏の尾高城(77)を攻め滅ぼす。岸本要害跡(58)は尾高城の砦とも播州三木城の出城ともいわれるが詳細は定かではない。

近世

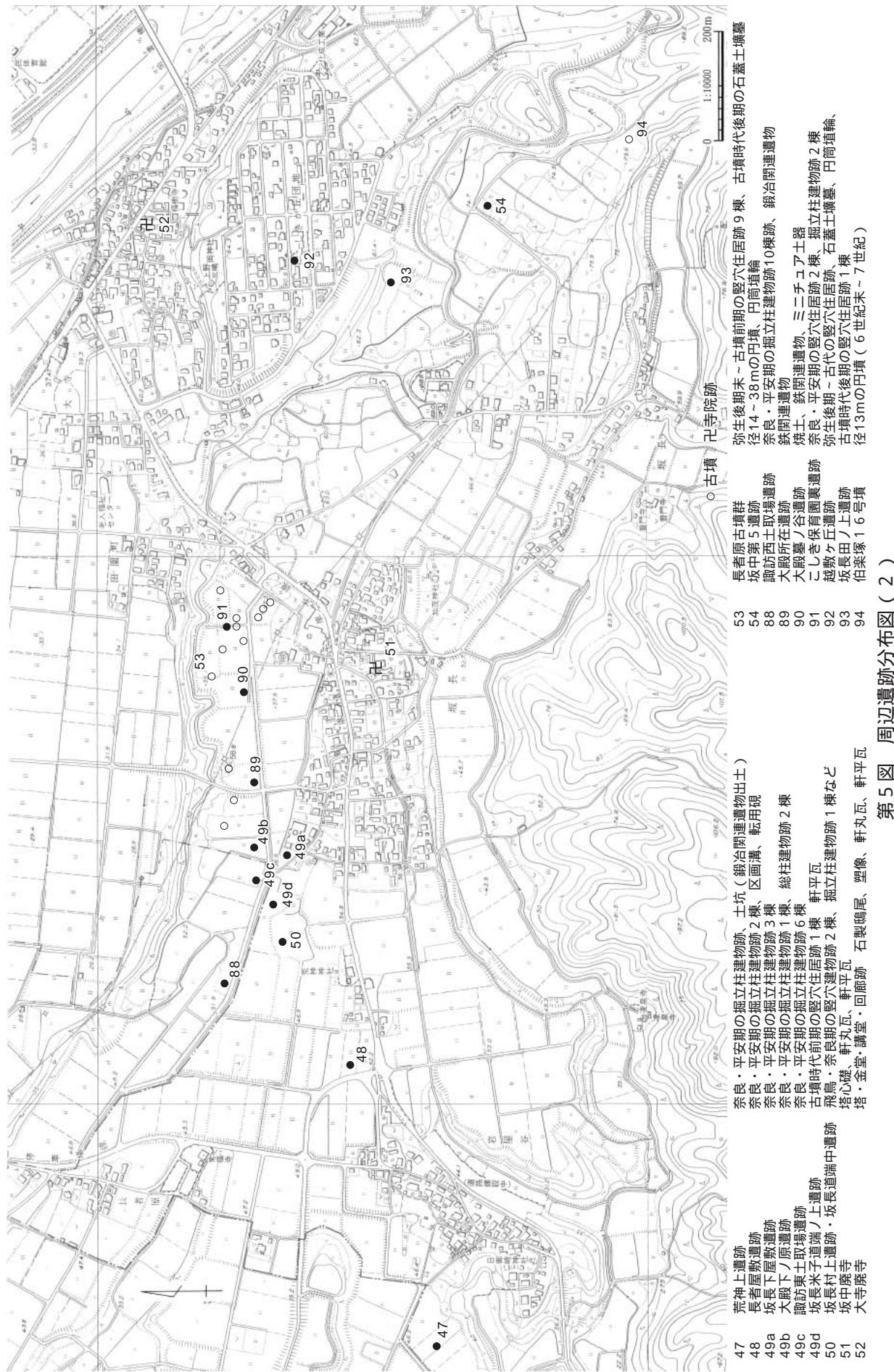
伯耆国は中村一忠と加藤貞泰とが領主交代し、元和3年(1617年)に池田光政が因幡・伯耆の両国32万石を領する鳥取城主となり鳥取藩ができる。その後、寛永9年(1632年)には国替えにより池田光仲が封入する。周辺地域は藩の直轄領、寺社領を除いた大半が米子城主荒尾家の給所に属した。長者原台地はこの藩政期において石田村吉持家により佐野川開発事業が実施された。事業は元和4年(1618年)から文久元年(1861年)までの250年間に及んでいる。



大寺廃寺・石尾鷲尾



坂中廃寺・塔心礎



第5図 周辺遺跡分布図（2）

第3節 遺跡周辺の地名



第6図 調査地周辺小字図

第3節 遺跡周辺の地名

調査地の字名は「下ノ原」「東土取場」「道端ノ上」「村ノ上」「道端ノ中」にあたる。調査地の南西に位置する長者屋敷遺跡周辺には「長者屋敷」、「長者原」という小字名が残る。(第6図)。この字名は郡衙や郡衙を構成する正倉別院が置かれていた土地に残っていることが多い。それは、郡衙や正倉別院には田租や出舉稻を収納した多数の稻倉が立ち並んでいることから、長者がいたという伝承に結びついたと考えられている。また、正倉はしばしば、火災(放火)に遭ったことが知られており、炭化米が出土することが多い。このことも長者伝説と結びついた一因となっているとみられている。長者屋敷遺跡でも出土状況や数量は定かではないが、発掘調査により炭化米が出土したことが報告されている。また、平安時代の豪族紀成盛の屋敷跡であったという伝承が残る。

その他、長者屋敷遺跡の北西側には「馬ノ子橋ノ上」「馬ノ子橋ノ下」の字名が残っている。古代山陰道の通過ルートは未だ確定していないが、駅家に関連した施設が存在した可能性を示唆する。

【参考文献】

地質調査所 1962 『5萬分の1地質図幅説明書 米子』 (岡山-第18号)

山名巖 1964 「山陰地方における第四紀末の諸問題」『鳥取県立科学博物館研究報告』

岸本町 1983 『岸本町誌』

会見町 1996 『会見町誌 続編』

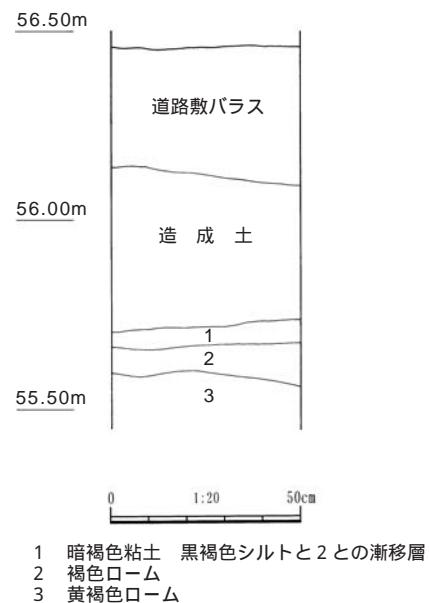
中山敏史ほか 2004『古代の宮衙遺跡 II 遺物・遺跡編』独立行政法人文化財研究所 奈良文化財研究所

第3章 大殿下ノ原遺跡・諏訪東土取場遺跡

第1節 遺跡の立地と土層堆積

遺跡は長者原台地上の平坦地に位置し、坂長下屋敷遺跡の北側隣接地にあたる。現地表面の標高56.4m～56.6mである。遺跡の南西側には東西方向に延びる谷があり、その谷へと下る斜面には坂長道端ノ上遺跡、坂長村上遺跡、坂長道端中遺跡が、谷を挟んで400mほど離れた台地上には長者屋敷遺跡が立地している。調査範囲は農道下にあたり、農道脇には佐野川用水路が通水し、周囲には水田地帯が広がっている。

調査区内の土層堆積をみると、地表下に道路敷のパラスと造成土が75cm前後の厚さで堆積しており、近現代における土地の改変や削平が著しい(第7図)。したがって、遺物包含層はほとんど遺存しておらず、僅かにT41グリッド杭の北側付近で黒褐色シルトの堆積層を確認したのみである。この層からは須恵器坏(第16図8)が出土しており、堆積時期は古代以降と推測される。1層はこの黒褐色シルト層の下層にあたり、この黒褐色シルト層と2層との漸移層と考えられる。2、3層はローム層で、色調などをもとに2つに分けた。なお、大殿下ノ原遺跡では一部を除き、1層、または2層が、諏訪東土取場遺跡では3層が遺構検出面となる。

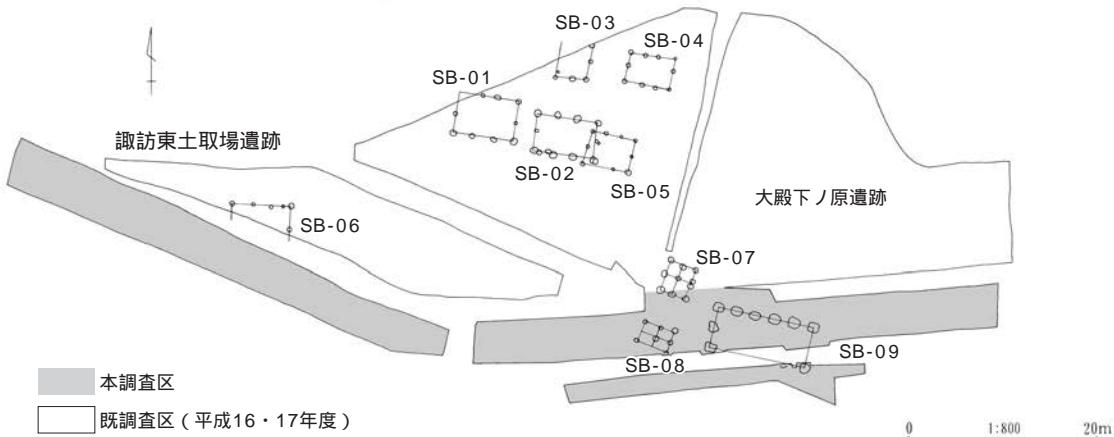


第7図 調査区土層柱状図

第2節 遺構と遺物

1. 概要(第8・9図 第1表)

大殿下ノ原遺跡、諏訪東土取場遺跡は、本調査区の北側隣接地(1900m²)を平成16、17年度にかけて財団法人米子市教育文化事業団が発掘調査を実施しており、その結果、古代の掘立柱建物跡7棟、柵2基などを確認している^(註1)(第8図)。



第8図 調査区位置図

第2節 遺構と遺物

本調査では古代の掘立柱建物跡3棟、土坑1基、時期不明の土坑1基、ピット8基を検出した。掘立柱建物跡のうち、S B-09は桁行5間、梁行2間の大型の側柱建物で、建物の規模や特徴は隣接する坂長下屋敷遺跡で検出された大型の掘立柱建物群と類似する^(註2)。S B-07、08は桁行2間、梁行2間の総柱建物で、S B-09の北西側に位置する。2棟は東側の柱筋が通ると考えられ、同時併存していた可能性は高い。棟間距離は3.7mを測る。両棟とも遺物は出土していないが、周辺での掘立柱建物跡の検出状況を勘案すると、造営時期は古代と考えられる。

出土遺物は稀少で、須恵器、土師器、鍛冶関連遺物がみられる。

2. 掘立柱建物跡

S B-09 (第10・11図 第2・3表 卷頭図版1 図版5~7)

A区T42・43~U42・43グリッドの平坦地に位置する。桁行5間(10.5m)、梁行2間(4.5m)の東西棟で、方位はN-13°-Eである。南側桁柱穴の多くは、調査区外のため検出していない。平面積は47m²程度と推定される。

側柱P1~P10の柱掘方は、長辺100~130cm、短辺78~112cmの隅丸方形を呈する。検出面からの深さは78~108cm、柱穴底面の標高は54.67~54.80mと、一定しない(第3表)。いずれの柱穴も柱痕跡は認められず、柱は抜き取られている。柱抜取穴(1層)の位置から、柱間距離は2.1m前後と推定される。

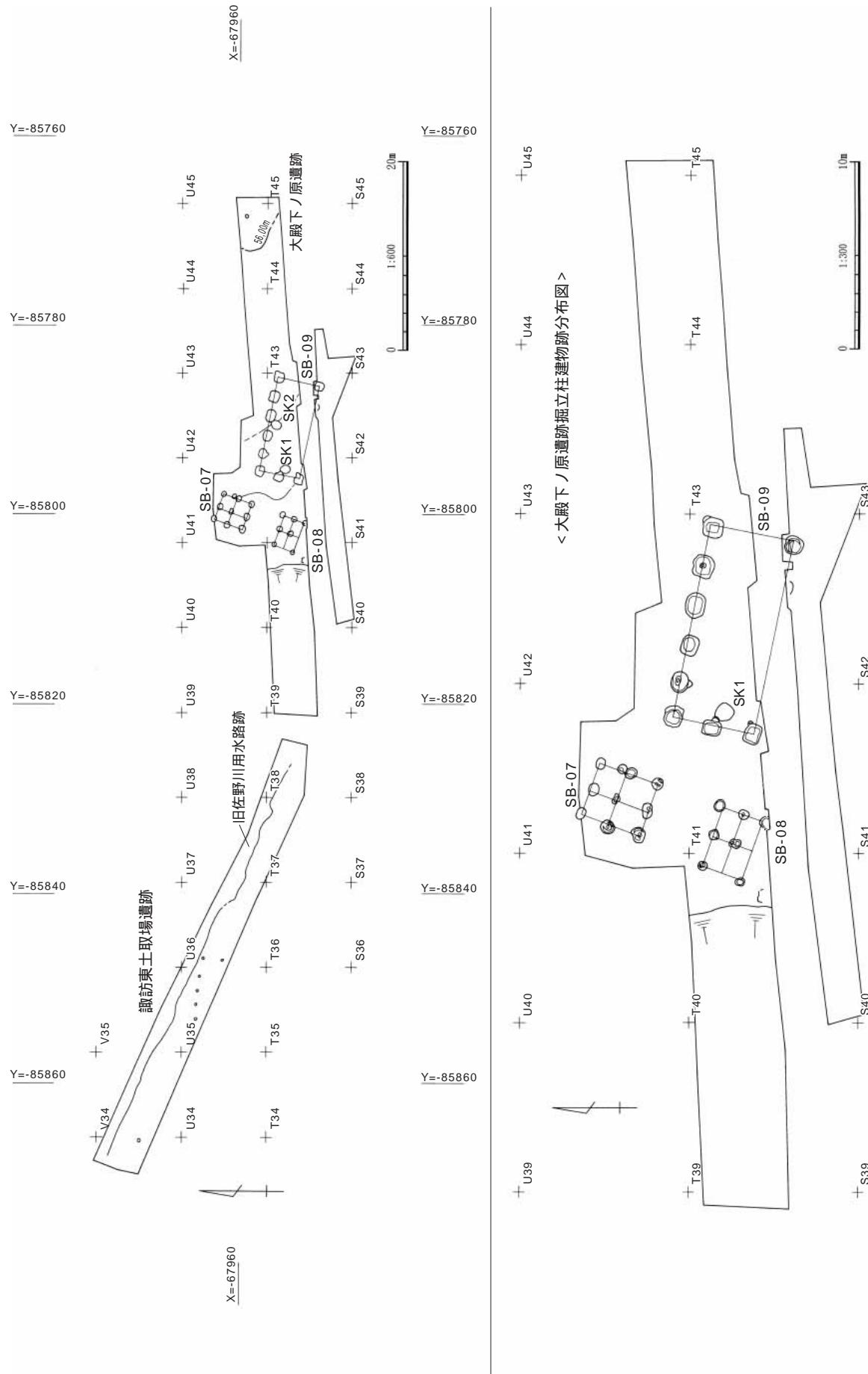
柱掘方埋土は重複が確認でき、建替えが一度行われている。P1~7・9・10の29層が建替え前の柱掘方埋土に該当すると考えられる。また、P4の底面には明白褐色に変色した箇所がみられ、柱のあたりである可能性が高い。当該部分の平面・断面を観察すると、切り合いが確認され、このことも建替えが一度行われたことを示唆するものといえよう。変色箇所は平面が方形を呈し、角柱が使用された可能性もある。その場合、柱材は30~40cm角程度と推測する。

遺物は稀少だが、建替え後の柱掘方埋土から土器、鍛冶関連遺物が出土している。第11図1は須恵器の蓋で、頂部を失っている。口縁部は下方に屈曲し、直立する。2~4は土師器で、3・4は内外面に赤色顔料が塗布される。3は皿で、口縁部が内湾しながら外傾し、端部を丸くおさめる。4は壺で、口縁端部がやや外反する。F1~F3は鍛冶関連遺物で、いずれもP5の建替え後埋土から出土している。F1・F2は鍛冶滓、F3は椀形鍛冶滓である。

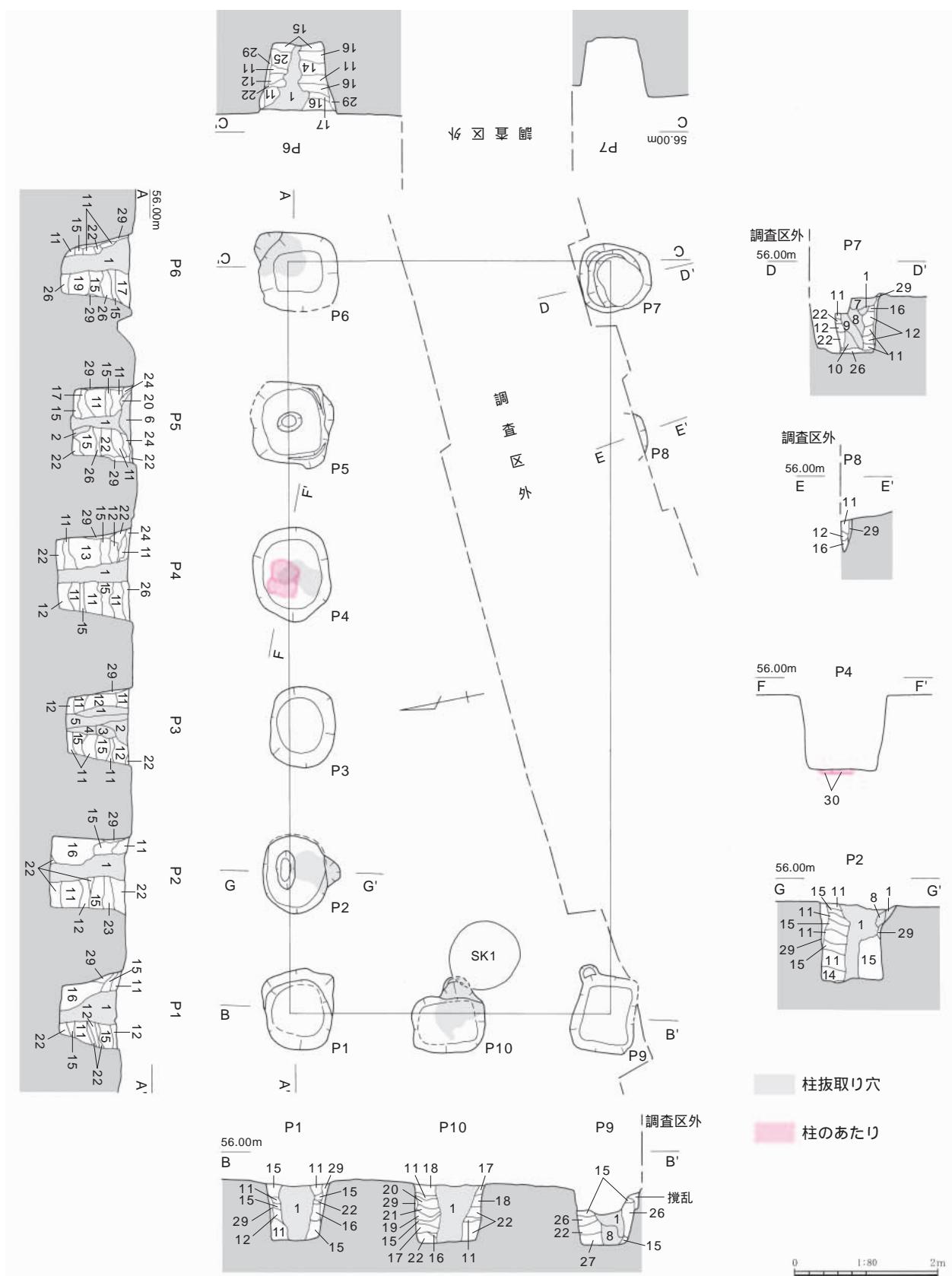
これらの出土遺物から建替え後の建物の時期は8世紀後半と推定される。

第1表 掘立柱建物跡一覧表

遺構名	建物区分	桁行	梁行	平面積	主軸方位	出土遺物
S B-07	総柱建物	2間(3.2m)	2間(2.9m)	9.3m ²	N-21°-E	
S B-08	総柱建物	2間(3.28m)	2間(2.2m)	7.2m ²	N-21°-E	
S B-09	側柱建物	5間(10.5m)	2間(4.5m)	47m ²	N-13°-E	土師器、須恵器、鍛冶関連遺物



第9図 遺構分布図



第10図 SB-09

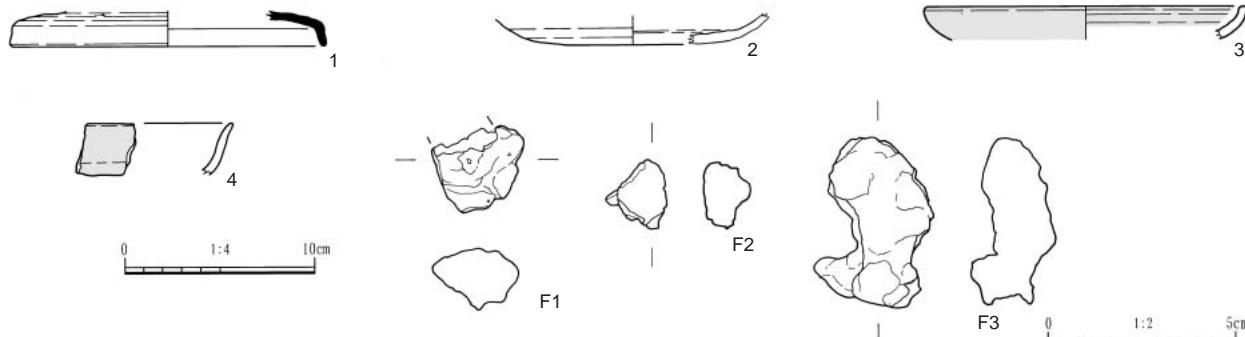
第2表 SB-09(第10図) 土層堆積一覧

番号	層名	備考	番号	層名	備考	
1	灰褐色シルト	ロームブロック混	柱抜取穴	16	黒褐色シルト	15に類似、ロームブロック少量混
2	灰褐色シルト	ロームブロック多量混		17	黒褐色シルト	15に類似、ロームブロック多量混
3	灰褐色シルト	黒褐色シルト多量混		18	黒褐色シルト	15よりやや色調が暗い
4	灰褐色シルト	2に類似。ロームブロック多量混		19	黒褐色シルト	15よりやや色調が明るい
5	灰褐色シルト	ロームブロック、黒褐色シルト混		20	にぶい褐色シルト	ロームブロック・黒褐色シルト混
6	灰褐色シルト	1より色調がやや暗く、しまり強		21	にぶい褐色シルト	20に類似、しまり強。
7	灰褐色シルト	ロームブロック・黒褐色シルト多量混、しまり強		22	灰褐色シルト	ロームブロック・黒褐色シルト混
8	灰褐色シルト	1より色調がやや暗い		23	灰褐色シルト	22に類似、ロームブロック多量混
9	灰褐色シルト	8よりやや色調が暗い		24	灰褐色シルト	22よりやや色調が暗い
10	灰褐色シルト	8に類似。		25	灰褐色シルト	22よりやや色調が明るい
11	明黄褐色シルト	ロームブロック・黒褐色シルト混	建替後 柱掘方埋土	26	明褐色シルト	ロームブロック混
12	明黄褐色シルト	11よりやや色調が暗い		27	明褐色シルト	26よりやや色調が暗い
13	明黄褐色シルト	11に類似、ロームブロック多量混		28	明褐色シルト	26に類似、しまり強
14	明黄褐色シルト	11に類似、黒褐色シルト多量混		29	灰褐色シルト	微細なロームブロック少量混
15	黒褐色シルト	ロームブロック混		30	明白褐色ローム	ローム層の変色箇所 古段階 柱掘方埋土 柱のあたり

第3表 SB-09柱穴計測表

柱穴No.	柱掘方				柱のあたり	
	長辺(cm)	短辺(cm)	深さ(cm)	底面の標高(m)	長軸(cm)	短軸(cm)
P1	114	98	84	54.72		
P2	108	88	114	54.90		
P3	114	90	92	54.80		
P4	130	108	108	54.68	40 [*40]	30 [*30]
P5	120	116	88	54.91		
P6	112	112	100	54.67		
P7	100	96	86	54.69		
P8	—	—	—	—		
P9	108	84	78	54.69		
P10	104	78	84	54.72		

※柱のあたりの□内は建替え前の推定値



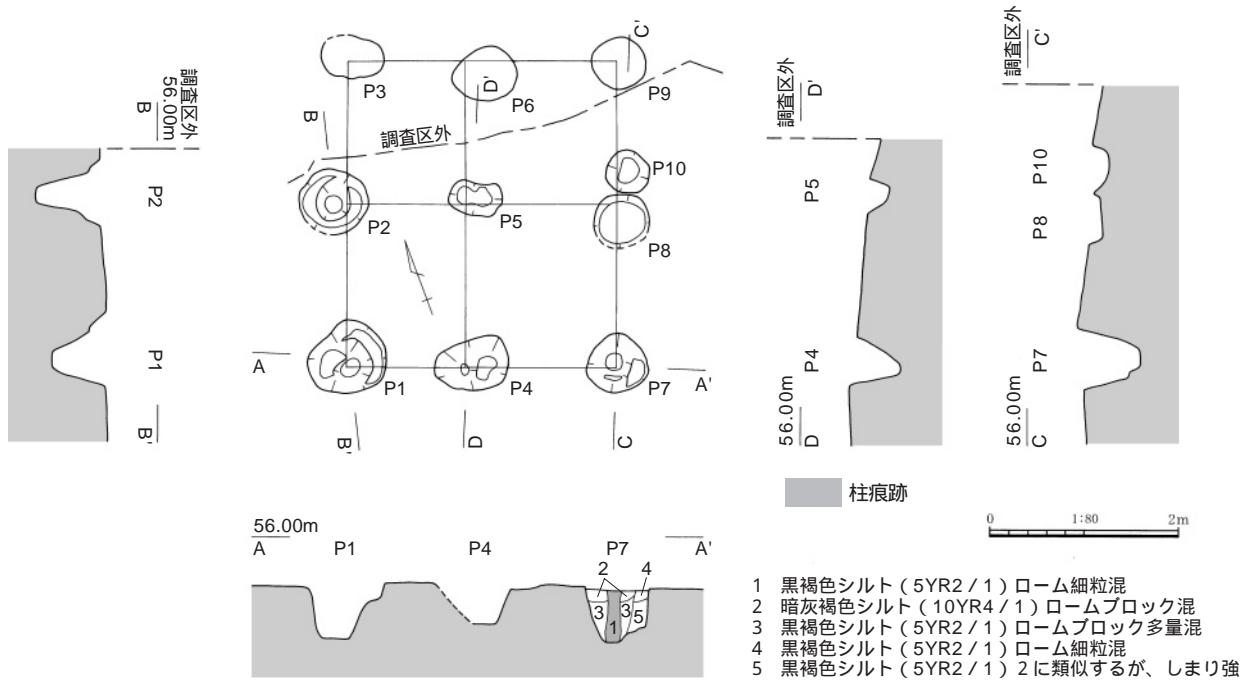
第11図 遺物観察表

番号	種別	口径(cm)	器高(cm)	文様・調整		胎土焼成	色調	備考	*復元値 △現存値
				底径(cm)	外面				
1 11	S B-09 P 4 柱掘方埋土	*16.5	△1.9	須恵器 壺蓋	外縁部回転ナデ 内縁部回転ナデ	頂部回転ヘラケズリ	密 良好	灰色	
2 11	S B-09 P 3 柱掘方埋土	—	△1.6	土師器 皿	外縁部ナデ 内縁部ナデ	底部ケズリ 磨耗著しい	やや粗 軟質	灰白色	
3 11	S B-09 P 4 柱掘方埋土	*16.7	△1.8	土師器 皿	外縁部ナデ	赤色塗彩	密 良好	赤色	
4 11	S B-09 P 2 柱掘方埋土	—	△2.8	土師器 壺	内外縁部ナデ	赤色塗彩	密 良好	赤色	

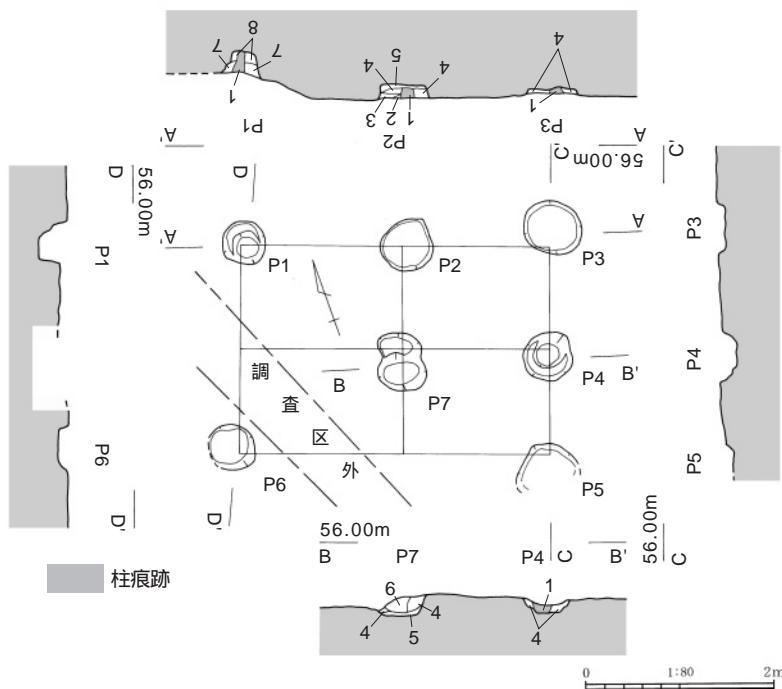
第11図 SB-09出土遺物

SB-07(第12図 第4表 図版5・6-7)

U42グリッドの平坦地に位置する。桁行2間(3.2m)、梁行2間(2.9m)の総柱建物と考えられる。本建物は、平成16年度に財団法人米子市教育文化事業団により調査されており、本調査では新たにP7を検出した。建物の平面積は9.3m²で、方位はN-21°-Eである。柱掘方は径50~80cmの円形を呈する。柱穴底面の標高は54.72~55.22mで、一定しない。平成16年度調査では、P2・4・5・9・10で柱痕跡を確認しており、本調査検出のP7においても確認した(1層)。柱の径は16cm程度と推定される。また、柱穴掘方の重複が確認でき、P7では4・5層が建替え前の埋土、1~3層が建替え後の埋土に該当する。P1・2・4で柱穴の重複が確認されている。本遺構から遺物



第12図 SB - 07



- 1 黒褐色シルト (5YR2/1)
- 2 暗灰褐色シルト (10YR3/1) ロームブロックを含む
- 3 黄褐色シルト (10YR4/3) ロームブロック主体
- 4 暗灰褐色シルト (10YR3/1) ロームブロックを多く含む
- 5 淡黄褐色粘土 (10YR4/2) ロームブロックを含む
- 6 灰黄褐色シルト (10YR4/2) ロームブロックを含む
- 7 灰黄褐色シルト (10YR4/2) ロームブロックの細粒を含む
- 8 黄褐色シルト質粘土 (10YR5/4) ロームブロック主体

第13図 SB - 08

は出土していない。

SB - 08 (第13図 第5表 図版 5・6-8)

T41・42グリッドの平坦地に位置する。削平や攪乱などにより遺存状態は良くない。桁行2間(3.28m)、梁行2間(2.2m)の総柱建物と考えられる。南側の桁行中央に柱穴が検出されなかったが、削平により消失した可能性が高い。平面積は7.2m²で、方位はN-21°-Eである。柱間寸法は梁行が1.1mであるのに対し、桁行が1.56m、1.72mと広い。柱穴の掘方は50~60cmの円形を呈し、P1では10cm、P2・3では16cm、P4では20cmの柱痕跡が確認される。底面の標高はP1が55.00mと他の柱穴よりも低い。P7には柱穴の重複が認められる。遺物は出土していない。

第4表 SB-07柱穴計測表

柱穴No.	長辺(cm)	短辺(cm)	柱掘方	深さ(cm)	底面の標高(m)	柱痕跡 径(cm)
P1	84	78		60	54.89	
P2	74	72		68	54.72	
P4	78	56		44	54.95	
P5	58	34		22	55.09	
P7	66	64		66	54.83	
P8	58	56		16	55.22	16
P10	46	46		18	55.13	

第5表 SB-08柱穴計測表

柱穴No.	長辺(cm)	短辺(cm)	柱掘方	深さ(cm)	底面の標高(m)	柱痕跡 径(cm)
P1	46	46		23	55.00	10
P2	58	56		14	55.35	16
P3	62	58		7	55.38	16
P4	52	52		16	55.24	20
P5	64	—		8	55.26	
P6	50	49		10	55.20	
P7	62	52		20	55.22	

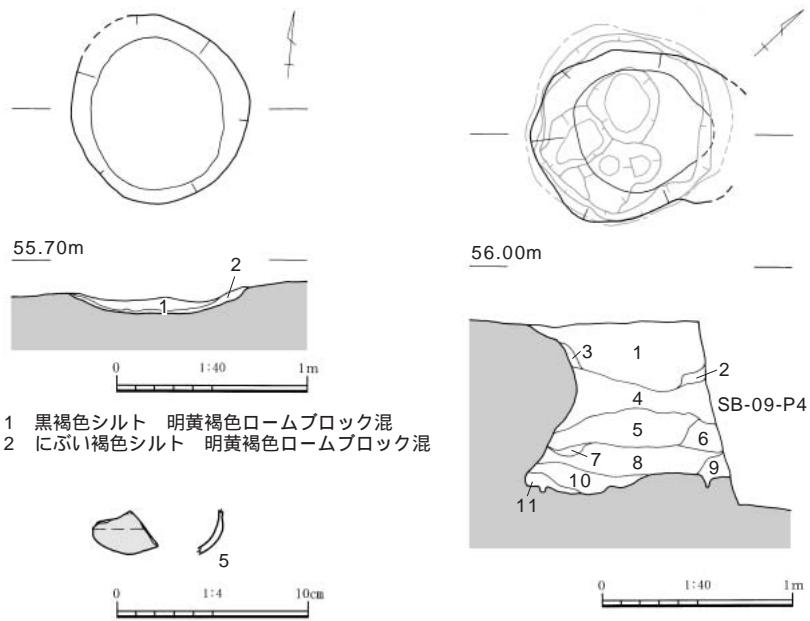
3. 土坑

SK1(第14図 図版7-1)

U42グリッド、標高55.6mの平坦地に位置する。平面形は長軸1.1m、短軸94cmの円形を呈している。断面形は皿状で、検出面から深さは14cmである。遺物は埋土中より土師器壊または皿(5)が出土している。時期はSB-09-P10に切られることから8世紀後半以前と推定される。

SK2(第15図 図版7-2)

T43グリッド、標高55.75mの平坦地に位置する。平面形は長軸90cm以上、短軸90cmのやや歪な楕円形を呈する。断面はフラスコ状を呈し、検出面からの深さは80cmである。底面は長軸1.08m、短軸1.0mの楕円形で、壁際には幅3~5cm、深さ5cmの周壁溝がめぐる。底面には径30~35cm前後の円形の凹みが4基みられる。形態的な特徴から貯蔵穴と考えられる。その場合、床面の凹みは壺や甕などの据え付け穴の可能性がある。出土遺物はな



第14図 SK1

- 1 暗褐色シルト(10YR3 / 3)
- 2 灰黄褐色シルト(10YR4 / 2)
- 3 にぶい黄褐色シルト(10YR4 / 3)
- 4 黒褐色シルト(10YR3 / 2)
- 5 黑褐色シルト(10YR2 / 2)
- 6 暗褐色シルト(10YR3 / 3)
- 7 にぶい黄褐色シルト(10YR5 / 4)
- 8 黒色シルト(10YR2 / 1)
- 9 黑褐色シルト(10YR3 / 1)
- 10 褐灰色シルト(10YR4 / 1)
- 11 黄褐色シルト質粘土(2.5Y5 / 4)

第15図 SK2

第14図 遺物観察表

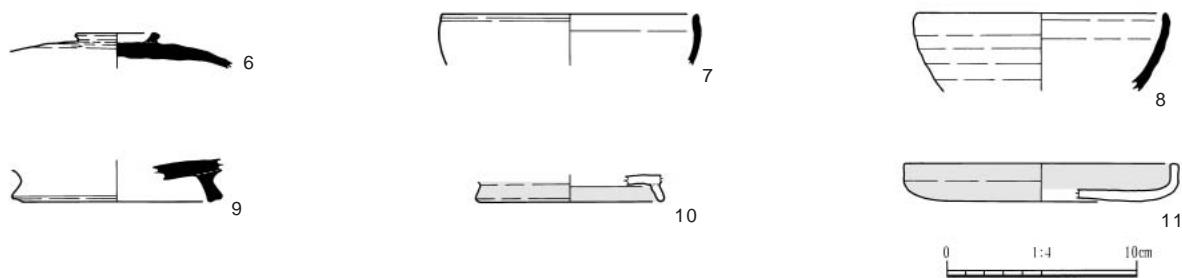
遺物番号	捕団番号	遺構層位	種別器種	口径(cm) 底径(cm)	器高(cm)	文様・調整	胎土焼成 密良好	色調	*復元値△現存値	備考
5	14	SK1	土師器 皿、または壊	△2.35	内外面:ナデ			赤褐色		内外面赤色塗彩

第2節 遺構と遺物

く、時期は不明である。

4. 遺構外出土遺物（第16図 図版7-3）

本調査における遺構に伴わない遺物のうち、古代に比定されるものを選別した。8は調査区内に一部堆積が確認された黒色包含層から、その他は造成土、もしくは搅乱土中から出土している。第16図6～9は須恵器である。6は壺蓋で、輪状つまみをもち、頂部の調整は回転ヘラケズリである。7・8は無高台の壺で、7は口縁部がわずかに屈曲する。8は屈曲が認められず内湾ぎみに立ち上がる器形である。高台付壺の可能性もある。9は高台が付く壺の底部である。10・11は土師器で、いずれも赤色顔料が塗布される。10は高台付壺、11は皿で、口縁部が短く直立するタイプである。



第16図 遺物観察表

遺物番号	挿図	遺構層位	種別器種	口径(cm) 底径(cm)	器高(cm)	文様・調整	胎土焼成	*復元値 △現存値	
								色調	備考
6 16		造成土	須恵器 壺蓋	つまみ径 3.9	△1.8	外面：頂部回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ後不整方向ナデ	密	外面：褐色	
7 16		造成土	須恵器 壺	*13.6 —	△2.7	内外面：回転ナデ	良好	内面：緑灰色	
8 16		黒色包含層	須恵器 壺	*13.1 —	△4.2	内外面：回転ナデ	密 良好	灰オリーブ色	
9 16		搅乱土	須恵器 高台付壺	— *9.9	△2.25	外面：高台回転ナデ 内面：粗い回転ナデ後不整方向ナデ	密 良好	灰色	
10 16		造成土	土師器 高台付壺	— *9.5	△1.45	外面：ナデ 赤色塗彩 内面：赤色塗彩 磨耗のため調整不明	密 良好	外面：赤色 内面：浅黄橙色	
11 16		搅乱土	土師器 皿	*14.0	2.05	外面：口縁部ナデ 内面：ナデ	赤色塗彩 良好	赤色	

第16図 遺構外出土遺物

注釈

(註1) 高橋浩樹 2006 『諏訪東土取場遺跡 大殿下ノ原遺跡』 財団法人米子市教育文化事業団

(註2) 森本倫弘ほか 2007 『長者屋敷遺跡 坂長下屋敷遺跡』 財団法人鳥取県教育文化財団

第4章 坂長米子道端ノ上遺跡

第1節 遺跡の立地と土層堆積

遺跡は長者原台地に入り組む谷の斜面に位置する。この谷は東西方向に延びており、現地形からは調査地の南東50m付近で収束するとみられる。南西側の谷部には坂長村上遺跡が隣接し、佐野川用水路を挟んで北側の台地上には諫訪東土取場遺跡が立地している。調査地は耕作地で、現地表面の標高は52.1m～53.9mである。

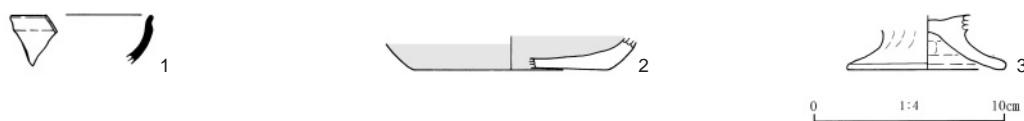
調査にあたり北壁、および南壁際にトレーニングを掘削し、基本層序の把握に努めた。標高の高い東側では圃場整備等により、6層、ないしはさらに下位に堆積するローム層にまで削平が及んでいる(第18図)。それに対して南西側の斜面では比較的安定して遺物包含層が遺存していた。ただし、調査区西端でも削平により包含層は遺存していない。

まず、1層は明褐色シルトで、南壁土層断面のみで確認された堆積層である。平面的な広がりは把握できず、遺物も出土していない。中世以降の堆積層と捉えられる。2層は褐色シルトで、摩滅の著しい土器細片を多く含む。図化し得なかつたが、底部糸切りの土師器片が出土していることから堆積時期は中世以降に下る可能性がある。3・4層は黒褐色シルトで、層をなす構成物は類似する。3層は土器細片を含んでいる。第17図1は須恵器の坏身で、口縁端部がやや屈曲している。明確に中世に下る遺物は見られないことから、3層は古代の包含層と考えられる。4層は3層よりも包含する遺物量は少ない。古墳時代前期から古代の土器片が出土している。2は土師器の皿または坏で、内外面ともに赤色塗彩が施されている。3は低脚杯の脚部とみられる。当層上面において遺構は検出されていないが、南壁の土層断面では遺構の可能性がある落ち込みを3基確認している。5層は褐色シルトで4層と6層との漸移層と考えられる。古墳時代前期の竪穴住居跡S I 1は断面観察により当層上面より掘り込まれたと考えられる。6層は黄褐色ローム層である。

第2節 遺構と遺物

1. 概要 (第19図)

調査区西側を中心として竪穴住居跡1棟、掘立柱建物跡1棟、柵列1基、土坑5基を検出した。土坑のうち2基は落とし穴、1基は貯蔵穴と考えられる。SK 3・4は6層、それ以外の遺構はすべて5層上面で検出している。竪穴住居跡S I 1の時期は出土遺物により古墳時代前期と考えられる

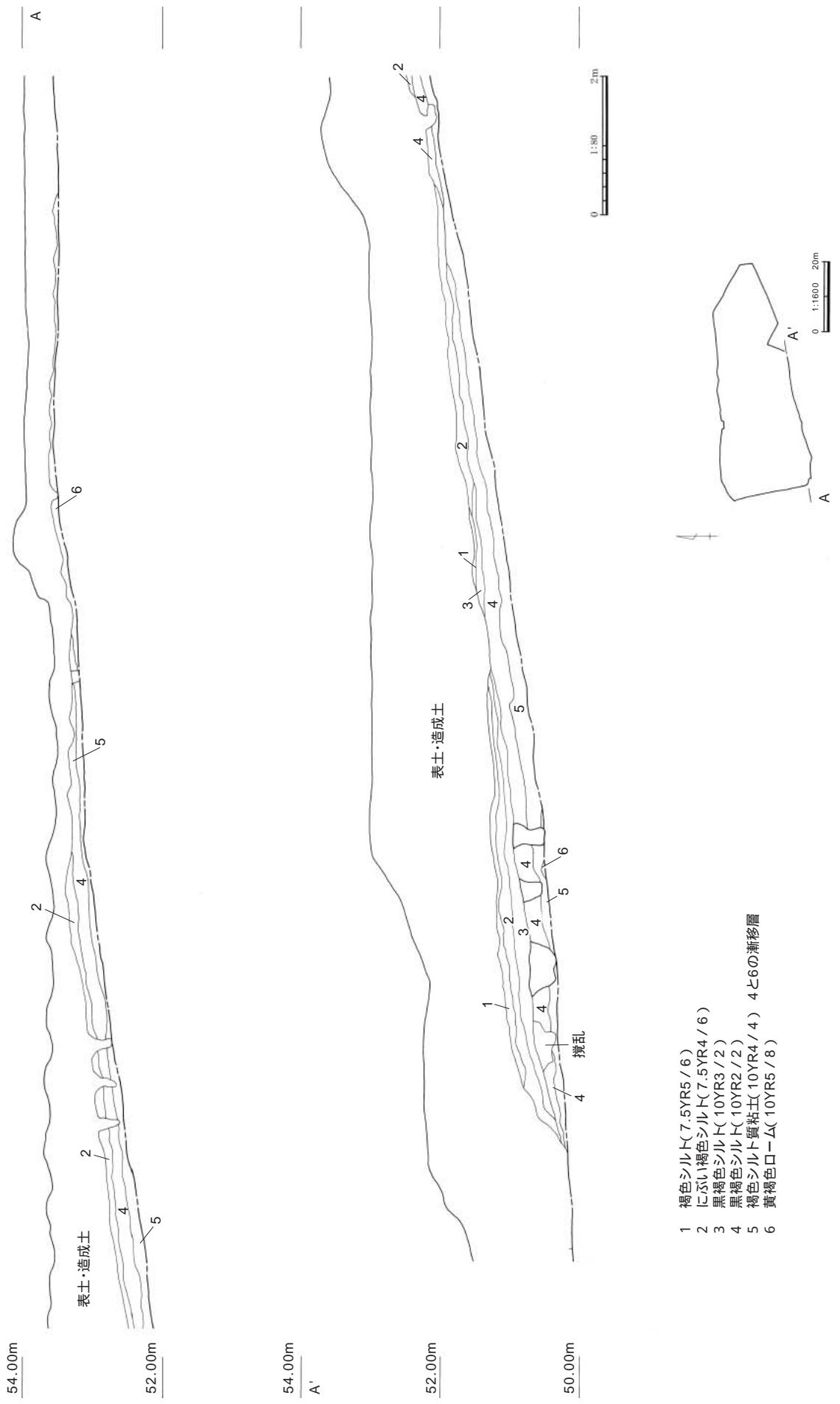


第17図 遺物観察表

遺物番号	挿図	遺構層位	種別器種	口径(cm) 底径(cm)	器高(cm)	文様・調整	胎土焼成	色調	*復元値 △現存値	
									備考	
1 17	1	3層	須恵器 坏身	—	△2.6	内外面：ヨコナデ	密良好	灰褐色		
2 17	2	4層	土師器 坏？	*7.6	△1.0	外面：ケズリ後ナデ 内面：ナデ	密良好	にぶい橙色	内外面赤色塗彩	
3 17	3	4層	土師器 低脚坏	*8.3	△2.9	内外面：ナデ	密良好	淡橙色		

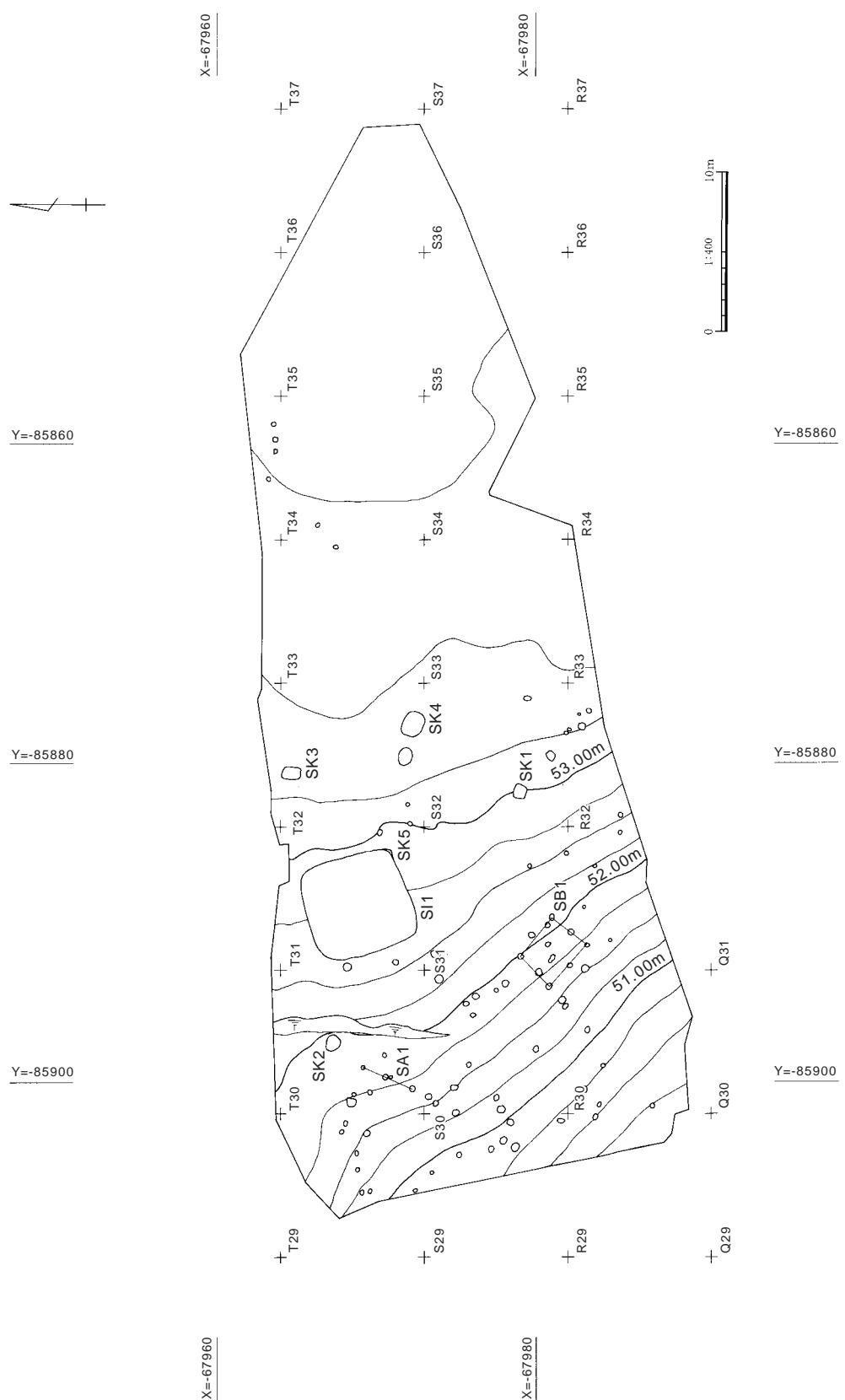
第17図 包含層出土遺物

第2節 遺構と遺物



第18図 調査区土層断面図

第19図 遺構分布図



第2節 遺構と遺物

が、その他の遺構については詳細な時期の特定には至っていない。遺構ではその他にピットが71基検出されているが、柱痕跡が確認できたものはなく、規則的な配置もみられない。

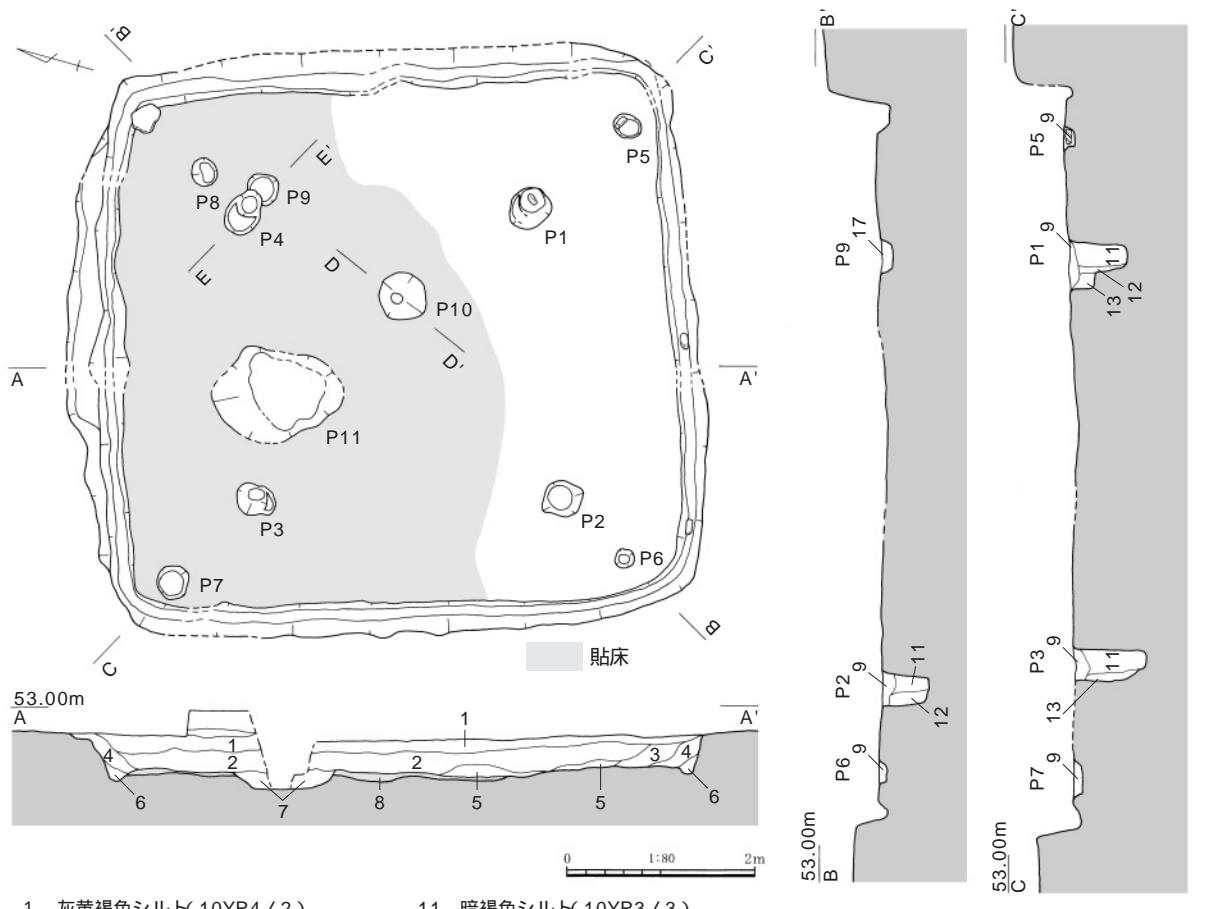
遺物は総じて少ない。包含層から出土した遺物は奈良・平安時代の土師器、須恵器の細片が主体となる。その他に軒平瓦1点、平瓦1点、丸瓦1点が出土している。

2. 積穴住居跡

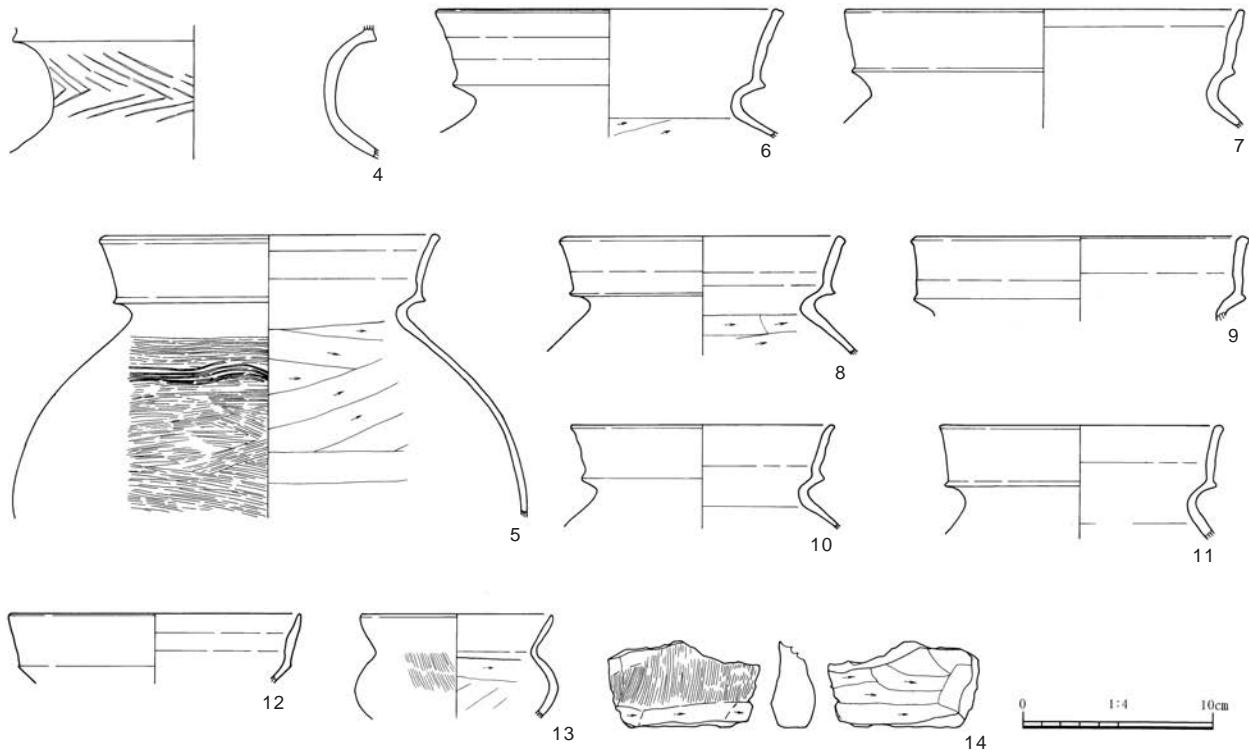
S I 1 (第20・21図 図版8~11)

T32グリッド、標高52.90m~52.65mの緩斜面に位置する。5層上面から掘り込まれている。平面形は長辺6.68m、短辺6.14mの隅丸方形を呈し、北西壁はやや二段堀りとなる。壁高は最大53cmを測り、壁際には幅約20cm、深さ14cm前後の周壁溝が巡る。床面積は31.9m²で、北西半の床面には6層を主体とする貼床が最大8cmの厚さで施されている。埋土は5層に分かれ、レンズ状の自然堆積である。

主柱穴はP1~P4の4基からなる。柱掘方は径40~50cm前後の円形、もしくは楕円形を呈し、4基とも柱痕跡(11層)が確認される。P1では底面から5cm程浮いた位置から長さ13cmの棒状の



第20図 S I 1



第21図 遺物観察表

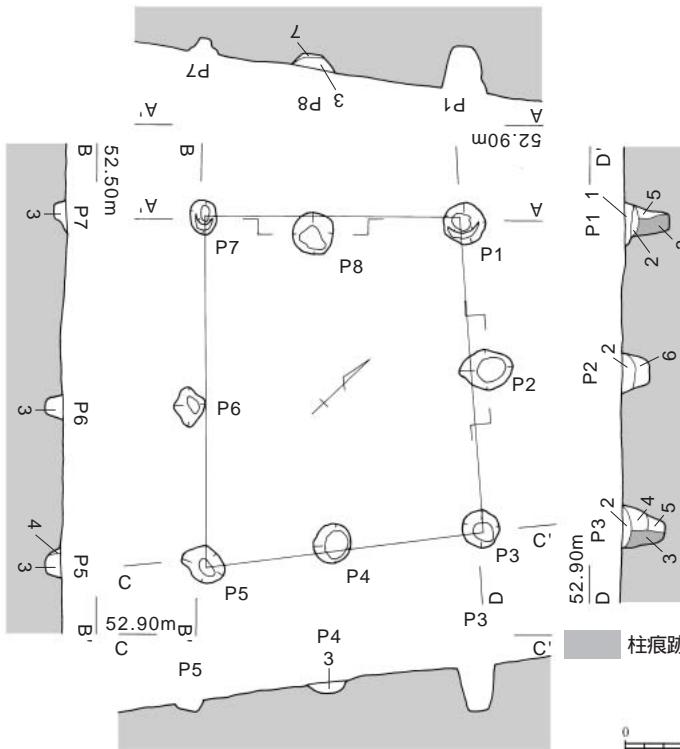
遺物番号	捕図番号	遺層	構位	種別器種	口径(cm) 底径(cm)	器高(cm)	文様・調整	胎土焼成	色調	*復元値 △現存値	備考
4 21	SI1	土師器壺	—	△6.5	外面：頸部羽状文 内面：調整不明	密良好	橙色				
5 21	SI1	土師器甕	*17.2	△15.0	外面：肩部波状文5条 胴部ハケ 内面：頸部以下ケズリ	密良好	明橙色				
6 21	SI1	土師器甕	*17.4	△6.5	外面：ナデ 内面：頸部以下ハケ	密良好	淡黄色				
7 21	SI1	土師器甕	*20.6	△6.1	内外面：ナデ	密良好	橙色				
8 21	SI1	土師器甕	*14.4	△6.3	外面：ナデ 内面：頸部以下ケズリ	密良好	明黄褐色				
9 21	SI1	土師器甕	*17.2	△4.5	内外面：ナデ	密良好	橙色				
10 21	SI1	土師器甕	*13.6	△5.4	内外面：ナデ	密良好	暗黄灰色				
11 21	SI1	土師器甕	*14.0	△5.7	外面：ナデ 内面：頸部ケズリ	密良好	橙色				
12 21	SI1	土師器甕	*15.0	△3.7	内外面：ナデ	密良好	にぶい黄橙色				
13 21	SI1	土師器小型丸底壺	*10.0	△5.5	外面：胴部ハケ 内面：頸部以下ケズリ	密良好	明橙色				
14 21	SI1	土製品移動式竈	—	△4.5	外面：ハケ 底部ケズリ 内面：ケズリ	密良好	橙色				

第21図 S I 1出土遺物

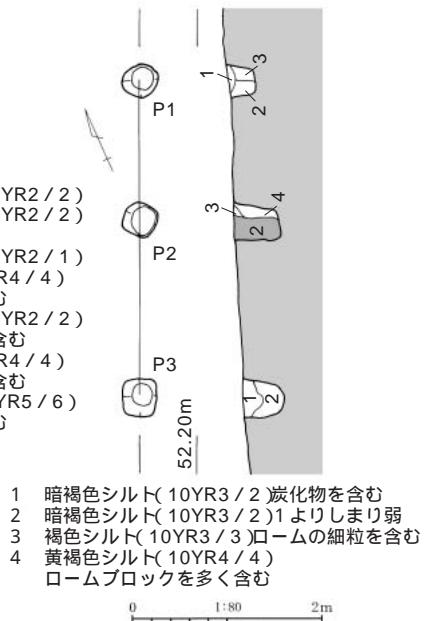
礫が出土した。礫はその出土状況から柱が抜き取られた後、何らかの意図で人為的に埋められた可能性がある。柱間寸法はP 1 - P 2が3.14m、P 2 - P 3が3.2m、P 3 - P 4が3.06m、P 4 - P 1が2.96mとなる。主柱穴以外に7基のピットを検出している。P 5～8は径30cm程の円形を呈し、主柱穴よりも一回り壁側に配置されている。深さは10cm前後と浅く、柱痕跡も確認されておらず、性格は不明である。P 10はいわゆる中央ピットと考えられ、埋土中に炭化物を多く含む。P 11は長軸1.4m、短軸98cmの平面不整形を呈し、深さは18cmである。用途は不明である。

遺物は埋土中より土器、土製品が出土している。4は壺の頸部片で刺突文が施されている。5～12は甕で、口縁部上端が面取りされている。13は小型丸底壺、14は移動式竈の底部片とみられる。その他に北東隅の床面で32cm×24cm、厚さ10cmの扁平な礫が据え置かれた状態で出土しているが、明確な使用痕等はみられない。

出土遺物から本遺構の時期は古墳時代前期と考えられる。



第22図 S B 1



第23図 S A 1

3. 掘立柱建物跡

S B 1 (第22図 図版9-3)

S 32、R 32グリッド、標高52.10m～52.70mの斜面地に位置する。5層上面を検出面とする。桁行2間（3.76m）、梁行2間（2.72m）の側柱建物である。主軸の方位はN-47°-Wであり、ほぼ等高線に沿う。柱間寸法は1.2～2.0mとばらつきがあり、柱筋の通りも悪い。柱穴の掘方は径40～50cm前後の円形を呈する。P 1、P 3では柱痕跡が確認され、柱は径20cm前後と推定される。柱穴の底面レベルは51.98m～52.28mと一定していないが、四隅のP 1、P 3、P 5、P 7がやや低い傾向にある。遺物は出土せず、詳細な時期の特定はできないが、古代以前の遺構と考えられる。

4. 柵列

S A 1 (第23図 図版9-4)

T 31、S 31グリッド、標高51.90m～52.05mの斜面に位置する。5層上面を検出面とする。3基の小型ピットが直線上に並び、方位はN-23°-Eである。各ピットの平面形はP 3が長辺40cm、短辺36cmの方形、P 2が径36cmの円形、P 1が長軸40cm、短軸36cmの円形を呈する。ピット間の距離は心々でP 3-P 2が1.8m、P 2-P 1が1.5mとなる。P 1の底面レベルはP 3、P 2と比べると30cmほど浅い。P 2、P 1で柱痕跡が確認され、P 2が20cm、P 1で16cmと復元される。遺物はP 3から土師器片が出土しているが、小片であるため、詳細な時期の特定はできない。ただし、層位から古代以前の遺構と考えられる。

5. 土坑

S K 1 (第24図 図版10-1)

S 33グリッド、標高53.00mの緩斜面に位置する。平面形は長軸88cm、短軸86cm の楕円形を呈する。検出面からの深さは1.63mである。遺物は出土せず、時期は特定できない。底面に小穴等は確認されていないが、深さや断面形態などから落とし穴と考えられる。

S K 2 (第24図 図版10-2)

T 31グリッド、標高52.00mの緩斜面に位置する。5層上面を検出面とする。平面形は長軸98cm、短軸88cm の楕円形を呈する。検出面からの深さは1.0mである。遺物は出土せず、時期は特定できない。底面に小穴はみられないが、深さや断面形態などから落とし穴と考えられる。

S K 3 (第24図 図版10-3)

T 33グリッド、標高53.40mの緩斜面に位置する。5層を検出面とする。平面形は長軸1.68m、短軸1.30mの楕円形を呈する。断面形は皿状を呈し、底面にはやや凹凸がある。検出面からの深さは27cm である。遺物は出土せず、時期、性格とも不明である。

S K 4 (第24図 図版10-4)

T 33グリッド、標高53.35mの緩斜面に位置する。5層を検出面とする。平面形は長辺1.11m、短辺83cm の長方形を呈する。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、検出面からの深さは1.0mである。底面はほぼ平坦である。埋土は13層に細分され、各層とも黄褐色ローム(6層)のブロックを多く含むことなどから人為的に埋め戻された可能性が高い。遺物は鉄製品F 1 が出土している。薄板状の鉄製品で、碧玉製とみられる剥片が付着した状態で出土した。上手、下手側とも明瞭な刃部は作り出されておらず、用途は不明である。それ以外の出土遺物は無く、本遺構の時期、性格とも不明である。

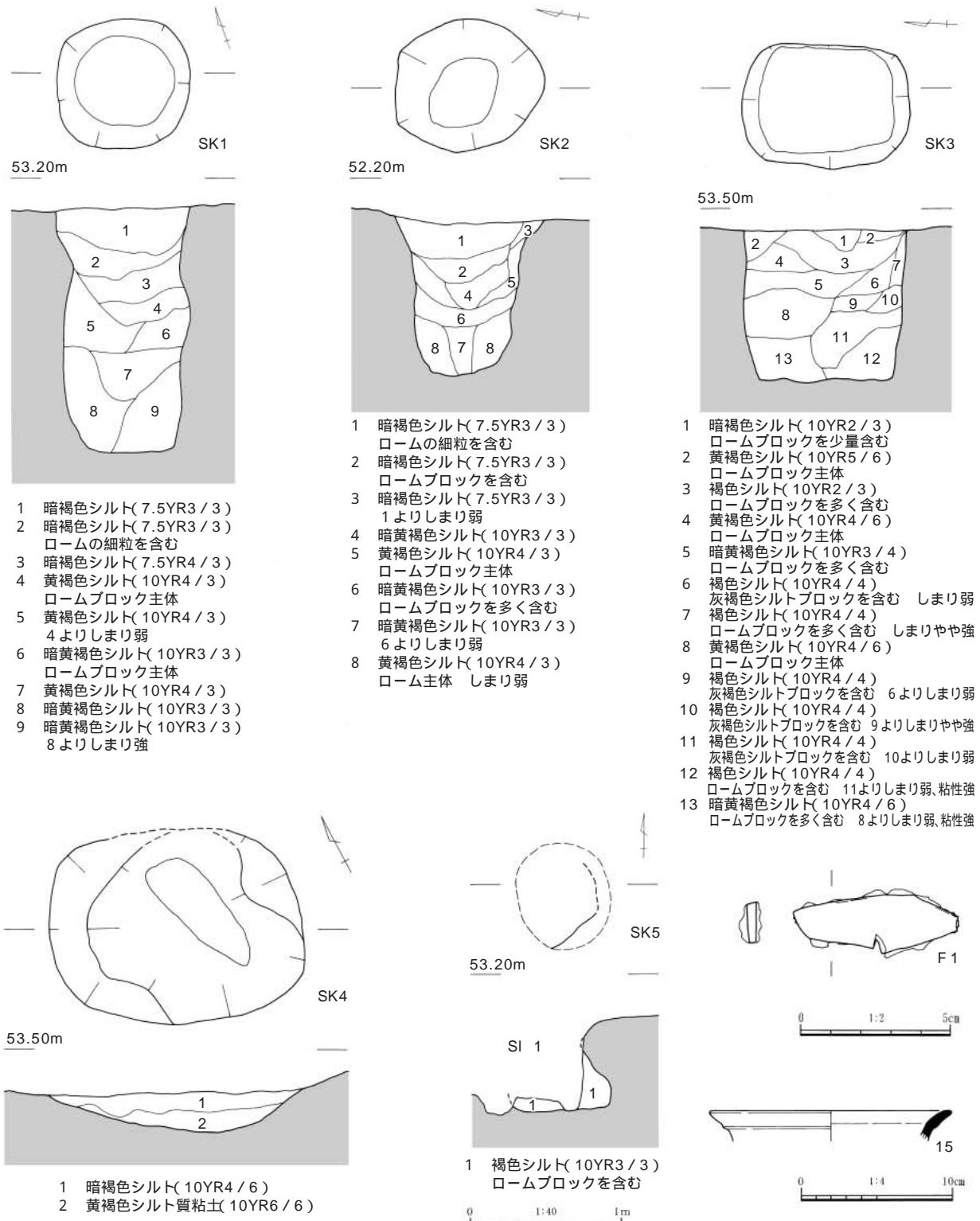
S K 5 (第24図 図版10-5・6)

T 33グリッド、標高52.90mの緩斜面に位置する。S I 1 の南東隅に位置し、大部分をS I 1 に切られ、検出面での正確な形態や規模を復元することはできない。底面は長軸70cm、短軸64cm の円形を呈すると考えられ、検出面からの深さは61cm である。断面形はフラスコ状を呈し、貯蔵穴と考えられる。遺物は出土していないが、S I 1 との重複関係から古墳時代前期以前と考えられる。

6. 遺構外出土遺物 (第25図 図版12・13)

遺構に伴わない遺物について、古代に比定されるものを選別した。第23図16~25は須恵器である。16~20は無高台の壺である。16は器壁が薄く、体部から口縁部にかけて直線的に外傾する。17~20は底部資料で、いずれも回転糸切り痕が残る。21・22は高台付壺である。21はやや外方に張る高台を持つ。器壁が比較的厚く、内面底部の調整が粗雑であることから、壺の可能性もある。22は断面逆三角形の高台が付く。底部は回転ヘラ切り後、粗いナデ調整が施される。23は広口壺の口縁部と思われ、内外面に若干自然釉が付着している。24・25は高台が付く壺である。26~35は土師器である。26は蓋で、扁平なつまみがつく。27~31は無高台の壺、32は高台付壺である。27・28・32は内外面に赤色顔料が塗布される。29~31は底部の切り離しが回転糸切りである。29・30は底径が約10cm と大きい。33~35は甕で、口縁部は「く」字状を呈するが屈曲はあまり。36は移動式甕で、焚口側部、および底の一部が残存する。外面には赤色顔料が塗布されている。

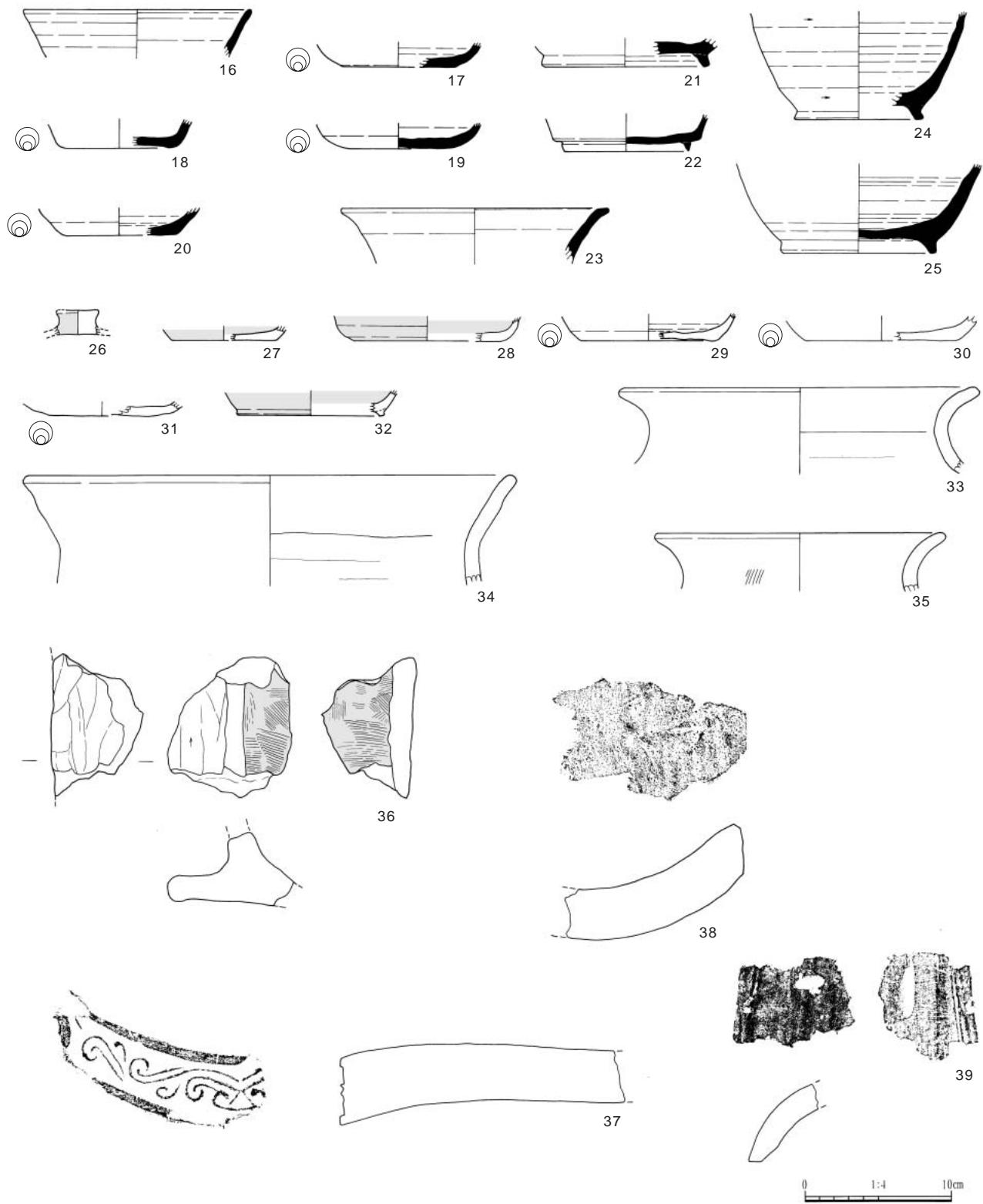
第2節 遺構と遺物



第24図 SK 4 遺物観察表

遺物番号	插図番号	遺構層位	種別器種	口径(cm) 底径(cm)	器高(cm)	文様・調整	*復元値 △現存値		
							胎土焼成	色調	備考
15	24	SK4	須恵器 甕	*16.0 —	△2.05 —	内外面:ナデ	密良好	灰色	

第24図 SK 1・2・3・4・5



第25図 遺構外出土遺物

37は均整唐草文軒平瓦である。中心飾りは無く、直線顆である。瓦当厚は4.5cmである。凹凸面ともケズリ後丁寧なナデが施されており、整形時におけるタタキや布目の痕跡は完全に消されている。端面の調整はケズリである。須恵質で、灰白色を呈する。一枚作りか。坂中廃寺II類と同型式と考えられる。38は37と接合しないが、調整、胎土や色調などから同一個体とみられる。39は丸

第2節 遺構と遺物

第25図 土器・土製品観察表

遺物番号	挿図番号	遺構層位	種別器種	口径(cm) 底径(cm)	器高(cm)	文様・調整	胎土焼成	*復元値 △現存値		
								色調	備考	
16 25	現代造成土	須恵器 壊	* 15.4	△3.25	内外面: ヨコナデ		密 やや軟質	灰色		
17 25	現代造成土	須恵器 壊	-	△1.7	外面: 体部ヨコナデ 底部回転糸切り 内面: ヨコナデ		密 良好	灰色		
18 25	現代造成土	須恵器 壊	* 8.0	△1.8	外面: 体部ヨコナデ 底部回転糸切り 内面: 体部ヨコナデ 底部ヨコナデ後不整方向ナデ		密 やや軟質	灰色		
19 25	II層	須恵器 壊	* 8.0	△1.7	外面: 体部ヨコナデ 底部回転糸切り 内面: ヨコナデ		密 良好	灰色		
20 25	現代造成土	須恵器 壊	-	△1.85	外面: 体部ヨコナデ 底部回転糸切り 内面: 体部ヨコナデ 底部回転ナデ後不整方向ナデ		密 良好	灰色		
21 25	II層	須恵器 高台付壊	-	△1.9	外面: 体部・高台ヨコナデ 底部回転ナデ		密 良好	灰色		
22 25	現代造成土	須恵器 高台付壊	-	△2.5	外面: 体部・高台ヨコナデ 底部回転ヘラ切り後ナデ 内面: 体部ヨコナデ 底部ヨコナデ後不整方向ナデ		密 やや軟質	灰色 青灰色		
23 25	現代造成土	須恵器 壺	* 18.3	△3.8	外面: ヨコナデ		密 良好	灰色 暗灰色	自然釉付着	
24 25	現代造成土	須恵器 高台付壺	-	△7.35	外面: 胴部・高台ヨコナデ 胴部下位~底部回転ヘラケズリ後ヨコナデ 内面: ヨコナデ		密 良好	灰色		
25 25	現代造成土	須恵器 高台付壺	-	△9.1	外面: 胴部・高台ヨコナデ 胴部下位~底部回転ヘラケズリ後ヨコナデ 内面: ヨコナデ		密 良好	灰色		
26 25	II層	土師器 蓋	つまり径 2.9	△1.75	外面: ナデ 内面: 磨耗のため調整不明		密 良好	にぶい橙色	内外面赤色塗彩	
27 25	III層	土師器 壊	* 7.2	△1.0	外面: 体部ナデ 底部ケズリ後ナデ 内面: ナデ		密 良好	暗赤褐色	内外面赤色塗彩	
28 25	現代造成土	土師器 壊	* 10.1	△1.7	外面: 体部ナデ 底部ケズリ後ナデ 内面: ナデ		密 良好	橙色	内外面赤色塗彩	
29 25	現代造成土	土師器 壊	* 9.3	△1.85	外面: 体部回転ナデ 底部回転糸切り 内面: 体部回転ナデ 底部回転ナデ後不整方向ナデ		密 良好	にぶい黄橙~橙色		
30 25	現代造成土	土師器 壊	* 10.4	△1.7	外面: 体部磨耗のため調整不明 底部回転糸切り 内面: 回転ナデ後不整方向ナデ 磨耗著しい		密 良好	橙色		
31 25	現代造成土	土師器 壊	* 7.2	△0.8	外面: 体部回転ナデ 底部回転糸切り 内面: 回転ナデ	密 良好	細砂粒多量混	明橙色		
32 25	II層	土師器 高台付壊	* 10.1	△1.75	外面: ナデ 磨耗著しい 内面: ナデ		密 良好	明赤褐色	にぶい黄橙色	内外面赤色塗彩
33 25	現代造成土	土師器 甕	* 24.2	△5.3	外面: ナデ 内面: 口縁部ナデ 頸部以下ヘラケズリ	密 良好	細砂粒多量混	橙色		
34 25	現代造成土	土師器 甕	-	* 33.2	△7.3	外面: ナデ 煤付着 内面: 磨耗のため調整不明	密 良好	細砂粒多量混	茶褐色	煤付着
35 25	現代造成土	土師器 甕	-	* 19.6	△4.0	外面: 口縁部ナデ 脊部上位ハケ 内面: 口縁部ナデ	密 良好		橙色	にぶい褐色
36 25	II層	土製品 移動式竈	-	△8.4	外面: 粗いナデ ハケ 内面: ヘラケズリ	密 良好	細砂粒多量混	橙色	外面赤色塗彩	

第25図 瓦観察表

遺物番号	挿図番号	遺構層位	種別器種	厚さ(cm)	重量(g)	文様・調整	胎土焼成	*復元値 △現存値		
								色調	備考	
37 25	耕作土	軒平瓦	4.8	120	瓦当文様: 均整唐草文 凸面: ケズリ 凹面: 布目		密 須恵質	灰白色	坂中廃寺II類	
38 25	表土中	軒平瓦	3.5	561	凸面: ケズリ 凹面: 布目 ケズリ		密 須恵質	灰色		
39 25	攪乱土	丸瓦	1.8	106	凸面: スリリ消し 凹面: 布目		密 須恵質	灰白色		

瓦で、凸面の調整はスリリ消しである。側面は凹面側をケズリにより面取りしている。

参考文献

岸本町教育委員会 1977 『大寺廃寺第四次発掘調査報告書』

真田廣幸 1980 「奈良時代の伯耆国に見られる軒丸の様相」『考古学雑誌』第66巻第2号

鳥取県立博物館 2003 『鳥取県立博物館所蔵 古代寺院関係資料集』

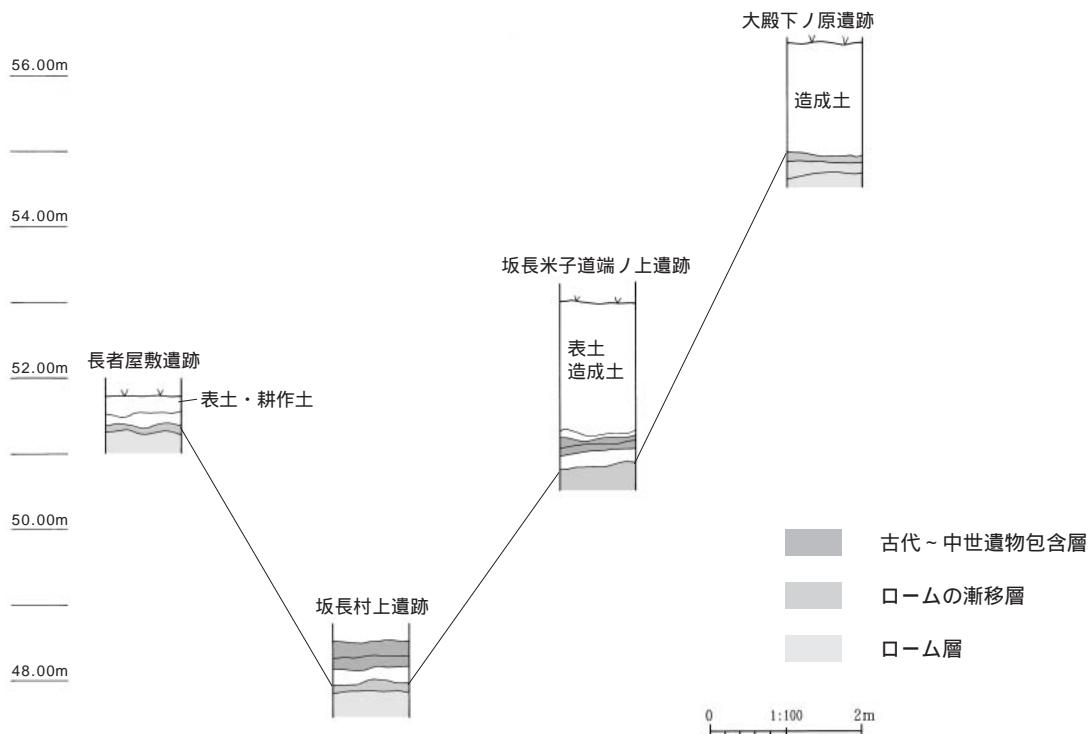
第5章 坂長村上遺跡・坂長道端中遺跡

第1節 遺跡の立地と土層堆積

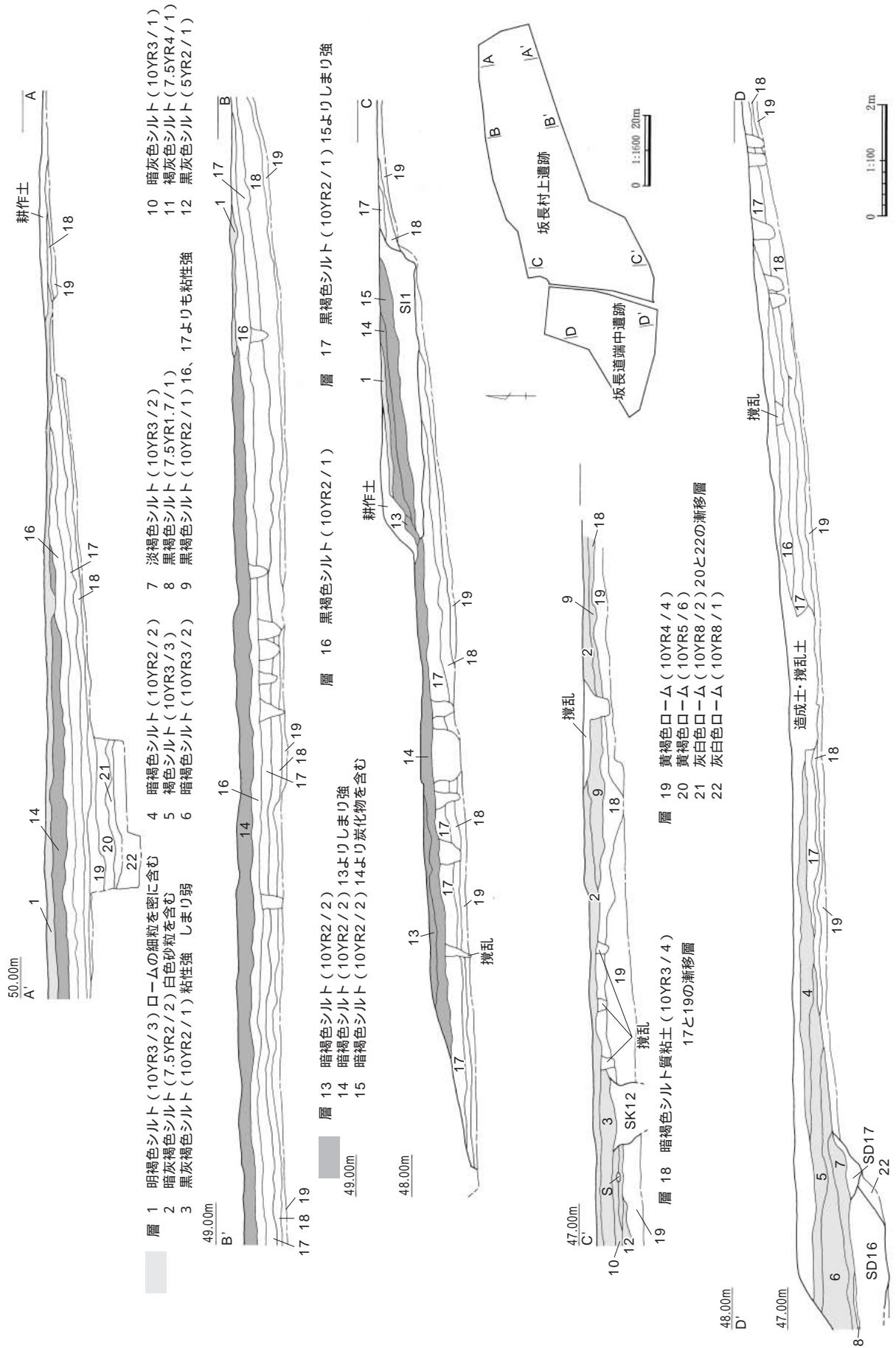
遺跡は長者原台地に入り組む谷に位置している。調査前は耕作地で、現地表面の標高が約47.0～50.0mの緩斜面にあたる。土層断面の堆積状況からは南西の調査区際付近が最も標高が低く、谷底と推測される。北側の台地上平坦部とは2.5～3.5m程の比高差がある。北東側の斜面には坂長米子道端ノ上遺跡が隣接し、さらにその北東から東側にかけての台地上には坂長下屋敷遺跡、大殿下ノ原遺跡、諏訪東土取場遺跡が存在する。また、南西へ200m程離れた台地上には長者屋敷遺跡が立地している。

調査区内の土層堆積をみると、北東隅や北西隅付近、および南側の標高の低い範囲で削平により、表土直下がローム層となる以外は遺物包含層の残りは比較的良好である。したがって、地形に沿う形でA-A'～D-D'の土層ベルト4本を設定し、堆積状況を把握しながら調査を進めた。堆積層は時期によりI～VI層の6つに大別される（第27図）。

I層は近世以降の遺物包含層と考えられ、12層に細分される。A-A'、B-B'、C-C'の1層はロームの細粒を密に含む暗褐色シルトで、人為的な堆積層の可能性がある。厚さは10cm程である。平面での検出は部分的な範囲にとどまり、遺物は出土していない。C-C'の2、3層、および10～12層は灰色系シルトで、酸化鉄を多く含んでいる。10～12層は砂粒をやや多く含み、拳大から人頭大の礫が出土している。12層中から磁器片が出土している。9層は黒褐色シルトで、遺物は出土していない。D-D'の4～7層は褐色系シルトで、酸化鉄を密に含む。遺物は近世以降の陶磁



第26図 遺跡周辺土層柱状図



第27図 調査区土層断面図

器片や中世の土師器坏や皿などが出土している。8層は炭化物層で、遺物は出土していない。5層上面からSK7が、10層上面からSK12が掘り込まれている。

II層は古代から中世前期にかけての遺物包含層と考えられる。坂長道端中遺跡の調査区では確認できず、近世以降に削平された可能性が高い。3層に細分され、14層は暗褐色シルトで、厚さは最大30cmほどである。13、15層はC-C'のみで確認された層で、その堆積範囲は明らかではない。層をなす構成物は14層と類似するが、S I 1の上部に堆積する15層は炭化物を多く含んでいる。遺物は主に14層中から須恵器、土師器、瓦、鉄製品、鍛冶関連遺物が多量に出土している。須恵器、土師器は8、9世紀に比定されるものが主体となる(第50~52図)。第52図182~184は土師器小皿、および坏で、II層の堆積時期の下限を示す資料と考えられる。いずれも底部糸切りの土師器で、10~11世紀頃に比定される。堆積時期の上限についてはIII層の出土遺物から8世紀後半頃と推定される。II層上面で遺構は確認されていない。

III層は古代の包含層と考えられ、16層は黒褐色シルトである。A-A'、B-B'、D-D'では20cmほどの厚さで堆積しているが、C-C'では確認されず、II層直下でIV層が検出される。III層上面では掘立柱建物跡SB1、集石遺構、溝状遺構、土坑など古代、中世の遺構が形成されたと考えられる。

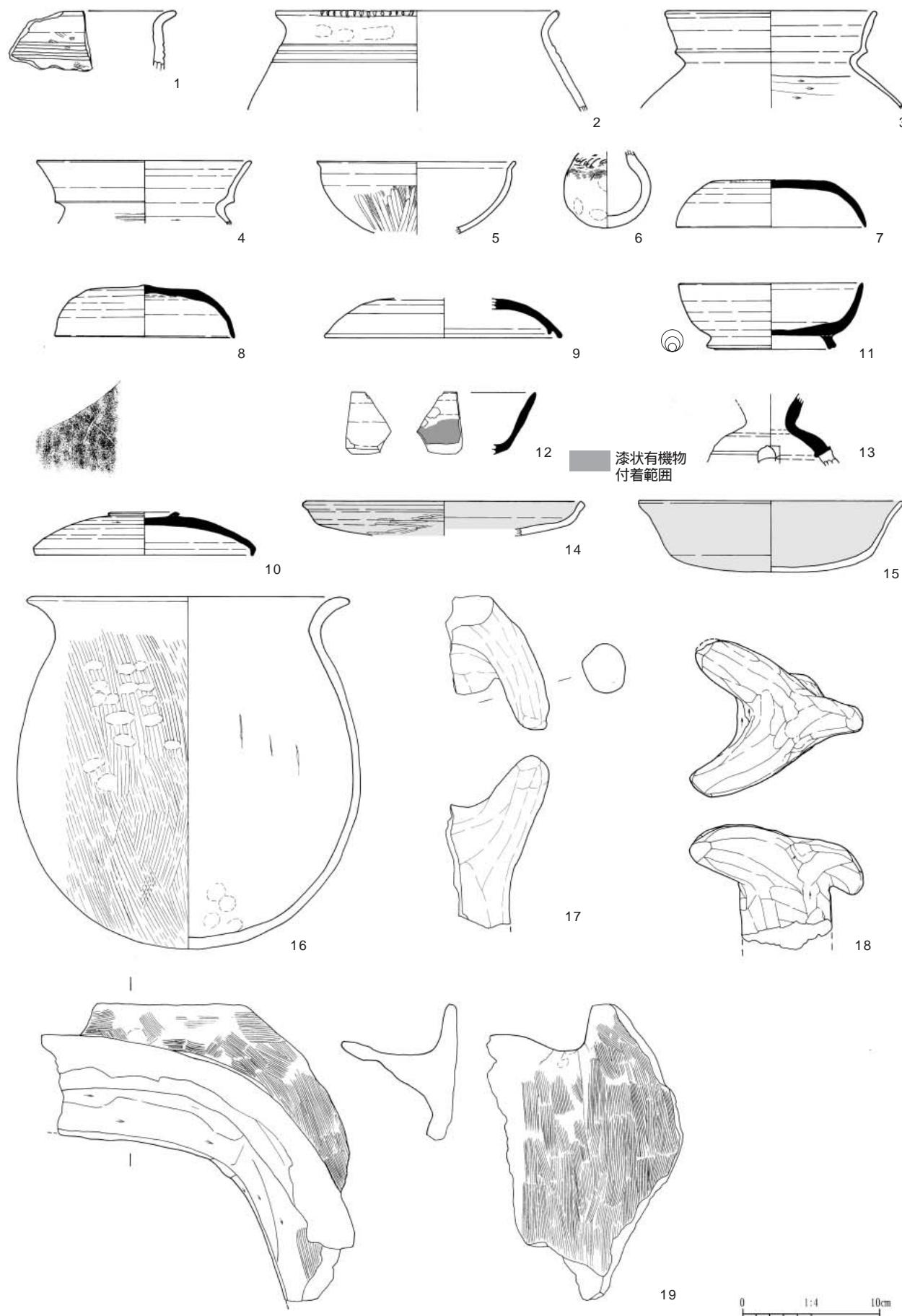
IV層は古墳時代以前の包含層の可能性がある。17層は黒褐色シルトで、厚さは20~30cmほどである。16層と色調、および層をなす構成物は酷似する。IV層上面では竪穴建物跡S I 1、段状遺構SS1など古代の遺構が形成された可能性がある。

III、IV層からは弥生土器、土師器、瓦、須恵器、鉄製品、鍛冶関連遺物などの遺物が出土している。調査ではIII層とIV層との識別が平面、断面とも容易ではなかったため、ひとまとめに捉え、遺物を出土レベルから便宜的に上層と下層とに分けて取り上げを行った。したがって、各遺物が出土した層位をどちらかに明確に特定できたものは僅かである。第28図10、14、第29図20は確実にIII層から出土している。10は須恵器坏蓋で、輪状つまみをもつ。口縁がやや内傾ぎみに屈曲する。14は土師器皿で、外面が丁寧なヘラミガキ調整が施されている。20は移動式竈の底部破片である。これらの遺物からIII層の堆積時期の下限は8世紀前半頃と考えられる。IV層については須恵器、土師器の細片が出土しているが、詳細な時期は特定できない。ただし、IV層上面からS I 1、SS1が掘り込まれた可能性があることから、堆積時期の下限は7世紀後葉頃と推定される。

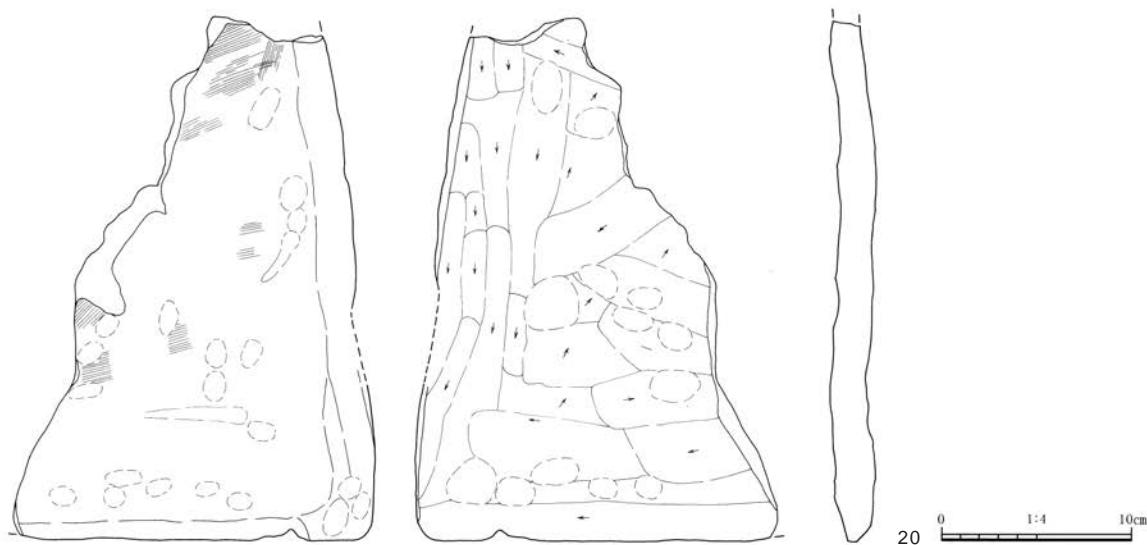
V層はIV層とVI層との漸移層と考えられる。18層は暗褐色シルト質粘土で、厚さは最大40cmほどである。この層からは旧石器時代のナイフ形石器1点、縄文時代草創器の尖頭器が4点出土している。当層上面から掘り込まれる遺構は確認されていない。VI層はローム層で、色調などから黄褐色ローム(19、20層)、灰白色ローム(21、22層)に大別される。いずれも遺物は出土していない。

なお、古代における堆積環境を把握するためC-C'のII~IV層(14層、16層、17層)から土壤試料を採取し、植物珪酸体分析、花粉分析を実施している。その結果、調査地周辺は当時、比較的乾燥した環境にあったことが判明している(第6章第2節参照)。また、旧石器、縄文時代草創期の石器が出土したV層、およびVI層については堆積年代、および古環境を明らかにするため、テフラ分析、花粉分析を実施している(次節、および第6章第1節参照)。

第1節 遺跡の立地と土層堆積



第28図 層出土遺物(1)



第29図・層出土遺物(2)

第28・29図 土器・土製品観察表

遺物番号	挿図番号	遺構層位	種別器種	口径(cm) 底径(cm)	器高(cm)	文様・調整	胎土焼成		色調	備考
							*復元値	△現存値		
1 28	III~IV層 上層	弥生土器 甕		△4.25	△4.25	外面: 口縁部キザミ ミガキ ヘラ描き沈線3条 内面: ナデ	3mm程の砂粒を含む 良好		黄橙色	
2 28	III~IV層 上層	弥生土器 甕		*20.6	△7.25	外面: 口縁部磨耗のため調整不明 胸部ナデ ヘラ描き沈線3条 内面: ナデ	4mm程の砂粒を多く含む 良好		黄橙色	
3 28	III~IV層 上層	土師器 甕		*15.1	△7.1	外面: ナデ 内面: 頸部以下ヘラケズリ	密 良好		にぶい橙色	
4 28	III~IV層 上層	土師器 甕		*15.8	△4.65	外面: ナデ 一部ハケ 内面: 頸部以下ヘラケズリ	密 良好		にぶい橙色	
5 28	III~IV層 上層 高坏?	土師器 甕		*14.6	△5.3	外面: ハケ後ミガキ 内面: ナデ	密 硬質		浅黄色	
6 28	III~IV層	土師器 小型丸底壺		△5.55		外面: 肩部刺突文 ハケ 胸部下半ユビオサエ 内面: ナデ	密 良好		にぶい橙色	
7 28	III~IV層	須恵器 坏蓋		*13.9	△3.45	外面: 天井部切り離し後ナデ 体部ヨコナデ 内面: ヨコナデ	やや密 やや軟質		灰黄褐色	
8 28	III~IV層	須恵器 坏蓋		*13.2	△3.8	外面: 天井部切り離し後ナデ 体部ヨコナデ 内面: ヨコナデ	2mm以下砂粒を含む やや軟質		灰色	
9 28	III~IV層	須恵器 坏蓋		*17.1	△2.8	外面: 天井部回転ヘラケズリ 内面: ヨコナデ	密 硬質		灰色	
10 28	III層	須恵器 坏蓋		*16.1	△3.2	外面: 天井部静止糸切り後、回転ヘラケズリ、ヨコナデ 内面: ヨコナデ	密 硬質		灰色	ヘラ記号あり
11 28	III~IV層 上層	須恵器 高台付坏		*13.4	△4.8	外面: ヨコナデ 底部回転糸切り 内面: ヨコナデ	密 硬質		灰色	
12 28	III~IV層 上層 高坏? 壊? 坏? 壊?	須恵器 甕		*9.55	△4.55	外: ヨコナデ 内: ヨコナデ	密 硬質		灰色	内面漆状有機物付着
13 28	III~IV層	須恵器 甕			△4.5	外: ヨコナデ 胸部沈線1条 内: ヨコナデ	密 硬質		灰色	
14 28	III層	土師器 皿		*20.1	△2.5	外: ケズリ後ミガキ 内: ナデ	密 良好		橙色	内外面赤色塗彩
15 28	III~IV層	土師器 坏		*19.3 14.75	△5.3	外: 口縁部ミガキ? 底部ケズリ後ナデ 内: ナデ	密 良好		橙色	内外面赤色塗彩
16 28	III~IV層	土師器 甕		*22.3	△26.0	外: 胸部粗いハケ 上半ユビオサエ 内: 胸部工具によるナデ? 底部ユビオサエ	密 良好		橙色	
17 28	III~IV層 上層	土製品 土製支脚			△12.6	外: ナデ	やや粗 良好		橙褐色	
18 28	III~IV層 下層	土製品 土製支脚			△8.65	外: ナデ	密 良好		橙色	
19 28	III~IV層 上層	土製品 移動式竈			△21.9	外: ハケ ヘラケズリ 内: 掛口ヘラケズリ	密 良好		橙色	
20 29	III層	土製品 移動式竈			△27.6	外: ハケ ユビオサエ 内: ケズリ後一部ユビオサエ	密 良好		淡褐色	

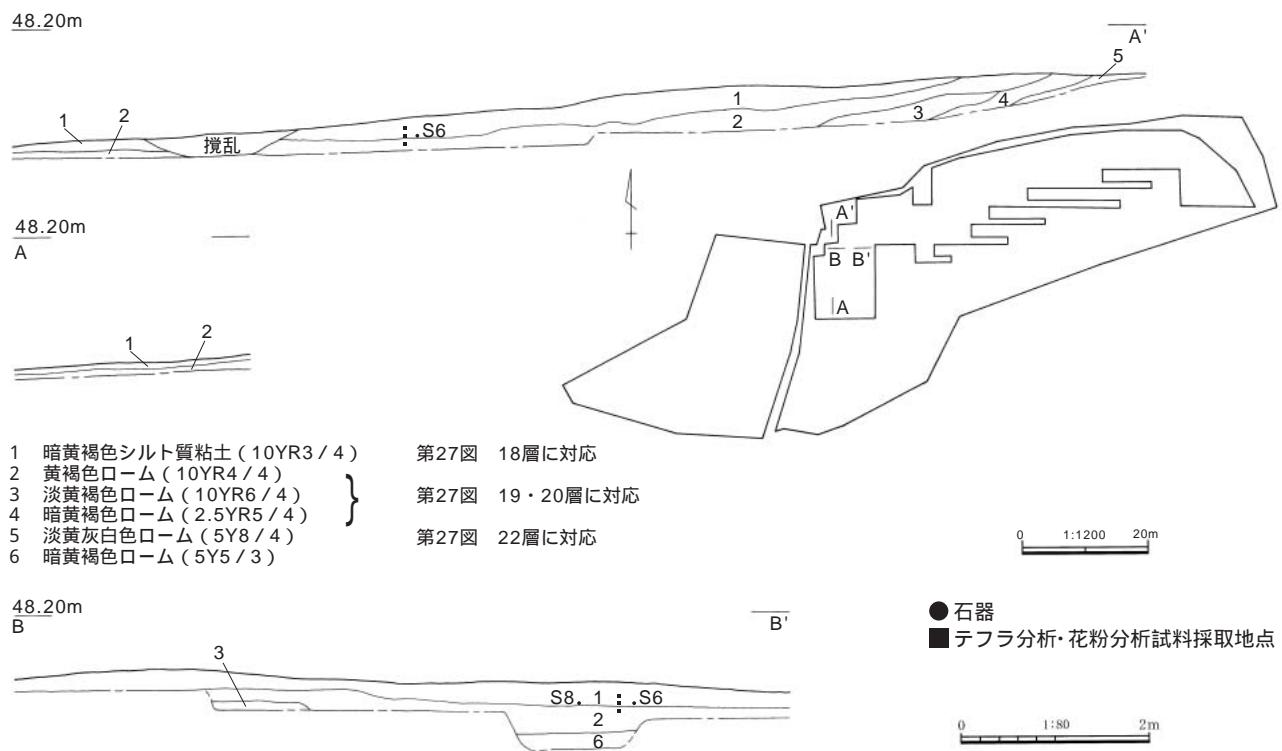
第2節 旧石器時代～縄文時代の調査

1. 概要 (第30・31図)

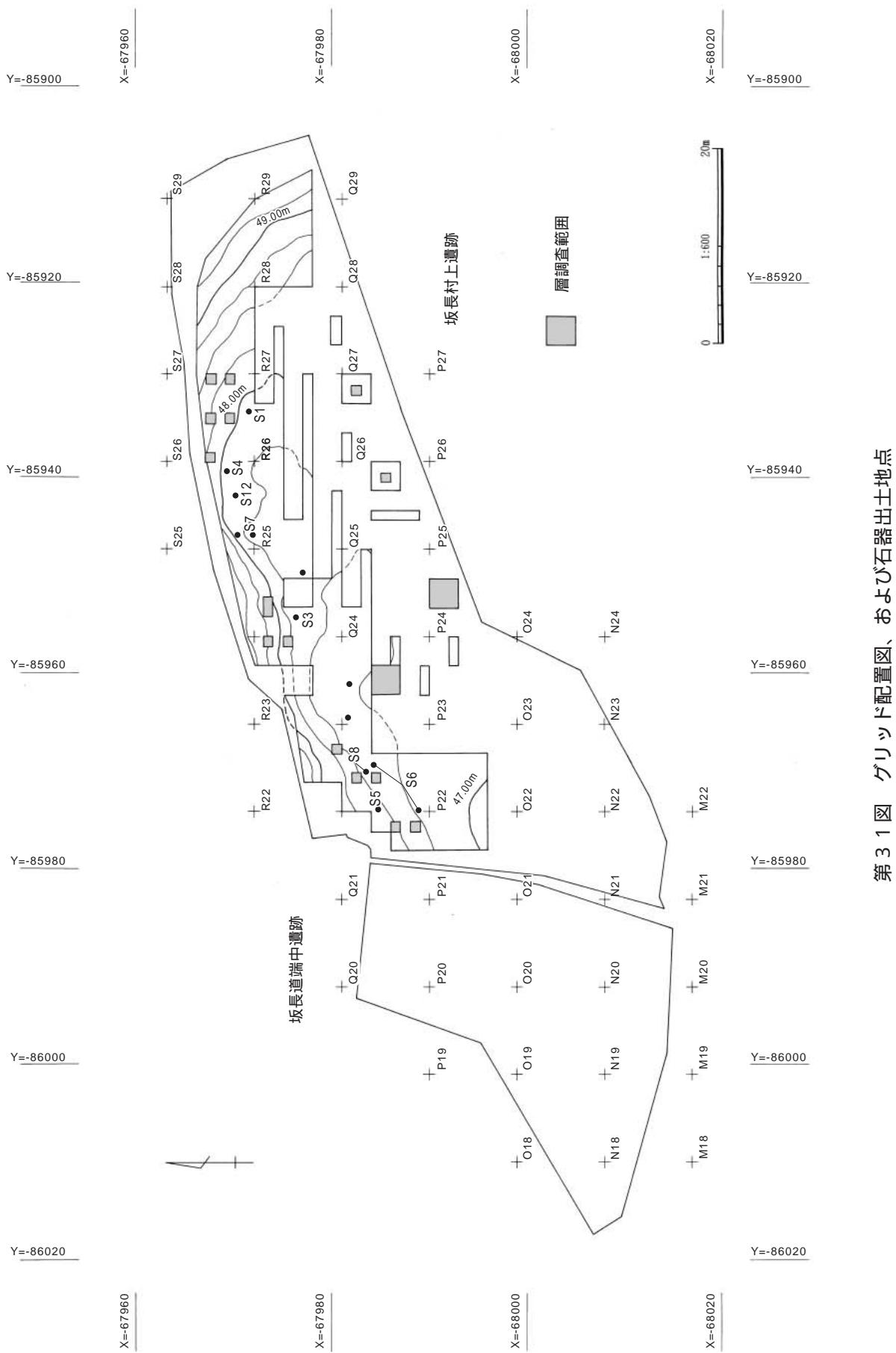
経緯と経過

調査開始後、Q23グリッドのサブトレーナー掘削時に尖頭器S5が、P20グリッドではIV層掘削時に尖頭器S3が出土した。とくにS5はロームの漸移層(V層)から出土した可能性が考えられ、V層以下に縄文時代以前の遺物包含層や遺構が存在することが予想された。したがって、まず、S5が出土した地点周辺のP25、Q23、Q24、R25グリッドに1箇所ずつ、3m×3mの調査区を設定し、V層、およびVI層の上部を掘り下げた。その結果、Q23グリッドのV層下部から尖頭器S6が出土したため、さらに南北9m、東西6mの範囲で拡張したところ、同じくV層下部からS6の接合資料、および黒曜石の剥片が出土するに至った。これらのことから、V層下部における石器群の広がりをさらに広範囲で確認する必要性が生じた。そこで石器が台地の斜面裾部から出土していることに着目し、まず、この裾部を可能な限り平面的に掘り下げるとした。それと同時に調査区南側でもトレーナーを設定し、V層における遺物の有無を確認した。また、S27グリッドのV層からナイフ形石器S1が出土したことから、適宜1m×1mの調査区を設定し、VI層中における遺物の有無も確認した。

なお、V層、およびVI層については堆積年代や当時の環境を知る手がかりを得るために、テフラ分析、および花粉分析を実施している。テフラ分析では、始良Tn火山灰(=AT、約2.4～2.5万年前)に由来する火山ガラスが検出され、尖頭器が出土したV層はAT降灰後で、鬼界アカホヤ火山灰(K-Ah、約6300年前)降灰前に形成された層であることが推定されている(第6章第1節参照)。



第30図 層堆積状況図



石器の出土状況

ロームの漸移層(V層)から尖頭器4点、剥片5点、ナイフ形石器1点、石鏃1点が出土している。これらの石器は標高47.25～48.0mの斜面裾部から散漫な状態で出土しており、特定の箇所やグリッドに集中する状況は窺えない。尖頭器と剥片はV層下部から出土し、ほぼ原位置を保つと考えられるが、ナイフ形石器についてはV層上部から出土しており、北側の台地上から二次的に流れ込んだ可能性が高い。尖頭器S 2～6はいずれもほぼ水平な状態で出土している。S 6は先端側と基部側の2片の接合資料であり、両者の出土地点は約6.6m離れている。なお、尖頭器は調査区全体で5点出土し、いずれも縄文時代草創期に位置付けられる。

2. 出土石器 (第32図 卷頭図版4 図版55-1)

ここでは、V層出土遺物と縄文時代草創期に位置づけられる資料計8点を掲載した。S 1は旧石器時代、S 2～S 8は縄文時代草創期に属すと考えられる資料である。

S 1は黒曜石製のナイフ形石器である。素材剥片の打面側を先端とし、二側縁を加工して成形する。左側縁は先端側に刃部を設定し、背面側と腹面側からプランティングを施す一方、右側縁は先端から基部にかけて腹面側からプランティングを施す。基部は背面側から折れている。S 2はガラス質安山岩製の尖頭器である。周縁から丁寧に調整して細長い柳葉形を呈するが、裏面に大きな剥離痕を残しており、再加工品である可能性も有している。S 3はガラス質安山岩製の有茎尖頭器である。打撃によって成形した後、押圧剥離によって調整して鋭い刃部を作り出す。右側縁の一部に微細剥離が認められる。先端を欠くが、折れ面が比較的新しく後世に折損したものと思われる。S 4は黒曜石製の尖頭器である。表裏とも押圧剥離によって調整し鋭い刃部を作り出す。上下を大きく欠き、全体の形状は不明である。先端側は裏面から折れ、基部側は左側縁からヒビが入ったあと、さらにそのヒビから折れている。S 5は無斑晶安山岩製の尖頭器である。表裏とも打撃によって木葉形に成形した後、刃部の一部を細かく調整する。先端は表面から折れて欠いている。S 6は緻密質安山岩製の有茎尖頭器である。打撃によって成形した後、押圧剥離によって鋭い刃部を作り出す。裏面から折れている。

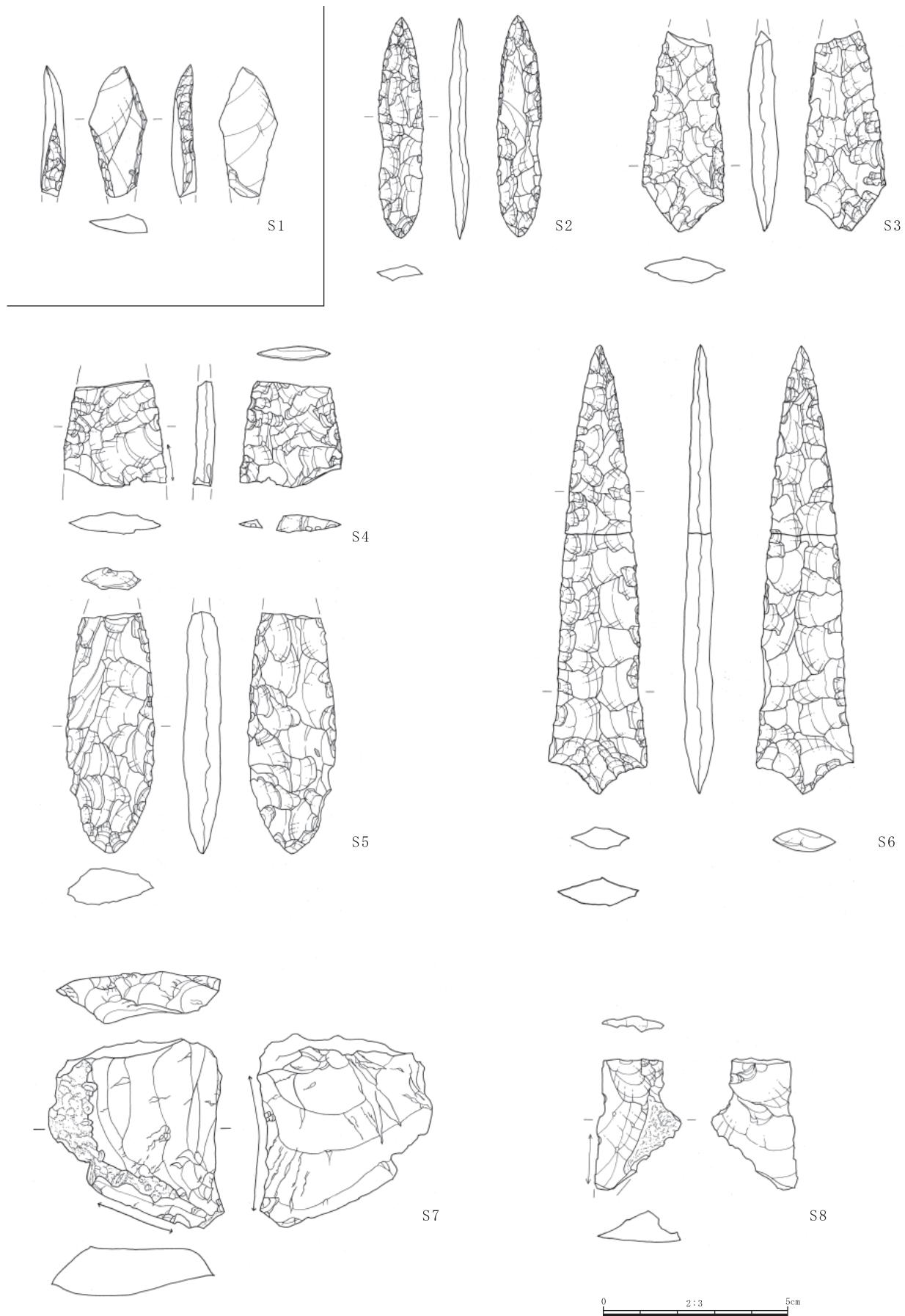
S 7はガラス質安山岩製の微細剥離のある剥片である。バルブ、コーン、スカーが発達し、硬質ハンマーによって直接打撃されたものと考えられる。右側縁腹面側と下端部背面側に微細剥離が認められる。S 8は黒曜石製の微細剥離のある剥片である。一度打撃されてヒビが入った後、再度打撃された際にヒビから剥離している。末端部が腹面から折れているが、風化の状態から若干時期差がある可能性もある。

なお、S 2～S 6の尖頭器類については、第7章第1節に別項を立てて詳述する。

第32図 石器観察表

遺物番号	挿図番号	出土地点	層位	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石材	備考
S1 32	S27	V層上部	ナイフ形石器	3.55	1.53	0.59	2.7		黒曜石	
S2 32	R25	V層下部	尖頭器	5.97	1.18	0.48	3.2		ガラス質安山岩	
S3 32	P20	IV層	有茎尖頭器	5.38*	2.20	0.74	8.5*		ガラス質安山岩	
S4 32	S26	V層下部	尖頭器	2.81*	2.77	0.52	4.3*		黒曜石	
S5 32	Q23	V層	尖頭器	6.62*	2.44	1.05	16.6		無斑晶安山岩	
S6 32	Q23	V層下部	有茎尖頭器	12.23	2.64	0.74	19.4		緻密質安山岩	
S7 32	S26	V層下部	微細剥離のある剥片	5.35	4.80	1.44	38.4	<ガラス質安山岩>		
S8 32	Q23	V層下部	微細剥離のある剥片	3.55*	2.31	0.87	4.7		黒曜石	

*残存値には*を付した。***石材名の<>は調査担当者の肉眼観察による。



第32図 出土石器

第3節 古代・中世の調査

1. 概要 (第33図)

検出された遺構の大半は標高48.0～49.0m前後の緩斜面に位置している。竪穴建物跡2棟、掘立柱建物跡1棟、段状遺構1基、溝状遺構10基、土坑8基、集石遺構2基を確認している。時期はS I 1、SS 1が7世紀後葉、S I 2が8世紀前半、S B 1が8世紀代、SK 8が9世紀代と考えられる。その他の溝状遺構や土坑については確実な共伴遺物がなく、詳細な時期を特定できない。遺構はその他にピットを28基確認しているが、柱痕跡が確認できたものではなく、規則的な配置もみられない。遺物は遺構、およびII～III、IV層上層の包含層中から須恵器、土師器、瓦、鉄製品、鍛冶関連遺物が多量に出土している。

2. 竪穴建物跡

S I 1(第34～37図、巻頭図版2・3 図版16-2・17 26-2～31-2)

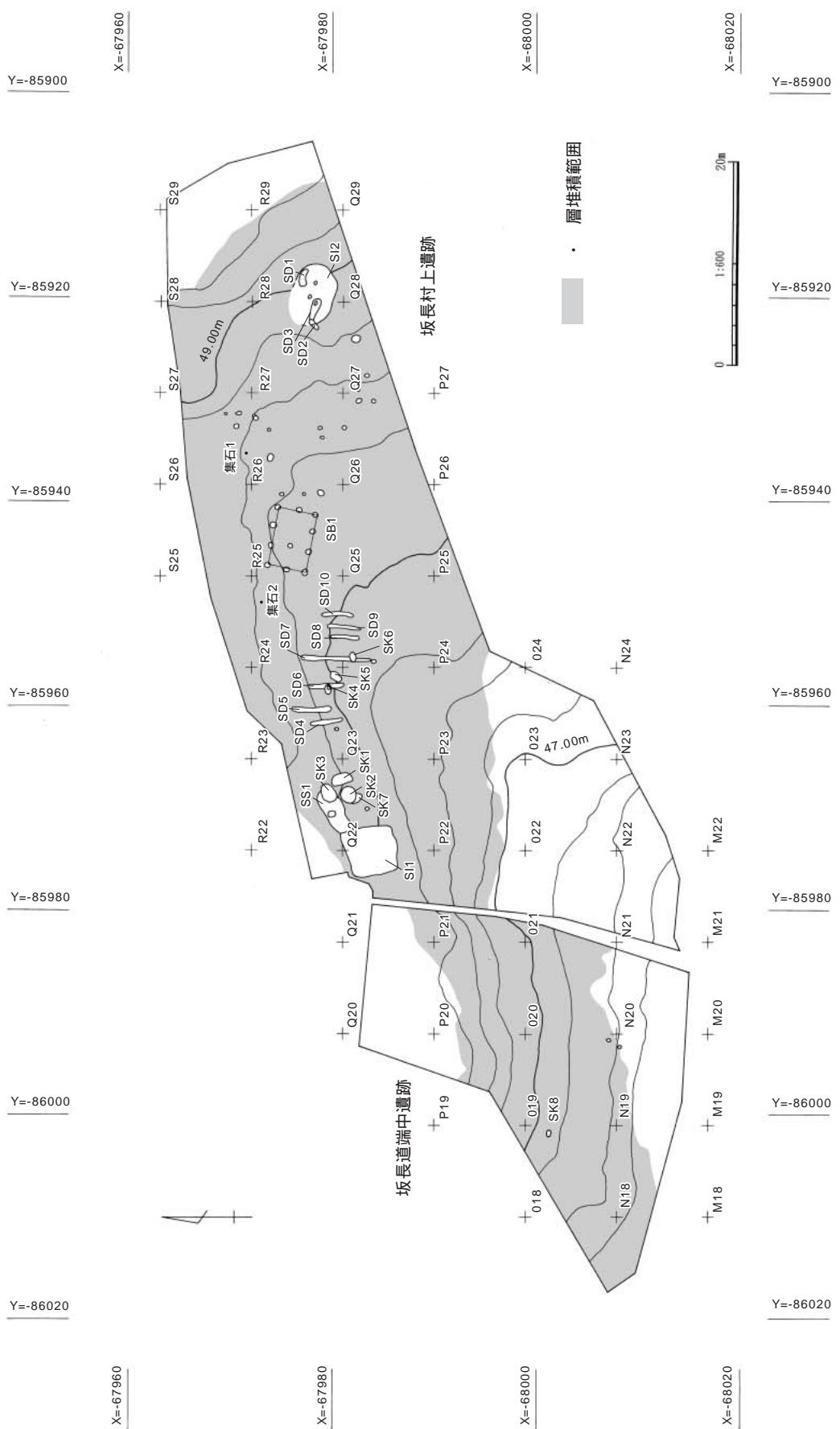
Q22、23グリッド、標高48.25mの緩斜面に位置する。IV層上面で検出している。平面形は長辺4.6m、短辺4.4mの方形を呈し、北東隅部分がやや突出する。壁高は最大で60cmで、壁際には幅20cm前後、深さ6～8cmほどの周壁溝が巡る。周壁溝は東壁、西壁沿いの一部で途切れている。床面積は18.9m²で、床面にはほぼ全面にローム層(VI層)を主体とする貼床が施されている。貼床の厚さは北側で概ね3～4cm程、南側で6～10cm程度である。埋土は2層に大別され、炭化物や焼土粒を多く含む。

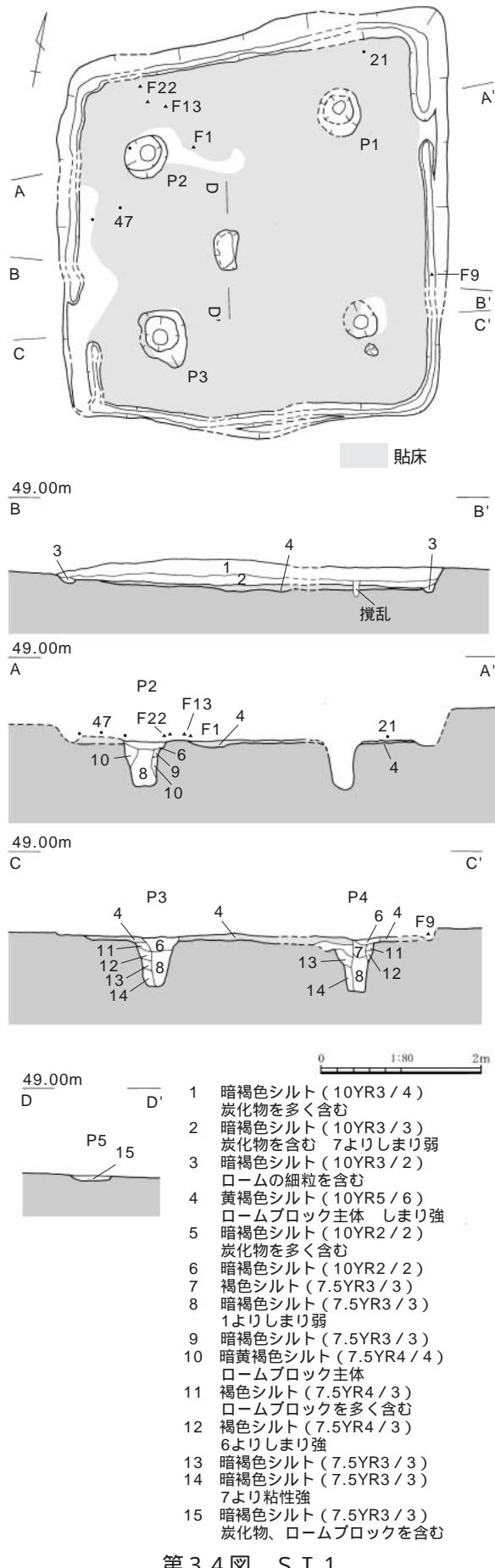
主柱穴はP 1～4の4基からなる。柱掘方は径50～60cm前後の円形、もしくは楕円形を呈する。P 2～4では柱抜取り痕跡(6～8層)が見られ、P 2、4については掘方の埋土を少し掘り下げた後、柱を引き抜いた可能性がある。柱間寸法はP 1～P 2で2.45m、P 2～P 3で2.3m、P 3～P 4で2.5m、P 1～P 4で2.7mを測る。柱堀方の深さは60cm前後で、底面の標高は南側のP 3、P 4が8cm前後低い。主柱穴以外に床面中央やや西寄りでP 5が検出されている。長軸52cm、短軸20cmの楕円形を呈し、深さ6cmと浅い。

遺物は床面直上、および埋土中から須恵器、土師器、鉄製品、鍛冶関連遺物などが多量に出土している。床面直上から出土したのは須恵器21、46～48、土師器55、61、鍛冶関連遺物F 1、3、鉄製品F 13、22である。21はかえりのつく小型の壺蓋で、つまみはもたない。天井部にはヘラ記号がみられる。46～48は低脚の無蓋高壺である。46は脚部に2方向に三角形の透かしが入る。47には透かしは無く、48は1方向に切れ目、もしくは長方形の透かしをもつと考えられる。55、61は甕で、55は胴部最大径が下半に位置する。F 1は楕円形鍛冶滓、F 3は製錬系の流動滓と考えられる。F 13、22は棒状品で、F 13は鉄鎌の可能性がある。

埋土上層から下層にかけて出土したのは須恵器22、30、31、42～45、49、51、土師器53、57～60、62、鍛冶滓F 6～8、鉄製品F 10、15、16、19、23、29、土壁片63である。22、30、31は壺蓋である。22は口径がやや大きく、かえりがつく。31は輪状つまみをもつタイプか。42～45は高台付壺と考えられる。42は高台が特異な形態をなし、輪状つまみの壺蓋となる可能性もある。45は内面に僅かに墨が付着し、転用硯の可能性も考えられるが、表面の磨耗は明瞭に確認できない。53は皿で、内面に放射状暗文が入る。F 10、15は鉄鎌と考えられ、F 16、19は釘、F 29は鎌

図33 古代・中世遺構分布図



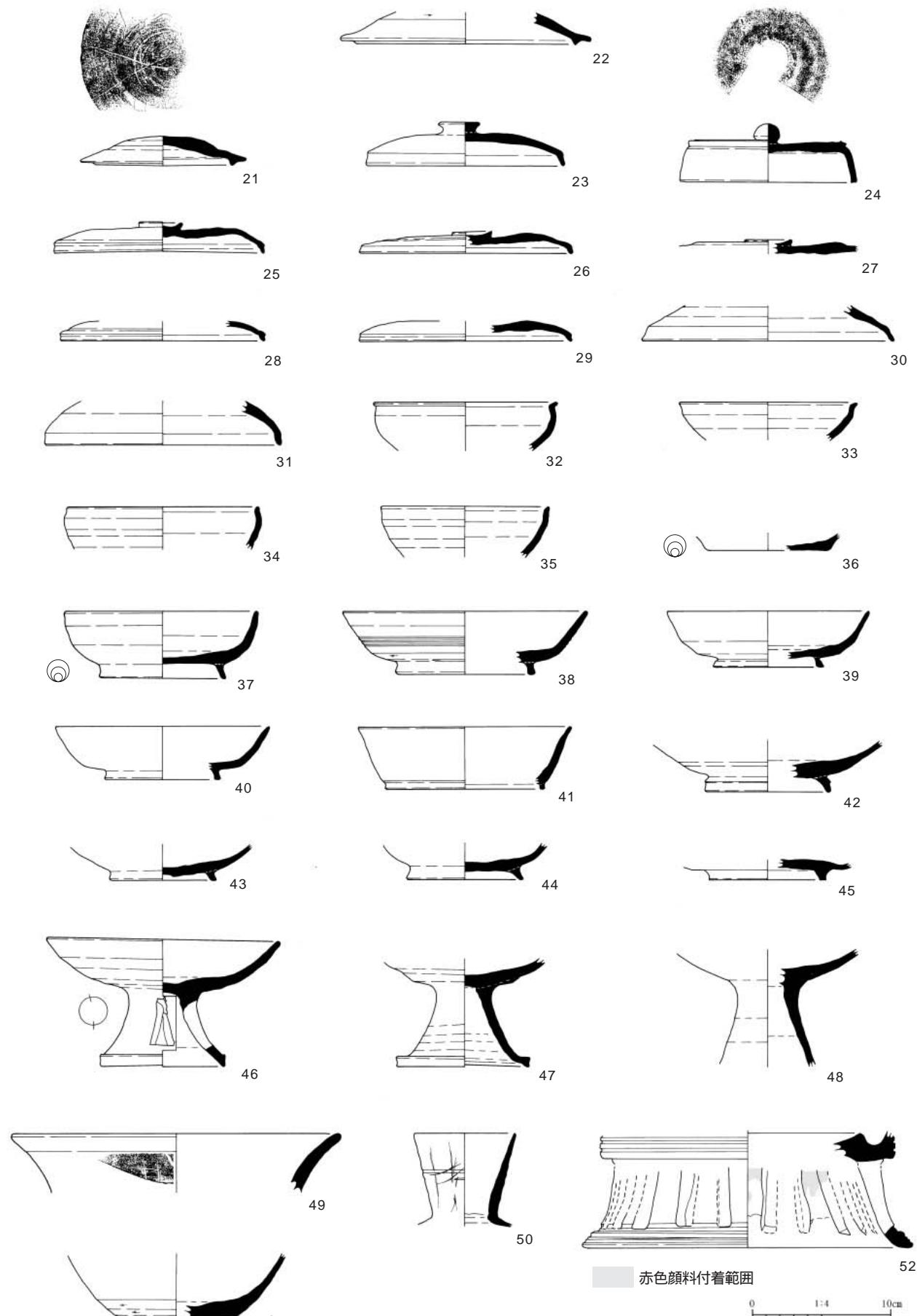


第34図 S I 1

の背側破片の可能性がある。

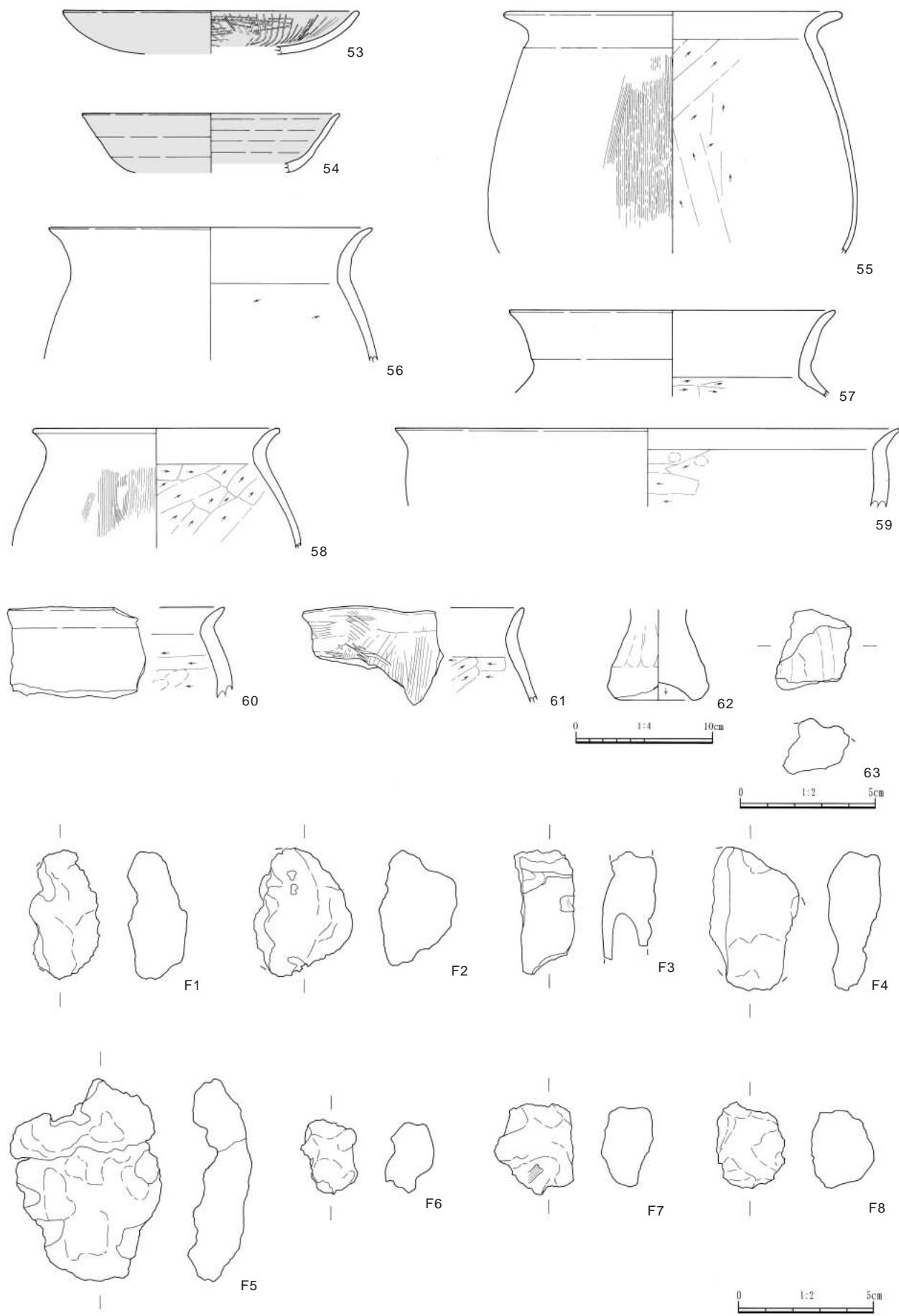
検出面付近から出土したのは須恵器23～29、32～41、50、52、楕形鍛冶滓F4、5、鉄製品F11、12、14、17、18、20、21、25、26、28である。23、25～29は壊蓋である。23は高さのある円盤状のつまみを持ち、口縁部は直立する。24は短頸壺の蓋と考えられる。球状の特異なつまみをもち、その周囲の天井部には波状文が3重に巡る。天井部の周縁には突帯が貼り付けられている。25～27は口縁部が短く屈曲する扁平な蓋で、中央部が凹んだつまみを持つ。32～36は無高台の壊身である。32は口縁部の屈曲が明瞭で、端部を丸くおさめる。34と35は口縁部が僅かに屈曲する。37～41は高台付壊である。37は体部が丸みを帶びており、底部の切り離しは回転糸切りである。38～40は体部が直線的に外反する。41は器高が高く、高台が底部周縁に付く。50は直口瓶とみられ、頸部にヘラ記号が記されている。52は大型の円面硯で、硯面径16.7cm、脚径は23.2cmと復元される。脚部に長方形の透かしをもつ。脚部内面には赤色顔料がまだらに付着する。F11、12、14は鉄鏃で、F14には環状の絞具がみられる。F18は頭折れ釘で、F20は釘、または楔、F28は刀子の可能性がある。F25は環状、F26はコの字形を呈するが、用途は不明である。遺物はこの他に鉄鏃F9が壁溝内、F24は主柱穴P4から出土している。

本遺構の時期は床面直上から出土した遺物から7世紀後葉と推定される。また、検出面付近で出土した土器は概ね8世紀前半から後半頃に比定される。これらの土器は遺構の北西側を中心とした範囲に集中し、残存状態の良い個体が目立つことから、建物廃絶後の埋没過程において廃棄された可能性が考えられる。

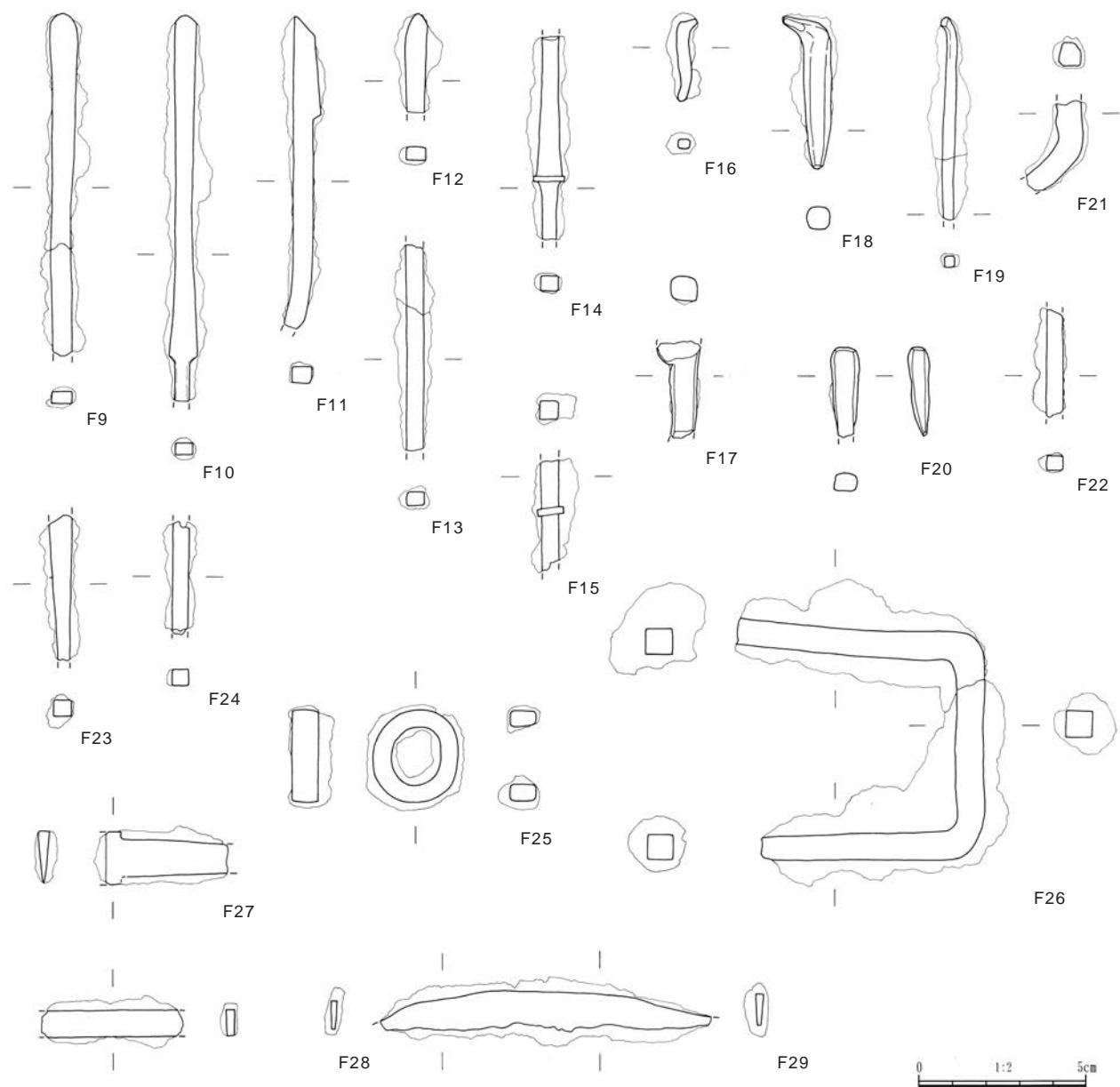


第35図 S I 1出土遺物(1)

第3節 古代・中世の調査



第36図 S I 1出土遺物(2)



第37図 SI 1出土遺物(3)

第35・36図 土器・土製品観察表

遺物番号	挿図番号	構層位	種別器種	口径(cm) 底径(cm)	器高(cm)	文様・調整	胎土焼成	色調	*復元値 △現存値	
									備考	
21	35	SI 1 床直	須恵器 坏蓋	9.9	2.2	外面: ヨコナデ 天井部回転ヘラケズリ 内面: ヨコナデ後ナデ	密 硬質	灰色	△記号あり	
22	35	SI 1 上層	須恵器 坏蓋	*15.9	△2.35	外面: ヨコナデ 天井部回転ヘラケズリ 内面: ヨコナデ	密 硬質	灰色		
23	35	SI 1 検出面	須恵器 坏蓋	14.2	3.2	内外面: ヨコナデ	やや粗 軟質	灰白色		
24	35	SI 1 検出面	須恵器 蓋	*12.1	4.3	外面: ヨコナデ 天井部波状文 内面: ヨコナデ	密 良好	灰色		
25	35	SI 1 検出面	須恵器 坏蓋	15.1	2.25	内外面: ヨコナデ	密 硬質	灰色		
26	35	SI 1 検出面	須恵器 坏蓋	15.2	1.75	内外面: ヨコナデ	0. 5~1mmの砂粒を含む 硬質	灰色		
27	35	SI 1 検出面	須恵器 坏蓋	—	△1.05	内外面: ヨコナデ	密 硬質	灰色		
28	35	SI 1 上層	須恵器 坏蓋	*14.7	△1.45	内外面: ヨコナデ	0. 5~1mmの砂粒を含む 硬質	灰色		
29	35	SI 1 検出面	須恵器 坏蓋	*15.3	△1.5	内外面: ヨコナデ	密 硬質	灰色		
30	35	SI 1 上層	須恵器 坏蓋	*18.4	△2.6	内外面: ヨコナデ	密 硬質	灰白色		
31	35	SI 1 下層	須恵器 坏蓋	*17.2	△2.2	内外面: ヨコナデ	密 硬質	黄灰色		
32	35	SI 1 検出面	須恵器 坏身	*13.1	△3.55	内外面: ヨコナデ	密 硬質	灰色		
33	35	SI 1 検出面	須恵器 坏身	*12.8	△2.8	内外面: ヨコナデ	密 硬質	灰色		

第3節 古代・中世の調査

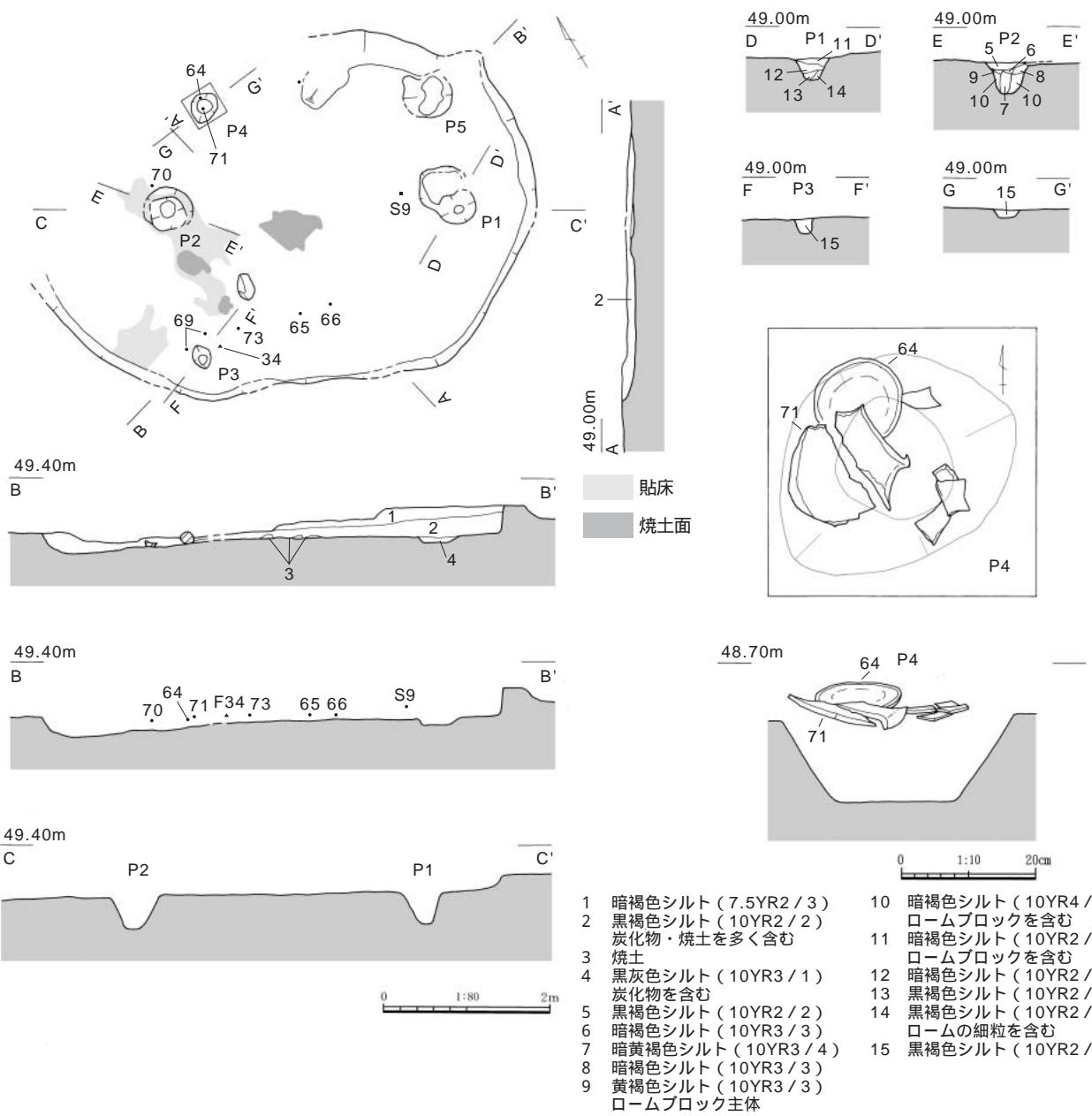
第35・36図 土器・土製品観察表							*復元値	△現存値
遺物番号	種類	口径(cm)	器高(cm)	文様・調整	胎土焼成	色調	備考	
34 35	須恵器 検出面 坏身	13.8	△3.1	内外面:ヨコナデ	密 硬質	灰色		
35 35	須恵器 検出面 坏身	*12.8	△3.8	内外面:ヨコナデ	密 硬質	黄灰色		
36 35	須恵器 検出面 坏身	—	△1.3	外面:ヨコナデ 底部回転糸切り 内面:ヨコナデ	密 硬質	灰色		
37 35	須恵器 検出面 高台付坏	13.75	4.9	外面:ヨコナデ 底部回転糸切り 内面:ヨコナデ	密 硬質	灰色		
38 35	須恵器 検出面 高台付坏	*17.5	4.65	外面:ヨコナデ 底部回転ヘラケズリ 体部沈線3条 内面:ヨコナデ	密 硬質	灰色		
39 35	須恵器 検出面 高台付坏	*14.6	4.1	外面:ヨコナデ	やや粗 軟質	灰白色		
40 35	須恵器 検出面 高台付坏	*15.6	2.9	外面:ヨコナデ	やや粗 軟質	淡灰褐色		
41 35	須恵器 検出面 高台付坏	*15.3	4.6	外面:ヨコナデ	1~1.5mmの砂粒を含む 硬質	灰色		
42 35	須恵器 下層	—	△3.75	外面:ヨコナデ	密 硬質	灰色		
43 35	須恵器 下層 高台付坏	—	△2.7	外面:ヨコナデ 底部切り離し後粗いナデ 内面:ヨコナデ	密 硬質	灰色		
44 35	須恵器 下層 高台付坏	—	△2.7	外面:ヨコナデ 底部調整不明 内面:ヨコナデ	やや粗 軟質	灰白色		
45 35	須恵器 上層 高台付坏	—	△1.5	外面:ヨコナデ 内面:やや磨耗	密 軟質	灰色	墨付着部分あり 転用観か?	
46 35	須恵器 床直 高坏	*16.7 *8.8	△9.45	外面:ヨコナデ 2方に三角形の透かし	密 硬質	灰色		
47 35	須恵器 床直 高坏	—	△7.9	外面:ヨコナデ	密 硬質	灰色	外面自然釉付着	
48 35	須恵器 床直 高坏	—	△8.6	外面:ヨコナデ 1方向以上に透かし	密 硬質	灰色		
49 35	須恵器 上層 甕	*23.5	△4.3	外面:ヨコナデ	密 硬質	灰色	ヘラ記号あり	
50 35	須恵器 検出面 直口壺	*7.3	△6.8	外面:ヨコナデ	密 硬質	灰色	ヘラ記号あり	
51 35	須恵器 上層 底部	—	△4.85	外面:胴部ヨコナデ 底部回転ヘラケズリ 内面:ヨコナデ	密 硬質	黄灰色	内面自然釉付着	
52 35	須恵器 検出面 円面硯	—	△9.55	硯面径16.4cm、海幅1.9cm、深さ9mm 脚部長方形の透かし	密 硬質	灰色	脚部内面赤色顔料付着	
53 36	土師器 皿	*21.4	△3.2	外面:ヘラケズリ後ナデ 内面:ヘラミガキ 放射状暗文	密 良好	赤褐色	外外面赤色塗彩	
54 36	土師器 坏	*19.4 *11.4	△4.4	外面:ナデ 内面:ナデ	やや粗 良好	淡褐色	外外面赤色塗彩	
55 36	土師器 甕 下層・床直	*24.0	△17.8	外面:胴部ハケ 内面:頸部以下ヘラケズリ	0.5~2mmの砂粒を含む 良好	にぶい黄橙色		
56 36	土師器 甕	*23.8	△9.8	外面:ナデ 内面:頸部以下ヘラケズリ	密 良好	橙色		
57 36	土師器 甕 上～下層	*24.0	△6.4	外面:ナデ 内面:頸部以下ヘラケズリ	密 良好	橙褐色		
58 36	土師器 甕 下層	*18.2	△8.9	外面:胴部ハケ 内面:頸部以下ヘラケズリ	やや粗 良好	橙褐色		
59 36	土師器 上層 甕	*37.2	△5.8	外面:ナデ 内面:頸部ヘラケズリ後ユビオサエ	密 良好	淡褐色		
60 36	土師器 下層 甕	—	△6.7	外面:ナデ 内面:頸部ヘラケズリ後ユビオサエ	やや粗 良好	淡褐色		
61 36	土師器 下層・床直 甕	—	△7.3	外面:ハケ後一部ユビオサエ 内面:頸部以下ヘラケズリ	密 良好	黒褐色		
62 36	土製品 下層 土製支脚	—	△6.7	外面:ナデ 内面:底部ヘラケズリ	密 良好	にぶい赤褐色	外外面工具痕あり	

S I 2 (第38~41図 卷頭図版2・3 図版18 31-3~33)

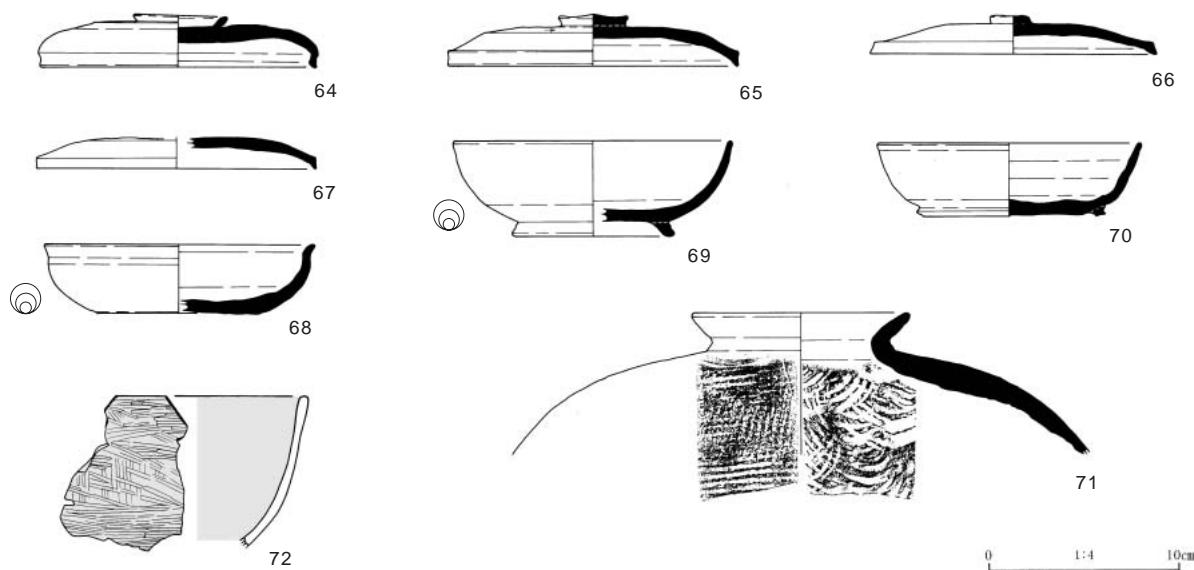
R 28、29グリッド、標高49.0mの緩斜面に位置する。IV層を掘り下げる過程で検出した遺構である。本来はⅢ層、またはIV層上面から掘り込んで形成された可能性が考えられる。北側の壁面については遺構埋土とⅢ、IV層との識別が難しく掘り下げてしまっている。

平面形は長軸6.0m以上、短軸4.1mのやや歪な楕円形を呈し、面積は25m²前後と推定される。壁面は東側を除いて緩やかに立ち上がっており、壁際に周壁溝は確認されていない。P 2周辺の床面には貼床が2~4cmほどの厚さで部分的に施されている。埋土は2層に分かれ、下層には焼土塊や炭化物が多く含まれている。中央から西寄りの床面では焼土面が3箇所確認されている。特に中央の焼土面は被熱が著しいことなどから、鍛冶炉の可能性も視野に入れ調査を行ったが、周辺の床面や埋土中から鍛造剥片や粒状滓などは出土していない。

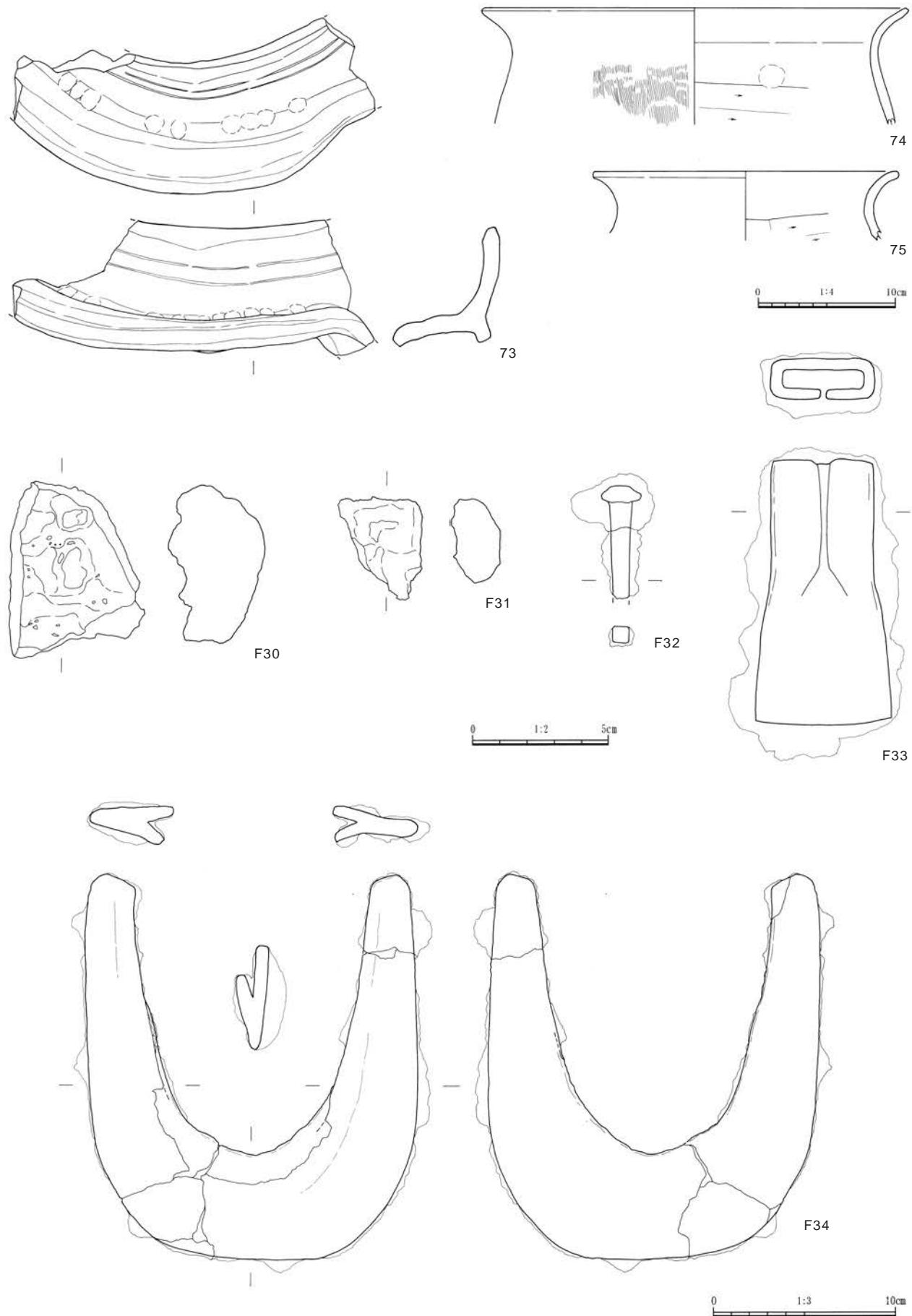
主柱穴はP 1とP 2の2基と考えられ、柱間寸法は3.5mである。P 1は長軸80cm、短軸46cmの歪な楕円形を呈し、掘方が二段掘りとなっている。P 2は長軸60cm、短軸54cmの楕円形を呈する。5~7層は柱抜取り痕跡と推定され、柱は掘方の埋土を少し掘り下げた後、引き抜かれたと考えられる。柱穴底面の標高はP 1が48.36m、P 2が48.20mとやや高低差がある。その他にP 3~5が検出されている。いずれも深さが20cm以下と浅く、柱痕跡も確認されていない。



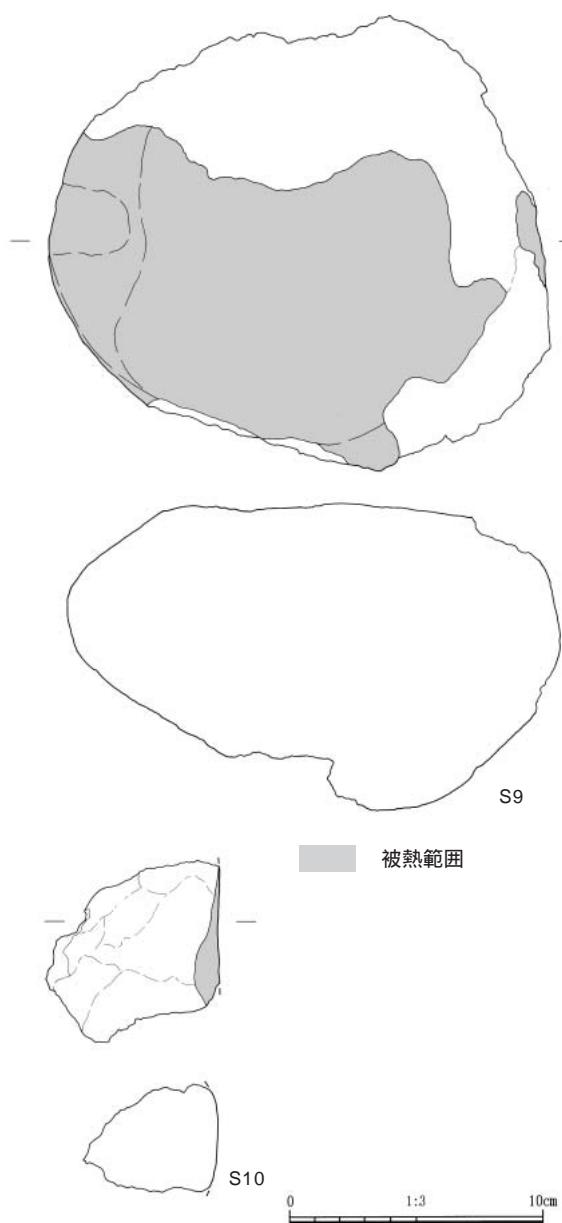
第38図 S I 2



第39図 S I 2出土遺物 (1)



第40図 SI 2出土遺物(2)



第4-1図 SI2出土遺物(3)

遺物は床面直上、もしくはやや浮いた状態で須恵器、土師器、鉄製品、鍛冶関連遺物などが出土している。P 4の検出面からは須恵器壺蓋(64)と横瓶(71)が出土している。64~67は須恵器壺蓋で、64は輪状つまみを持ち、口縁部が強いナデにより屈曲する。65は扁平な擬宝珠状つまみ、66は円盤状のつまみをもち、口縁部が短く直立、もしくはやや外傾する。68は須恵器壺身で口縁端部が屈曲し、外反する。底部の切り離しは回転糸切りである。69、70は高台付壺で、69は体部がやや丸みを帯びており、底部の切り離しは回転糸切りである。70は体部が直線的に外反し、底部の周縁近くに短い高台が付く。72は赤色塗彩された土師器壺、または鉢と考えられ、外面は丁寧なヘラミガキが施されている。73は移動式竈の底から掛口にかけての破片、74・75は土師器甕である。F 30、31は椀形鍛冶滓、F 32は釘、F 33は鉄斧である。F 34は鉄製鋤、もしくは鋤先である。平面形がU字形を呈し、長さ21.5cmの大型品である。刃先部先端はやや使い減りしている可能性がある。櫃は断面V字形を呈し、基部まで伸びており、櫃の深さは最も深いところで2.8cmである。この他に被熱石S 9、S 10が出土している。S 9は人頭大の礫で、表面が被熱により剥離している。使用痕等はみられない。

これらの出土遺物から本遺構の時期は8世紀前半頃と推定される。

第39・40図 土器・土製品観察表

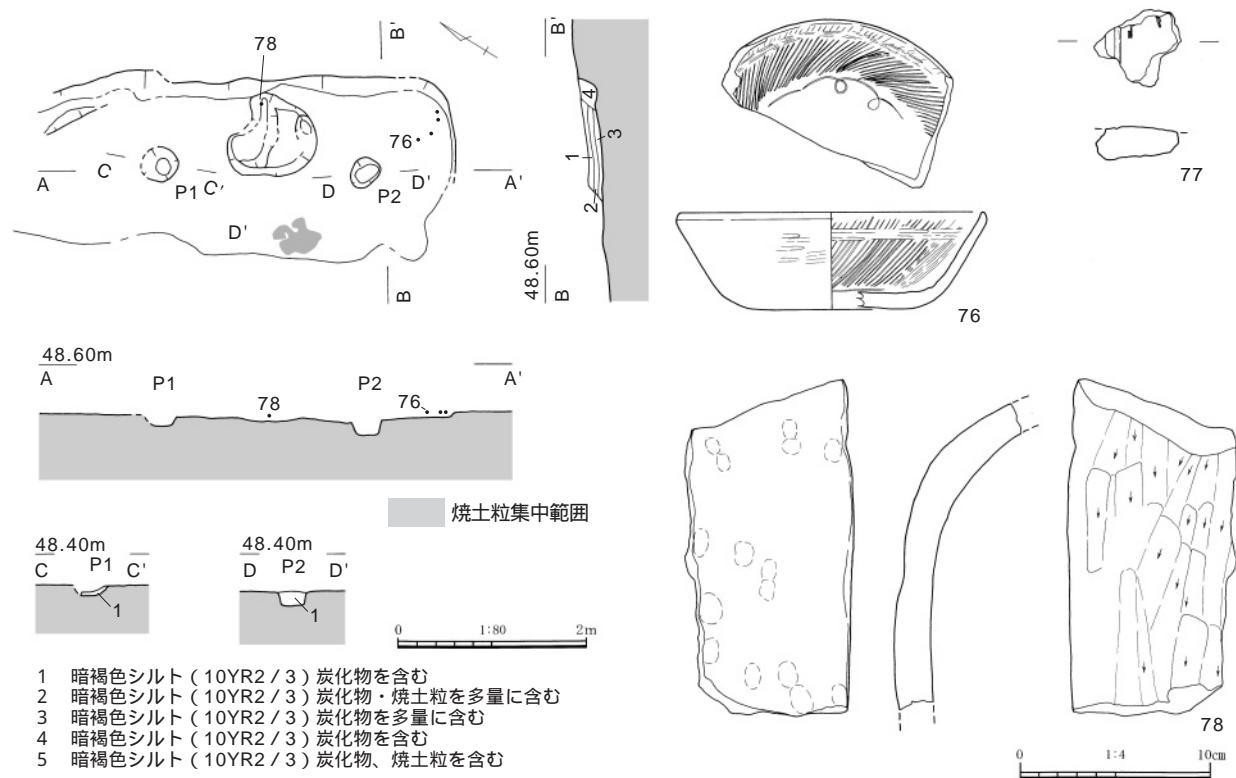
遺物番号	挿図番号	遺構層位	種別器種	口径(cm) 底径(cm)	器高(cm)	文様・調整		胎土焼成	色調	備考
						外側:ヨコナデ 内側:ヨコナデ	天井部回転ヘラケズリ			
64	39	SI2	須恵器壺蓋	14.6	2.9			密硬質	灰色	
65	39	SI2	須恵器壺蓋	*15.2	2.8	外側:ヨコナデ 内側:ヨコナデ	天井部回転ヘラケズリ	密軟質	灰白色	
66	39	SI2	須恵器壺蓋	15.2	2.1	外側:磨耗により不明 内側:磨耗により不明		密軟質	黄灰白色	
67	39	SI2	須恵器壺蓋	*14.3	△1.6	外側:天井部回転ヘラケズリ 内側:ヨコナデ		1~2mmの砂粒を含む 軟質	灰白色	
68	39	SI2	須恵器壺身	*14.4	3.7	外側:ヨコナデ 内側:ヨコナデ	底部回転糸切り	密硬質	暗灰色	
69	39	SI2	須恵器高台付壺	*14.5	5.1	外側:ヨコナデ 内側:ヨコナデ	底部回転糸切り	密硬質	灰色	
70	39	SI2	須恵器高台付壺	*14.0	3.9	外側:ヨコナデ 内側:ヨコナデ	底部切り離し後ヨコナデ	0.1~7mmの砂粒を含む 硬質	淡灰色	
71	39	SI2	須恵器横瓶	*11.4	△7.5	外側:胸部平行タタキ 内側:胸部同心円タタキ		0.1~7.5mmの砂粒を含む 硬質	灰色	
72	39	SI2	土師器壺、または鉢	△8.1		外側:口縁部・体部ミガキ 内側:ナデ		密良好	赤褐色	内外面赤色塗彩
73	40	SI2	土製品移動式竈	△9.8		外側:掛口ケズリ 内側:掛口ナデ	沈線2本 底ナデ ユビオサエ	密良好	橙色	
74	40	SI2	土師器甕	*30.6	△8.5	外側:頸部以下ハゲ 内側:頸部以下ヘラケズリ	ユビオサエ	密良好	橙色	
75	40	SI2	土師器甕	*22.0	△4.5	外側:ナデ 内側:頸部以下ヘラケズリ		密良好	橙色	

3. 段状遺構

SS1 (第42図 図版19 34-1・2)

Q23グリッド、標高48.10mの緩斜面に位置する。V層上面で検出したが、本来はIV層を掘り込んで形成されたと考えられる。段状遺構としたが、標高の低い南西側が流失してしまったとみれば、竪穴建物跡となる可能性も否定できない。平面形は長辺4.62m、短辺1.8mのやや歪な長方形を呈する。北西隅はS I 1に切られ、遺存していない。検出面からの深さは最大15cmで、北西隅付近の壁際のみ、幅22cm、深さ2cmの浅い溝がみられる。床面からは2基のピットが検出されている。P 1が径40cm、P 2が径35cmの円形を呈し、ピット間の距離は心々で2.18mを測る。深さはP 1が11cm、P 2が14cmといずれも浅く、柱痕跡も確認されていない。P 1、2の他に長軸80cm、短軸70cmの土坑状の落ち込みP 3が検出されたが、性格は不明である。埋土は4層に分かれる。各層とも焼土粒や炭化物を多く含んでおり、床面直上では50cm×40cm程で焼土粒が集中する範囲がみられた。出土遺物は少ない。76は土師器坏で、床面から7cm程浮いた状態で出土している。内面には体部に放射状暗文、底部外縁に螺旋状暗文が丁寧に施されている。外面は磨耗しているが、一部にヘラミガキが認められる。77は粘土塊で、胎土にスサがみられる。

出土遺物やS I 1との重複関係から本遺構の時期は7世紀後葉と考えられる。



第42図 土器・土製品観察表

遺物番号	挿図	遺構層位	種別	口径(cm) 底径(cm)	器高(cm)	文様・調整	*復元値 △現存値		
							胎土焼成	色調	備考
76 42	SS1	土師器坏	*16.0 *9.0	5.2	外面部：口縁部ナデ 内面部：体部放射状暗文	体部ヘラケズリ後ヘラミガキ 底部螺旋状暗文	密 良好	橙色	
77 42	SS1	粘土塊	長△4.1 幅△4.6	厚△1.65	表面に沈線様の溝1条		スサ入り 良好	淡橙褐色	土壁片？
78 42	SS1	土製品 移動式窓	庇長8.1 庇厚1.9	△17.8	外面：ユビオサエ 内面：ヘラケズリ		密 良好	暗褐色	

第42図 SS1

4. 掘立柱建物跡

S B 1 (第43図 第6表 図版19・20 34-3・5・6)

R 26グリッド、標高48.20mの緩斜面に位置する。Ⅲ層上面で検出している。桁行3間(5.74m)、梁行2間(3.85m)の側柱建物である。平面積は22.09m²を測る。方位はN-10°-Eで、等高線に沿って真北からやや東偏する。柱間寸法は1.6~2.2mとばらつきがあるが、柱筋の通りは比較的よい。柱穴は掘方が径57~74cm前後の円形を呈し、P 1、3~8、10では18~26cmの柱痕跡を確認している。P 1については掘方の埋土を少し掘り下げた後、柱を取り取った可能性がある。P 2、P 9では柱抜取り痕跡が確認されている。P 2は柱抜取り痕跡から人頭大の礫が出土しており、人為的に埋められた可能性が高い。柱穴の底面の標高は47.70~47.97mと一定していない。出土遺物は少ない。79はP 3の柱痕跡から出土した土師器皿で、内面の一部に赤色塗彩が残るが、表面は磨耗が著しく、調整は不明である。80はP 5の検出面から出土した平瓦で、凸面の整形は正格子タタキである。F 35は楕円形鍛冶滓、F 36・37は鍛冶滓、F 38は含鉄鍛冶滓、F 39は轍の羽口、F 40は釘状の棒状品で、いずれも柱掘方の埋土から出土している。出土遺物やⅡ、Ⅲ層の堆積時期から本遺構の時期は8世紀代と推定される。

5. 集石遺構

集石1 (第44図 図版20-5)

R 27グリッド、標高48.50mの緩斜面に位置する。15個の円礫が33cm×25cmの範囲で集められており、部分的に二段積みとなる。各礫の大きさは長さ5~11cm、幅4~8cmで、石材は同一のものと推定される。表面に使用痕等が確認できるものはない。礫の下から遺構は確認されていない。

集石2 (第44図 図版20-6)

R 25グリッド、標高48.50mの緩斜面に位置し、集石1からは約13m離れている。6個の円礫が16.5cm×16cmの範囲内に集められている。ただし、Ⅱ層を掘り下げる過程で周囲からほぼ同じ大きさの円礫が数点出土しており、本来はもう少し多くの礫が集められた可能性がある。各礫の大きさは長さ8~8.5cm、幅3~5cmで、石材は同一のものと推定される。表面に使用痕が確認できるものはない。礫の下から遺構は確認されていない。

6. 溝状遺構

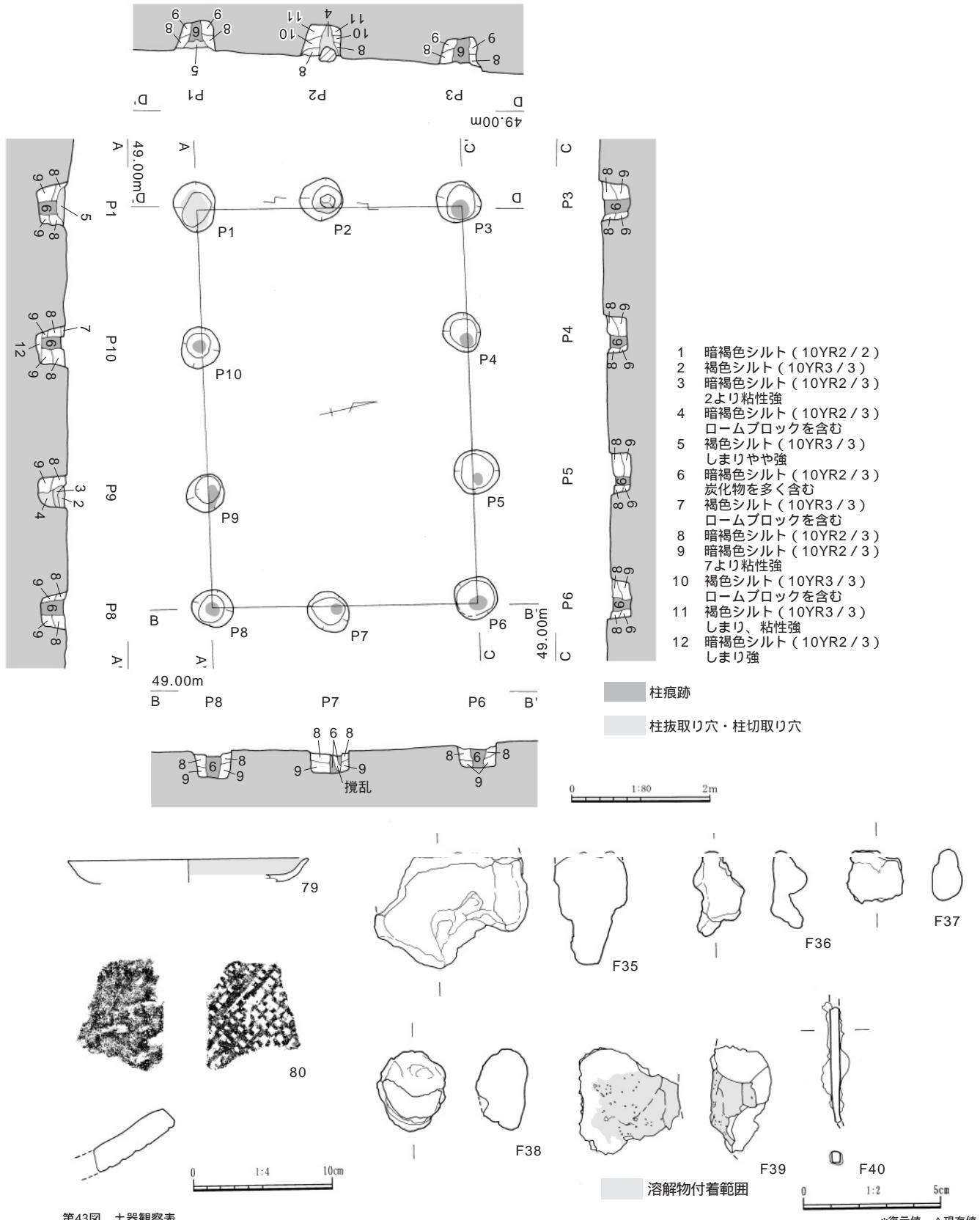
S D 1 (第45図 図版20-7)

R 29グリッド、標高48.6~48.7mの平坦地に位置し、IV層上面で検出した。長さは1.7mで、わずかに湾曲しながら東西方向にのびる。幅は58~78cm、深さは2~13cmで、底面の標高は東端が西端より4cm高い。埋土は灰褐色シルトの単層で、遺物は出土していない。

S D 2・3 (第45図 図版20-8)

R 28グリッド、標高48.4~48.5mの平坦地に位置し、IV層上面で検出した。SD 2がSD 3を切る。SD 2は検出した長さが1.3mで、南西-北東方向に直線状にのびる。幅は39~44cm、深さは10~12cmで、底面の標高は北東端が南西端より2cm高い。SD 3は長さが2.4mで、北西-南東方向に直線状にのびる。幅は56~79cm、深さは2~14cmで、底面の標高は南東端が北西端より16cm高い。SD 2・3の埋土は単層で、遺物は出土していない。

第3節 古代・中世の調査



第43図 土器観察表

遺物番号	挿図番号	遺構層位	種別器種	口径(cm)	器高(cm)	文様・調整	胎土焼成	色調	*復元値△現存値
79 43	SB1-P3		土師器皿	*17.4	△1.7	内外面：磨耗により不明	密良好	淡褐色	内面赤色塗彩

第43図 瓦観察表

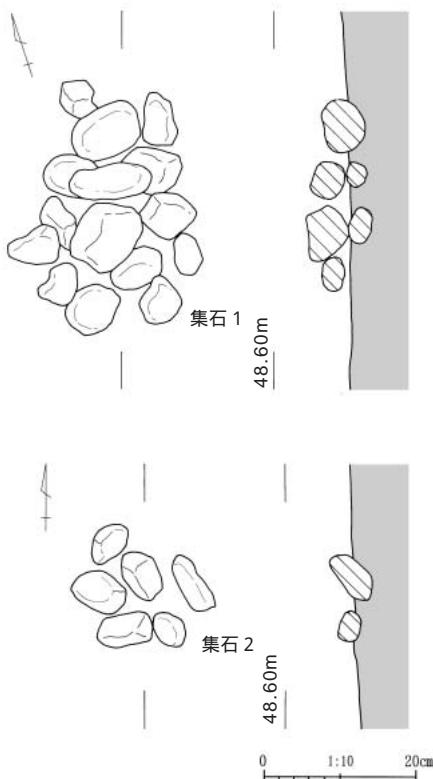
遺物番号	挿図番号	遺構層位	種別	厚さ(cm)	重量(g)	文様・調整	胎土焼成	色調	備考
80 43	S B1-P5	平瓦 検出面		1.9	120	凸面：正格子タタキ 凹面：布目	1mm程の砂粒を含む 軟質	淡黄橙色	

第43図 S B 1

第6表 SB 1柱穴計測表

柱穴No.	長軸 (cm)	短軸 (cm)	柱掘方	深さ (cm)	底面の標高 (m)	柱痕跡 径 (cm)
P1	74	62		44	47.70	
P2	64	64		48	47.75	
P3	68	60		50	47.95	26
P4	60	55		34	47.97	20
P5	66	64		32	47.91	20
P6	62	60		36	47.90	26
P7	63	56		31	47.80	18
P8	62	54		40	47.73	22
P9	57	54		43	47.70	
P10	62	55		44	47.70	20

SD 4・5・6・7・8・9・10 (第46図 図版21-1)



第44図 集石 1・2

Q24・25、R24・25グリッド、標高48.0m前後の緩斜面に位置する。7本の溝状遺構が南北方向に並行して走る。各溝状遺構間の距離はSD 4とSD 5で90cm、SD 5とSD 6で1.26m、SD 6とSD 7で2.3m、SD 7とSD 8で1.88m、SD 8とSD 9で70cm、SD 9とSD 10で90cmを測る。規模はSD 4が長さ3.3m、幅44cm、深さ6cm、SD 5が長さが3.8m、幅46cm、深さ10cm、SD 6が長さ3.7m、幅44cm、深さ8cm、SD 7が長さ6.8m、幅47cm、深さ12cm、SD 8が長さ2.9m、幅34cm、深さ6cm、SD 9が長さ3.34m、幅34cm、深さ6cm、SD 10が長さ3.1m、幅34cm、深さ8cmである。ただし、SD 5については南側へ2.4mの地点でも僅かに長さ1.0m程の溝状遺構が確認されており、同一遺構である可能性がある。その場合、SD 5の長さは7.3mとなる。埋土はいずれも明褐色シルトの単層で、砂礫等の混入は窺えない。遺物は各遺構の埋土中より須恵器、土師器の細片が出土している。規模や特徴から溝状遺構は互いに有機的な関係を持つ遺構群と考えられるが、性格は不明である。

7. 土坑

SK 1 (第47図 図版21-2 34-3)

R23、Q23グリッド、標高48.30mの緩斜面に位置する。平面形は長軸1.88m、短軸1.19mの橢円形を呈する。断面形は皿状で、検出面からの深さは15cmである。底面は平坦である。埋土中より須恵器片、土師器片が出土している。81、82は須恵器坏身、F41は楕円形鍛治溝、F42は鍛治溝である。

SK 2 (第47図 図版21-2)

R23、Q23グリッド、標高48.25mの緩斜面に位置する。平面形は長軸1.67m、短軸1.56mの橢円形を呈する。断面形は皿状で、検出面からの深さは19cmである。底面には長軸77cm、短軸50cmの円形の凹みが見られる。遺物は須恵器や土師器の細片が出土している。

第3節 古代・中世の調査

S K 3 (第47図 図版21-2 34-3)

R 23グリッド、標高48.40mの緩斜面に位置する。平面形は長軸2.0m、短軸1.45mのやや歪な橢円形を呈する。断面形は皿状で、底面にはやや凹凸がある。検出面から深さは14cmである。埋土中から須恵器坏蓋(83)、土師器坏(84)が出土している。

S K 4 (第47図 図版21-3)

R 24グリッド、標高48.05mの緩斜面に位置する。平面形は長軸94cm、短軸87cmの橢円形を呈する。断面形は浅い逆台形状で、検出面からの深さは9cmである。遺物は出土していない。

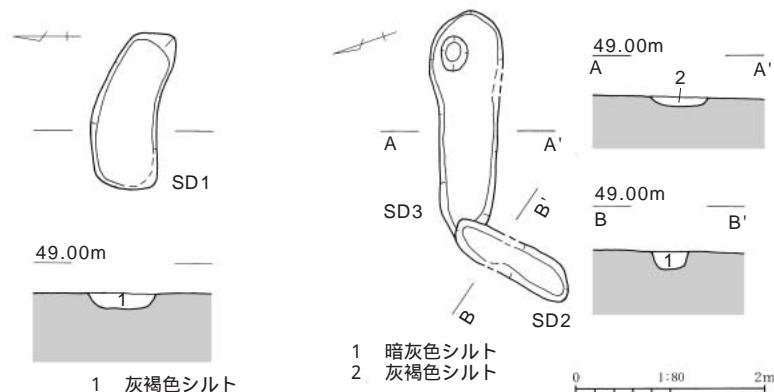
S K 5 (第47図 図版21-4 34-3)

R 24グリッド、標高48.10mの緩斜面に位置する。平面形は長軸1.33m、短軸87cmの歪な橢円形を呈する。断面形は逆台形状で、

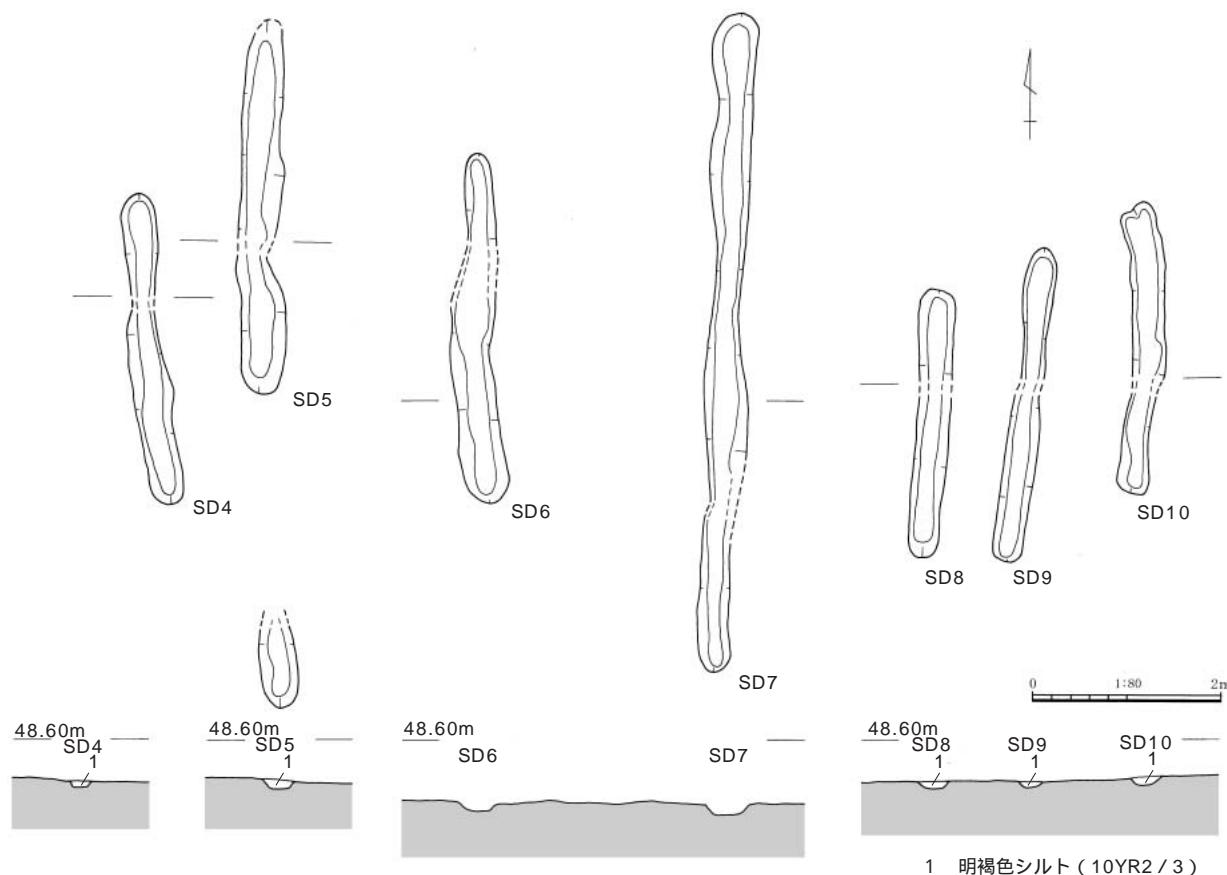
検出面からの深さは25cmである。
遺物は埋土中から須恵器片、土師器片が出土しており、85は須恵器坏蓋である。

S K 6 (第47図 図版22-1)

Q 25グリッド、標高47.85mの緩斜面に位置する。平面形は長軸95cm、短軸73cmのやや歪な橢円形を呈する。断面形は皿状で、検出面

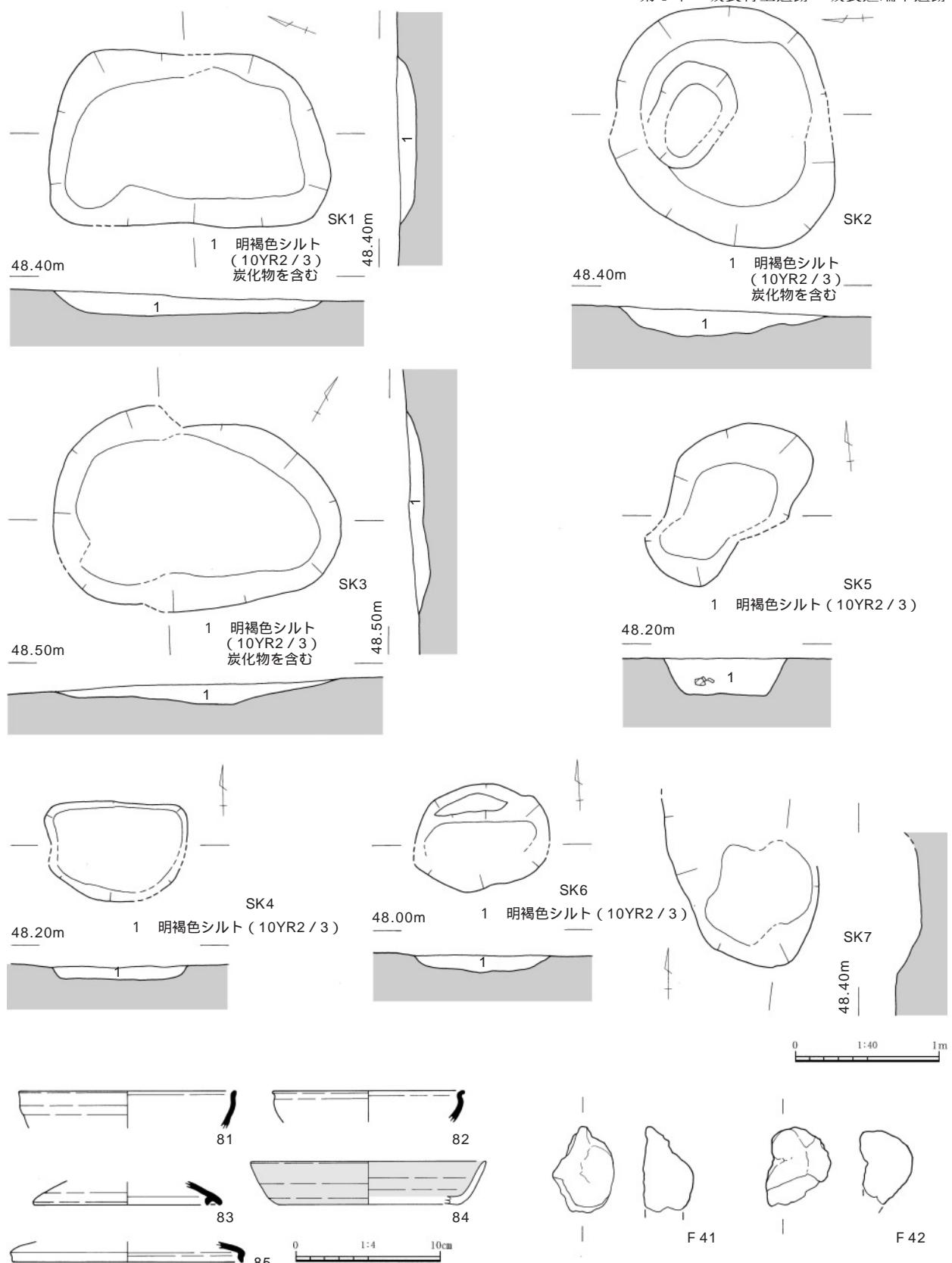


第45図 SD 1・2・3



第46図 SD 4・5・6・7・8・9・10

第5章 坂長村上遺跡・坂長道端中遺跡



第47図 土器観察表

遺物番号	挿図番号	遺構層位	種別	口径(cm) 底径(cm)	器高(cm)	文様・調整	胎土焼成	色調	*復元値 △現存値	備考
81 47	SK1	須恵器 坏身		*13.2	△2.2	内外面: ヨコナデ	密硬質	灰色		
82 47	SK1	須恵器 坏身		*15.2	△2.6	内外面: ヨコナデ	密硬質	黄灰色		
83 47	SK3	須恵器 坏蓋		*11.0	△1.7	内外面: ヨコナデ	密硬質	灰色		
84 47	SK3	土師器 坏		*16.4 *12.6	△3.1	内外面: ナデ	密良好	淡褐色		
85 47	SK5	須恵器 坏蓋		*16.0	△1.9	内外面: ヨコナデ	密硬質	黄灰色		

第47図 SK1・2・3・4・5・6・7

第3節 古代・中世の調査

から深さは12cmである。遺物は土師器片、須恵器片が出土している。

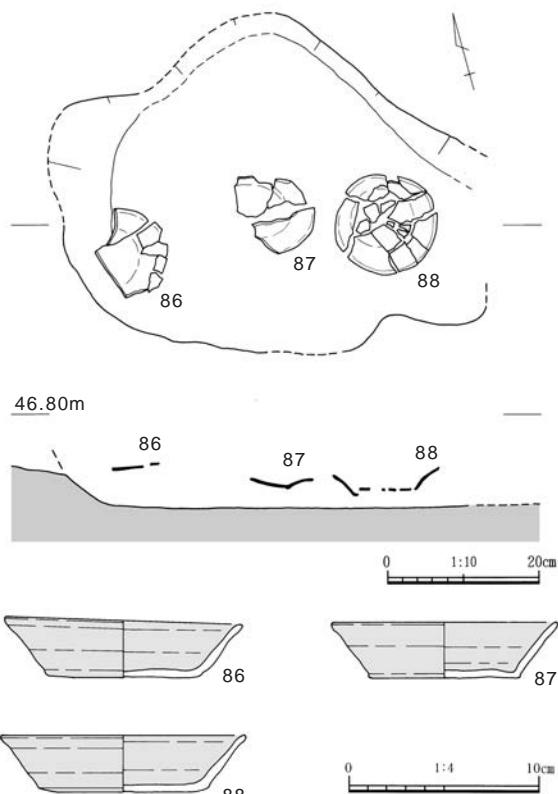
S K 7 (第47図 図版22-2)

Q23グリッド、標高48.15mの緩斜面に位置する。北側はS K 3に切られている。平面形は長軸1.30m以上、短軸90cmのやや歪な楕円形を呈すると考えられる。断面形は皿状で、検出面からの深さは17cmである。遺物は須恵器甕の体部片が数点出土している。

S K 8 (第48図 図版22-3 34-4)

O19グリッド、標高46.65mの緩斜面に位置する。V層上面で検出したが、本来はⅢ層、ないしはIV層を掘り込んで形成された遺構と考えられる。現状での平面形は長軸60cm、短軸45cmの歪な楕円形を呈する。断面形は皿状で、検出面からの深さは9cmである。遺物は底面から5~10cm浮

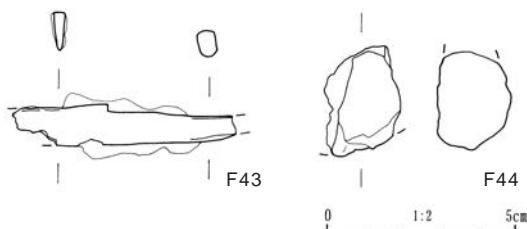
いた地点から土師器坏3個体(86、87、88)が並んだ状態で出土している。いずれも赤色塗彩されており、底部は切り離し後、押圧がなされている。出土遺物から本遺構の時期は9世紀頃と推定される。



第48図 S K 8

8. ピット出土遺物 (第49図 図版34-5・6)

F 43はP 1、F 44はP 13の埋土中から出土している。F 43は刀子で、刃部の途中で折れている。F 44は極小の椀形鍛冶津である。



第49図 ピット出土遺物

第48図 土器観察表

遺物番号	挿図番号	遺構層位	種別器種	口径(cm) 底径(cm)	器高(cm)	文様・調整	*復元値 △現存値		
							胎土焼成	色調	備考
86 48	SK8	土師器坏	*12.6 *8.1	3.2	3.2	外面:ナデ 内面:ナデ 底部押圧	密 良好	淡橙褐色	内外面赤色塗彩
87 48	SK8	土師器坏	*12.0 *8.0	3.0	3.0	外面:ナデ 内面:ナデ 底部押圧	密 良好	淡橙褐色	内外面赤色塗彩
88 48	SK8	土師器坏	*13.0 *9.0	3.1	3.1	外面:ナデ 内面:ナデ 底部押圧	密 良好	淡橙褐色	内外面赤色塗彩

9. 遺構外出土遺物

土器・土製品（第50～55図 図版35～44）

II層、およびIII、IV層中から古代の土器・土製品が多量に出土している。とくにII層の出土量が著しく多い。調査区内の出土状況をみると特定の範囲やグリッドに集中する傾向はみられない。出土した土器は概ね7世紀後葉～9世紀前半に比定されるものが主体となる。須恵器では壺、皿、高壺、鉢、躰、壺、甕、円面硯などが出土し、壺の占める割合が多い。なかには転用硯や内面に漆状の有機物が付着している容器類もみられる。また、焼成が不良で軟質のものや焼き歪みや膨れによって変形している個体も目につく。土師器では壺、皿、高壺、甕などが出土し、赤色塗彩された壺や皿の占める割合が多い。一方で移動式竈や土製支脚も一定量出土している。なお、第54、55図には耕作土やI層(近世包含層)などから出土した古代～中世の遺物を掲載している。

須恵器

第50図、および第51図132～165はII層から出土した須恵器である。89～106は壺蓋で、かえりのつくもの(89～91)とつかないもの(92、96～99、101～104、106)がある。89は口径が10.9cmと小さく、中央が凹んだつまみをもつ。92～96は中央が凹んだつまみをもつ。92は扁平で、短く屈曲する口縁部をもつとみられる。口縁部を意図的に打ち欠いた可能性が考えられる。93は擬宝珠状つまみがつぶれたような観がある。94はつまみにヘラ記号が記されている。97～100は輪状つまみをもつ。97は体部が丸みをもち、口縁部はやや内側に屈曲する。天井部が焼き膨れにより変形している。98は口縁部が屈曲し、ほぼ直立する。105は内面が平滑で、転用硯と考えられる。107は短頸壺の蓋と考えられ、宝珠状つまみがつく。108は大型の蓋で、高さのある輪状つまみをもつ。天井部と体部の境には明瞭な段がみられ、沈線が1条巡る。体部はハの字状に大きく開くが、口縁部の形状は不明である。

109～149は壺身で、高台をもたないもの(110～122)ともつもの(123～149)がある。109はかえりがつき、口径が9.4cmと小さい。底部調整は回転ヘラケズリで、外面には自然釉がみられる。110、113は底部調整がナデで、113は体部が直線的に立ち上がる。114～116は口縁部が短く屈曲し外反する。114は体部が張り、底部の切り離しは回転糸切りである。115は口縁端部をやや丸く収める。116は114、115と比較すると屈曲がわずかに甘い。117～121は口縁部の屈曲が甘く、120以外はいずれも底部の切り離しは回転糸切りである。117、119は体部がやや丸みを帯びる。121はやや小型品である。122は体部が直線的に外傾し、底部の切り離しは回転糸切りである。123は体部が丸みを帯び、高さのある高台をもつ。底部の切り離しは回転糸切りである。124も体部がやや丸みを帯びる。125は体部が直線的に外反し、高さのある高台が底部周縁につく。口縁端部は平坦面を形成している。体部にはヘラ状の工具によるとみられる沈線が2条巡る。126～128、130、131は低い高台をもち、体部は直線的に外傾する。126、127の底部はナデ調整である。129はやや小型で、底部はナデ調整である。130、131は軟質で、焼成が不良と考えられる。132は口径10.2cmの小型品で、体部は直線的に立ち上がる。底部はナデ調整で、ヘラ記号が記されている。133は体部が直線的に外傾し、器壁が薄い。134～149は底部資料で、141、142は底部の切り離しが静止糸切りである。134、139はヘラ記号が記されている。149は底径から高台付皿となる可能性もある。

150は皿で、底部の切り離しは回転糸切りである。151は鉢で鉄鉢形を呈する。底部はカキメ後

第3節 古代・中世の調査

ナデ調整が施されている。152、153は處と考えられる。152は1方向に円形の透かしが施されており、底部の切り離しは回転糸切りである。154は高坏の脚部で、透かしをもつ可能性も残る。155は甕の口縁部、156、157は甕、または瓶の口縁部と考えられる。158は長頸壺で、頸部にはしばり目がみられる。内面は焼き膨れにより変形している。159、160も長頸壺の底部、胴部片と考えられる。161は小型の短頸壺と考えられる。163、164は把手である。165は円面硯の脚部で、三角形の透かしが施された可能性がある。外面にはヘラ状工具による沈線が3条施される。

第54図217～223は坏蓋で、217、218はかえりのつくもので、輪状つまみをもつ。217は内面がやや平滑で、硯に転用された可能性もある。223も転用硯とみられ、内面には僅かに墨が残存している。224は坏身で、底部の調整は回転ヘラケズリである。225～231は高台のつく坏身である。230、231は高台が底部周縁につく。232は底径から高台付皿か。233は高坏の脚部で、3方向に切れ目状の透かしがみられる。234、235は處で、235は底部の切り離しが回転糸切りである。237は小型の短頸壺と考えられ、内面に漆状の有機物が付着している。

土師器

第51図166～173、および第52図はⅡ層から出土した土師器である。166～187は坏である。166～170、169は底部が丸みをもち、口縁部が外反する。166は磨耗のため明瞭ではないが、外面の調整は底部、体部ともミガキと考えられる。体部内面には放射状暗文の痕跡が残っている。167～169は底部調整がヘラケズリ後ナデである。170は口縁部が僅かに外反し、底部調整はヘラケズリである。171、173～180は平底で、体部はほぼ直線的に外傾する。底部調整は171、173、174がヘラケズリ後ナデ、176～178、180がヘラケズリのみである。175の底部調整はヘラケズリ後部分的にヘラミガキが認められる。181は内外面とも赤色塗彩され、底部調整はいわゆる底部押圧技法による。182～185は底部糸切りのロクロ土師器である。182は内外面とも赤色塗彩されている。183は小型で、皿となる可能性もある。内面には押圧が施されている。184は口径が16.2cmで、体部はやや丸みを帯びる。186、187は低い高台がつく。187は内外面とも赤色塗彩され、底部調整はナデである。188～200は皿で、高台をもたないもの(188～191)ともつもの(192～200)がある。188は底部が丸みを帶びており、調整はヘラケズリ後ナデである。190、191は平底で、191の底部調整はヘラケズリである。192はハの字状に開く高台をもち、193は高台が直立ぎみとなる。201は高坏の坏部と考えられる。内外面とも磨耗が著しく、表面の調整等は観察できない。202は高坏の脚部で、面取りにより断面が多角形を呈する。内外面は赤色塗彩されている。203～208は甕で、小型のもの(206、208)もみられる。

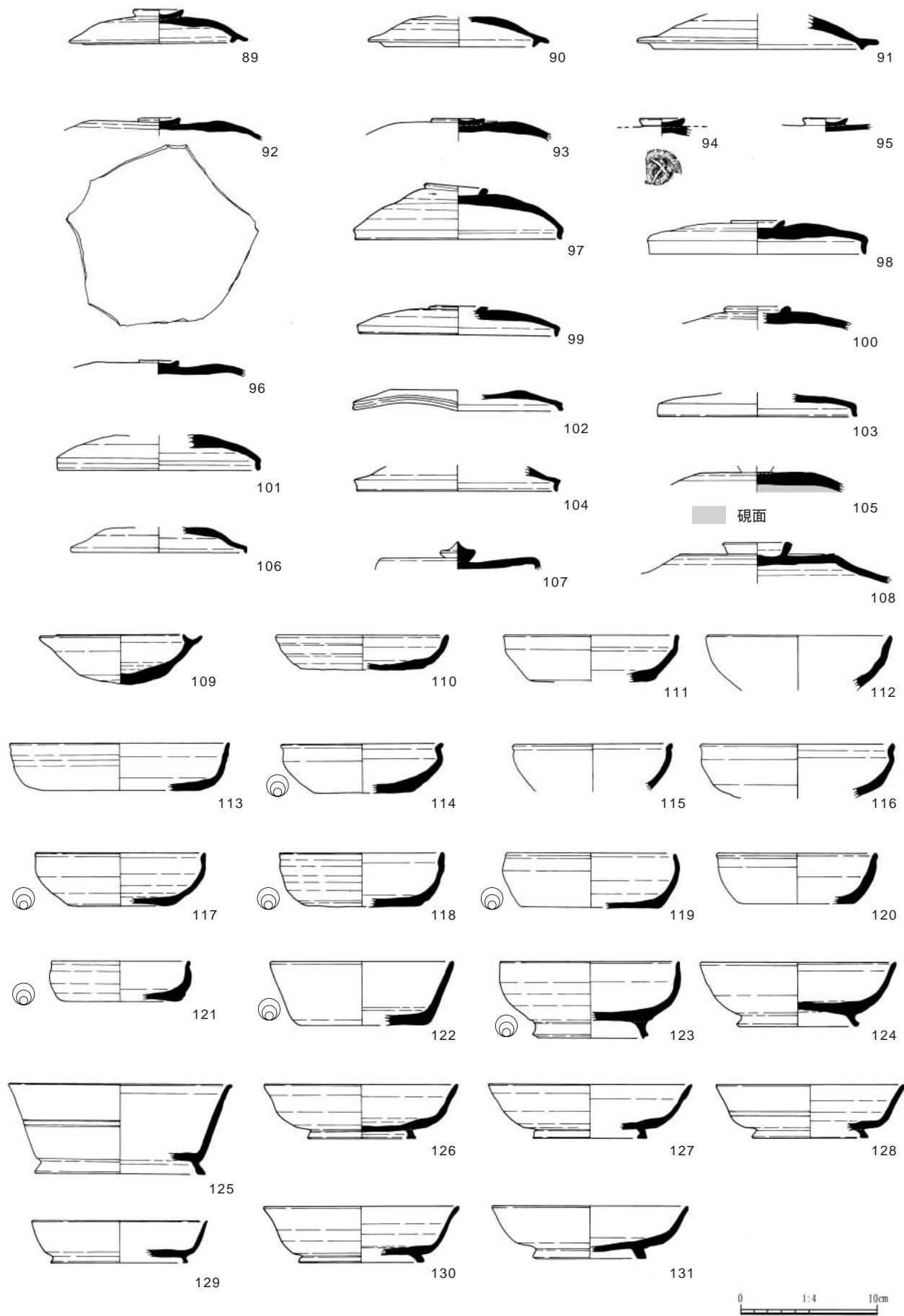
第54図242は小型の坏と考えられ、体部下半にはヘラケズリによる調整がみられる。243は赤色塗彩された皿で、底部調整はヘラケズリ後ミガキである。244、245は底部糸切りで、246は柱状高台をもつ皿である。247、248は小型の容器、249は高台をもつ大型の容器と考えられるが、全体の器形は不明である。250、251は甕で、250は外面と口縁部内面が赤色塗彩される。

陶器

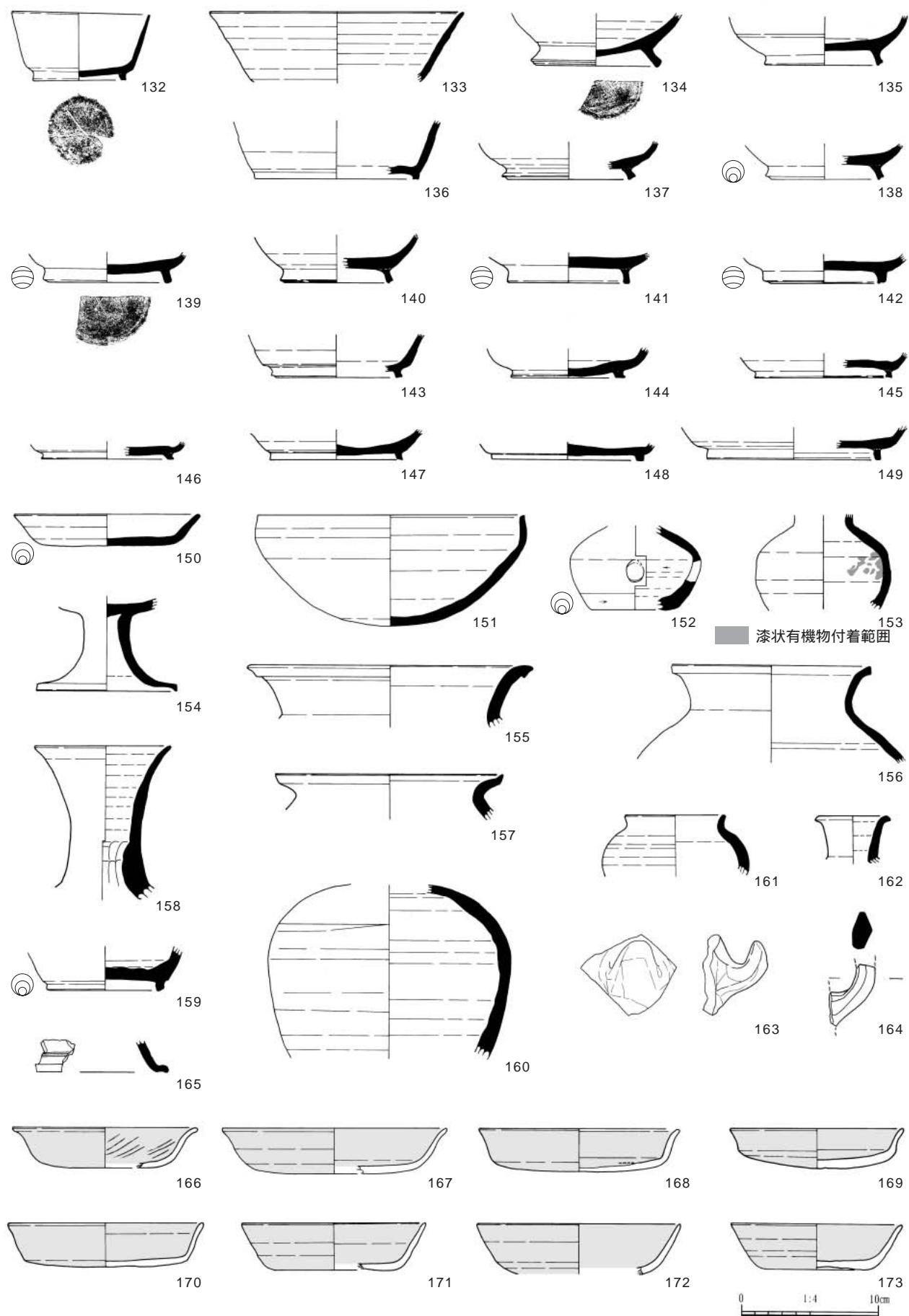
第55図252は龍泉窯系青磁の碗で、蓮弁文をもつ。

土製品

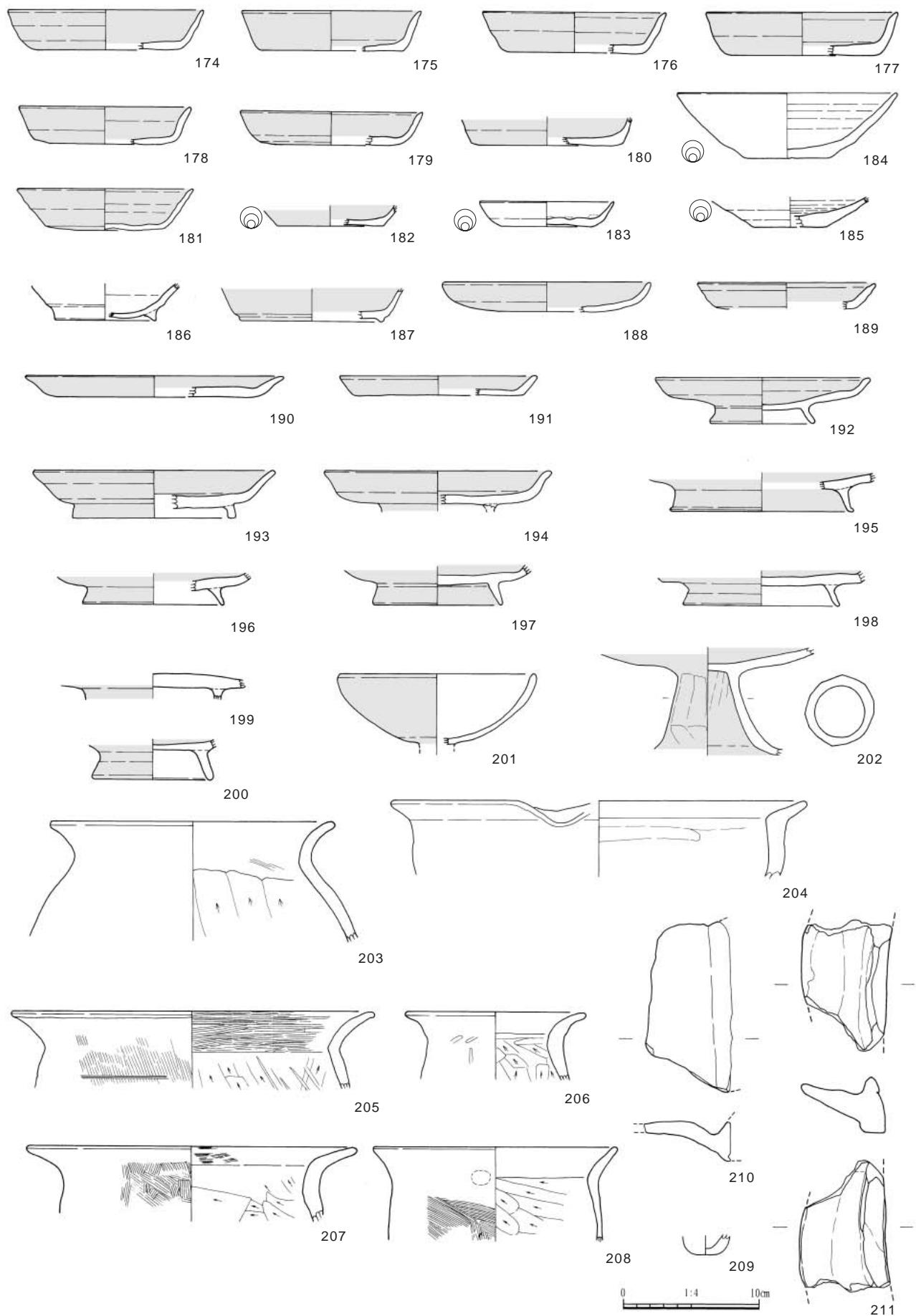
第52図209は手捏土器、210、211は移動式竈の底部分、215、216は土錘である。



第50図 層出土土器・土製品(1)

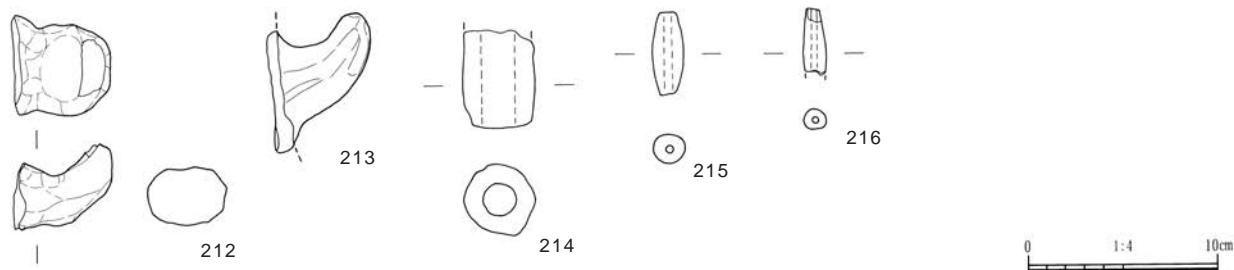


第51図 層出土土器・土製品(2)

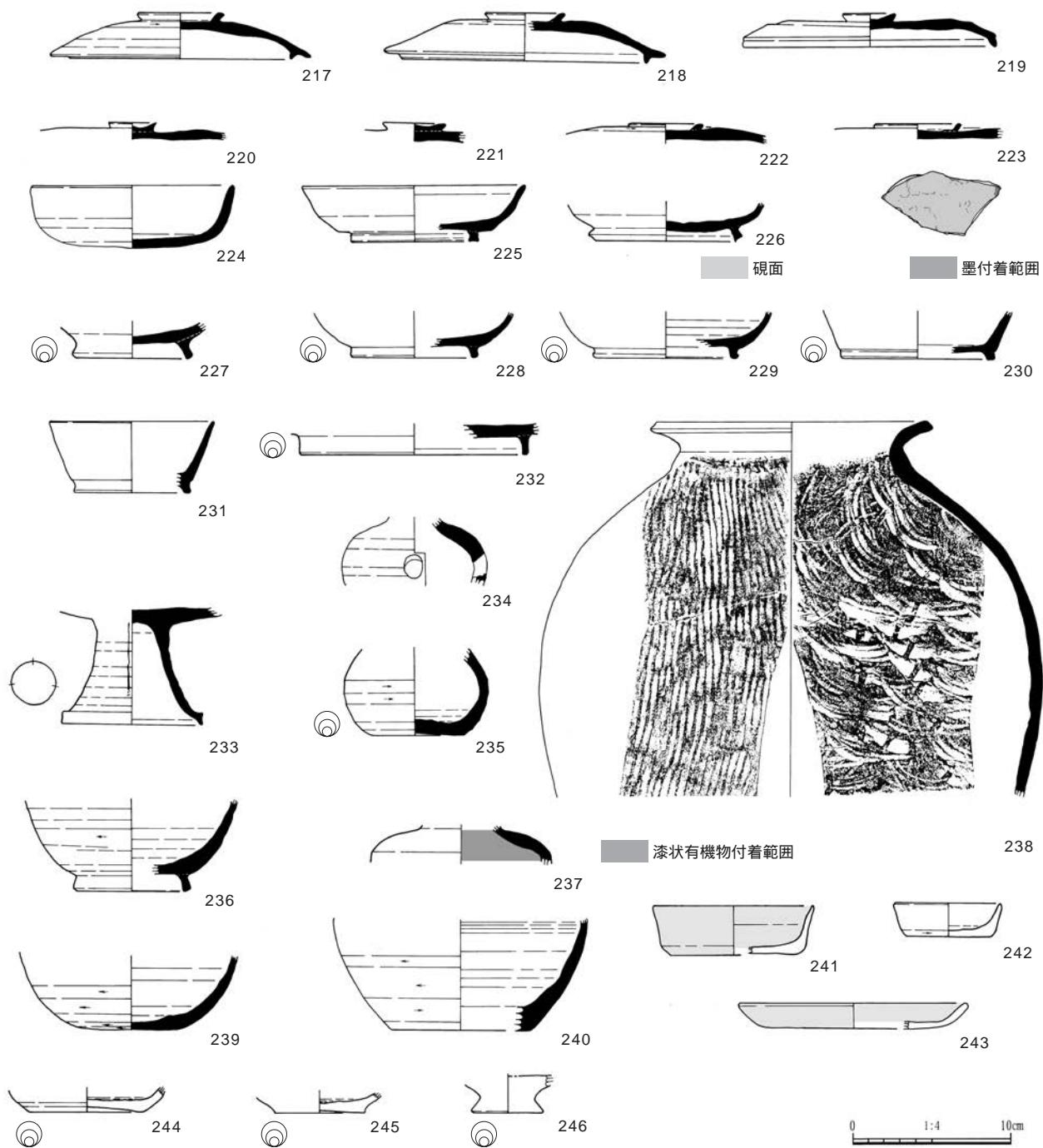


第52図 層出土土器・土製品(3)

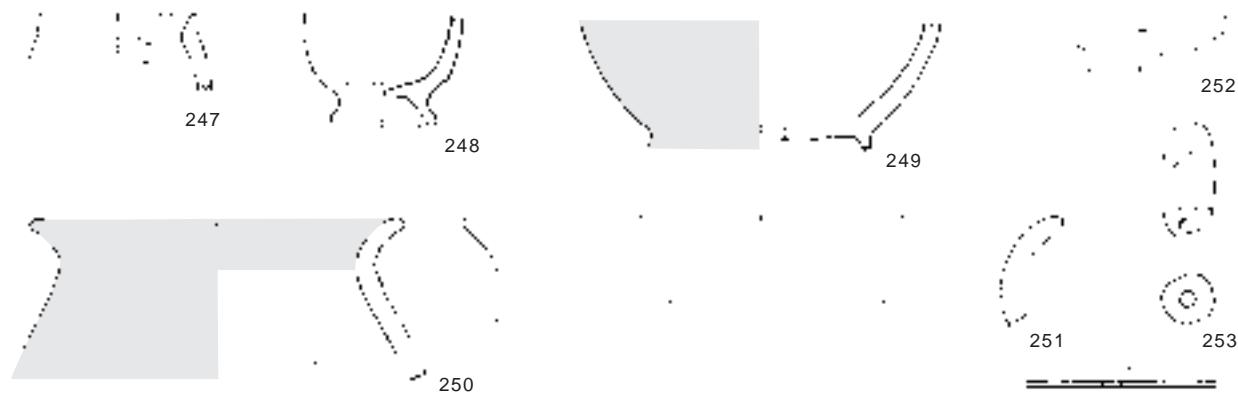
第3節 古代・中世の調査



第53図 層出土土器・土製品(4)



第54図 その他当該期の土器・土製品(1)



第55図 その他当該期の土器・土製品(2)

第50~53図 土器・土製品観察表

遺物番号	捕団番号	遺構層位	種別器種	口径(cm) 底径(cm)	器高(cm)	文様・調整	胎土焼成		色調	復元値△現存値 備考
							1mm以下の砂粒を含む 硬質	密 硬質		
89	50	II層	須恵器 坏蓋	*10.9	2.5	外面:天井部回転ヘラケズリ後ナデ 内面:ヨコナデ	1mm以下の砂粒を含む 硬質	灰色		
90	50	II層	須恵器 坏蓋	*13.3	△2.2	外面:天井部回転ヘラケズリ 内面:ヨコナデ	密 硬質	灰色		
91	50	II層	須恵器 坏蓋	*15.4	△2.5	外面:天井部回転ヘラケズリ 内面:ヨコナデ	密 硬質	灰色		
92	50	II層	須恵器 坏蓋	つまみ径 3.1	△1.5	内外面:ヨコナデ	密 硬質	灰色		
93	50	II層	須恵器 坏蓋	つまみ径 4.0	△1.65	内外面:ヨコナデ	1mm以下の砂粒を含む 硬質	灰色		
94	50	II層	須恵器 坏蓋	つまみ径 3.35	△1.3	内外面:ヨコナデ	密 硬質	灰色	つまみヘラ記号あり	
95	50	II層	須恵器 坏蓋	つまみ径 3.3	△1.0	内外面:ヨコナデ	1mm以下の砂粒を含む 硬質	灰黄色		
96	50	II層	須恵器 坏蓋	つまみ径 2.9	△1.0	内外面:ヨコナデ	1mmの砂粒を多く含む 硬質	灰色		
97	50	II層	須恵器 坏蓋	15.1	4.35	外面:天井部回転ヘラケズリ 内面:ヨコナデ	1.5mm以下の砂粒を含む 硬質	灰色	天井部焼き膨れによる変形	
98	50	II層	須恵器 坏蓋	*15.8	2.5	外面:天井部回転ヘラケズリ 内面:ヨコナデ	密 良好	灰色		
99	50	II層	須恵器 坏蓋	*14.6	2.15	外面:天井部回転ヘラケズリ 内面:ヨコナデ	3mm以下の砂粒を含む 硬質	灰色		
100	50	II層	須恵器 坏蓋	つまみ径 4.9	△1.7	外面:天井部回転ヘラケズリ 内面:ヨコナデ	密 硬質	灰色		
101	50	II層	須恵器 坏蓋	*14.8	△2.6	内外面:ヨコナデ	密 硬質	灰色		
102	50	II層	須恵器 坏蓋	*15.6	△1.5	内外面:ヨコナデ	1~2mmの砂粒を含む 硬質	灰色	口縁部焼き歪みにより変形	
103	50	II層	須恵器 坏蓋	*14.7	△1.7	内外面:ヨコナデ	密 硬質	灰色		
104	50	II層	須恵器 短頸壺蓋	*14.7	△1.8	内外面:ヨコナデ	密 硬質	灰色		
105	50	II層	須恵器 坏蓋		△1.5	外面:天井部回転ヘラケズリ 内面:ヨコナデ	1.5mm以下の砂粒を含む 硬質	灰色	転用硯	
106	50	II層	須恵器 坏蓋	*12.9	△1.9	内外面:ヨコナデ	密 硬質	灰色		
107	50	II層	須恵器 短頸壺蓋	つまみ径 2.6	△2.0	内外面:ヨコナデ	密 硬質	灰色		
108	50	II層	須恵器 蓋	つまみ径 5.1	△3.0	外面:ヨコナデ	密 硬質	灰色		
109	50	II層	須恵器 坏身	*9.4	3.7	外面:ヨコナデ 底部回転ヘラケズリ 内面:ヨコナデ	密 硬質	灰色	自然釉付着	
110	50	II層	須恵器 坏身	*12.4	2.5	内外面:ヨコナデ	密 硬質	灰色		
111	50	II層	須恵器 坏身	*9.0						
112	50	II層	須恵器 坏身	*12.1	3.4	内外面:ヨコナデ	1mmの砂粒を多く含む 軟質	にぶい黄灰色		
113	50	II層	須恵器 坏身	*9.0						
114	50	II層	須恵器 坏身	*13.5	△4.0	内外面:ヨコナデ	1~2mmの砂粒を多く含む やや軟質	灰褐色		
115	50	II層	須恵器 坏身	*16.0	3.5	内外面:ヨコナデ	密 硬質	灰色		
116	50	II層	須恵器 坏身	*14.0						
117	50	II層	須恵器 坏身	*11.8	3.6	外面:ヨコナデ 底部回転糸切り 内面:ヨコナデ	密 硬質	灰色		
118	50	II層	須恵器 坏身	*7.3						
119	50	II層	須恵器 坏身	*12.3	3.9	外面:ヨコナデ 底部回転糸切り 内面:ヨコナデ	密 やや軟質	灰色		
120	50	II層	須恵器 坏身	*10.1	4.0	外面:ヨコナデ 底部回転糸切り 内面:ヨコナデ	密 硬質	灰色		
121	50	II層	須恵器 坏身	*11.6	3.7	外面:ヨコナデ 底部回転糸切り 内面:ヨコナデ	密 やや軟質	褐色		
122	50	II層	須恵器 坏身	*8.4						
123	50	II層	須恵器 高台付坏	*9.4	4.7	外面:ヨコナデ 底部回転糸切り後ナデ 内面:ヨコナデ	1~2mmの砂粒を含む 硬質	灰色		
				*13.1	5.65	外面:ヨコナデ 底部回転糸切り 内面:ヨコナデ	密 硬質	灰色		
				*8.5						

第3節 古代・中世の調査

第50~53図 土器・土製品観察表

遺物番号	挿図番号	遺構層位	種別器種	口径(cm) 底径(cm)	器高(cm)	文様・調整	胎土焼成	*復元値 △現存値	
								色調	備考
124	50	II層	須恵器 高台付坏	*14.3 *8.8	4.7	内外面:ヨコナデ	1~2mmの砂粒を含む 硬質	灰色	
125	50	II層	須恵器 高台付坏	*15.9 *12.5	7.1	外面:ヨコナデ 体部沈線2条 内面:ヨコナデ	密 硬質	灰色	
126	50	II層	須恵器 高台付坏	*14.2 *7.9	4.0	内外面:ヨコナデ	1mm以下の砂粒を含む 硬質	灰色	
127	50	II層	須恵器 高台付坏	*14.9 *8.4	4.0	内外面:ヨコナデ	2.5mm以下の砂粒を含む やや軟質	灰色	
128	50	II層	須恵器 高台付坏	*13.9 *8.5	3.9	外面:ヨコナデ 体部沈線2条 内面:ヨコナデ	密 硬質	灰色	
129	50	II層	須恵器 高台付坏	*12.9 *10.1	3.1	内外面:ヨコナデ	2mm以下の砂粒を含む 硬質	灰色	
130	50	II層	須恵器 高台付坏	*14.3 *9.2	4.15	内外面:ヨコナデ	2mm以下の砂粒を含む 軟質	灰白色	
131	50	II層	須恵器 高台付坏	*14.3 *8.0	3.3	内外面:磨耗のため不明	1mmの砂粒を多く含む	灰白色	
132	51	II層	須恵器 高台付坏	*10.2 6.9	5.2	内外面:ヨコナデ	密 硬質	灰色	底部外面ヘラ記号あり
133	51	II層	須恵器 高台付坏?	*18.7	△5.2	内外面:ヨコナデ	密 硬質	にぶい赤褐色	
134	51	II層	須恵器 高台付坏	*9.6	△3.7	内外面:ヨコナデ	1~2mmの砂粒を含む 硬質	灰色	底部外面ヘラ記号あり
135	51	II層	須恵器 高台付坏	*8.2	△3.6	外面:ヨコナデ 体部沈線1条 内面:ヨコナデ	密 硬質	灰色	
136	51	II層	須恵器 高台付坏	*12.1	△4.2	内外面:ヨコナデ	密 硬質	褐色	
137	51	II層	須恵器 高台付坏	*9.9	△2.8	内外面:ヨコナデ	1mm以下の砂粒を含む やや軟質	灰色	
138	51	II層	須恵器 高台付坏	*7.9	△2.4	外面:ヨコナデ 底部回転糸切り後ナデ	密 硬質	灰色	
139	51	II層	須恵器 高台付坏	*9.5	△2.0	内外面:ヨコナデ	密 硬質	灰色	底部外面ヘラ記号あり
140	51	II層	須恵器 高台付坏	*8.3	△3.5	内外面:ヨコナデ	密 硬質	灰色	
141	51	II層	須恵器 高台付坏	*9.6	△2.2	外面:底部静止糸切り後ナデ 内面:底部ナデ	密 硬質	灰色	
142	51	II層	須恵器 高台付坏	*9.0	△1.7	外面:ヨコナデ 底部静止糸切り 内面:ヨコナデ	密 硬質	灰色	
143	51	II層	須恵器 高台付坏	*9.5	△3.0	内外面:ヨコナデ	密 硬質	灰色	
144	51	II層	須恵器 高台付坏	*8.3	△2.0	内外面:ヨコナデ	1~2mmの砂粒を含む 硬質	灰色	
145	51	II層	須恵器 高台付坏	*9.9	△1.75	内外面:ヨコナデ	密 硬質	灰色	
146	51	II層	須恵器 高台付坏	*9.8	△1.3	内外面:ヨコナデ	1.5mm以下の砂粒を含む 硬質	灰色	
147	51	II層	須恵器 高台付坏	*9.8	△2.25	内外面:ヨコナデ	密 硬質	灰色	
148	51	II層	須恵器 高台付坏	*11.1	△1.1	内外面:ヨコナデ	1~2mmの砂粒を含む やや軟質	灰白色	
149	51	II層	須恵器 高台付皿?	*12.9	△2.4	内外面:ヨコナデ	密 硬質	灰色	
150	51	II層	須恵器 皿	*13.5 *9.4	2.2	外面:ヨコナデ 底部回転糸切り後ナデ 内面:ヨコナデ	密 硬質	褐色	
151	51	II層	須恵器 鉢	*19.5	8.2	外面:ヨコナデ 底部カキメ後ナデ 内面:ヨコナデ	密 硬質	灰色	鉄鉢形
152	51	II層	須恵器 壺	*5.8	△6.2	外面:胸部回転ヘラケズリ後ヨコナデ 底部回転糸切り 内面:ヨコナデ	密 硬質	灰色	
153	51	II層	須恵器 壺	*7.0	△7.0	内外面:ヨコナデ	密 硬質	灰色	漆状の有機物付着
154	51	II層	須恵器 高坏	*10.4	△6.8	外面:脚部ヨコナデ 内面:脚部ケズリ後ナデ	3mm以下の砂粒を含む やや軟質	灰白色	
155	51	II層	須恵器 甕	*20.4	△4.5	内外面:ヨコナデ	密 硬質	灰色	
156	51	II層	須恵器 甕?瓶?	*14.5	△6.9	内外面:ヨコナデ	密 硬質	灰色	
157	51	II層	須恵器 甕?瓶?	*16.7	△3.35	内外面:ヨコナデ	密 硬質	灰色	
158	51	II層	須恵器 長颈壺	10	△11.2	内外面:ヨコナデ	5mm以下の砂粒を多く含む 硬質	暗灰色	頸部焼き彫れによる変形
159	51	II層	須恵器 壺底部	*8.6	△2.8	外面:体部回転ヘラケズリ後ナデ 底部回転糸切り 内面:ヨコナデ	1~2mmの砂粒を含む 硬質	灰色	
160	51	II層	須恵器 壺胴部		△12.9	外面:回転ヘラケズリ後ナデ 内面:ヨコナデ	密 硬質	灰色	
161	51	II層	須恵器 小型壺		*7.2	△4.4	内外面:ヨコナデ	密 硬質	
162	51	II層	須恵器 口縁部	*5.0	△3.15	内外面:ヨコナデ	1mm以下の砂粒を含む 硬質	暗灰色	
163	51	II層	須恵器 把手	厚1.6		外面:ナデ	密 硬質	灰色	
164	51	II層	須恵器 把手	厚1.5		外面:ナデ	密 硬質	灰色	
165	51	II層	須恵器 円面鏡		△2.35	外面:ヨコナデ 脚部沈線3条 三角形の透かし 内面:ヨコナデ	密 硬質	赤灰色	
166	51	II層	土師器 坏	*13.4 *9.7	3.0	外面:ナデ 底部ヘラケズリ後ラミガキ 内面:放射状暗文	1mm以下の砂粒を含む 良好	橙色	外側赤色塗装
167	51	II層	土師器 坏	*16.7 *12.0	3.4	外面:ナデ 底部ヘラケズリ後ナデ 内面:ナデ	1mm以下の砂粒を含む 良好	橙色	外側赤色塗装
168	51	II層	土師器 坏	*14.3 *12.2	3.0	外面:ナデ 底部ヘラケズリ後ナデ 内面:ナデ	密 良好	にぶい黄橙色	外側赤色塗装
169	51	II層	土師器 坏	*12.6 *10.6	2.95	外面:ナデ 底部ヘラケズリ後ナデ 内面:ナデ	密 良好	橙色	外側赤色塗装
170	51	II層	土師器 坏	*14.2 *12.0	3.2	外面:ナデ 底部ヘラケズリ 内面:ナデ	密 良好	にぶい橙色	外側赤色塗装
171	51	II層	土師器 坏	*13.4 *9.0	3.5	外面:ナデ 底部ヘラケズリ後ナデ 内面:ナデ	密 良好	にぶい黄橙色	外側赤色塗装
172	51	II層	土師器 坏	*14.8	△3.7	内外面:ナデ	密 良好	にぶい黄橙色	外側赤色塗装

第5章 坂長村上遺跡・坂長道端中遺跡

第50~53図 土器・土製品観察表

遺物番号	挿図番号	遺構層位	種別器種	口径(cm) 底径(cm)	器高(cm)	文様・調整	*復元値 △現存値		
							胎土焼成	色調	備考
173	51	II層	土師器 壺	*12.6 *7.8	3.35	外面:ナデ 底部ヘラケズリ後ナデ 内面:ナデ	密良好	赤褐色	内外面赤色塗彩
174	52	II層	土師器 壺	*14.4 *11.0	3.0	外面:ナデ 底部ヘラケズリ後ナデ 内面:ナデ	密良好	橙色	内外面赤色塗彩
175	52	II層	土師器 壺	*13.2 *10.7	3.0	外面:ナデ 底部ヘラケズリ後ミガキ 内面:ナデ	密良好	橙色	内外面赤色塗彩
176	52	II層	土師器 壺	*13.5 *10.0	3.0	外面:ナデ 底部ヘラケズリ 内面:ナデ	密良好	橙色	内外面赤色塗彩
177	52	II層	土師器 壺	*14.1 *11.6	3.2	外面:ナデ 底部ヘラケズリ 内面:ナデ	1.5mm以下の砂粒を含む 良好	橙色	内外面赤色塗彩
178	52	II層	土師器 壺	*12.65 *10.4	2.8	外面:ナデ 底部ヘラケズリ 内面:ナデ	密良好	にぶい黄橙色	内外面赤色塗彩
179	52	II層	土師器 壺	*13.5 *10.3	1.45	外面:磨耗により不明 内面:ナデ	密良好	にぶい橙色	内外面赤色塗彩
180	52	II層	土師器 壺?	*11.3	△2.15	外面:ナデ 底部ヘラケズリ 内面:ナデ	2mm以下の砂粒を含む	にぶい黄橙色	内外面赤色塗彩
181	52	II層	土師器 壺	*13.0 *8.7	3.1	外面:ナデ 内面:ナデ 底部押圧	密良好	橙色	内外面赤色塗彩
182	52	II層	土師器 壺	*8.0	△1.55	外面:ヨコナデ 底部回転糸切り 内面:ヨコナデ	密良好	灰白色	内外面赤色塗彩
183	52	II層	土師器 壺	*9.9 *6.8	△1.9	外面:ナデ 底部回転糸切り 内面:ナデ後底部ユビオサエ	密良好	にぶい黄褐色	
184	52	II層	土師器 壺	*16.2 *3.5	4.9	外面:ヨコナデ 底部回転糸切り 内面:ヨコナデ	密良好	にぶい橙色	
185	52	II層	土師器 壺	*4.6	△2.2	外面:ヨコナデ 底部回転糸切り 内面:ヨコナデ	密良好	橙色	
186	52	II層	土師器 高台付壺	*7.4	△2.25	内外面:ナデ	密良好	橙色	
187	52	II層	土師器 高台付壺	*10.6	△2.4	内外面:ナデ	密軟質	淡褐色	内外面赤色塗彩
188	52	II層	土師器 皿	*15.0 *13.5	2.2	外面:ナデ 底部ヘラケズリ後ナデ	密良好	明橙色	内外面赤色塗彩
189	52	II層	土師器 皿	*13.0 *10.6	1.9	内外面:ナデ	密良好	橙色	内外面赤色塗彩
190	52	II層	土師器 皿	*18.9 *15.6	1.6	内外面:磨耗により不明	1mm以下の砂粒を含む 良好	にぶい橙色	内外面赤色塗彩
191	52	II層	土師器 皿	*14.7 *12.5	1.5	内外面:ナデ	密良好	赤褐色	内外面赤色塗彩
192	52	II層	土師器 高台付皿	*15.9 *7.5	3.4	内外面:ナデ	密良好	橙色	内外面赤色塗彩
193	52	II層	土師器 高台付皿	*17.7 *12.0	3.5	内外面:ナデ	密良好	赤橙色	内外面赤色塗彩
194	52	II層	土師器 高台付皿	*16.6 *8.0	△2.9	内外面:ナデ	密良好	橙色	内外面赤色塗彩
195	52	II層	土師器 高台付皿	*13.7	△2.9	内外面:ナデ	密良好	赤褐色	内外面赤色塗彩
196	52	II層	土師器 高台付皿	*10.5	△2.35	内外面:ナデ	密良好	にぶい黄橙色	内外面赤色塗彩
197	52	II層	土師器 高台付皿	*8.4	△2.5	内外面:ナデ	密良好	橙色	内外面赤色塗彩
198	52	II層	土師器 高台付皿	*11.4	△2.45	外面:ナデ 内面:底部ヘラケズリ後ナデ	密良好	橙色	内外面赤色塗彩
199	52	II層	土師器 高台付皿	*10.0	△1.9	内外面:ナデ	密良好	橙色	外面赤色塗彩
200	52	II層	土師器 高台付皿	*9.0	△2.95	外面:ナデ 内面:磨耗により不明	2mm以下の砂粒を含む 良好	橙色	内外面赤色塗彩
201	52	II層	土師器 高壺	*14.2	△5.2	内外面:磨耗により不明	密良好	橙色	外面赤色塗彩
202	52	II層	土師器 高壺		△7.9	外面:脚部ケズリ 内面:ナデ	密良好	橙色	内外面赤色塗彩
203	52	II層	土師器 甕	*20.6	△8.5	外面:磨耗のため不明 内面:頸部以下ヘラケズリ	密良好	にぶい橙色	
204	52	II層	土師器 甕	*30.8	△5.6	外面:ナデ 内面:頸部以下ヘラケズリ	密良好	にぶい黄橙色	
205	52	II層	土師器 甕	*26.5	△5.7	外面:頸部以下ハケ 内面:口縁部ハケ 頸部以下ヘラケズリ	密良好	橙色	
206	52	II層	土師器 甕	*13.1	△5.0	外面:ナデ一部ミガキ 内面:頸部以下ヘラケズリ	密良好	黒褐色	
207	52	II層	土師器 甕	*23.8	△4.65	外面:ハケ 内面:口縁部ハケ 頸部以下ヘラケズリ	1mm以下の砂粒を含む 良好	にぶい褐色	
208	52	II層	土師器 甕	*17.9	△6.8	外面:胴部ハケ 頸部一部ユビオサエ 内面:頸部以下ヘラケズリ	1mm以下の砂粒を含む 良好	橙色	
209	52	II層	土製品 手捏土器	*1.4	△1.5	外面:ナデ 内面:ユビオサエ	やや粗 やや軟質	淡褐色	
210	52	II層	土製品 移動式竈			外面:ナデ	密良好	橙色	
211	52	II層	土製品 移動式竈	底長4.4	△4.1	外面:ナデ	密良好	にぶい黄橙色	
212	53	II層	土製品 把手			外面:ナデ	やや粗 良好	橙褐色	
213	53	II層	土製品 把手			外面:ナデ	密良好	橙色	
214	53	II層	土製品 土錐?	長*5.2 径3.8	孔径1.8	外面:ナデ	やや粗 良好	橙褐色	
215	53	II層	土製品 土錐	長4.4 径1.7	孔径0.4	外面:ナデ	密良好	淡黃褐色	
216	53	II層	土製品 土錐	長*3.6 径1.2	孔径0.3	外面:ナデ	密良好	黒褐色	

第54・55図 土器・土製品観察表

遺物番号	挿図番号	遺構層位	種別器種	口径(cm) 底径(cm)	器高(cm)	文様・調整	*復元値 △現存値		
							胎土焼成	色調	備考
217	54	耕作土	須恵器 壺蓋	*14.1	2.95	外面:天井部回転ヘラケズリ 内面:ヨコナデ	密硬質	灰色	転用硯?
218	54	耕作土	須恵器 壺蓋	*15.6	3.15	外面:天井部回転ヘラケズリ 内面:ヨコナデ	密硬質	灰色	
219	54	耕作土～I層	須恵器 壺蓋	*16.0	△2.1	外面:天井部回転ヘラケズリ後ナデ 内面:ヨコナデ	密硬質	灰色	

第3節 古代・中世の調査

第54・55図 土器・土製品観察表

遺物番号	挿図番号	遺構層位	種別器種	口径(cm) 底径(cm)	器高(cm)	文様・調整	胎土焼成	*復元値 △現存値	
								色調	備考
220	54	耕作土	須恵器 壺蓋	つまみ径 3.1	△1.1	内外面：ヨコナデ	2.5mm以下の砂粒を含む 硬質	灰色	
221	54	耕作土	須恵器 壺蓋	つまみ径 4.0	△1.2	内外面：ヨコナデ	密 硬質	灰白色	
222	54	耕作土	須恵器 壺蓋	つまみ径 4.8	△1.05	外面：天井部回転ヘラケズリ後ナデ 内面：ヨコナデ	密 硬質	灰色	
223	54	耕作土	須恵器 壺蓋	つまみ径 5.6	△1.0	内外面：ヨコナデ	密 硬質	灰色	転用観 内面部分的に墨付着
224	54	不明	須恵器 壺身	*12.7 *9.0	4.0	内外面：ヨコナデ	密 やや軟質	灰白色	
225	54	耕作土	須恵器 高台付壺	*14.2 *8.2	3.6	外面：ヨコナデ 体部下回転ヘラケズリ後ナデ 内面：ヨコナデ	2mm以下の砂粒を含む 硬質	灰色	
226	54	耕作土・I層	須恵器 高台付壺	*9.9	△2.4	内外面：ヨコナデ	2mm以下の砂粒を含む 硬質	灰色	
227	54	耕作土	須恵器 高台付壺	*7.8	△2.3	外面：ヨコナデ 底部回転糸切り後ヨコナデ 内面：ヨコナデ	密 硬質	灰色	
228	54	耕作土～I層	須恵器 高台付壺	*8.0	△2.8	外面：ヨコナデ 底部回転糸切り 内面：ヨコナデ	密 硬質	赤灰色	
229	54	耕作土	須恵器 高台付壺	*9.2	*3.0	外面：ヨコナデ 底部回転糸切り 内面：ヨコナデ	1mmの砂粒を含む 硬質	灰色	
230	54	I層	須恵器 高台付壺	*9.8	△3.0	外面：ヨコナデ 底部回転糸切り 内面：ヨコナデ	密 硬質	灰色	
231	54	耕作土	須恵器 壺	*10.4 *7.4	4.5	内外面：ヨコナデ	1mmの砂粒を多く含む やや軟質	浅黄橙色	
232	54	耕作土	須恵器 高台付皿	*14.6	△1.95	外面：ヨコナデ 底部回転糸切り 内面：ヨコナデ	密 硬質	暗灰色	
233	54	耕作土	須恵器 高壺	*9.0	△7.4	外面：ヨコナデ 脚部切れ目状透かし3方向 内面：ヨコナデ	密 硬質	灰色	
234	54	耕作土	須恵器 壺		△4.3	内外面：ヨコナデ	密 硬質	灰色	
235	54	表土・造成土	須恵器 壺	5.85	△5.5	外面：胴部下半ヘラケズリ 底部回転糸切り 内面：ヨコナデ	4.5mm以下の砂粒を含む 硬質	灰色	
236	54	耕作土	須恵器 壺底部	*7.55	△5.7	外面：胴部下半ヘラケズリ ヨコナデ 内面：ヨコナデ	密 硬質	灰色	
237	54	I層	須恵器 短頸壺		△2.4	内外面：ヨコナデ	密 硬質	暗灰黄色	内面漆状の有機物付着
238	54	耕作土	須恵器 壺	*17.0	△24.0	外面：胴部平行タタキ 内面：胴部同心円当て具痕	密 硬質	灰色	自然釉付着
239	54	耕作土	須恵器 底部	6.0	△4.7	外面：胴部下半ヘラケズリ 内面：ヨコナデ	密 硬質	灰色	底部外面に火襷様の焼縞あり
240	54	耕作土	須恵器 底部	*8.9	△7.1	外面：胴部下半ヘラケズリ 内面：ヨコナデ	密 硬質	灰色	
241	54	耕作土	土師器 壺	*10.1 *8.2	3.0	内外面：ナデ	1~2mmの砂粒を含む 良好	淡橙色	内外面赤色塗彩
242	54	耕作土	土師器 壺	6.7 5.5	2.1	外面：ナデ 体部下半ヘラケズリ 内面：ナデ	密 良好	にぶい褐色	
243	54	耕作土	土師器 皿	*14.5	1.7	外面：ナデ 底部ヘラケズリ後ミガキ 内面：ナデ	密 良好	橙色	内外面赤色塗彩
244	54	II層？	土師器 壺	*7.4	△1.6	外面：ナデ 底部回転糸切り 内面：ナデ	密 良好	褐色	
245	54	I層	土師器 皿？壺？	*5.7	1.3	外面：ナデ 底部回転糸切り 内面：ナデ	密 良好	にぶい黄橙色	
246	54	耕作土	土師器 皿		△2.4 4.65	外面：ナデ 底部回転糸切り 内面：ナデ	密 良好	にぶい黄橙色	
247	55	耕作土	土師器 小型容器？	*8.2	△4.1	外面：磨耗により不明 内面：頸部以下ヘラケズリ	1mm以下の砂粒を含む 良好	にぶい褐色	
248	55	不明	土師器 小型容器？		△6.0	外面：ナデ？高台部ユビオサエ 内面：ナデ？	密 良好	橙色	
249	55	耕作土	土師器 大型容器？		*5.2	△7.0	内外面：ナデ	密 良好	にぶい黄橙色 外面赤色塗彩
250	55	表土・造成土	土師器 壺		*12.0				
251	55	不明	土師器 壺		△19.3	△8.5	外面：胴部ハケ 内面：頸部以下ヘラケズリ	密 良好	にぶい黄橙色 外面と口縁部内面赤色塗彩
252	55	不明	青磁 碗		*31.0	△5.6	外面：ハケ 内面：頸部以下ヘラケズリ	密 良好	明橙色
253	55	耕作土	土製品 土錐		*5.0	△3.05	外面：蓮弁文	密 良好	淡オリーブ色
				長*5.9	孔径0.9	外面：ナデ？ 径2.8	密 良好	橙色	

瓦類(第56～59図 第7・8表 図版45～49)

坂長村上遺跡・坂長道端中遺跡では272点、総重量約35.2kgの瓦類が出土している。すべて小破片で、完形のものはない。また、遺構に確実に共伴するものではなく、大半は包含層から出土している。とくに古代の包含層であるII層からの出土量が最も多く、III・IV層の上層からも少量ながら確認されている。グリッド別の出土量をみるとQ23、24付近とR27付近、およびN21、22付近にやや集中する傾向にある(第7表)。このうち、N21、22付近で出土した瓦類の大半は近世以降と考えられる二次堆積層(I層)中で確認されたものである。

出土した瓦類には、軒丸瓦、丸瓦、平瓦などがある。その他に風化が著しく、種類が特定できない小破片44点がある。焼成は硬質で須恵質なもの、須恵質ではないが、良好なもの、軟質なものがある。全体的にはやや軟質なものが多い。

なお、坂長村上遺跡・坂長道端中遺跡、および坂長米子道端ノ上遺跡で出土した瓦類のうち10点

について胎土分析を実施している(第6章第3節参照)。

軒丸瓦

3点を確認している。254、255はいずれも単弁八葉蓮華文軒丸瓦であるが、范型が異なる。

254は弁端がやや尖りぎみで、蓮弁内は中央部が壅み、子葉をもつ。中房はやや突出し、蓮子は1+4である。外区内縁には珠文が巡り、外縁は素文の直立縁と考えられる。瓦当文様は坂中廃寺I類、大寺廃寺IV類と同範と考えられ、伯耆国分寺630型式に類似する。側面、および瓦当裏面は粗いナデ調整が施されている。瓦当厚は2.0cmである。

255は弁端が丸く、蓮弁内は中央部が最も突出し、子葉をもつ。間弁は弁区を囲むようにつながっている。中房は突出し、蓮子は1+4と考えられる。外区内縁には珠文が巡り、外縁は素文の直立縁である。瓦当文様は坂中廃寺II類と同範と考えられる。側面、および瓦当裏面はナデ調整が施されている。瓦当厚は3.3cmである。

256は狭端部近くに8mm×7mmの方形の釘穴を持ち、軒丸瓦の丸瓦部である可能性がある。

丸瓦

8点を確認している。いずれも小破片のため、行基式、玉縁式の分類はできない。凸面にタタキの痕跡を残すものではなく、風化のため判然としないが、タタキによる成形後スリ消し、またはハケ調整などが施されたと考えられる。257、258は凸面にハケ目が僅かに残る。259は凸面が丁寧にスリ消された可能性が高い。凹面には糸切り痕跡が残る。257~259の側面はいずれも凹面側を面取りしている。

第7表 瓦類グリッド別出土量

単位:g ()内は点数

グリッド	軒丸瓦	丸瓦	平 瓦				その他	計
			正格子タタキ	繩タタキ	平行タタキ	タタキ不明		
N19			597(4)					597(4)
N20			3727(22)			94(2)	119(2)	4040(26)
N21			2179(12)	227(1)			201(4)	2607(17)
N22			332(2)	173(1)			532(1)	1037(4)
N23			522(4)	186(1)		665(1)		1373(6)
O18						53(1)		53(1)
O20			506(5)	99(1)				605(6)
O21			752(5)			50(1)	65(1)	867(7)
O22			342(3)					342(3)
O23		141(1)	268(2)	696(2)		21(1)		1126(6)
O24			45(1)	306(1)				351(2)
P20			391(4)					391(4)
P21			617(3)				93(2)	710(5)
P22			155(2)			64(1)		219(3)
P23			414(4)	250(1)			107(2)	771(7)
P24			895(6)	83(1)		63(1)		1041(8)
P25			44(1)				99(2)	143(3)
Q21			210(1)					210(1)
Q22		112(1)	372(4)	130(2)				614(7)
Q23			64(1)	1443(16)	291(2)	117(2)	163(5)	2078(26)
Q24				233(4)	602(9)	408(4)	288(6)	2531(23)
Q25	97(1)		171(1)	624(3)				892(5)
Q26			1021(1)	358(4)			44(1)	1423(6)
Q27		276(1)		848(4)			94(4)	1218(9)
Q28				149(1)				149(1)
R23			1160(6)			170(1)		1330(7)
R24			148(2)	215(2)		28(1)	303(4)	694(9)
R25		346(1)	1044(11)	156(2)			30(1)	1576(15)
R26			37(2)					337(2)
R27	316(1)	225(1)	1190(5)	1124(11)	57(1)		150(4)	3062(23)
R28				807(5)		64(1)	116(3)	987(9)
R29			84(1)	672(7)				756(8)
R30	225(1)					190(1)		415(2)
S28				292(3)				292(3)
S29			73(1)		98(1)			73(1)
不明							174(2)	272(3)
計	638(3)	1248(7)	19188(134)	9386(65)	57(1)	2087(18)	2578(44)	35182(272)

平瓦

218点を確認している。成形技法には桶巻き作りと一枚作りがある。凸面整形が明確に判断できるものでは正格子タタキ、縄タタキ、平行タタキの3種類が確認されている。出土量は正格子タタキのものが最も多く、重量比率では平瓦全体の約62%を占める(第8表)。

端面、および側面の調整は(1)分割後未調整のもの、(2)ケズリを施すもの、(3)凹面側に面取りを施すもの、(4)凹凸面ともに面取りを施すものに分類される。(3)、(4)については端面、または側面と面取り部分の両方をケズるものと、面取り部分のみケズるもの、ナデにより面取りを行っていると考えられるものもあり、さらに細分が可能である。ただし、タタキの種類と端面、側面の調整方法とに明確な対応関係を見出すことはできない。出土量では(3)が最も多く、(1)、(2)は僅かである。

A 正格子タタキ

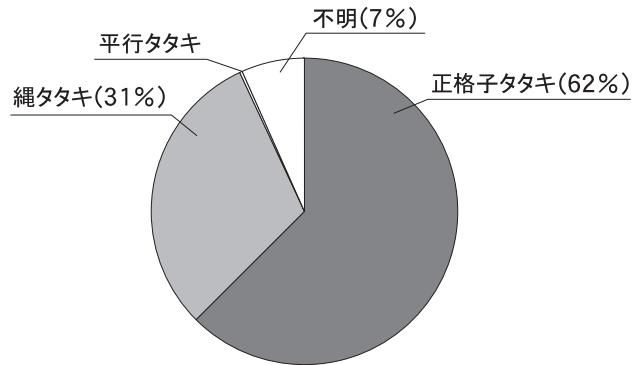
正格子タタキは原体によって数種類に分かれると考えられるが、いずれも小破片で表面が風化している個体も多いため、ここでは明確な細分は行っていない。管見する限りでは $5 \sim 6\text{ mm} \times 4 \sim 5\text{ mm}$ ほどの長方形を呈する格子が主体を占めている。成形技法は分割面の傾きや凹面に残る模骨痕などから多くが桶巻き作りと推定される。厚さは概ね1.5~2.5cmほどである。

260は格子が1cm角の正方形、深さも深い。凹面には模骨痕が明瞭に残る。261~263は $7\text{ mm} \times 5\text{ mm}$ ほどの長方形の格子をもつ。261は部分的にタタキの重複が激しい。端面と側面とも凹面側をケズリにより面取りする。262は須恵質で、側面は凹凸面ともケズリにより面取りを施す。263は広端部に向かってやや反りぎみとなる。端面と側面は凹面側をケズリにより面取りする。 4.5 mm ほどの砂粒を多く含み、焼成は軟質である。264~268は $6\text{ mm} \times 5\text{ mm}$ ほどの格子をもつ。266は須恵質で、広端面は凹面側が面取りされている。表面には砂粒等の動いた痕跡がみられず、ナデ調整の可能性が考えられる。269~272は $5 \times 4\text{ mm}$ ほどの格子をもつ。269には凹面に模骨痕が明瞭に残り、桶板の幅は3cm前後と推定される。270は凹面に糸切り痕が残る。狭端面、側面は凹面側を面取りする。272は広端長が30cm、厚さが2.4cmである。凹面の模骨痕は明瞭で、桶板の幅は2cm前後と推定される。広端面、側面の調整は凹面側をケズリにより面取りする。凹面には分割後に施されたと考えられるヘラ状の工具痕がみられる。273は $4\text{ mm} \times 3\text{ mm}$ ほどの格子をもち、深さは比較的浅い。

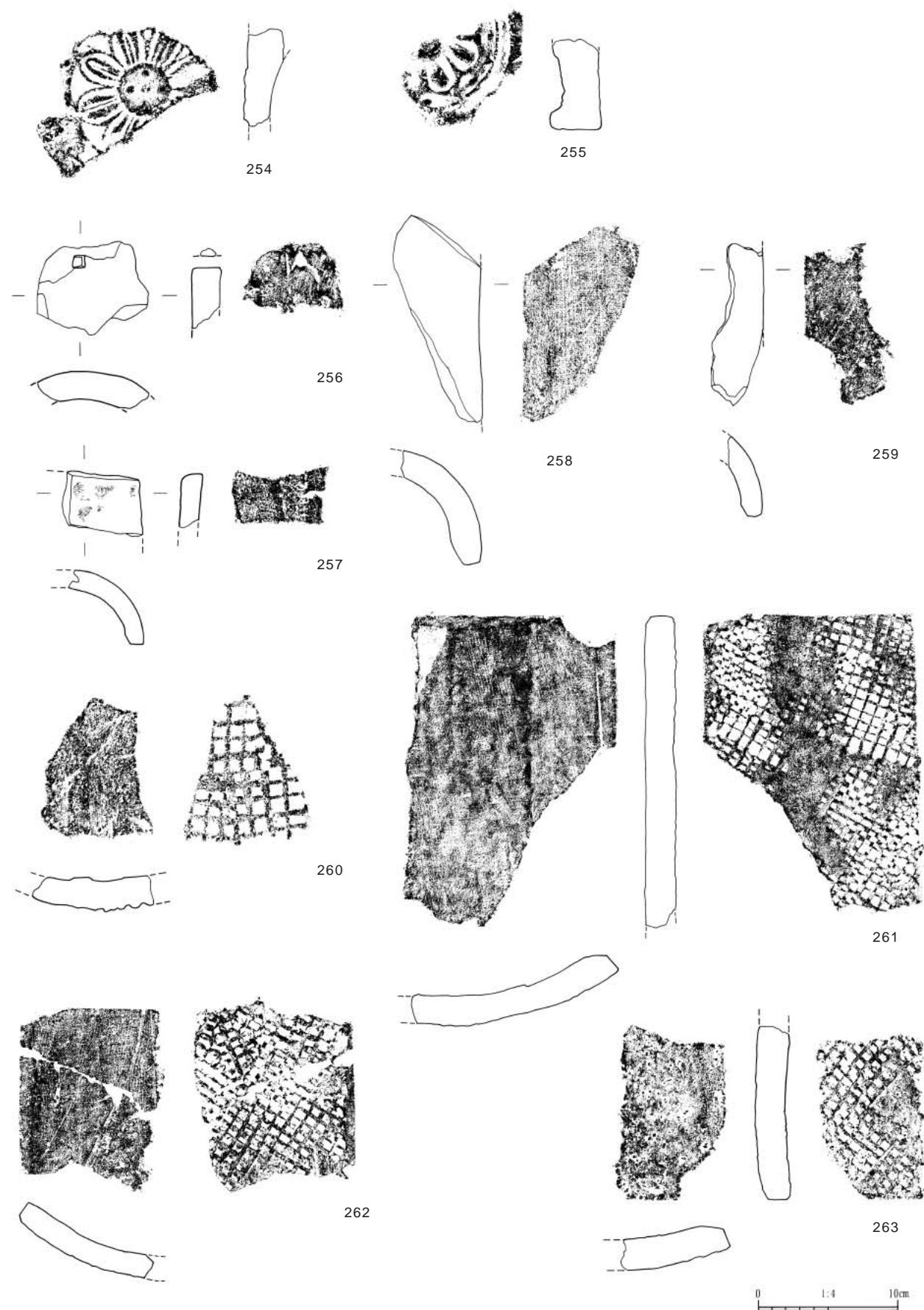
B 縄タタキ

縄タタキは単位あたりの密度や縄の太さ、巻き方によって数種類に分けられると考えられるが、いずれも小破片で表面が風化している個体も多いため、ここでは明確な細分は行っていない。成形技法は側面が平瓦の円弧に対して鉛直であること、凹面に模骨痕がみられないことなどから大半は一枚作りと考えられる。ただし、桶巻き作りと考えられるものも僅かながらみられる。厚さは概ね2.0cm~3.0cmほどである。

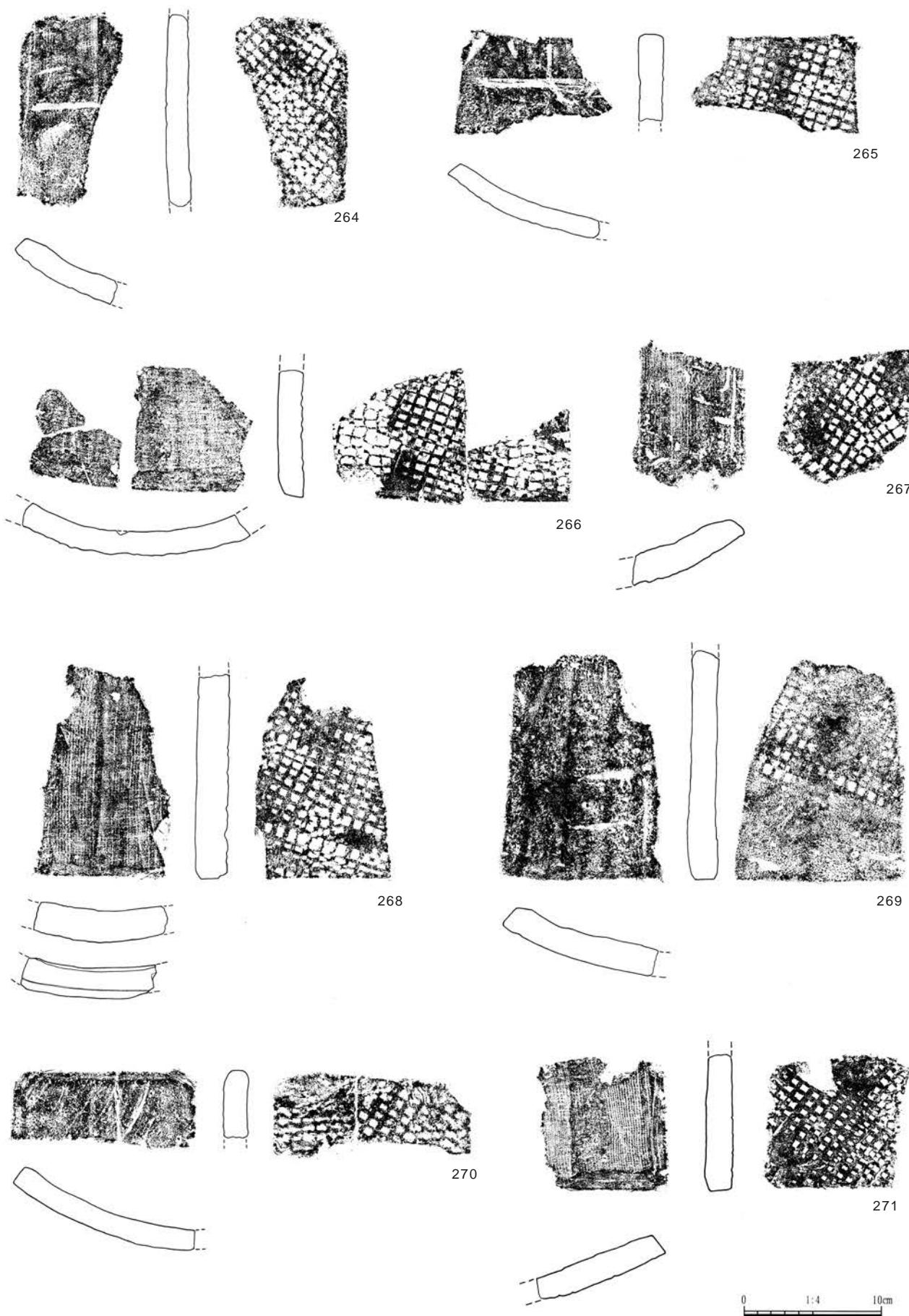
274、275は3cmの幅に13~14本ほどの縄目がみられる。274は明瞭ではないが、側面の凹面側をケズリにより面取りしている可能性もある。凹面の広端部側には黒色化した範囲がみられる。こ



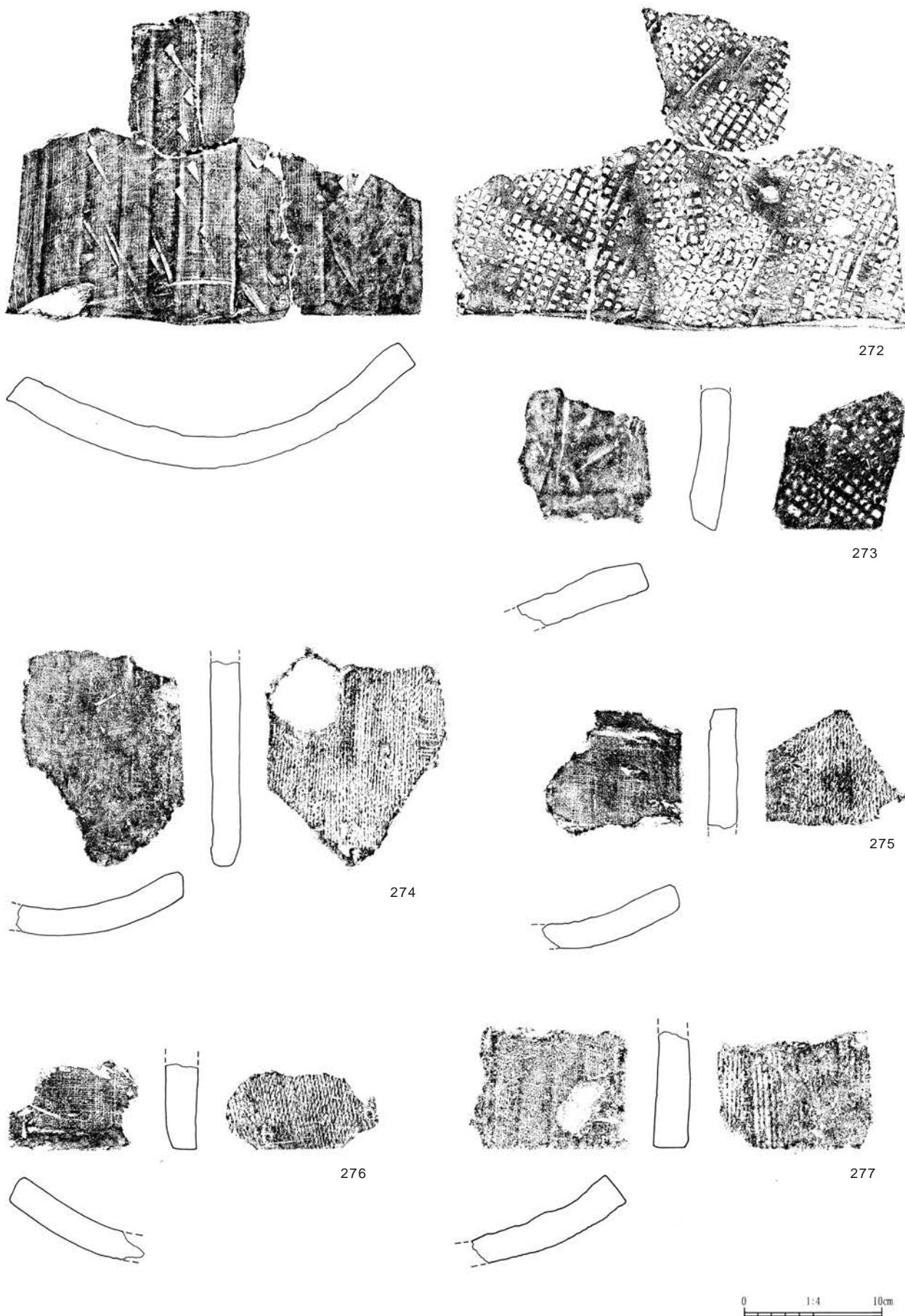
第8表 平瓦重量比率



第56図 瓦類(1)

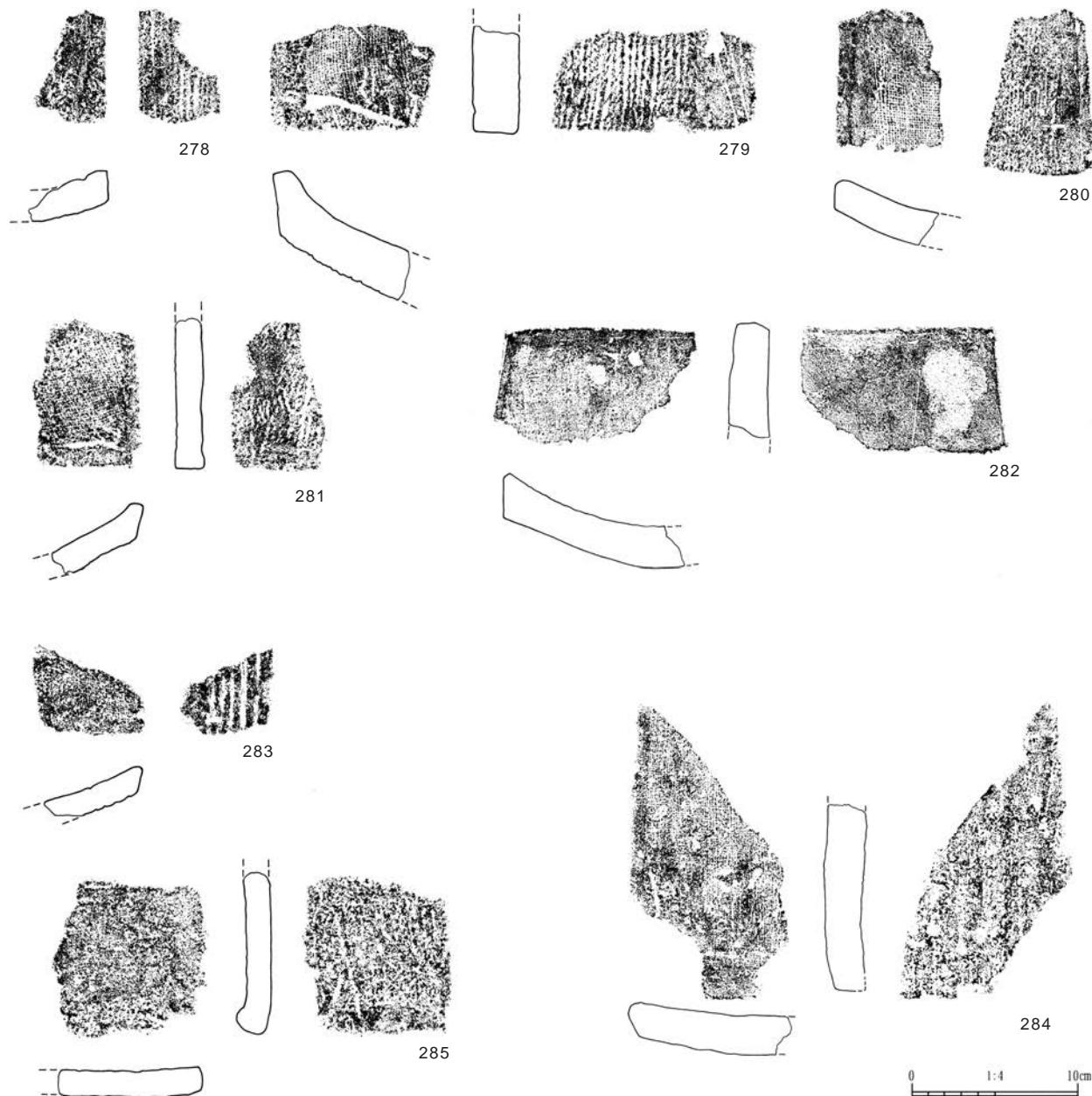


第57図 瓦類(2)



第58図 瓦類(3)

第3節 古代・中世の調査



第59図 瓦類(4)

第56~59図 瓦類観察表

遺物番号	挿図番号	遺構層位	種別器種	厚さ(cm)	重量(g)	文様・調整	胎土焼成	色調	備考
254 56		II層	軒丸瓦	2.0	316	瓦当文様: 単弁八弁蓮華文 瓦当裏面: 粗いナデ調整	1mm程の砂粒を含む 良好	淡黄橙色	坂中廃寺I類 残存度: 瓦当1/2
255 56		耕作土	軒丸瓦	3.3	225	瓦当文様: 単弁八弁蓮華文	1mm程の砂粒を含む 良好	淡黄褐色	坂中廃寺II類 残存度: 瓦当2/5
256 56		II層	軒丸瓦	2.1	97	凸面: スリ消し? 凹面: 布目	1mm程の砂粒を含む やや軟質	淡黄橙色	釘穴あり
257 56		II層	丸瓦	1.5	64	凸面: スリ消し? 一部ハケ? 凹面: 布目	1mm程の砂粒を含む やや軟質	黄橙色	
258 56		II層	丸瓦	2.2	346	凸面: スリ消し? 凹面: 布目	1mm程の砂粒を含む 良好	黄橙色	
259 56		耕作土	丸瓦	1.6	141	凸面: スリ消し 凹面: 布目 糸切り痕	1mm程の砂粒を含む 良好	にぶい褐色	
260 56		II層	平瓦	2.2	203	凸面: 正格子タタキ 凹面: 布目 模骨痕	1mm程の砂粒を含む やや軟質	黄灰褐色	
261 56		III~IV層	平瓦	1.9	1021	凸面: 正格子タタキ 凹面: 布目 模骨痕	1mm程の砂粒を含む 良好	淡黄橙色	
262 56		耕作土	平瓦	1.6	347	凸面: 正格子タタキ 凹面: 布目	密 須恵質	淡灰色	
263 56		II層	平瓦	2.4	270	凸面: 正格子タタキ 凹面: 磨耗により不明	5~6mmの砂粒を多く含む やや軟質	淡黄橙色	
264 57		I層	平瓦	1.65	230	凸面: 正格子タタキ 凹面: 布目	2mm程の砂粒を含む やや軟質	淡黄橙色	
265 57		I層	平瓦	1.65	161	凸面: 正格子タタキ 凹面: 布目	1mm程の砂粒を含む やや軟質	黄灰褐色	
266 57		II層	平瓦	1.9	329	凸面: 正格子タタキ 凹面: 布目	1mm程の砂粒を含む 須恵質	灰白色	

第56~59図 瓦類觀察表

遺物番号	挿図番号	遺構層位	種別器種	厚さ(cm)	重量(g)	文様・調整	胎土焼成	色調	備考
267	57	II層	平瓦	2.3	266	凸面:正格子タタキ 凹面:布目	密軟質	淡黄橙色	
268	57	耕作土	平瓦	2.3	492	凸面:正格子タタキ 凹面:布目 模骨痕	密良好	淡黄橙色	
269	57	II層	平瓦	2.1	571	凸面:正格子タタキ 凹面:布目 模骨痕	1mm以下の砂粒を含む 軟質	淡黄橙色	
270	57	I層	平瓦	1.7	168	凸面:正格子タタキ 凹面:布目? 糸切り痕	2mm程の砂粒を含む やや軟質	灰白色	
271	57	II層	平瓦	2.0	300	凸面:正格子タタキ 凹面:布目 模骨痕	密 やや須恵質	灰白色	
272	58	I層	平瓦	2.4	1177	凸面:正格子タタキ 凹面:布目 模骨痕	密良好	淡黄橙色	
273	58	III~IV層	平瓦	2.5	274	凸面:正格子タタキ 凹面:布目	密軟質	淡黄白色	
274	58	III~IV層	平瓦	2.2	509	凸面:縄タタキ 凹面:布目	1mm以下の砂粒を含む 良好	淡黄橙色	
275	58	耕作土	平瓦	2.2	237	凸面:縄タタキ 凹面:布目	1mm以下の砂粒を含む 良好	淡黄橙色	
276	58	II層	平瓦	2.3	216	凸面:縄タタキ 凹面:布目	密 やや須恵質	灰白色	
277	58	耕作土	平瓦	2.6	395	凸面:縄タタキ 凹面:布目 模骨痕	1mm程の砂粒を含む 良好	赤褐色	
278	59	II層	平瓦	2.1	83	凸面:縄タタキ 凹面:布目	2mm程の砂粒を含む 軟質	赤褐色	
279	59	II層	平瓦	3	301	凸面:縄タタキ 凹面:布目	1mm程の砂粒を含む やや軟質	淡黄橙色	
280	59	II層	平瓦	2.1	202	凸面:縄タタキ 凹面:布目	1mm以下の砂粒を含む 良好	淡黄橙色	
281	59	II層	平瓦	1.8	133	凸面:縄タタキ 一部ナデ消し 凹面:布目	1mm程の砂粒を含む 軟質	にぶい黄橙色	
282	59	II層	平瓦	2.5	347	凸面:ケズリ 凹面:布目	1mm以下の砂粒を含む 須恵質	灰色	
283	59	II層	平瓦	1.7	57	凸面:平行タタキ 凹面:布目	1mm程の砂粒を含む 軟質	にぶい黄橙色	
284	59	II層	平瓦	2.3	452	凸面:磨耗のため不明 縄タタキか? 凹面:布目	3~4mmの砂粒を含む やや軟質	黄橙色	
285	59	II層	道具瓦?	1.95	196	凸面:縄タタキ 凹面:布目	1mm程の砂粒を多く含む 軟質	黄橙色	

の部分は布目が著しく磨耗しており、葺足と考えられる。葺足の長さは9.5cm前後と推定される。

275は狭端面、側面とも凹面側がナデにより面取りされている。276は3cmの幅に11本ほどの縄目がみられる。須恵質で、端面は凹面側が面取りされている。277は3cmの幅に縄目が8、9本みられる。側面が平瓦に鉛直ではなく、円弧の中心を向く。凹面には模骨痕が明瞭に残っており、桶巻き作りか。その場合、桶板の幅は2.4cm前後と推定される。279は3cmの幅に8本の縄目がみられる。広端面はケズリで、側面は凹面側をケズリにより面取りする。281は凸面の広端面沿い、側面沿いの縄目が強いナデにより消されている。

C 平行タタキ

283は側面に沿ってタタキが施されている。側面は面取りされていない。坂長村上遺跡・坂長道端中遺跡では1点のみの出土である。

D その他

282は凸面に丁寧なケズリ調整がみられる。したがって、整形時におけるタタキの種類を特定することはできない。

用途不明瓦

284はやや扁平な平瓦と考えられ、熨斗瓦の可能性もある。凸面は風化しているため、タタキの種類等は特定できない。広端面、側面とも凹面側がケズリにより面取りされている。285は扁平な瓦で、片面には布目がみられる。もう片面には縄タタキのような痕跡が残るが、風化が著しく明瞭ではない。形状から隅木蓋瓦の可能性もあるか。

参考文献

岸本町教育委員会 1977 『大寺廃寺第四次発掘調査報告書』

真田廣幸 1980 「奈良時代の伯耆国に見られる軒丸の様相」『考古学雑誌』第66巻第2号

鳥取県立博物館 2003 『鳥取県立博物館所蔵 古代寺院関係資料集』

鉄製品・鍛冶関連遺物（第61～66図 第9～11表 図版50～53）

坂長村上遺跡・坂長道端中遺跡では鉄製品が112点、鉄滓等の鍛冶関連遺物が372点出土している。鍛冶関連遺物の総重量は約12.2kgに及ぶ。調査地内では鍛冶炉を伴う遺構は確認されていないが、周囲における鉄器生産を示唆している。

鉄製品、鍛冶関連遺物のうち、遺構に共伴するものは僅かで、大半が包含層から出土している（第10・11表）。とくに古代の包含層であるⅡ層から出土したものが全体の6割以上を占める。Ⅰ層、およびⅢ、Ⅳ層から出土した資料についても他の遺物出土状況などを勘案すると、多くは古代に帰属する可能性は高い。グリッド毎の出土量をⅡ層、およびⅢ、Ⅳ層の鍛冶関連遺物でみると、P23、R23、Q23グリッド付近（=範囲A）とR27、28、Q28グリッド付近（=範囲B）を中心とした範囲にやや集中する（第60図）。範囲AはS11、SS1、土坑、溝状遺構など古代の遺構が比較的集中する範囲からその南側にかけて、範囲BはS12からSB1にかけての範囲にあたる。

鍛冶関連遺物では製錬系の流動滓、椀形鍛冶滓、鍛冶滓、含鉄鉄滓、鉄塊系遺物、粘土質溶解物、羽口などが出土している。出土量は椀形鍛冶滓が最も多く、鍛冶滓を含めると84%を占める（第9表）。鉄塊系遺物は2点のみである。

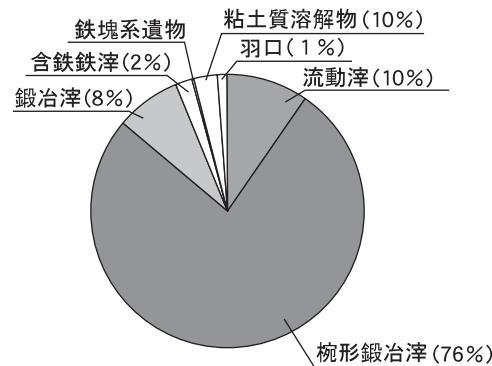
鉄製品はほとんどが破片で、完形に復元できたものは少ない。したがって、器種を特定できないものが68点と大半を占める（第11表）。器種を特定できるものでは釘類、鏃、斧、刀子、鎌、鋤（または、鍔）、鍋などを確認している。その中で最も多いのは釘類（18点）である。断面が方形、もしくは長方形を呈する棒状品が39点出土しており、これらの中には釘や鉄鏃が一定量含まれていると考えられる。

鍛冶関連遺物

第61～63図はⅡ層から出土した鍛冶関連遺物である。

第61図F45～F49は製錬系の流動滓である。F45は下面がスサ混じりの炉壁片を噛み込んでいる。F46は下面が桶状に突出しており、その部分には多量の炉壁粉が固着する。流出孔滓の可能性もある。F48は炉底塊の側部片、もしくは流出孔滓の可能性がある。結晶は冷却速度が遅く、製錬系の炉内滓の一種かもしれない。

F50～F66は椀形鍛冶滓で、大きさから4つに分類される。F50、51は大型のものである。F51は端部に露出する滓の結晶が発達しており、炉内滓の可能性もある。F52、53、55は中型のものである。F52、53は下面に貼り付いた炉床土を明瞭に確認できる。F55は完形で、重量は379gである。表皮は紫紅色を呈する。上面には4cm×2.5cm大の別個体の滓が付着している。F54、56～60は小型のものである。F54は上面肩部が二段ぎみで、上層は羽口由来の粘土質滓となっている。F56はほぼ完形で、重量160gである。左側部が直線状となるのは鍛冶具による変形の可能性もある。F58は上面が左右で段をなし、左側が一段低く、木炭痕が集中する。F61～F66は極小のものである。F61は肩部が木炭痕により変形している。断面形は浅い桶状となる。F62は完形品に近く、重量は34gである。磁着部分が複数確認される。F63は全体に含鉄部が広がっている印象で、磁着部分が広い。F65は平面不整三角形を呈し、鉄部主体とな

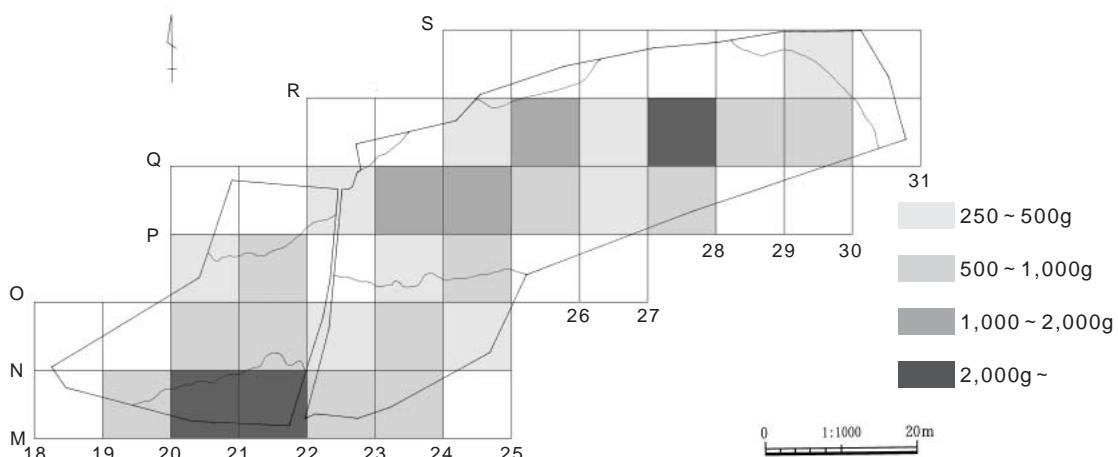


第9表 鍛冶関連遺物重量比率

る。F66は特L(☆)レベルの含鉄部を持つ。上面や側面の形状が乱れており、鍛冶作業中に変形した可能性がある。

F67~73は鍛冶滓である。F67は左側部に小破面を持つが、比較的完形に近い。重量は6gである。F69は完形品で、16gである。F72は外周部に鍛冶滓の小片や様々な形態の鍛造剥片が再結合している。F73は鉄塊系遺物の錆化が進んだ個体の可能性がある。F74~76は含鉄鉄滓である。

F77、78は鉄塊系遺物である。F78は上面は平坦ぎみで、鍛冶鉄塊系遺物か。F79は羽口の先端部破片で、通風孔側が欠け落ちている。右側部を中心に表皮が黒褐色に滓化している。S11は被熱石の破片である。金床石の可能性があるが、鍛造剥片等の付着は認められない。



第6-0図 鍛冶関連遺物グリッド別重量図

第10表 鍛冶関連遺物重量組成

単位: g ()内は点数

遺構・層位名 種別	S I 1	S I 2	S B 1	S D 10	S K 1	S K 2	P 3	P 11	P 13	P 14	S D 13	S D 16	I層	II層	III・IV層	その他	計
	7世紀後葉	8世紀前半	8世紀	古代～中世				時期不明			近世以降	古代～中世	古墳～古代				
流動滓	27 (1)										278 (2)	832 (10)					1137 (13)
椀形鍛冶滓	248 (5)	155 (2)	80 (1)	25 (2)				12 (1)	123 (1)	102 (2)	1341 (13)	5939 (109)	360 (4)	1280 (29)			9665 (169)
鍛冶滓	61 (5)		22 (9)	3 (2)	20 (2)	16 (3)	1 (1)	1 (1)	5 (1)		16 (1)	447 (89)	130 (8)	137 (16)			859 (138)
含鉄鉄滓			2 (1)									159 (3)					161 (4)
鉄塊系遺物												30 (2)					30 (2)
粘土質溶解物	3 (1)	10 (5)										206 (31)	25 (3)				244 (40)
鞴(羽口)			29 (2)									77 (4)					106 (6)
計	336 (11)	158 (3)	143 (18)	3 (2)	45 (4)	16 (3)	1 (1)	1 (1)	12 (1)	5 (1)	123 (1)	102 (2)	1635 (16)	7690 (248)	515 (15)	1417 (45)	12202 (372)

第11表 鉄製品数量組成

遺構・層位名 種別	S I 1	S I 2	S B 1	P 1	S K 9	II層	III・IV層	その他	計
	7世紀後葉	8世紀前半	8世紀	古代・中世	近世	古代～中世	古墳～古代		
釘(鎌・楔)	5	1	1			9	2		18
斧			1			2			3
刀子	2			1		2			5
鍔			1						1
鎌	1				2	2	1		6
鍋(鋸造品)					3				3
鋸	7				1				8
棒状品	4				31	4			39
板状品					7		1		8
その他	3			1	14	2	1		21
計	22	3	1	1	71	10	3		112

第3節 古代・中世の調査

第66図はⅢ、Ⅳ層から出土した鍛冶関連遺物である。F 119は中型の椀形鍛冶滓である。ほぼ完形で、重量は270gである。上面下手側の肩部には外周部を巡るように羽口由来の粘土質の溶解物が固着している。F 120、121は鍛冶滓である。

鉄製品

第64、65図はⅡ層から出土した鉄製品である。F 80、F 85は刀子である。F 80は茎部から刃部にかけての破片で、片闇である。F 85は茎部の長さが4.1cmで、背側にやや甘い闇を持つ。F 81～F 84は外観が刀子様の板状品である。F 81は鎌の可能性があり、F 82は刀子、または鎌破片と考えられる。側部が緩やかにうねっており、何らかの起こしへらのような用途も考えうるか。F 82は刀子、または鎌の刃部破片である。鎌とすれば、刃部そのものが欠けてしまっている可能性が高い。F 84は先端部と茎状の端部が欠けている刀子、または鉈と考えられる。断面形が中高の片刃状で、鉈の刃先に近い形状を示す。

F 86～F 93は釘類と考えられる。F 86は大型品で、長さは9.1cmを測る。体部は半ばでくの字状に折れ曲がっている。F 87は体部が太めである。F 88は、頭部が比較的大きめで、厚みが3mm近くある。F 89は細身で、薄い板状に折り返されている。F 90は足部側が緩やかにS字状にうねっており、既使用品である可能性が考えられる。F 92は頭部の端部と足部を欠く釘、または楔状の鉄製品の可能性がある。F 93は飾り金具としての用途を持つ鉈釘の可能性がある。体部は長さ2.1cmで、方形の断面となる。頭部は径が2cm、厚さ3.5mmほどで、平面形は丸みを持つ。

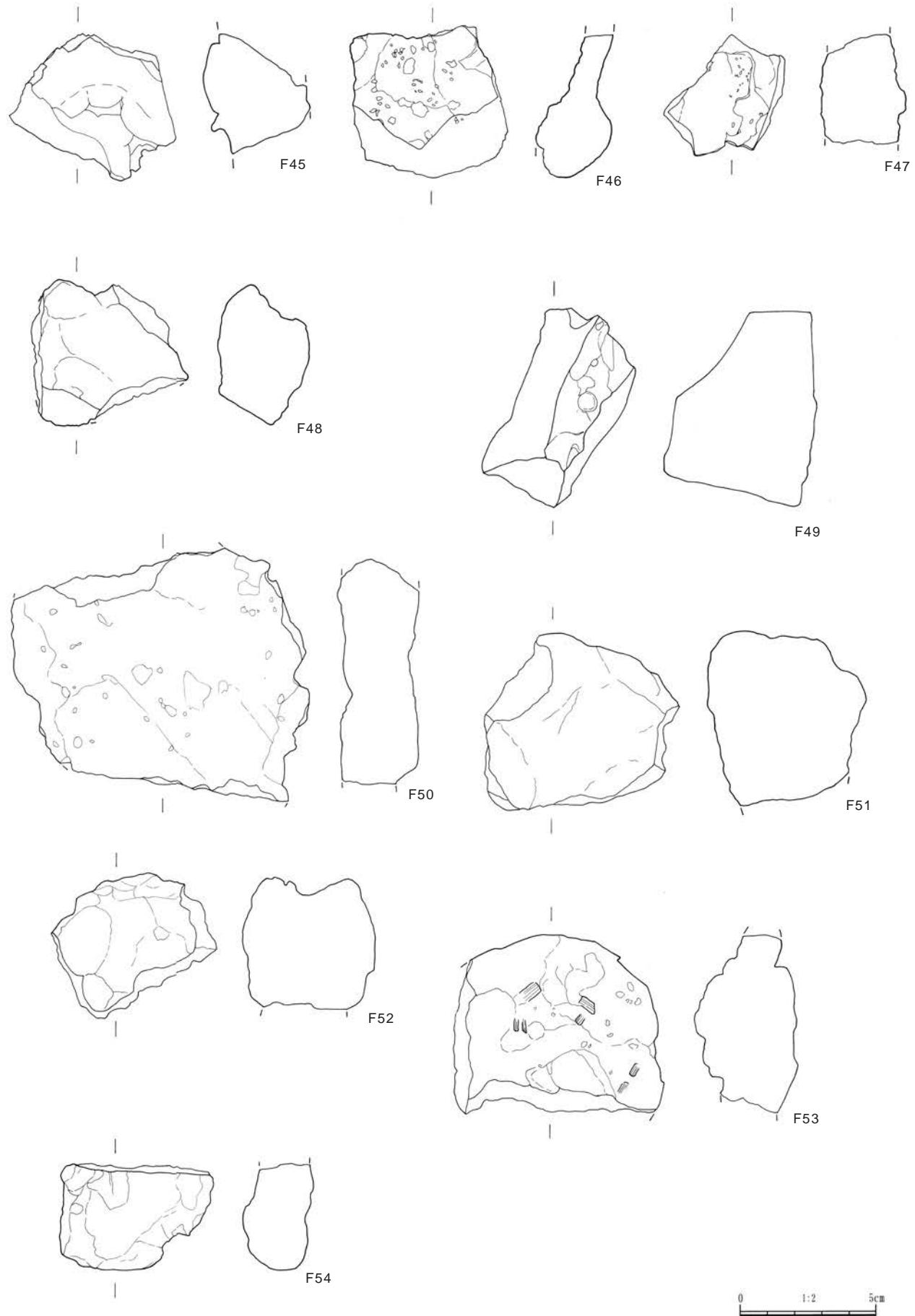
F 94～106は棒状不明品である。F 100は両端部がL字状に折れ曲がっており、長さは17.5cmを測る。両端部は薄板状に折れ曲がっており、端部の厚みは1～1.5mmを測る。F 101は長めの釘となる可能性がある。F 103は足部先端を欠く大型の釘の可能性がある。横断面形は方形を呈する。F 106は細身の鎌、または何らかの鉄製品の茎部の可能性がある。

F 107、108は鉄鎌と考えられる。F 108は刃部幅が3.2cmを測る。背側の厚みが2mm前後で、左側部は小さな三角形に折り曲げられている。高さは1.3cmを測る左鎌である。刃部は直線状で研ぎ減りはない。F 109～114は板状不明品である。

F 115、116は袋状鉄斧である。F 115は袋部の破片で、袋部の横断面形は丸みを持つ。F 116はF 115と同一グリッドで出土しており、同一個体の可能性もある。

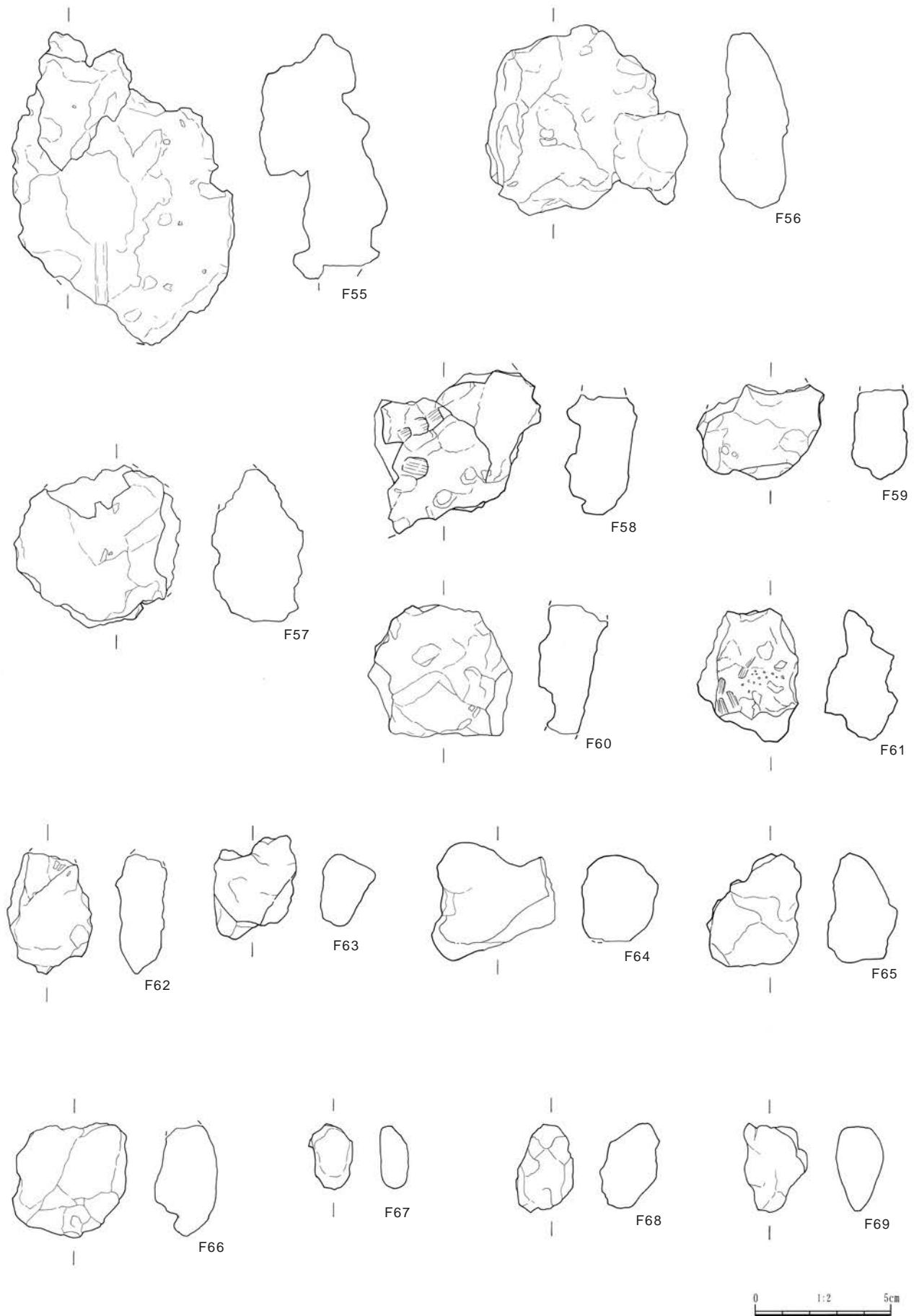
F 117、118は鋳造品で、鉄鍋と考えられる。F 116は厚さ4mmほどで、鉄鍋の注部破片の可能性がある。F 118は比較的大型品で、厚みは一定しない。

第66図はⅢ、Ⅳ層から出土した鉄製品である。F 123、124は鎌と考えられる。F 123は基部が1cmほど小さく折り返されている。F 124は基部幅が3.2cmで、刃部側は僅かに狭くなる。F 122、125は釘、または鎌の可能性がある。F 122はL字に折れ曲がっており、横断面形は方形である。

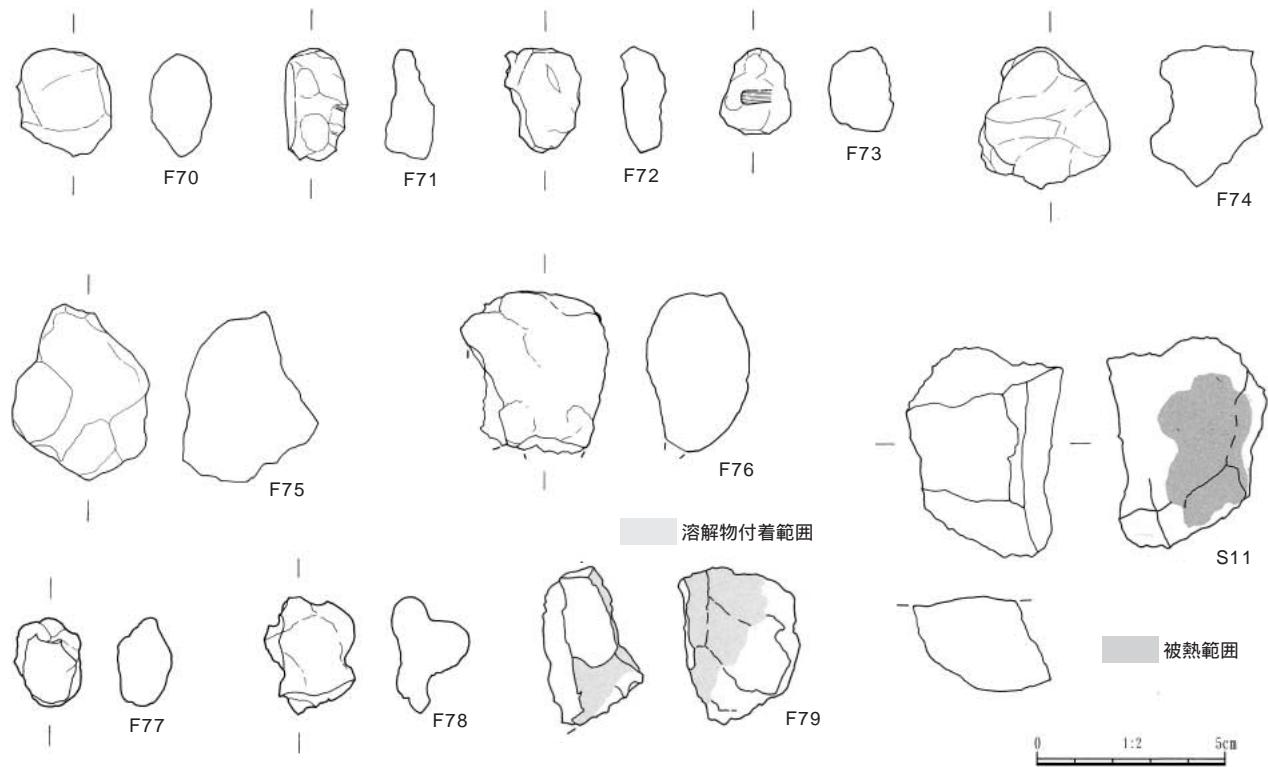


第61図 層出土鍛冶関連遺物(1)

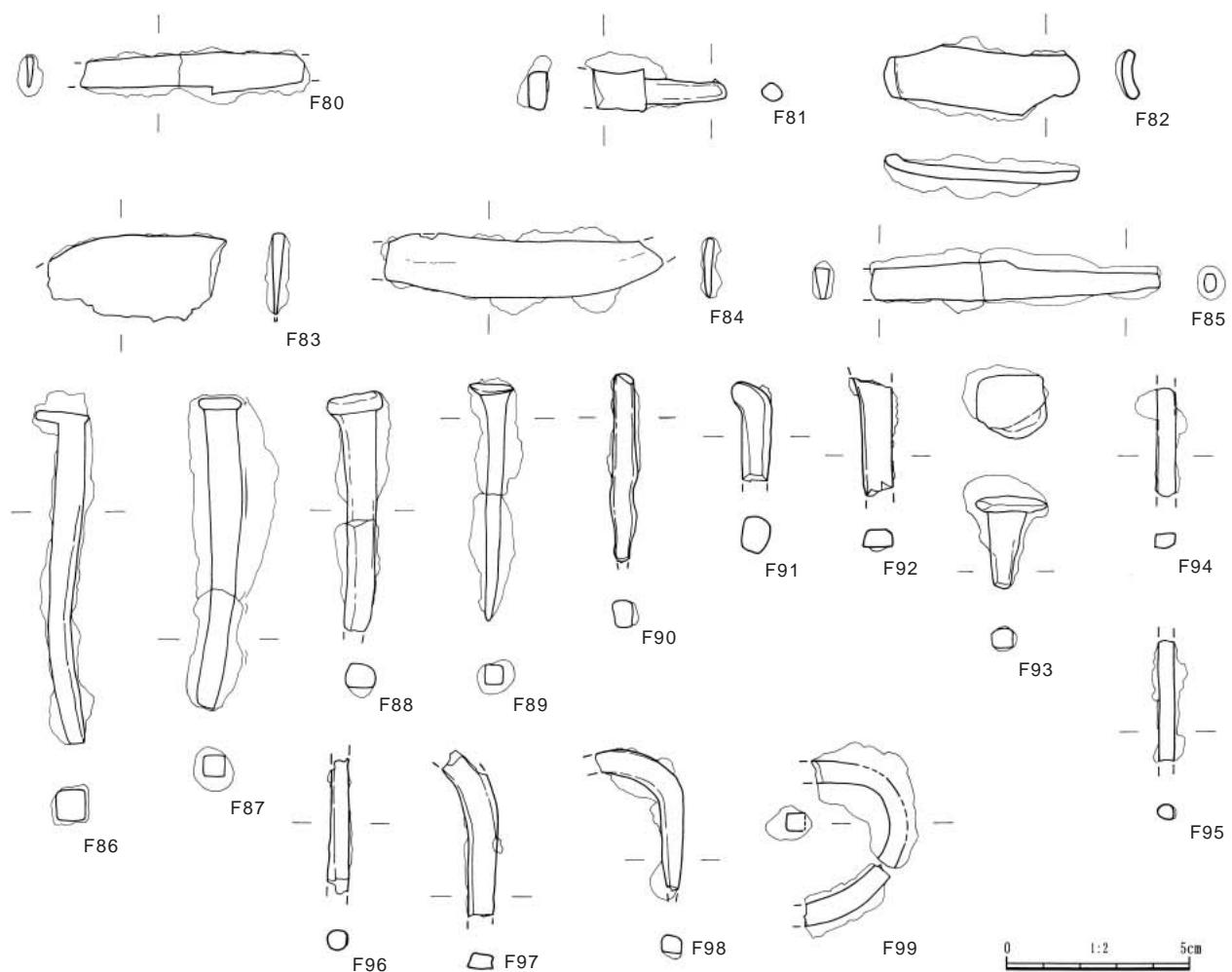
第3節 古代・中世の調査



第62図 層出土鍛冶関連遺物(2)

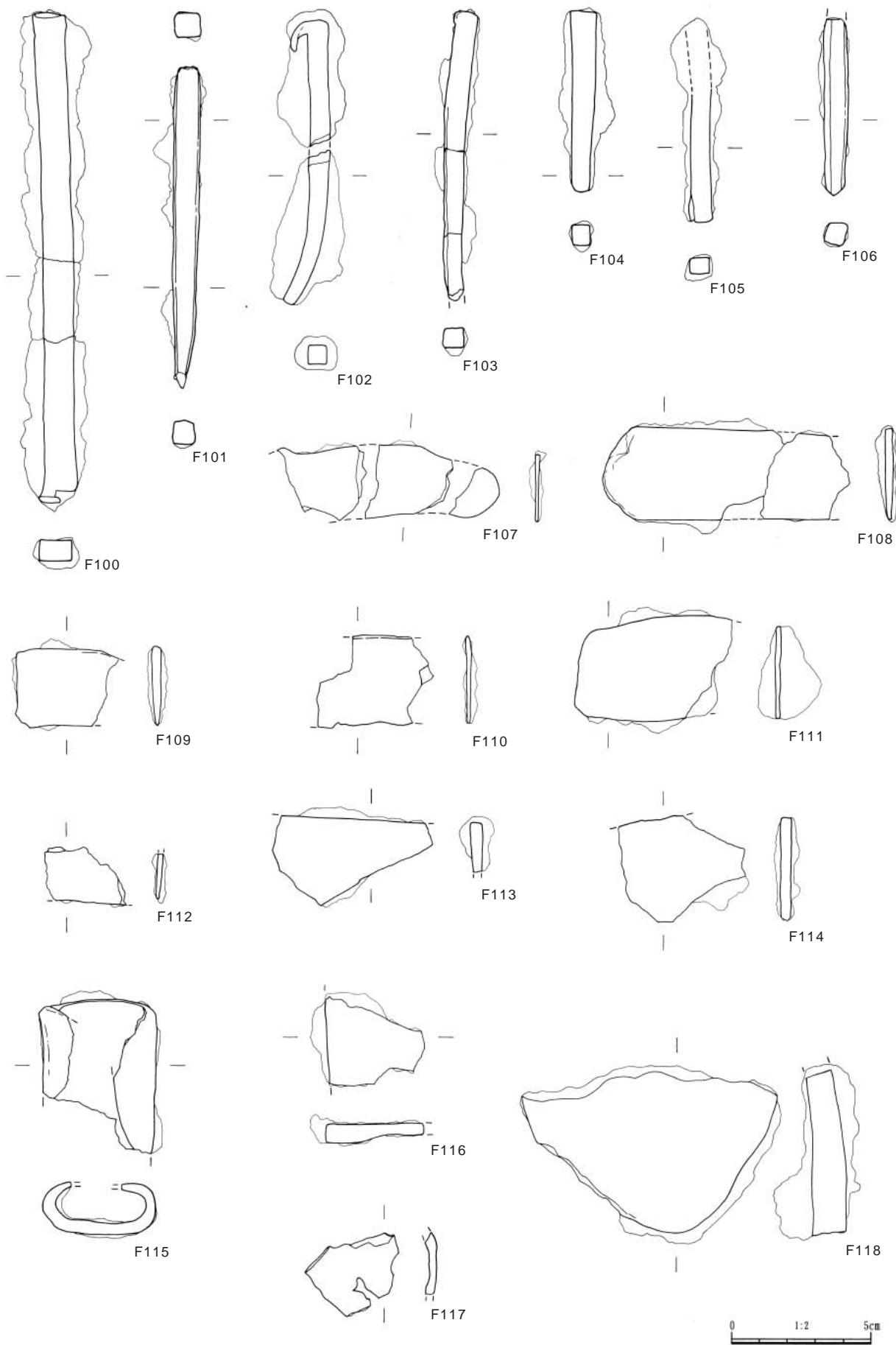


第63図 層出土鍛冶関連遺物(3)

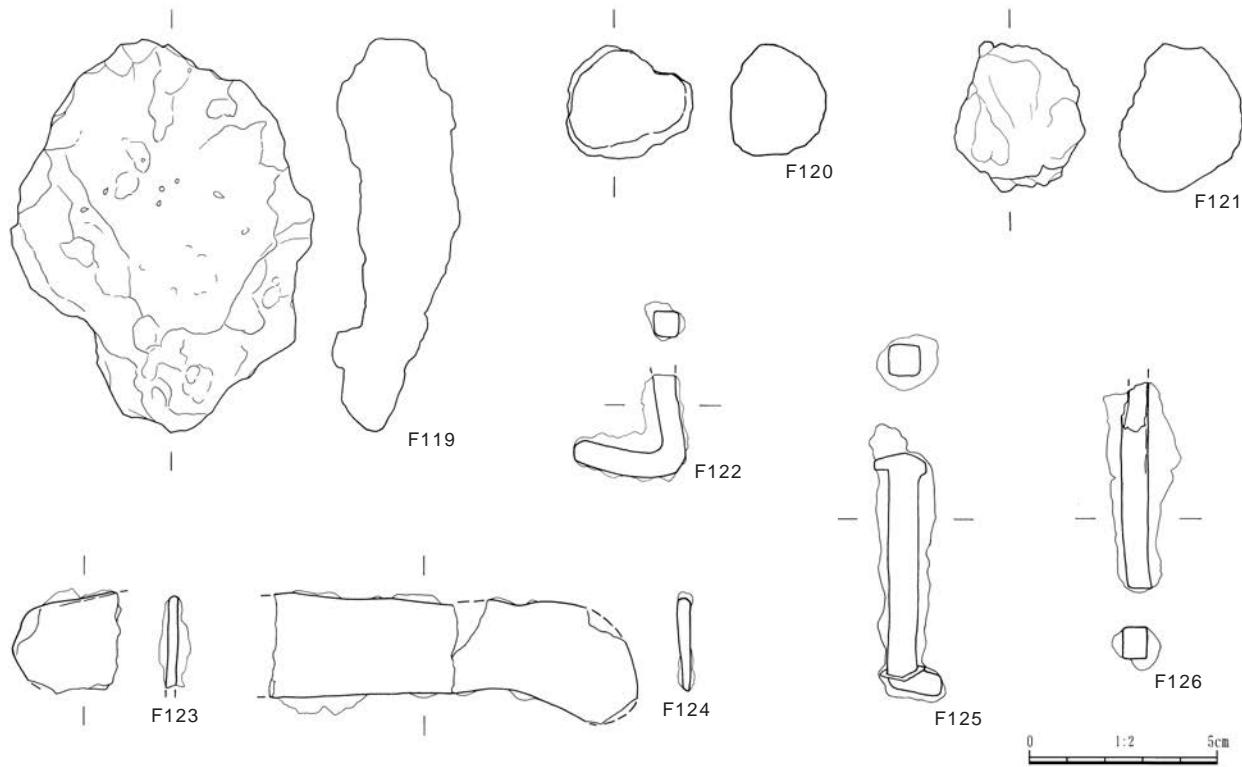


第64図 層出土鉄製品(1)

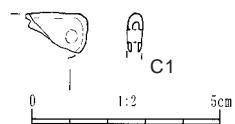
第3節 古代・中世の調査



第65図 層出土鉄製品(2)



第66図 層出土鉄関連遺物



第67図 青銅製品

第61~67図 鉄関連遺物観察表

遺跡名	遺物番号	構成番号	図版番号	出土遺構層	遺物名	計測表(cm)			重量(g)	磁着度	メタル度	備考
						長さ	幅	厚さ				
坂 長 村 上 遺 跡 ・ 坂 長 道 端 中 遺 跡	F 1	1	35	Q22 SII 床直	楕形鍛治滓 (極小・含鉄)	4.7	2.6	2.15	25	2	錆化 (△)	酸化土砂に覆われた極小の楕形鍛治滓片。楕形鍛治滓の肩部破片で、左側部が破面となる。含鉄部は上面下手寄りの芯部。
	F 2	2	35	Q22・23 SII 貼床内	楕形鍛治滓 (極小・含鉄)	4.8	3.7	2.8	56	3	錆化 (△)	薄い酸化土砂に覆われた極小の楕形鍛治滓片。左側部と上手側が破面となる。上面が平坦気味で、下面は左右が突出して中央部が窪む。含鉄部は下面の突出部中心とする。
	F 3	6	35	Q22 SII 床直	流動滓 (製錬系)	4.6	2.2	1.9	27	1	なし	上面が平滑な流動状となった流動滓破片。上面が生きており、側面4面が破面となる。滓は重層して、気孔が部分的に発達する。下面には明褐色のスコリアが点々と固着する。製錬滓と考えられる。
	F 4	8	35	Q22 SII 検出面	楕形鍛治滓 (極小・含鉄)	5.3	3.3	1.95	44	4	H (○)	極小の楕形鍛治滓の中核部から肩部にかけての破片。左右の側部と上手側が小破面となる。滓は扁平で前者と似る。含鉄部は下手側の中核部が主体。
	F 5	7	35	Q23 SII 検出面	楕形鍛治滓 (極小)	7.5	5.6	1.85	115	2	なし	肩部に小破面を残す極小の楕形鍛治滓片。破面は左右の肩部のみ。上面はゆるやかに窪み、1cm大以下の木炭痕が残る。下面は短軸方向に長手の楕形となる。灰色に被熱した鍛冶炉の炉床土がわずかに固着する。滓質は比較的緻密。
	F 6	9	35	Q22 SII 下層	鍛治滓 (含鉄)	2.8	2.1	1.7	11	1	錆化 (△)	酸化土砂に覆われた小塊状の鍛治滓。含鉄部は下面の表皮ぞい。
	F 7	10	35	Q23 SII 下層	鍛治滓 (含鉄)	3.35	2.95	1.8	21	3	錆化 (△)	小塊状の含鉄の鍛治滓。前者よりやや比重が高く、下面下手側に滓表面が突出する。含鉄部は下面、表皮寄り。酸化土砂のため表面状態が分かりにくい。
	F 8	11	35	Q22 SII 上層	鍛治滓 (含鉄)	3.2	2.5	2.3	27	3	H (○)	小塊状でやや丸みを持った含鉄の鍛治滓。上面はわずかに盛り上がり、側部は立ち上がりが急。表面には細い木炭痕あり。含鉄部は中核部下半に広い。
	F 9	5	36	Q23 SII 壁溝内	鉄製品 (鍛造品) 鎌?	10.2	0.8	0.35	14	4	M (○)	2片に割れている細身の鉄鎌状不明品。透過X線像で見ると茎部が欠落するものの、造りは、細身の鉄鎌状。構成No.24と似る。横断面形はやや長方形。
	F 10	24	36	Q23 SII 下層	鉄製品 (鍛造品) 鎌	11.5	0.8	0.35	18	2	錆化 (△)	茎部の先端部を欠く細身の鉄鎌。下手側には両側に小さな闊が確認され、刃部先端はわずかに広がりを持つ程度で収束する。構成No.5と極めて近い形状を持つ。透過X線像には酸化土砂中に錆化した環状の絞具と考えられる部分が1mm角の斑点状となっている。部位は下手側から1.2cm入ったあたり。

第3節 古代・中世の調査

第61~67図 鉄関連遺物観察表

遺跡名	遺物番号	構成番号	図版番号	出土遺構層位	遺物名	計測表(cm)			重量(g)	磁着度	メタル度	備考
						長さ	幅	厚さ				
坂 長 村 上 遺 跡 ・ 坂 長 道 端 中 遺 跡	F11	23	36	Q22 SI1 検出面	鉄製品 (鍛造品) 鎌	9.3	1.1	0.5	11	4	銹化 (△)	2片に割れている細身の鉄鎌。上手側の端部には片刃となる先端部が確認される。長さは約3cmで片側のみに刃が認められる。体部は細身で横断面形は方形。下手側が小さな破面となっており、茎部は確認されない。
	F12	14	36	Q23 SI1 検出面	鉄製品 (鍛造品) 鎌	3.0	0.6	0.4	3	3	銹化 (△)	細身の鉄鎌の体部から刃部にかけての小破片。下手側は破面で、やや長方形の断面が露出する。刃部は徐々に広がる形の細身のもの。
	F13	4	36	Q22 SI1 床直	鉄製品 (鍛造品) 鎌?	6.1	0.5	0.4	4	2	銹化 (△)	2片に割れている鉄鎌状の不明品。透過X線像で見ると、下手側が鉄鎌の茎部状となる。細身で体部の長い鉄鎌か。
	F14	12	36	Q23 SI1 検出面	鉄製品 (鍛造品) 鎌	6.05	0.75	0.45	8	2	銹化 (△)	細身の鉄鎌破片。横断面形はほぼ方形で、透過X線像には鎌の茎部から体部にかけてが確認される。下手寄りの1.7cmほど入った部分に幅1.5mmほどの細かい環状の絞具あり。刃部は欠落する。
	F15	18	36	Q22 SI1 下層	鉄製品 (鍛造品) 鎌	3.35	0.8	5.5	5	3	銹化 (△)	細身の鉄鎌破片。酸化土砂が厚く、両端部が破面となる。不明瞭ながら5.5mmの径を持つ方形の断面像が確認される。中央部付近の左右に突出部を持ち、構成No.12と同じ細身の鉄鎌の茎部から体部にかけての破片と推定される。中間の突出部は幅2mm前後の環状の絞具か。
	F16	15	36	Q23 SI1 上層	鉄製品 (鍛造品) 釘	2.5	0.6	0.3	1	1	銹化 (△)	酸化土砂に覆われた短い棒状不明品。透過X線像にはわずかに頭部を造り出している小釘が、S字形にうねった形で確認される。頭部は折り曲げ気味。
	F17	20	36	Q22 SI1 検出面	鉄製品 (鍛造品) 釘?	2.9	1.3	0.7	5	3	銹化 (△)	上手側の端部が4mmほど左側に折れ曲がった釘状の鉄製品破片。頭折れ釘の可能性も残るが、頭部の上面が銷ぶくれから欠落しており、やや不明瞭となる。透過X線像には銷ぶくれが別破片として写し込まれている。側部側の端部も破面となる。
	F18	21	36	Q22 SI1 検出面	鉄製品 (鍛造品) 釘	4.6	1.5	0.7	11	3	銹化 (△)	頭部が左側に張り出した短い頭折れ釘。側部も健全で完形品。体部の長さに比べて頭部の張り出しが大きく、飾り釘状でもある。横断面は頭部に向かい長方形となっている。
	F19	22	36	Q22 SI1 下層	鉄製品 (鍛造品) 釘?	6.1	0.4	0.35	8	2	銹化 (△)	頭折れ釘状の細身の鉄製品。上手側の端部は幅1.1cmほどの薄板状に加工されており、体部から足部にかけては方形の断面形を示す。頭部が折り曲げられないまま、または、開いてしまった釘の可能性が強い。足部先端は小さく欠ける。
	F20	17	36	Q22 SI1 検出面	鉄製品 (鍛造品) 釘または楔	2.7	0.85	0.55	3	3	銹化 (△)	やや扁平な横断面形を持つ小さな楔状の棒状不明品。透過X線像には、頭部に向かって徐々に広がる小さな楔状の鉄部が確認される。下手側の端部は足部状で、小さな破面となる。体部の横断面形は長方形。
	F21	19	36	Q22 SI1 検出面	鉄製品 (鍛造品) 棒状不明品	2.65	1.65	0.7	6	3	H (○)	逆「く」の字状に折れ曲がった棒状不明品。両端部が破面となっており、外周部には酸化土砂がやや厚い。鉄部は方形の断面形の可能性が強いが不明瞭。かなり急激に折り曲げられている。
	F22	3	36	Q22 SI1 床直	鉄製品 (鍛造品) 棒状不明品	3.2	0.5	0.45	5	1	銹化 (△)	方形の断面形を持つ棒状不明品。両端部が破面となる。径は4.5mm大。
	F23	13	36	Q22 SI1 下層	鉄製品 (鍛造品) 棒状不明品	4.3	0.7	0.5	5	3	銹化 (△)	細身の棒状不明品。上手側には破面が露出しており、ほぼ方形断面となっている。幅は5.5mm。透過X線像で見る限り前者の茎部と近い。
	F24	16	36	Q23 SI1-P4	鉄製品 (鍛造品) 棒状不明品	3.35	0.5	0.5	3	2	銹化 (△)	細身の棒状不明品。両端部が破面となっており、製品名は不明。下手側に露出する断面形はほぼ方形で、5mmを測る。
	F25	28	36	Q22 SI1 検出面	鉄製品 (鍛造品) 環状鉄製品	2.8	0.8	0.5	12	4	銹化 (△)	幅8mmほどの環状鉄製品。ほぼ完形で内側には不整梢円形をした中空部が確認される。鉄部の身厚は残りの良い部分で約5mmを測る。中空部分は、1.45×1.7cmの不整梢円形。鎌あるいは工具の柄に伴う絞具か。
	F26	29	36	Q23 SI1 検出面	鉄製品 (鍛造品)「コ」 の字状不明品	7.2	7.4	0.8	107	3	銹化 (△)	「コ」の字状に折り曲げられた鉄製品。左側に突出する2方の端部は生きている可能性あり。身幅が8mmから6.5mmほどの、方形から長方形の断面形を持つ。内側には高さ5cm強の四角い空間が形成されることになる。外観的には、瘤状の酸化土砂が激しく非常に分かりにくいくものの、透過X線像にはきれいに成形された「コ」の字状の鉄部が写っている。端部が足部とすれば、わずかに細くなる。また、右側の背側は打撃によるためか、鍛造痕がやや乱れてしまっている。こちらから打ち込まれるような特殊な楔状の用途を持つものかもしれない。
	F27	26	36	Q22 SI1 検出面	鉄製品 (鍛造品) 刀子	3.65	1.6	0.35	8	2	銹化 (△)	左右の端部が破面となった刀子破片。左側から5mm入ったところに刃が確認される。刀子としては茎部の半次品。目釘穴や外装は残されていない。構成No.25と同一個体の可能性も残されている。
	F28	25	36	Q23 SI1 検出面	鉄製品 (鍛造品) 刀子?	4.2	0.8	0.3	7	2	H (○)	酸化土砂に覆われた棒状不明品。上手側は扁平で、一見、鎌の先端部のようにも見えるが、身幅は7mmと広く、むしろ刀子かもしれない。両端部が破面の可能性が大。
	F29	27	36	Q22 SI1 上層	鉄製品 (鍛造品) 鎌?	9.9	1.2	0.25	19	3	銹化 (△)	左右の側部が破面となったヘラ状の鉄製品。断面形は刀子に似るが、背側が丸みを持つ弧状となっており、鎌の背側破片の可能性を持つ。透過X線像では刀部と推定される下手側がギザギザした破面となっており、完形品でないことを示している。表面には酸化土砂が厚い。
	63	30	35	Q22 SI1 上層	土壁片 (被熱・吸炭)	2.95	2.8	1.95	10	1	なし	吸炭した被熱土塊。上面には短軸方向に2条、スマキ状の植物痕が並走しており、土壁の表面破片の可能性を持つ。周辺に土壁建物があったためか。
	F30	31	39	R29 SI2 埋土中	楕円形鍛冶滓 (小)	6.5	4.95	3.55	131	1	なし	側面3面が破面となった小型の楕円形鍛冶滓破片。上面は生きており、木炭痕がやや目立つ。下面は上手側に向かい立ち上がりが急な楕形で、灰色に被熱した鍛冶炉の炉床土が面的に貼り付いている。滓質は緻密。
	F31	32	39	R29 SI2 埋土中	楕円形鍛冶滓 (極小・含鉄)	3.8	3.1	1.7	24	2	銹化 (△)	平面、不整三角形をした極小の鍛冶滓の肩部破片。上下面と側面2面が生きており、左側部が破面となる。上面はゆるやかな波状で、下面是粉炭痕を残す楕形となる。含鉄部は中核部。

第5章 坂長村上遺跡・坂長道端中遺跡

第61~67図 鉄関連遺物観察表

遺跡名	遺物番号	構成番号	図版番号	出土遺構層位	遺物名	計測表(cm)			重量(g)	磁着度	メタル度	備考
						長さ	幅	厚さ				
坂 長 村 上 遺 跡	F32	33	39	R29 SI2 埋土中	鉄製品 (鍛造品) L字状不明品	4.1	1.45	0.6	17	2	銹化(△)	下手側が鈎の手状に折れ曲がった鉄製品破片。上手側は破面となっており、径6mmほどの方形の断面形が確認される。何らかの掛け具と推定されるが、酸化土砂が厚く、不亮点が多い。上下逆で頭折れ釘状となるかもしれない。
	F33	34	39	R29 SI2 埋土中	鉄製品 (鍛造品) 袋状鉄斧	9.7	5.0	0.4	297	3	特L(☆)	酸化土砂に覆われたほぼ完形の袋状鉄斧。刃部側が特に厚い瘤状の酸化土砂に覆われている。鉄斧としての長さは、9.7cm前後。袋部側の幅は3.7cmを測る。体部半ばから刃部にかけてが広がっており、刃部の最大幅は5cmとなる。袋部の合わせ目は最も狭いところで2mmほど開いている。袋部の横断面形は箱形で、側部は直線状になる。酸化土砂のため厚み方向は厳密な数値とはならないが、およそ1.5cmを測る。刃部の平面形はゆるやかな弧状。特に片減りはない。袋部から刃部に欠けては緩やかに反っている。
	F34	35	39	R29 SI2 埋土中	鉄製品 (鍛造品) U字状鋸先	21.2	18.1	2.1	597	2	銹化(△)	大型の鉄製鋸先。刃部から茎部までが生きており、実測図の上面となる片側の柵部分が幅10cmほどの範囲で欠落して小破面となっている。刃部の先端は使用による摩耗のためか、先端左寄りがゆるやかな弧状となる。内側の形状が本来の形状を持つと仮定すれば、最も広い所で刃部の身幅は6.2cmを測り、刃部の中央部付近では現状は5.5cmと狭くなっている。このため、先端部が7mmの幅で、つかい減りしている可能性がある。また、左右均等に形成されていたとすれば、やや片減りしていることになる。柵は基部まで延びており、最も深いところで2.5cmを測る。刃部の横断面形は酸化土砂ではつきりせず、柵部分のみが整で左右に押し広げられたものであろう。左右の側部が水平方向にややずれているのは、右側の錆ぶくれによる影響かもしれない。
	S9	37	40	R29 SI2 埋土中	被熱石	18.1	19.75	12.0	4400	1	なし	前者と同様、全体に被熱して隅の部分の風化が進んだ被熱石の中核部。隅丸の転石で短軸側の肩部から側部、さらに右側の肩部が風化により表面が剥離している。前者と同一の被熱状態や石質ながら接合せず。
	S10	36	40	R29 SI2 埋土中	被熱石	7.2	6.9	4.2	205	1	なし	被熱石の表面破片。右側部に自然面を持ち、全体に弱い被熱をしている。自然面以外は全面破面。石質や被熱状態から見て構成No.37と同一個体と推定されるが接合せず。金床石のような打痕や鍛造剥片の付着は確認されない。石質は安山岩系。
	F35	38	42	R26 SB1-P3 掘方埋土	楕円鍛治溝(小)	4.05	5.4	2.65	80	1	なし	小型の楕円鍛治溝の側部破片。上手側の側部から左側部が破面となる。上下面が平坦気味で下面の中央部には、わずかに炉底土が確認される。溝質は緻密で、下部の気孔が発達する。
	F36	39	42	R26 SB1-P3 掘方埋土	鍛治溝	3.0	6.05	1.15	7	2	なし	小ぶりながら完形の鍛治溝。全体に扁平で、下面の2ヶ所が瘤状に突出する。上面はわずかに平坦気味。
	F37	40	42	R26 SB1-P3 掘方埋土	鍛治溝(含鉄)	1.9	2.05	1.1	5	2	銹化(△)	扁平な鍛治溝破片。一見、酸化土砂に覆われた鉄片状。はっきりとした破面は確認されないが、側面の2方が破面の可能性を持つ。
	F38	41	42	R26 SB1-P2 掘方埋土	含鉄鍛治溝	2.9	2.5	1.75	2	3	H(○)	側面に層状の錆ぶくれが確認される、やや丸みを持った含鉄鍛治溝。上面下手側は酸化土砂が脱落して、地の酸化部分が露出する。全体に丸みを持っており、放射割れも生じている。
	F39	42	42	R26 SB1-P8 掘方埋土	羽口(鍛冶)	3.8	3.6	2.1	23	1	なし	鍛治羽口の先端部小破片。外側は溶接して8割方が黒色のガラス質溝に覆われており、下面には通風孔部の壁面が小範囲ながら認められる。側面は先端側を除いて破面となる。胎土はスサや石英質石粒を混じえる粘土質。羽口正面から見て左側部破片。
坂 長 道 端 中 遺 跡	F40	43	42	R26 SB1-P3 掘方埋土	鉄製(鍛造品) 釘?	4.2	0.35	0.45	2	3	銹化(△)	頭部を欠いた釘状の鉄製品。足部側の端部も小さく欠けている。横断面形は方形で、丁寧な作り。
	F41	49	46	Q23 SK1 埋土中	楕円鍛治溝(極小)	3.0	2.2	1.75	13	2	なし	極小の楕円鍛治溝の側部破片。1.6cmほどの薄手で、左右の側部と下手側が破面となっている。上面はわずかに瘤み下面は楕円となる。
	F42	50	46	Q23 SK1 埋土中	鍛治溝(含鉄)	2.65	2.1	1.7	13	2	銹化(△)	わずかに磁着する含鉄の鍛治溝片。上手側が丸みを持っており、下手側の側部が破面となる。含鉄部は中核部。
	F43	47	48	R25 P1 埋土中	鉄製品(鍛造品) 刀子	5.9	1.1	0.5	9	4	銹化(△)	右側半分が茎部となる刀子破片。上手側に丸みを持ち、刃部の途中で折れている。茎部の長さは3.4cm。刀子自体の身幅は1cm前後で、やや研ぎ減りしている可能性が強い。
	F44	48	48	Q23 P13 埋土中	楕円鍛治溝(極小)	2.65	1.95	1.95	12	1	なし	極小の楕円鍛治溝の小破片。上下面是生きており、側面3面が破面となる。下手側の側部が生きており、立ち上がりが急。他の面は酸化土砂に覆われて、表面状態が不明となる。
	F45	51	61	R27 II層	流動溝(製鍊系)	4.9	4.9	3.8	143	1	なし	上面がきれいな流動状となった流動溝破片。側面は全面破面で溝は緻密。下面にはスサ混じりの還元色の炉壁片を嗜み込んでおり、製鍊系の流動溝であることを窺わせる。流动性が良いためか、気孔はほとんど認められない。溝表皮は暗紫紅色。
	F46	52	61	Q23 II層	流動溝(製鍊系)	5.35	5.6	2.8	105	1	なし	下面の下手側が極端に突出した流動溝破片。側面はシャープな破面が連続し、結晶が発達してキラキラと輝いている。上面は不規則な波状で、褐色に被熱した炉壁粉が散っている。下面上手側は薄くなつて横方向に延びており、極端な部分には大量の炉壁粉が固着する。流出孔溝の可能性もあり。
	F47	53	61	R28 II層	流動溝(製鍊系)	4.1	4.0	3.15	78	1	なし	上下面が平坦気味の流動溝破片。側面はシャープな破面が開まれており溝は緻密。結晶の発達が窺える。上面はわずかに流動気味で、下面は炉壁粉やスコリアが貼り付いている。
	F48	54	61	P23 II層	流動溝(製鍊系)	5.4	5.65	3.4	140	1	なし	破面が二段の極端な極端な流動溝破片。側面はシャープな破面が連続し、結晶が発達してキラキラと輝いている。上面は皿状に瘤み、炉底塊の側部または流出孔溝の可能性を持つている。結晶は冷却速度が極めて遅かったことを示し、製鍊系の炉内溝の一種かもしれない。下面には転々とスサ入りの炉壁粉が固着する。
	F49	55	61	R27 II層	流動溝(製鍊系)	7.3	3.8	5.4	221	1	なし	5cm程の厚みを持った流動溝の中核部破片。側部にはシャープな破面が取り巻いており、結晶が発達している。上面は皿状に瘤み、炉底塊の側部または流出孔溝の可能性を持つている。結晶は冷却速度が極めて遅かったことを示し、製鍊系の炉内溝の一種かもしれない。下面には転々とスサ入りの炉壁粉が固着する。
	F50	56	61	R28 II層	楕円鍛治溝(大)	9.1	10.8	3.0	409	3	なし	短軸側の両側部が破面となった扁平で大型の楕円鍛治溝破片。肩部は木炭痕のためわずかに凹凸を持つ。上面は木炭痕の残る平坦面で、下面是さらに突出する。表面には1.5cm大の木炭痕が比較的密。溝質は上面表皮沿いを除き密度が高い。楕円鍛治溝としては中核部破片。

第3節 古代・中世の調査

第61~67図 鉄関連遺物観察表

遺跡名	遺物番号	構成番号	図版番号	出土遺構位	遺物名	計測表(cm)			重量(g)	磁着度	メタル度	備考
						長さ	幅	厚さ				
坂 長 村 上 遺 跡 ・ 坂 長 道 端 中 遺 跡	F51	57	61	Q28 II層	楕形鍛治滓 (大・含鉄)	6.35	6.05	5.8	352	3	L (●)	表面が酸化土砂に覆われた厚みを持った大型の楕形鍛治滓、または炉内滓破片。上下面と上手側の側部は生きており、側面3面が破面となる。内2面はゆるやかな平坦面で、下面は楕形の一部をなす。上手側の側部は立ち上がりが急となり、表面には木炭痕を残す。含鉄部は上面表皮沿いで、酸化土砂中にも放射割れが走る。厚み自体は構成No.59と比較的近い条件を持つ。ただし、楕形鍛治滓かどうかは、はつきりしない。端部に露出する滓の結晶が発達するのは炉内滓。
	F52	59	61	R29 II層	楕形鍛治滓 (中・含鉄)	5.1	5.9	4.8	183	4	H (○)	4cmを超える厚みを持った中型の楕形鍛治滓の側部破片。上下面と側面上手側が生きており、残る3面の側面が破面となる。上面は木炭痕の残る皿状。下面是楕形で6割以上の範囲に鍛冶炉の炉床土が貼り付いている。厚み的には構成No.57と近い。
	F53	58	61	Q26 II層	楕形鍛治滓 (中・含鉄)	6.5	7.6	3.8	280	2	錆化 (△)	密度の高い津質を持つ中型の楕形鍛治滓の中核部から側部破片。上下面と右側部のみが生きており、側部3面がシャープな破面となる。上面は1cm大前後の木炭痕が目立ち、やや凹凸が激しい。下面是鍛冶炉の炉床土に完全に接しており、灰色に被熱した炉床土が全体に確認される。炉床土のひび割れを映した放射状の筋も認められる。破面の一部は結晶が発達する。
	F54	61	61	R24 II層	楕形鍛治滓 (小)	3.85	5.6	2.35	72	1	なし	上手側の側面がシャープな破面となった小型の楕形鍛治滓。それ以外は表面がすべて生きている。上面肩部が二段気味で、上層は羽口由来の粘土質滓となる。側面から下面は短軸方向に延びる樋状で、全体に薄く鍛冶炉の炉床土が貼り付いている。津質は緻密でほとんど気孔がなく、小型の滓の割には結晶が発達する。
	F55	60	62	II層	楕形鍛治滓 (中・含鉄)	9.6	8.0	3.9	379	3	L (●)	平面・長楕円形をしたほぼ完形の中型の楕形鍛治滓。上面は中央部に向かい皿状に窪み、平滑な流动滓となっている。表皮は紫紅色。上手側には別單位の4cm×2.5cm大の滓が乗っており、やや磁着が強い。側面から下面は強い楕形で、下面全面に粉炭痕と鍛冶炉の炉床土の圧痕が残されている。下手側の肩部に小破面あり。
	F56	64	62	II層	楕形鍛治滓 (小・含鉄)	6.8	7.35	2.45	160	3	M (○)	ほぼ完形の小型の楕形鍛治滓。左側部と下手側が直線状で、残る側部が不規則な弧状となる。上面の中央部が窪み、下面是楕形で、鍛冶炉の炉床土の剥離痕と粉炭痕が共存する。含鉄部は上面表皮沿いに広い。左側部が直線状となるのは、鍛冶具による変形か。
	F57	62	62	II層	楕形鍛治滓 (小・含鉄)	5.7	6.1	3.35	140	3	錆化 (△)	錆色の酸化物に表面を覆われた小型の楕形鍛治滓。肩部2面のみが破面で他は生きている。厚みを持ちながらもまとまったきれいな楕形となる。津質はやや密度が低く、微細な気孔が散る。含鉄部は上面表皮沿いに広範囲。
	F58	63	62	Q23 II層	楕形鍛治滓 (小・含鉄)	5.05	6.1	2.5	131	5	H (○)	小型の楕形鍛治滓の中核部から側部破片。上下面が生きており、側部のうち2面が破面となる。上面は左右で段をなし、左側が一段低く、木炭痕が密集する。下面是やや不規則な楕形で、鍛冶炉の炉床土の剥離面となる。津質はやや緻密。全体に磁着傾向が強いものの、特に強い部分はない。
	F59	65	62	Q27 II層	楕形鍛治滓 (極小)	3.4	4.5	2.1	43	3	なし	上手側が破面となった極小の楕形鍛治滓。扁平で上面は平坦面となる。肩部は丸みを持ち、下面是右側が徐々に薄くなったり楕形となる。津質は緻密ながら、気孔も散在する。
	F60	66	62	R24 II層	楕形鍛治滓 (小)	4.8	5.3	2.1	59	2	なし	肩部が全周に渡り破面となる小型の楕形鍛治滓。全体に扁平で上面には1cm大以下の木炭痕が目立つ。下面是浅い皿状で炉床土のひび割れに貫入した滓あり。楕形鍛治滓の部位としては、中核部から右寄りの破片。
	F61	67	62	Q23 II層	楕形鍛治滓 (極小・含鉄)	4.9	3.6	2.55	47	4	H (○)	表面の錆色が目立つ極小の楕形鍛治滓片。左側部が小破面で、肩部が木炭痕により変形している。上手側部が徐々に薄くなり、断面形は浅い樋状となる。含鉄部は左下手側の下半部。
	F62	68	62	R28 II層	楕形鍛治滓 (極小・含鉄)	4.35	3.1	1.8	34	3	H (○)	酸化土砂に覆われ、下手側が赤みの強い錆に覆われた極小の楕形鍛治滓。上手側の側部に小破面を持つものの、完形品に近い。側部の立ち上がりが比較的急で、右側に向かい薄くなっている。破面の結晶はやや発達気味。磁着部分が複数確認される。
	F63	69	62	S28 II層	楕形鍛治滓 (極小・含鉄)	3.2	3.0	1.9	31	4	M (○)	酸化土砂に覆われ、小さな放射割れが走る極小の楕形鍛治滓片。左側部から上手側が破面と推定されるがやや不明瞭。上面は平坦気味で、下面の凹凸が激しい。全体に含鉄部が広がっている印象で磁着範囲が広い。
	F64	70	62	Q24 II層	楕形鍛治滓 (極小・含鉄)	4.25	4.2	2.8	65	5	M (○)	上手側の側部に錆ぶくれから発達した瘤状の酸化土砂部分を持つ極小の楕形鍛治滓片。主破面は右側部と下手側。上面はゆるやかな丘状で、下面是比較的きれいな楕形となる。含鉄部は広く、下面沿いの磁着が強い。
	F65	71	62	P23 II層	楕形鍛治滓 (極小・含鉄)	4.05	3.3	2.5	49	2	L (●)	平面、不整三角形をした鉄部主体の楕形鍛治滓。酸化土砂のため表面状態が分かれにくいが、短軸側の両側部は破面の可能性が強い。上下面とも短軸側に肥厚し、横断面形はV字状。含鉄部の主体は下手側の中核部。
	F66	72	62	Q22 II層	楕形鍛治滓 (極小・含鉄)	4.05	4.05	2.2	77	3	特L (☆)	本遺跡唯一の、特L(☆)レベルの含鉄部を持つ極小の楕形鍛治滓。上下面や側面の形状が乱れており、鍛冶作業中に変形した可能性あり。上下面とも短軸側に肥厚し、横断面形はV字状。含鉄部の主体は下手側の中核部。
	F67	73	62	R23 II層	鍛治滓	2.3	1.6	1.0	6	1	なし	指頭大の扁平な鍛治滓。左側部に小破面を持つが比較的完形に近い。上面はわずかに窪み、側部から下面是丸みを持った楕形となる。津質は密度が低く、気孔もやや多い。
	F68	74	62	Q23 II層	鍛治滓	3.1	2.1	2.05	13	2	なし	上面上手側に、羽口由来と推定される粘土質の滓が残る小塊状の鍛治滓。丸みを持つ外観ながら磁着は弱い。破面は上手側のごく小範囲。
	F69	75	62	Q24 II層	鍛治滓 (含鉄)	3.2	2.3	1.7	16	3	錆化 (△)	酸化土砂に覆われた小塊状の鍛治滓。上面は狭い平坦面で、滓は右下に向かい延びている。完形品と推定され、表面には放射割れが入り始めている。
	F70	76	63	S29 II層	鍛治滓 (含鉄)	2.75	2.5	1.6	16	3	錆化 (△)	やや扁平・塊状の鍛治滓。左側部が丸みを持ち、右側に向かいやすくなっている。明瞭な破面は確認されない。含鉄部は上面寄りの中核部か。
	F71	77	63	Q24 II層	鍛治滓 (含鉄)	3.0	1.7	1.25	8	2	H (○)	一見、鉄製品破片に似た薄板状の鍛治滓。完形品で上下面にはわずかに木炭痕が残されている。上面下手側に錆ぶくれがあり、含鉄部を示す。

第5章 坂長村上遺跡・坂長道端中遺跡

第61~67図 鉄関連遺物観察表

遺跡名	遺物番号	構成番号	図版番号	出土遺構層位	遺物名	計測表(cm)			重量(g)	磁着度	メタル度	備考
						長さ	幅	厚さ				
坂長村上遺跡	F72	78	63	R27 II層	鍛治滓(含鉄)	2.75	2.0	1.2	8	2	H(O)	外周部に鍛治滓の小片や様々な形態の鍛造剥片が再結合した鍛治滓。やや扁平で滓表面がほとんど露出せず、表面は赤みの強い酸化土砂に覆われている。磁着は鍛造剥片が加わり下面沿いが強い。
	F73	79	63	R25 II層	鍛治滓(含鉄)	2.25	1.9	1.65	11	2	M(O)	下面に鏽ぶくれの突出部を持つ含鉄の鍛治滓。全体に丸みを持っており、表面には赤褐色の錆色と細かい放射割れが確認される。鉄塊系遺物の錆化が進んだ個体の可能性もあり。磁着したまま持ち上げられる。
	F74	80	63	Q22 II層	含鉄鍛滓	3.75	3.4	2.7	47	3	M(O)	酸化土砂が目立ち、各面とも不規則な凹凸のある含鉄鍛滓。鉄部と滓部の混在物と推定され、鍛治系とは言い切れないため、含鉄鍛滓とした。表面状態は破面と自然面が混在する。
	F75	81	63	R25 II層	含鉄鍛滓	4.5	3.6	3.35	57	2	M(O)	全体に凹凸が生じ、酸化土砂も広がる含鉄鍛滓。破面と自然面が混在する外観を呈するが、土砂のため破面自体を確定できない。端部の各所が突出するのは含鉄部による。
	F76	82	63	R28 II層	含鉄鍛滓	4.2	3.85	2.7	55	3	L(●)	表面の酸化土砂に黄褐色の錆色や放射割れが走る含鉄鍛滓。厚板状で左側部は明らかに破面となる。下手側の側部も破面の可能性あり。全体形状は極小で含鉄の椀形鍛治滓様。含鉄部は点在するものの、左下手側の上半部が主体。この部分のみ黒錆が吹いている。
	F77	83	63	P24 II層	鉄塊系遺物	2.3	1.75	1.4	9	4	H(O)	小塊状で丸みを持った鉄塊系遺物。側部に放射割れが巡り、上下で鏽ぶくれから分解しきしている。側面から下面は立ち上がりの急な椀形となる。磁着が強く、表皮のみが滓部と推定される。
	F78	84	63	P24 II層	鉄塊系遺物	3.1	2.4	1.95	21	2	L(●)	側面から下面に不規則な突出部を持つ鉄塊系遺物。磁着が強く、外周部は錆化した鉄部と酸化土砂となっている。上面は平坦気味で、鍛治鉄塊系遺物か。
	F79	85	63	R29 II層	羽口(鍛冶)	3.15	2.55	3.0	23	1	なし	鍛治羽口の先端部小破片。側面2面が破面で、通風孔部側が欠け落ちている。右側部を中心で表皮が黒褐色に漬化しており、下手側の下面には顎部からの垂れが突出する。胎土は粗い石英質の砂粒主体のざっくりとしたもの。
	S11	86	63	II層	被熱石	5.3	3.9	2.5	59	1	なし	全体に被熱して、くすんだ赤褐色となる被熱石の表面破片。側部3面が使用時の破面で、左側部と下面が母体となった石材からの剥離面となる。石材は安山岩系か。金床石の可能性があるものとして構成されているが、鍛造剥片等の付着は認められない。
	F80	87	64	R29 II層	鉄製品(鍛造品)刀子"	6.1	1.1	0.15	8	4	H(O)	2片に割れている刀子の茎部から刃部に欠けての破片。片側で鍛造痕はきれいに延びている。刃部先端側と茎部の端部は破面となる。刃部は錆化が進み荒れている。
	F81	88	64	P23 II層	鉄製品(鍛造品)鎌または刀子	3.6	1.15	0.5	6	2	錆化(△)	刃部側を欠く鎌、または刀子状の鉄製品破片。茎部が2.15cmと短く、その先に環状の絞具が装着されている可能性あり。片側のように見えるが、やや不明瞭。刃部が先端部に向かい広がっており、通常の刀子状ではない。また、茎部の短さから見てもやや特異である。鎌の一種であろうか。
	F82	90	64	R27 II層	鉄製品(鍛造品)刀子または鎌	5.3	2.0	0.3	12	5	錆化(△)	右側の端部が上方に小さく折れ曲がっている刀子または鎌破片。短軸側の両側部が生きており、左側の端部は破面となる。側部が緩やかにうねり、鍛造痕にも同様の歪みが確認されることから、何らかの起こしら様。短軸側の厚みがあり、均一であることもこうした情報を補強する。
	F83	89	64	Q23 II層	鉄製品(鍛造品)鎌または刀子	4.8	2.35	0.3	10	4	錆化(△)	錆化の進んだ鎌または刀子の刃部破片。左端部寄りの背側の弧状が強くなつており、先端部寄りの破片と推定される。鎌と仮定すれば、透過X線像からは刃部そのものが欠けている可能性が強い。
	F84	91	64	S28 II層	鉄製品(鍛造品)刀子または?	7.55	1.75	0.25	16	3	錆化(△)	先端部と茎部の端部が欠けている刀子または?破片。閑部分ははっきりせず、全体に錆化が進む。背側が直線状なのに対して刃部側は緩やかにうねっている。また、断面形が中高の片刃状で?の刃先に近い形상을示す。全体に長軸方向に向かい緩やかに反る。
	F85	92	64	R27 II層	鉄製品(鍛造品)刀子	7.85	1.1	0.4	14	2	錆化(△)	先端部の欠落した刀子の刃部から茎部にかけての破片。茎部の長さは4.9cmを測り、背側にやや甘い闊を持つ。刃部は刃こぼれ状の乱れがあり、錆化も進んでいる。鍛造痕はやや乱れており、造りとしてはやや粗い。
	F86	99	64	Q24 II層	鉄製品(鍛造品)釘	9.1	1.45	0.85	27	3	H(O)	体部半ばから二つに折れているやや大振りの頭折れ釘。長さは9.1cm、頭部の厚みは2.5mm程度で、体部から6mmほど左側に突出した平頭となる。体部は半ばで「く」の字状に折れ曲がっている。足部先端が小さく欠けているように見えるが不明瞭。
	F87	111	65	R29 II層	鉄製品(鍛造品)釘	8.6	1.65	0.6	32	2	錆化(△)	頭部が確認できる頭折れ釘の破片。二つに割れており、足部先端も生きている可能性が強い。体部の幅は9mm前後と太めで、3mm程の薄い厚みを持つ頭部を造り出している。横方向への張り出しは1~1.5mm程度と僅か。平頭で体部の横断面形は方形気味。
	F88	98	65	R28 II層	鉄製品(鍛造品)釘	6.55	1.5	0.6	16	2	錆化(△)	足部の先端を小さく欠く頭折れ釘。頭部が比較的大きめで厚みも3mm近く、左側に向かい5mmほど突出する。体部半ばから緩やかに折れ曲がってしまっている。外周部の酸化土砂が厚い。
	F89	97	65	R28 II層	鉄製品(鍛造品)釘	6.5	1.2	0.55	9	2	錆化(△)	真ん中で二つに折れているが、形の整った頭折れ釘。頭部は左側に向かい、薄い板状で折り返されている。厚みは1.5mmほどを測る。体部から足部先端にかけてが徐々に細くなり、全体に細身の釘である。
	F90	95	65	R27 II層	鉄製品(鍛造品)釘	5.05	0.75	0.7	5	3	錆化(△)	足部先端を欠く頭折れ釘。横断面形は方形で、頭部がやや左側に傾いている。既使用品のためか、足部側が緩やかなS字状にうねる。
	F91	93	65	R25 II層	鉄製品(鍛造品)釘	2.65	1.1	1.0	5	3	錆化(△)	頭折れ釘状の釘破片。体部の半ばから足部にかけてが欠けており、横断面形はやや長方形気味。頭部は斜め左方向に緩やかに傾斜する。内側の切り欠きは現状では確認されない。
	F92	94	65	P24 II層	鉄製品(鍛造品)釘	3.15	1.15	1.0	5	2	錆化(△)	頭部の端部と足部を欠く頭折れ釘、または楔状の鉄製品破片。体部は方形の断面形を持ち、頭部側に向かい長方形になっている。頭部そのものは残されていないが、わずかに左側に張り出している。下面には黒錆が吹く。

第3節 古代・中世の調査

第61～67図 鉄関連遺物観察表

遺跡名	遺物番号	構成番号	図版番号	出土遺構層位	遺物名	計測表(cm)			重量(g)	磁着度	メタル度	備考
						長さ	幅	厚さ				
坂 長 村 上 遺 跡	F93	100	65	R29 II層	鉄製品 (鍛造品) 鎌釘	2.55	1.9	0.5	11	2	銹化 (△)	鎌に近い頭部が外周部に張り出す小振りの鉄製品。体部は長さ2.1cmで、方形の断面形となり、足部先端に向かい急激にすぼまっている。頭部は径1.9cm、厚さ4mmほどで、平面形は丸みを持つ。飾り金具としての用途を持つ鎌釘か。
	F94	101	65	R28 II層	鉄製品 (鍛造品) 棒状不明品	2.95	0.5	0.4	2	2	銹化 (△)	下手側の端部下端が破面となった棒状不明品。横断面形は長方形で釘ではない。細身の鉄鎌の茎部、または他の鉄製品か。
	F95	102	65	P23 II層	鉄製品 (鍛造品) 棒状不明品	3.25	0.4	0.4	3	2	銹化 (△)	両端部が破面となった細身の棒状不明品。横断面形は長方形で、やや前者に近い。幅は4mm前後を測る。
	F96	103	65	Q24 II層	鉄製品 (鍛造品) 棒状不明品	3.6	0.6	0.55	3	2	銹化 (△)	両端部が欠落した棒状不明品。横断面は方形で、下手側の破面には芯部が突出する。性格不明。銹化の仕方が表層から剥離していく前者と似る。
	F97	104	65	R27 II層	鉄製品 (鍛造品) 棒状不明品	4.5	0.9	0.45	6	2	銹化 (△)	体部半ばで「く」の字状に折れている棒状不明品。両端部が破面となる。横断面形は、端部では長方形となるが、折れ曲がった部分では、厚みが6mmと厚く、表面に軽い鍛打痕を持つ。作りの粗い鉄製品で、鎌や刀子を考えにくい。銹化の仕方は表層から剥離していく前者と似る。
	F98	105	65	Q28 II層	鉄製品 (鍛造品) 棒状不明品	4.9	0.7	0.5	6	2	銹化 (△)	上手側が左側に大きく折れ曲がった棒状不明品破片。上手側の端部は明らかに破面で、細くなっている足部は小さく欠けている。曲がりは比較的自然で、全体としては鎌状の鉄製品を窺わせる。造りはやや粗い。
	F99	106	65	Q23 II層	鉄製品 (鍛造品) 棒状不明品	6.7	0.65	0.5	21	2	銹化 (△)	片に割れてしまっている、U字状に折れ曲がった棒状の不明品破片。両端部の一方が明らかな破面で、一方は鋸ぐぐれで途切れている。横断面形は方形の可能性が強い。曲がり方は歪んだ孤状で楔ではない。何らかの掛け金具か。
	F100	113	65	P23 II層	鉄製品 (鍛造品) 棒状不明品	18.0	1.2	0.75	79	2	銹化 (△)	両端部が「L」字状に折れ曲がった棒状不明品。長さは18cm、端部の最大幅は1.2cm。中央部の細いところで1cmを測る。両端部が折れ曲がった薄板状となっており、端部の厚みは1～1.5mmを測る。横断面形は長方形。用途不明の鉄製品となる。鍛造痕は比較的きれい。
	F101	107	65	R27 II層	鉄製品 (鍛造品) 棒状不明品	11.6	0.9	0.85	28	3	銹化 (△)	形の整った棒状不明品。頭部は生きているように見える。足部は細くなって、先端部が小さく欠けている。体部の横断面形は方形気味で、足部先端はわずかに長方形の断面形となる。長手の釘であろうか。側面の平坦部は部分的に造りが粗い。
	F102	112	65	P24 II層	鉄製品 (鍛造品) 棒状不明品	10.3	1.35	0.7	51	2	H (○)	上手側の端部が小さな「コ」の字状に折り曲げられた棒状不明品。二つに割れているが、端部は完形成。鍛造痕が緩やかなS字状にうねっており、造りとしてはやや雑。「コ」の字状に曲がる端部は薄い板状となって収束する。一方、下手側の足部先端は方形気味のしつかりとした断面形を持つ。何らかの用途を持つ掛け金かもしれない。外周部の酸化土砂が厚い。
	F103	108	65	S28 II層	鉄製品 (鍛造品) 棒状不明品	10.45	0.9	0.7	20	3	銹化 (△)	足部先端が欠けている大ぶりの釘、または棒状不明品。頭部が作り出されていた可能性もある。横断面形は全体的には方形で、頭部寄りは長方形となる。鍛造痕がやや歪んでおり、造りは粗い。現状では3片に割れている。構成No.107と長さや造りは近い。
	F104	109	65	R27 II層	鉄製品 (鍛造品) 棒状不明品	6.5	0.9	0.75	23	3	L (●)	上手側の端部が長方形の横断面形となった棒状不明品。透過X線像では端部が明らかに破面とは言えず、生きている可能性もある。下手側の横断面形は方形。芯部に残る鉄部の残りがよく、外周部の酸化土砂が厚い。釘や刀子ではないとまでは言える。
	F105	110	65	Q23 II層	鉄製品 (鍛造品) 棒状不明品	6.9	0.8	0.6	20	2	H (○)	6mm程の方形断面を持つ棒状不明品。下手側の端部は明らかに破面で、上手側は酸化土砂のためはつきりしない。やや太い印象を持つ棒状不明品。
	F106	96	65	S28 II層	鉄製品 (鍛造品) 棒状不明品	6.4	0.9	0.8	11	2	銹化 (△)	上手側の端部が破面となった棒状不明品。横断面形は方形で、下手側に向かい細くなっている。幅は上手側が6mmで下手側が4mm弱となる。細身の鎌または何らかの鉄製品の茎部か。
	F107	115	65	Q22 II層	鉄製品 (鍛造品) 鎌	8.1	2.7	0.15	58	2	銹化 (△)	6片に割れている鉄鎌の刃部破片。酸化土砂が塊状に固着している部分が先端部と推定される。また、構成No.114と出土位置は離れているが、厚みや表面の鋸が似ている。芯部が抜けた部分的に中空となっている。
	F108	114	65	R27 II層	鉄製品 (鍛造品) 鎌	8.3	3.3	0.3	29	6	銹化 (△)	刃部幅が3.2cmを測る鉄鎌。2片に割れており、接合する。構成No.115も割れ口からみて同一個体の可能性が高い。背側の厚みは3mm前後。左側部は小さな三角形に折り曲げられており、高さは1.3cmを測る左鎌。刃部は直線状で、研ぎ減りは少ない。
	F109	116	65	R29 II層	鉄製品 (鍛造品) 薄板状不明品	3.7	2.8	0.3	10	3	H (○)	鉄鎌様の薄板状不明品破片。背側、刃部側とも丸みを持っており、構成No.117と同一個体の可能性あり。左側がふくらんでいるのは鋸ぐぐれによるもので、鎌基部の折り返し部ではない。透過X線像では明瞭な鍛造痕が確認できず、一様な像を示す。厚みの薄い羽根の羽部様。
	F110	117	65	Q28 II～III層	鉄製品 (鍛造品) 薄板状不明品	4.2	3.35	0.2	13	3	H (○)	鎌の刃部様の薄板状不明品。背側、刃部側とも丸みを持っており、左右の端部が破面となっている。構成No.116と幅や表面の色調が似ている。身幅は3.35cmを測る。
	F111	121	65	R27 II層	鉄製品 (鍛造品) 薄板状不明品	5.6	3.8	0.2	63	4	M (○)	薄板状の不明品破片。表面に酸化土砂が厚く、下面は左右方向に突出する。外観上は鎌様にも見えるが、不明点が多い。短軸方向の幅は現状では3.8cmを測る。厚みは右下手側の端部で1.5mmと薄い。構成No.119～121は酸化土砂が黄色味を帯びており、比重が高く鋸の進行が少ないとから、やや時期の下る可能性も残る。
	F112	118	65	P24 II層	鉄製品 (鍛造品) 薄板状不明品	3.05	2.05	0.2	4	4	銹化 (△)	鉄鎌の破片様の薄板状不明品。左右の端部と上手側が破面となっており、わずかに反っている。薄手で銹化が進み、分かれにくい。透過X線像では鍛造痕が見られず、全体が一本の板状となっている。やや新しい鉄製品の可能性も残す。
	F113	119	65	Q23 II層	鉄製品 (鍛造品) 薄板状不明品	5.7	3.2	0.45	28	3	銹化 (△)	鎌に似た薄板状の不明品破片。上手側は直線状で生きており、左右の側部から下手側が破面となる。現状の最大幅は3.2cm。上手側がやや厚くなっています、外形は鎌に類似するが透過X線像では鍛造痕が弱い。
	F114	120	65	R29 II層	鉄製品 (鍛造品) 薄板状不明品	4.6	3.8	0.4	26	5	H (○)	薄板状の不明品破片。右側の上面には鋸ぐぐれに由来する瘤状の酸化土砂が固着する。上手側と左側部は直線状に途切れており、残る側面は破面となる。厚みがほぼ一定で、薄板状の鉄板としか言えない。新しい可能性もあり。

第5章 坂長村上遺跡・坂長道端中遺跡

第61~67図 鉄関連遺物観察表

遺跡名	遺物番号	構成番号	図版番号	出土遺構層位	遺物名	計測表(cm)			重量(g)	磁着度	メタル度	備考
						長さ	幅	厚さ				
坂長村上遺跡	F115	122	65	P23 II層	鉄製品(鍛造品)袋状鉄斧	5.6	4.3	0.5	19	2	銹化(△)	袋状鉄斧の袋部破片。刃部側全体と袋部の左側が破面となっている。右側の袋部は2片に割れているが接合する。袋部の横断面形は丸みを持っており、最大幅は4.3cm、現状の最大の長さは5.6cmを測る。基部は外側に向かい2mmほど張り出しており、平面形も緩やかな弧状となる。袋部の内側は唯一の平坦な面で内幅は3.35mm前後。内側の厚みは1.1cm。構成No.123は体部から刃部側の破片で、同一個体の可能性がある。
	F116	123	65	Q24 II層	鉄製品(鍛造品)袋状鉄斧	3.2	3.6	0.7	15	3	銹化(△)	下面が左右方向にわずかに丸みを持った薄板状の鉄製品破片。左側部上半が上方に向かい、立ち上がり気味に割れており、構成No.122の袋状鉄斧の体部から刃部破片と推定される。出土位置も比較的近い。現状の最大幅が3.6cmで、右側部が破面となっていることから、前者と同一個体であっても問題はない。厚みも7mm前後と類似する。短軸側には新しい破面あり。
	F117	124	65	N21 II層	鉄製品(鍛造品)鍋注口部	3.4	2.9	0.4	8	3	銹化(△)	厚さ4mmほどの铸造品破片。右側に開く小さなラッパ状または樋状で、鉄鍋の注口部の破片を窓とする。側面は全面破面で、中小の気孔が確認される。部位による厚みの差があり、造りとしては粗い。表面には無数に放射割れが走っている。
	-	125	-	R29 II層	鉄製品(鍛造品)鍋体部	-	-	-	70	4	L(●)	厚さ6mm前後の中厚手の铸造品破片。銹化が進んでおり、粉末化した破片も多数伴っている。側部はシャープな破面となっており、放射割れや黒錆もにじんでいる。鉄鍋の体部破片と推定される。透過X線像では上手側の端部が比較的きれいに途切れている。
	F118	126	65	R29 II層	鉄製品(鍛造品)鍋体部	9.2	5.7	1.2	225	4	特L(☆)	表裏面を厚い酸化土砂に覆われた铸造品破片。側部は三方とも破面で、厚みは一定しない。全体に左側が薄く、右下手側が厚くなっている。薄いところで約7mm、厚いところでは12mmを測る。右側部上面が厚くなっているのは酸化土砂による。比較的大型の鉄鍋破片と推定される。
	C1	127	67	R30 III~IV層上面	木芯青銅製品	1.6	1.05	0.45	1.7	1	銹化(△)	木芯青銅張りの青銅製品の端部破片。薄板状で最大幅は1.05cmを測るが、本来はもう一回り大きい可能性を持つ。上手側の厚みは3.5mm、下手側は2.5mmとやや薄い。上手側の側部は直線状に途切れ、面自体は平坦化している。透過X線像では、右端部から2.5mmほど入った位置に径3mmほどの不整楕円形の金属部分が確認される。青銅の外装の表裏面にも同位置にもかすかな窪みが確認され、金属製の目釘ではないかと考えられる。刀子や刀装具の端部破片であろうか。木部と推定される内側には、土砂が詰まっている。
	F119	128	66	R29 III~IV層下層	楕形鍛治滓(中・含鉄)	8.0	10.2	3.0	270	L(●)	ほぼ完形の中型の楕形鍛治滓。平面形は不整楕円形で左下手側がやや乱れている。上面は皿状に窪み、下面は浅い楕形に突出する。上面下手側の肩部には外周部を巡るように羽口由来の粘土質の溶解物が乗っている。下面は鍛冶炉の炉床土の圧痕と炭灰痕が相半ばする。	
	F120	129	66	Q23 III~IV層上層	鍛治滓(含鉄)	3.0	3.3	2.9	25	3	銹化(△)	右側に向かって薄くなる含鉄の鍛治滓。表面には酸化土砂が厚く、内部情報を読み取れない。形態的には左側部が破面の可能性あり。
	F121	130	66	R23 III~IV層上層	鍛治滓(含鉄)	3.9	3.45	3.2	58	4	M(○)	塊状で含鉄の鍛治滓。酸化土砂に覆われており、端部には小さな錆ぶくれが生じている。上面は小さな平坦面で、側部から下面は丸みを持つ。含鉄部は上面寄りの中核部か。
	F122	133	66	Q23 III~IV層上層	鉄製品(鍛造品)鎌?	5.5	0.7	0.7	9	4	銹化(△)	「L」字状に折れ曲がった鉄製品破片。横断面形は方形で、上手側の端部は破面となる。左下手側の端部が小さな頭部様にふくらんでいるが、錆ぶくれの可能性が強い。鍛造痕はやや雑で、鎌の足部または釘頭であろうか。
中遺跡	F123	131	66	P25 III~IV層上層	鉄製品(鍛造品)鎌	2.9	2.7	0.25	9	3	銹化(△)	左側部上手側が小さく立ち上がる鎌破片。身幅は現状で2.7cmを測る。刃部の先端が割れているように見え、本来はもう少し幅広か。体部から切つ先側は全く欠落する。左側の立ち上がりは高さ1cm。鍛造痕は不明瞭で、やや新しい可能性もある。
	F124	132	66	Q23 III~IV層上層	鉄製品(鍛造品)鎌	9.8	2.8	0.3	33	5	銹化(△)	3片に割れた鉄鎌片。左側部がわずかに立ち上がっているように見えるが、はっきりしたものではない。先端部は刃部側が小さく欠けている。3片を合わせた現状の長さは9.8cm、基部の幅は2.8cm。刃部側はわずかに狭くなる。銹化が進み内部は中空化する。
	F125	134	66	R29 III~IV層下層	鉄製品(鍛造品)鎌?	6.8	0.8	0.8	22	2	銹化(△)	下手側の端部が小さく折れ曲がった釘または鎌片。下手側の曲がりの部分は、6mmほど突出する。体部の幅は下手側が7.5mmで、上手側が8mmとなる。透過X線像には上手側の端部に錆ぶくれがあり、頭折れ釘状。鍛造痕は雑で前者と似る。
	F126	135	66	P24 III~IV層	鉄製品(鍛造品)棒状不明品	5.5	0.7	0.8	14	4	銹化(△)	上手側が破面となる棒状不明品。下手側は生きている。横断面形は径6mmほどの方形となる。鍛造痕はほぼ良好で、前二者よりは直線状。何らかの棒状鉄製品の茎部か。
	F127	44	66	Q22 SD13	楕形鍛治滓(中)	4.95	5.3	3.8	123	2	なし	側部が全面破面となった中型の楕形鍛治滓の中核部破片。上面が生きており、滓の芯部に比べて細かい気孔が目立つ。下面是楕形で炭灰痕に覆われている。
	F128	45	66	N20 SD16	楕形鍛治滓(極小)	6.2	4.6	2.15	65	4	なし	平面、不整合形をした扁平な極小の楕形鍛治滓。右側の肩部が破面となっている以外は、ほぼ完形品。上面は平坦気味で、上手側から右側は小さな段をなす。下面是右側の立ち上がりが急な舟底状。滓内部には横方向に広がった気孔が発達する。
	F129	46	66	N20 SD16	楕形鍛治滓(極小・含鉄)	4.7	2.65	2.1	37	3	銹化(△)	極小の楕形鍛治滓の側部。短軸側の両側部から右側部が破面となる。滓質は緻密で表面の風化が進んでいる。元の楕形鍛治滓の左側部破片。含鉄部は芯部。
	F1	136	11	S B1-P5 建替後埋土	鍛治滓	2.15	2.4	1.65	10	2	なし	表面が流動状となった鍛治滓。上手側は破面の可能性が高い。短軸方向の断面形はV字状で、本来の大きさも小さかった可能性が高い。遊離した鍛治滓片であろう。
	F2	137	11	S B1-P5 建替後埋土	鍛治滓(含鉄)	1.8	1.6	1.25	3	2	銹化(△)	指頭大のやや丸みを持った含鉄の鍛治滓。一見、土塊状でわずかに磁着する。左側部の小さな突出部は錆ぶくれで、表面には薄く酸化土砂を取り巻いている。
	F3	138	11	S B1-P5 建替後埋土	楕形鍛治滓(極小・含鉄)	4.4	2.75	1.7	23	2	銹化(△)	平面、不整勾玉状の極小の楕形鍛治滓。ほぼ完形品で側部には凹凸が生じている。一部は木炭痕であろう。上下面ともにふくらみを持ち、下面是舟底状。含鉄部は上手側の中核部。上面下手側には錆ぶくれが突出する。

※鉄製品・鍛冶関連遺物観察表の備考欄における観察結果は穴澤氏の口述による。

	坂長村上遺跡・坂長道端中遺跡									
	SI1	SI2	SB1	SD13	P13					層
楕形鍛冶滓 (極小・含鉄)	流動滓 (製鍊系)	鉄製品(鍛造品)	楕形鍛冶滓 (小)	石 (被熱)	楕形鍛冶滓 (小)	楕形鍛冶滓 (極小)	流動滓 (製鍊系)	楕形鍛冶滓 (大)	L()	
F1 (1) 楕形鍛冶滓 (小)	F21 (19)	F28 (25)	F35 (38)	F45 (51)	F50 (56)	F55 (60)				
F2 (2) 鉄製品 (鍛造品)	F14 (12)	F27 (26)	F30 (31)	F44 (48)	F46 (52)	F54 (61)				
鍛化()	F17 (20)	F29 (27)	S10 (36)	SK1		F55 (60)				
F22 (3) 鍛冶滓 (含鉄)	F18 (21)	F19 (22)	F32 (33)	F36 (39)	F41 (49)	F51 (57)				
	F12 (14)	F25 (28)	F38 (41)	F46 (52)	F47 (53)	F51 (57)				
F13 (4) F6 (9)	F16 (15)	F24 (16)	F32 (33)	F41 (49)	F47 (53)	F51 (57)				
F9 (5) F8 (11)	F17 (20)	F26 (29)	F38 (42)	F48 (54)	F53 (58)	F57 (62)				
	F18 (21)	F27 (26)	S9 (37)	P1		H()				
	F20 (17)	F33 (34)	F39 (42)	F48 (54)	F53 (58)	H()				
	F21 (23)	F34 (35)	F40 (43)	F49 (55)	F58 (63)	M()				
	F24 (16)	F42 (50)	F43 (47)	F52 (59)	F56 (64)					
	F25 (28)	F44 (48)	F40 (43)	F49 (55)						
	F26 (29)	F45 (51)								
	F27 (26)	F46 (52)								
	F28 (25)	F47 (53)								
	F29 (27)	F54 (61)								
	F30 (31)	F55 (60)								
	F31 (32)									
	F32 (33)									
	F33 (34)									
	F34 (35)									
	F35 (38)									
	F36 (39)									
	F37 (40)									
	F38 (41)									
	F39 (42)									
	F40 (43)									
	F41 (49)									
	F42 (50)									
	F43 (47)									
	F44 (48)									
	F45 (51)									
	F46 (52)									
	F47 (53)									
	F48 (54)									
	F49 (55)									
	F50 (56)									
	F51 (57)									
	F52 (59)									
	F53 (58)									
	F54 (61)									
	F55 (60)									
	F56 (64)									

() 内数字は構成番号

第68図 鉄関連遺物構成図(1)

坂長村上遺跡・坂長道端中遺跡							大殿下ノ原遺跡
層							SB-09-P5 建替後埋土
楕形鍛治滓 (極小)			鐵製品(鍛造品)			楕形鍛治滓 (中・含鉄)	
L()	H()	L()	刀子類	釧類	鍊類	斧	L()
F59 (65)	F65 (71)	F71 (77)	F80 (87)	F91 (93)	F94 (101)	F108 (114)	F123 (131)
		F76 (82)		F92 (94)	F95 (102)	F107 (115)	F1 (136)
	特L()	F72 (78)	H()	F81 (88)	F103 (108)	F115 (122)	
F60 (66)	F66 (72)			F93 (95)	F96 (103)	F119 (128)	
				F97 (96)	F100 (113)	F116 (123)	
	H()	F67 (73)	M()	F82 (89)	F104 (109)	F109 (116)	
F61 (67)		F73 (79)	F78 (84)	F83 (90)	F105 (110)	F117 (124)	
				F84 (91)	F97 (104)	F110 (117)	
		F68 (74)	含鍛鉄滓	F85 (92)	F98 (105)	F112 (118)	
	M()		鍛化()	F86 (93)	F99 (106)	F113 (119)	
				F87 (99)	F100 (111)	F117 (124)	F2 (137)
F62 (68)				F88 (98)	F101 (107)	F120 (129)	
	M()			F89 (99)	F102 (112)	F125 (134)	
				F90 (100)	F103 (108)		
F63 (69)	F69 (75)	F75 (81)	S11 (86)	F91 (92)	C1 (127)	F121 (130)	
F64 (70)	F70 (76)	F75 (81)		F92 (93)	F104 (126)	F126 (135)	
					M()		
					F114 (120)	木芯青銅製品	
					F115 (121)		
					F116 (122)		
					F117 (123)		
					F118 (126)		
					F119 (128)		
					F120 (129)		
					F121 (130)		
					F122 (133)		
					F123 (131)		
					F124 (132)		
					F125 (134)		
					F126 (135)		

第69図 鋼門連遺物構成図(2)

()内数字は構成番号

第4節 近世、およびその他の遺構・遺物

1. 概要(第70図)

溝状遺構8基、土坑5基を確認した。SD11・12・13はIV層上面で検出している。その他の遺構は○グリッドライン以南が近世以降に改変を受けているため、近世以降の包含層(I層)上面、およびVI層上面で検出した。検出された遺構のうち、SK9を除いて遺構の時期を特定できる遺物は出土していない。SD11～15は現代の水路と重複する位置にあり、この水路が現在の小字界となることから、これらの溝は土地の境界等を示していたと考えられる。

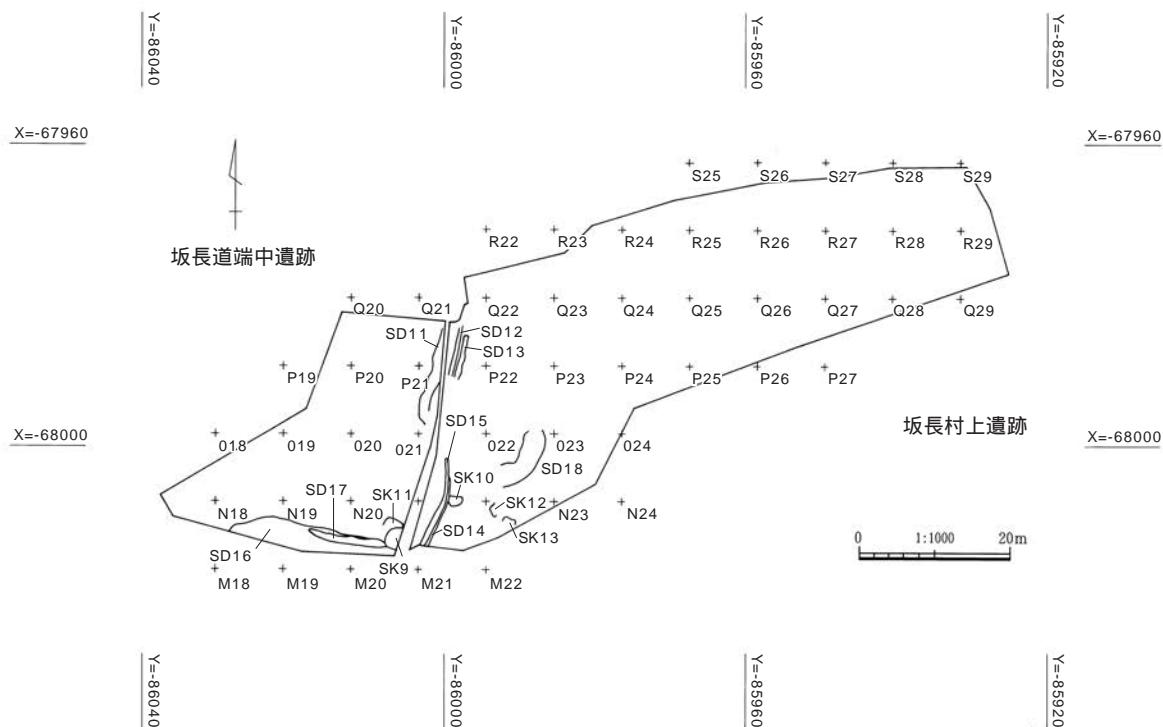
2. 溝状遺構

SD11 (第71図 図版23-1)

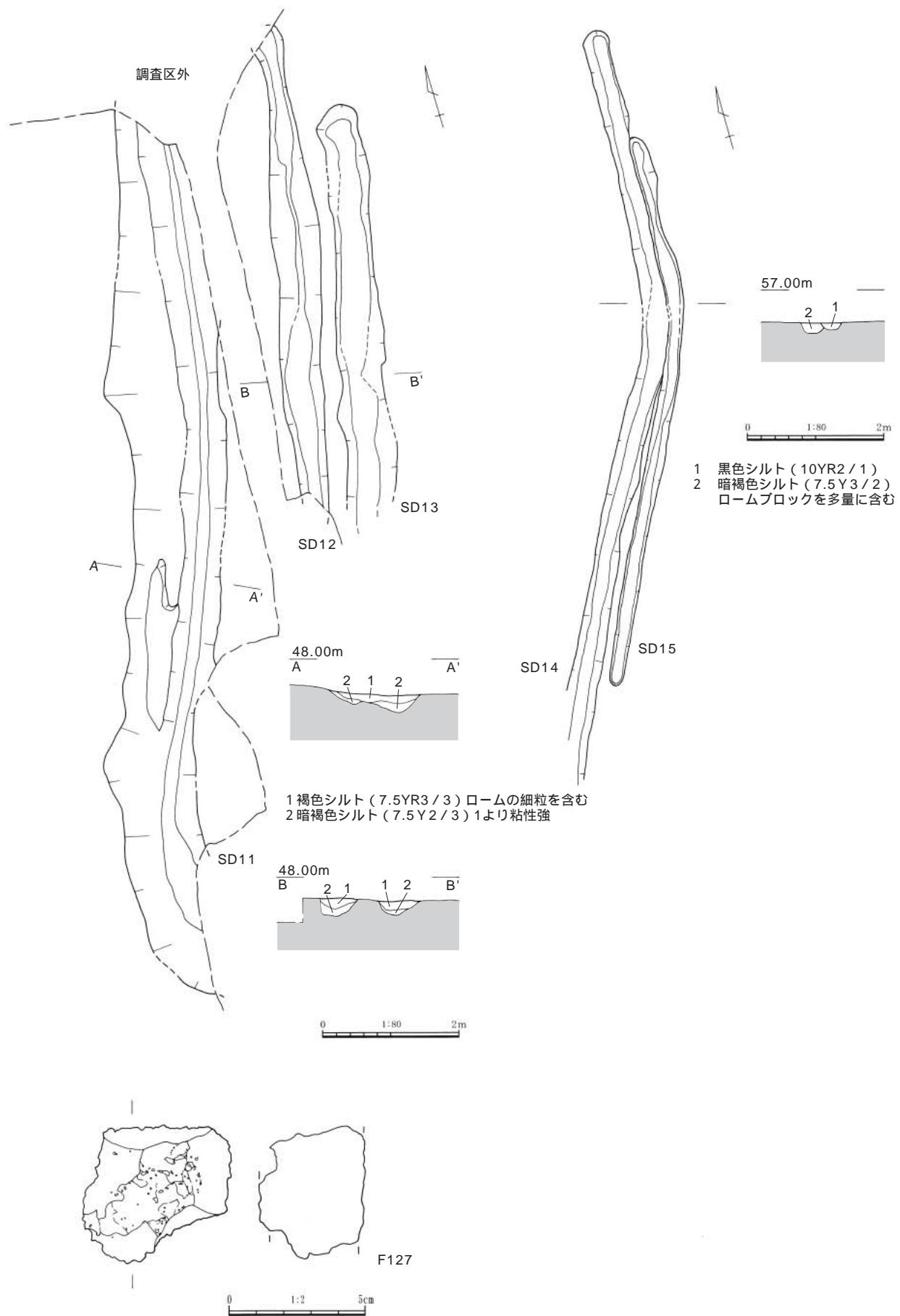
P22・Q22グリッド、標高46.8～48.2mの南から北へ下る緩斜面に位置し、IV層上面で検出した。北側は調査区外へのび、東側は現代の水路、南側は搅乱によって改変を受けている。検出した長さは13.7mで、南北方向に直線状にのびる。幅は0.74～1.68m、深さは30～40cmで、底面の標高は北端が南端より97cm高い。主軸はN-16°-Eである。埋土は褐色シルト(上層)と暗褐色シルト(下層)の2層からなる。埋土からは須恵器と土師器が出土したが、時期や性格については不明である。

SD12 (第71図 図版23-1)

P22・Q22グリッド、標高47.4～48.0mの南から北へ下る緩斜面に位置し、IV層上面で検出した。北側は調査区外へのび、南側は搅乱によって改変を受けている。検出した長さは7.2mで、南北方向に直線状にのびる。幅は0.29～0.71m、深さは15～25cmで、底面の標高は北端が南端より40cmある。



第70図 近世、およびその他の遺構分布図



第71図 SD11・12・13・14・15

第4節 近世、およびその他の遺構・遺物

高い。主軸はN-11°-Eである。埋土は褐色シルト（上層）と暗褐色シルト（下層）の2層からなる。埋土からは須恵器と土師器が出土したが、時期や性格については不明である。

S D 13（第71図 図版23-1）

P 22・Q 22グリッド、標高47.4～47.9mの南から北へ下る緩斜面に位置し、IV層上面で検出した。検出した長さは6.1mで、南北方向に直線状にのびる。幅は0.54～0.76m、深さは10～20cmで、底面の標高は北端が南端より38cm高い。主軸はN-11°-Eである。埋土は褐色シルト（上層）と暗褐色シルト（下層）の2層からなる。埋土からは須恵器、土師器、椀形鍛冶滓（F 127）が出土したが、時期や性格については不明である。

S D 14（第71図 図版23-2）

O 22・N 22グリッド、標高46.3～46.6mの平坦地に位置し、VI層上面で検出した。南北方向から北東－南西方向へ緩やかに湾曲してのびており、S D 15に切られる。検出した長さは8.2mで、幅は0.16～0.28mである。深さは3～10cmで、底面の標高は北端が南端より27cm高い。埋土は暗褐色シルトの単層で、埋土からは遺物は出土していない。そのため、時期や性格については不明であるが、遺構の重複関係からS D 15に先行すると考えられる。

S D 15（第71図 図版23-2）

O 22・N 22グリッド、標高46.3～46.8mの平坦地に位置し、VI層上面で検出した。南北方向から北東－南西方向へ緩やかに湾曲してのびており、S D 14を切る。検出した長さは11.3mで、幅は0.29～0.43mである。深さは10～25cmで、底面の標高は北端が南端より50cm高い。埋土は黒色シルトの単層で、埋土からは遺物は出土していない。そのため、時期や性格については不明であるが、遺構の重複関係からS D 14に後出すると考えられる。

S D 16（第72図 図版22-4）

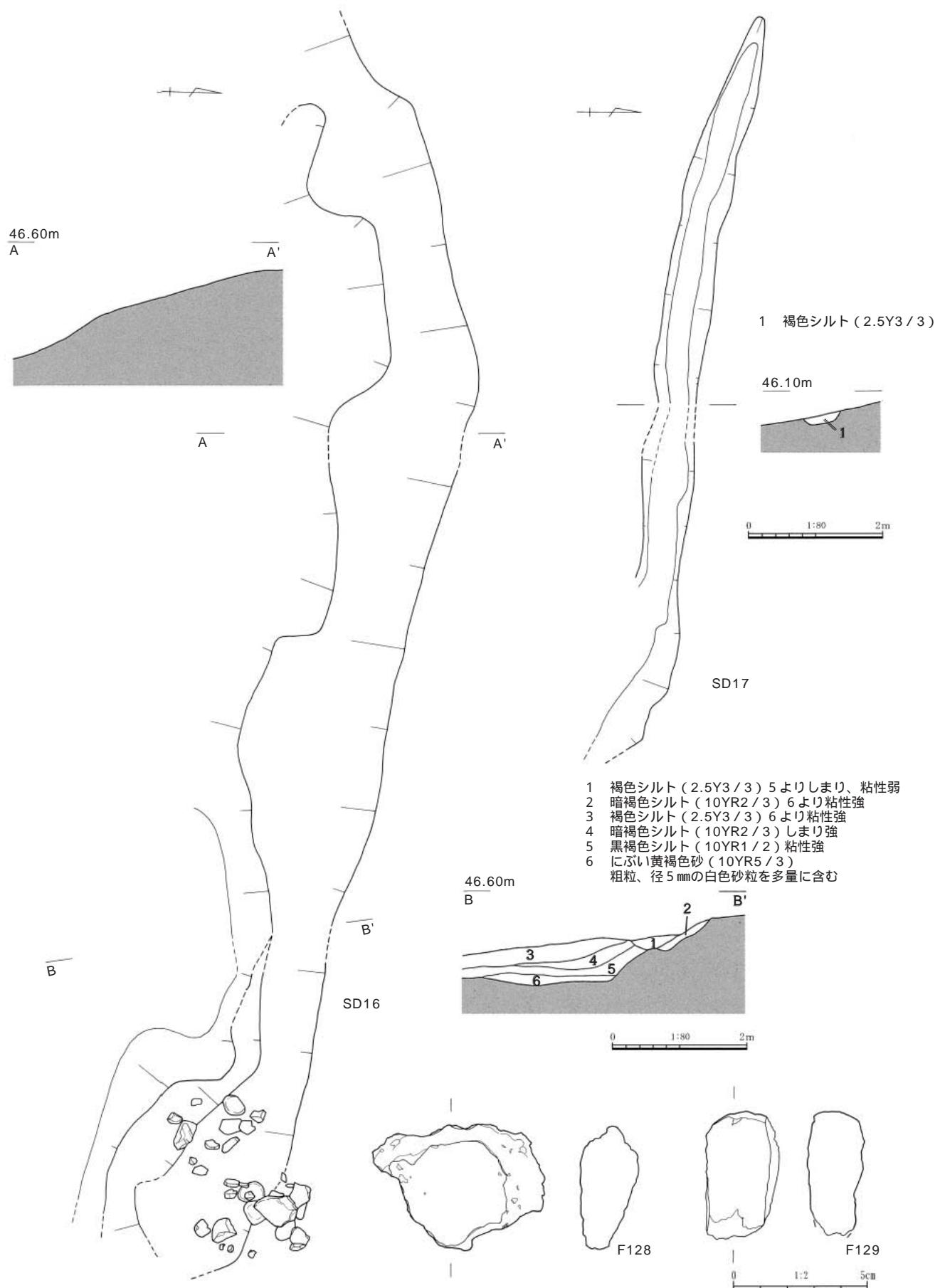
N 19～21グリッド、標高45.9～46.3mの平坦地に位置する。検出した長さは18.5mで、東西方向に直線状にのび、東側はさらに調査区外へのびる。西側は南西方向へ湾曲すると思われ、南側は水路による改変を受けている。現状での最大幅は3.4m、深さは80～90cmである。埋土は上層から褐色シルト、暗褐色シルト、黒褐色シルト、にぶい黄褐色砂となっており、最上層の褐色シルト層上面ではS D 17を検出した。東側では埋土の最上層に10～45cm 大の礫が流れ込んだ状態で出土し、その北西の肩部分には原位置を保つと考えられる集石が認められる。集石は30～35cm 大の河原石7個の上に板石が置かれている。ただし、本遺構とこの集石との関係性は不明である。遺物は埋土中から須恵器、土師器、土製支脚、椀形鍛冶滓（F 128・129）が出土しているが、本遺構の掘削時期は不明である。

S D 17（第72図 図版22-4）

N 20・21グリッド、標高45.8～46.0mのS D 16内に位置し、その堆積土（褐色シルト層）上面で検出した。検出した長さは11.0mで、東西方向にほぼ直線状にのびる。幅は0.26～0.78m、深さは5～15cm を測る。S D 16の肩との比高差は20cm である。埋土は褐色シルトの単層である。埋土からは須恵器と土師器が出土したが、時期や性格については不明である。

S D 18（第73図 図版23-3）

O 23グリッド、標高46.5～46.9mの平坦地に位置し、VI層上面で検出したが、C-C' ラインの土層断面ではI層上面から掘り込まれているのが確認できた。西側はトレンチによって改変を受



第72図 SD16・17

第4節 近世、およびその他の遺構・遺物

け、北側も排水溝によって改変を受けている。検出した長さは7.5mで、南北方向から東西方向へ湾曲してのびており、中央では一段深くなっている。断面形態は両端では、皿状を呈し、中央ではV字状を呈する。幅は1.92～2.53mで、深さは北端が15cm、中央が1.2～1.4m、西端が30cmで、底面の標高は北端が西端より32cm高い。遺物は出土しておらず、時期や性格については不明である。

3. 土坑

SK9 (第74図 図版23-4、54-4)

N21グリッド、標高46.3～46.4mの平坦地に位置する。I層の掘り下げ中に検出したが、土層観察によりI層上面から掘り込まれていることが判明している。東側は未調査であるが、平面形は隅丸方形を呈すると思われる。断面形態は逆台形を呈し、底面は平坦である。規模は、東西長は現状で1.57m、南北長2.24m、深さ40～50cmを測る。埋土は5層に細分される。1層はI層と酷似した層である。2～5層は粘性の強いシルト層で、これらは水性堆積によるものと思われる。遺物は、埋土から土師器、須恵器、土製支脚が出土し、床面直上から磁器碗(286)が出土した。遺構の時期は出土遺物から近世後半頃と考えられる。

SK10 (第74図 図版23-5)

N22・O22グリッド、標高46.5～46.6mの平坦地に位置し、VI層上面で検出した。平面形は長軸1.50m、短軸1.05mの隅丸長方形を呈する。深さは35cmで、断面形態は皿状を呈する。埋土は大きく2層に分かれ、いずれも遺物は出土していない。時期や性格については不明である。

SK11 (第74図 図版24-1・2、54-4～6)

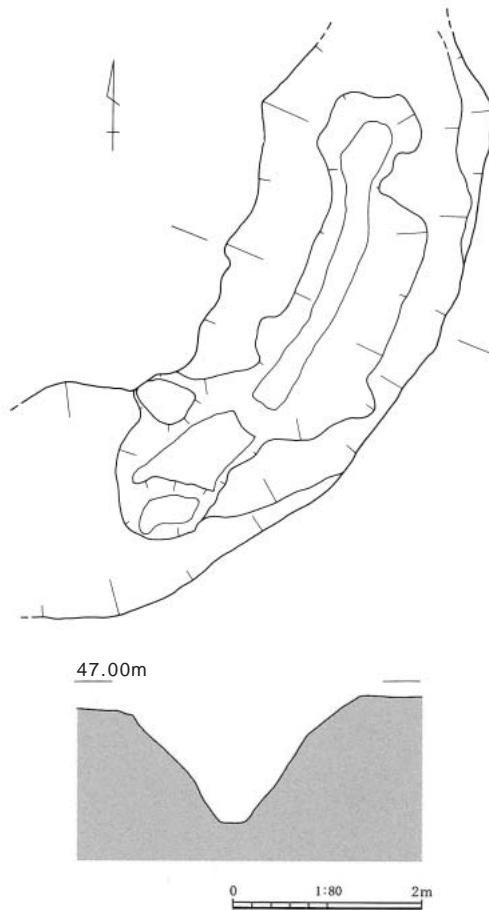
N21グリッド、標高46.3mの平坦地に位置し、VI層上面で検出した。南東側はSK9に切られ、南西側は攪乱による改変を受けている。平面形は長軸2.14m、短軸1.98mの隅丸方形を呈すると考えられる。深さは1.12mで、底面は平坦である。埋土は12層に細分され、下層には水性堆積によるものと思われる微細粒砂と細粒砂の堆積が認められる。また、埋土中には20～30cm大の石が認められ、その出土状況から南側から流れ込んだものと思われる。遺物は土師器、須恵器、陶器が出土

第74図 磁器観察表

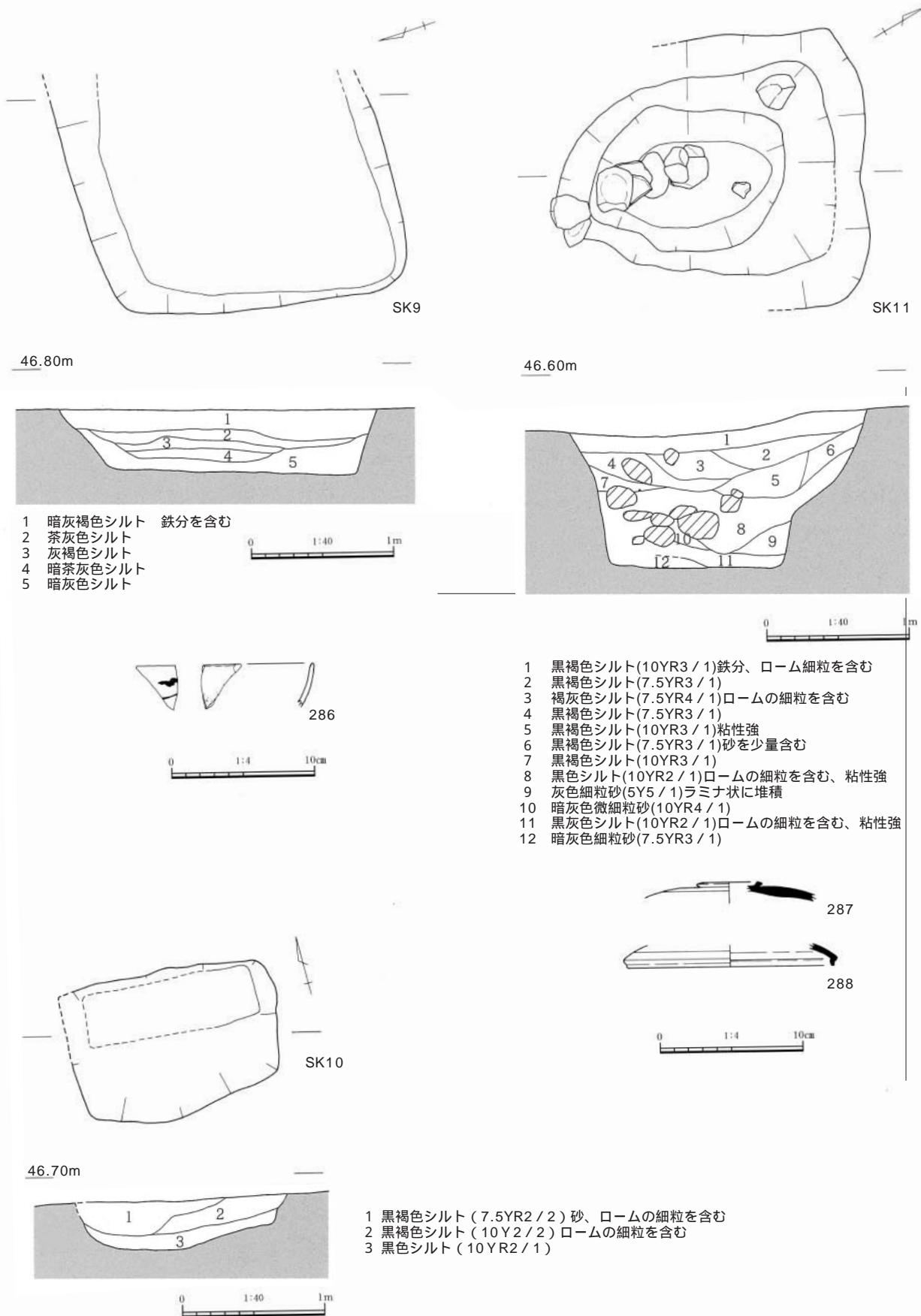
遺物番号	挿図番号	遺構層位	種別器種	口径(cm) 底径(cm)	器高(cm)	文様・調整	胎土焼成	色調	△現存値 備考
286 74	SK9	磁器碗 床面直上	—	—	△3.1	外面：呉須による文様 内面：呉須による文様	密良好	灰白色	

第74図 土器観察表

遺物番号	挿図番号	遺構層位	種別器種	口径(cm) 底径(cm)	器高(cm)	文様・調整	胎土焼成	色調	△現存値 備考
287 74	SK11	須恵器 下層	—	—	△1.5	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ後不整方向ナデ	密良好	灰色	
288 74	SK11	須恵器 上層	壺蓋	14.6	△1.6	内外面：ヨコナデ	密良好	灰色	



第73図 SD18



第74図 SK9・10・11

第4節 近世、およびその他の遺構・遺物

した。287・288は須恵器坏蓋で、287は輪状つまみを有し、288の口縁にはかえりが認められない。陶器は最上層から出土したもので、遺構は最終的に近世以降に埋没したと考えられる。

S K 12 (第75図 図版24-3)

N23グリッド、標高46.2~46.3mの平坦地に位置し、VI層上面で検出した。東側はトレンチによって改変を受けている。平面形は長軸1.39m、短軸0.6mの不整形を呈する。深さは湧水が著しいため完掘できておらず、不明である。北側の壁面は垂直ぎみに立ち上がるが、南側の壁面は57°の角度で立ち上がっている。埋土は掘削した範囲では16層に分けられ、土層断面から本遺構は埋没した後、掘削し直された可能性がある。なお、最上層には5~30cm大の石が出土している。土器は出土しておらず、時期や性格については不明である。

S K 13 (第75図 図版24-4)

N23グリッド、標高46.1~46.2mの平坦地に位置し、VI層上面で検出した。南側は調査区外にかかり、西側はトレンチによって改変を受けている。本遺構は湧水や南側の調査区壁が崩落する危険性などを考慮し、検出のみに留めた。平面形態は長軸1.32m、短軸0.5mの瓢箪形を呈すると考えられる。遺物は最上面から須恵器が出土したが、時期や性格については不明である。

4. 遺構外出土遺物

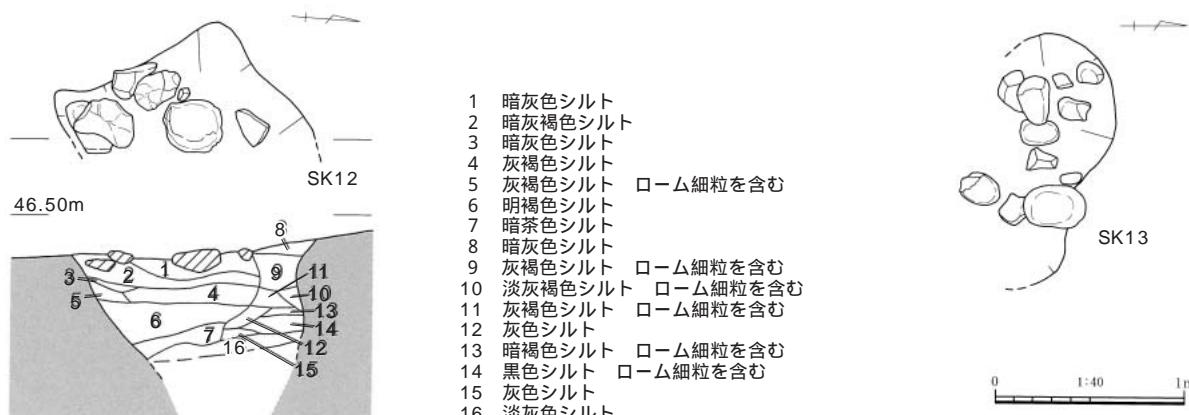
石器 (第76図 図版55・56)

表土からV層上面にかけて散漫に石器が出土しており、ここではそのうちの15点を掲載した。

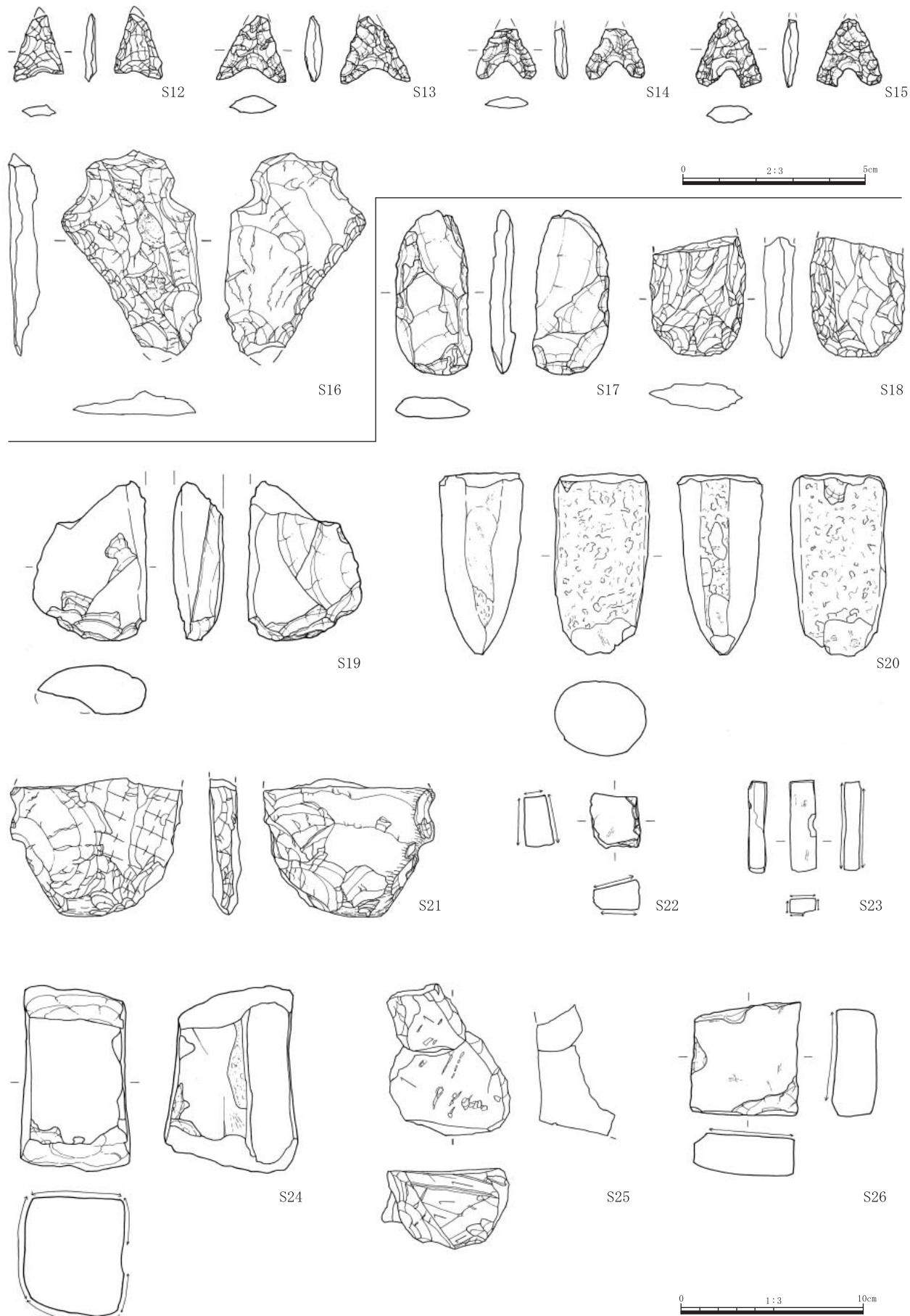
S 12~S 15は石鏸である。S 12はガラス質安山岩製で表裏に素材面を残す。抉りが浅い凹基式である。S 13~S 15は黒曜石製で、抉りの深い凹基式である。S 13は基部の先端が尖り、S 14は長さに対して抉りが深い特徴を持つ。

S 16は無斑晶安山岩製の削器である。素材剥片末端部につまみ状の突起を持たせ、左側縁(素材の右側縁)に表裏から調整を加えて刃部としている。

S 17~S 19、S 21は打製石斧である。S 17、S 18は片麻状花崗岩質砂岩製で、板状の素材の周縁を表裏から調整する。S 17には刃部に若干の研磨痕が認められる。片麻状花崗岩質砂岩は山陽側に多いが、山陰地方では採取できないため、山陽側から持ち込まれた可能性もある^(註1)。S 19は半花崗岩製で、加工途中で廃棄されている。S 21は板状安山岩製で、周縁を表裏から調整され、部分的に研磨痕が残る。製作途中に折損し、廃棄されている。



第75図 S K 12・13



第76図 遺構外出土石器

第4節 近世、およびその他の遺構・遺物

第76図 石器観察表

遺物番号	挿図番号	出土地点	層位	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石材	備考
S12	76	S26	V層上面	石鏃	1.70*	1.39	0.32	0.6*	<ガラス質安山岩>	
S13	76	Q28	II層	石鏃	1.77*	1.89	0.39	0.9*	黒曜石	
S14	76	Q28	II層	石鏃	1.37*	1.60	0.31	0.5*	黒曜石	
S15	76	P23	II層	石鏃	1.84*	1.79	0.40	1.0*	黒曜石	
S16	76	Q23・S11	埋土中	削器	5.63	3.63	0.70	12.1	無斑晶安山岩	
S17	76	R23	II層	打製石斧	9.0	4.1	1.4	63.7	片麻状花崗岩質砂岩	
S18	76	—	表土	打製石斧	6.5*	5.3	1.6	73.7	片麻状花崗岩質砂岩	
S19	76	R25	III層～IV層	打製石斧	8.7*	6.2	2.7	169.1	半花崗岩(アブライト)	
S20	76	Q27	II層	磨製石斧	9.8*	5.0	4.6	358.6	閃綠岩	加工途中
S21	76	N20	III層	打製石斧	8.5*	10.4	1.6	149.3*	板状安山岩	
S22	76	P22	III層～IV層	砥石	2.0*	2.2*	2.1*	18.2*	流紋岩	
S23	76	R27	II層	砥石	5.0	1.4	0.9	10.3	流紋岩	
S24	76	N21	I層	砥石	10.1*	5.9	7.1	571.3	流紋岩質凝灰岩	
S25	76	R27	II層	砥石	9.3*	7.6*	4.3*	165.7*	流紋岩	
S26	76	O18	耕作土	砥石	6.2*	6.0	2.5	138.2*	流紋岩	

※残存値には*を付した。※※石材名の<>は調査担当者の肉眼観察による。

S 20は閃綠岩製の磨製石斧である。敲打による成形のあと、刃部と側面を中心に研磨されているが、製作途中で廃棄されている。

S 22～S 26は砥石である。S 22、S 23、S 25、S 26は流紋岩製、S 24は流紋岩質凝灰岩製である。S 22は全体の形状が不明であるが、表面が緩やかに内湾する。S 23は小型で、表裏の中央付近がやや壅む。S 22、S 23とも線状痕が認められる。S 24、S 25は比較的大型で厚みがある。S 24は上下端部を欠損しているが、表裏左右の四面が利用されており、表裏面が緩やかに内湾する。S 25は欠損のため全体の形状が不明であるが、正面と下面部に研磨による線状痕、下面部に沈線が認められる。S 26は厚さ2.5cmと中型で、表面が利用され、やや内湾している。

註釈

(註1) 赤木三郎氏のご教示による。

第6章 自然科学分析

第1節 坂長村上遺跡・坂長道端中遺跡におけるテフラ分析

株式会社 古環境研究所

1. テフラ分析

はじめに

鳥取県西部とその周辺に分布する後期更新世以降に堆積した地層や土壤の中には、大山や三瓶など中国地方に分布する火山のほか、南九州地方や中九州地方などに位置する火山などから噴出したテフラ (tephra, 火山碎屑物、いわゆる火山灰) が数多く堆積している。テフラの中には、すでに噴出年代が明らかにされている指標テフラがあり、それらとの関係を求めるこことにより、地層の堆積年代や土壤の形成年代のみならず、遺構や遺物の層位や年代などについても知ることができるようになっている。

そこで、層位や詳細な年代が不明な遺物が検出された坂長村上遺跡・坂長道端中遺跡においても、A地点において採取送付された試料を対象に、火山ガラス比分析と火山ガラスの屈折率測定により指標テフラの降灰層準を明らかにして、遺物包含層をはじめとする土層の層位および年代に関する資料の収集を行うことになった。

火山ガラス比分析

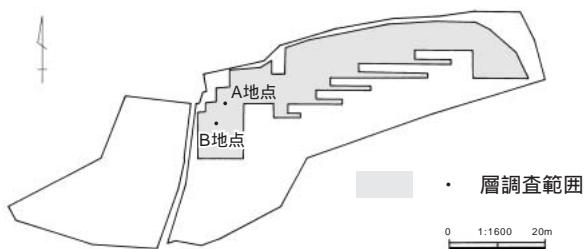
(1) 分析試料と分析方法

発掘調査担当者により採取された2試料 (V層)、さらにその下位から採取送付されたブロック状試料から分析者により採取された4試料 (VI層) の合計6点を対象に火山ガラス分析を行い、火山ガラスで特徴づけられるテフラの降灰層準の把握を行った。分析の手順は次の通りである。

- 1) 試料10~15gを秤量 (発掘調査担当者採取試料: 10g, ブロック試料: 15g)。
- 2) 超音波洗浄装置により泥分を除去。
- 3) 80°Cで恒温乾燥。
- 4) 分析篩により1/4-1/8mmの粒子を篩別。
- 5) 偏光顕微鏡下で250粒子を同定し、火山ガラスの形態・色調別比率を求める。

(2) 分析結果

火山ガラス比分析の結果をダイヤグラムにして第78図に、その内訳を第12表に示す。いずれの試料からも、比較的粗粒の軽石やスコリアは検出されなかったものの、細粒の火山ガラスを検出することができた。火山ガラスの比率は、試料6から試料5にかけてやや減少するものの、試料5より上位では上方にむかって比率が増大するような傾向にある。試料6では、無色透明のバブル型ガラス (3.2%) のほかに、繊維束状に発泡した



第77図 土壤サンプル採取地点

第1節 坂長村上遺跡・坂長道端中遺跡におけるテフラ分析

軽石型（1.6%）や分厚い中間型ガラス（0.8%）が含まれている。それより上位では、とくに無色透明のバブル型ガラスの比率が高い。もっともその比率が高い試料1では、このタイプのガラスは11.2%を占める。

屈折率測定

(1) 測定試料と測定方法

現段階における火山灰編年学における指標テフラとの同定の際、一般に小規模な噴火に由来するスコリアや岩片に富むテフラを除くテフラについては、テフラ粒子の屈折率測定が必須になっている。そこで、比較的火山ガラスの比率が高いV層の試料のうち、より尖頭器の検出層準に近い試料2に含まれる火山ガラスの屈折率（n）について、温度変化型屈折率測定装置(MAIOT)を利用して、測定を実施した。

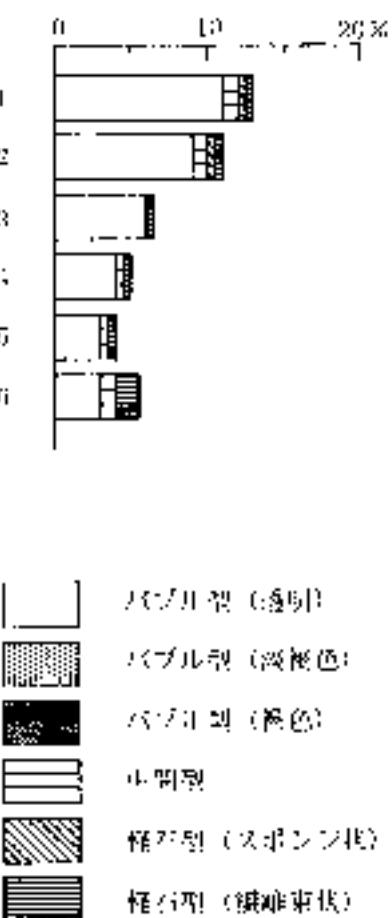
(2) 測定結果

屈折率測定の結果を第13表に示す。試料2に含まれる火山ガラスの屈折率（n）は、1.498-1.501である。

考察

試料2（V層）に含まれる火山ガラスのうち、少なくともバブル型ガラスについては、無色透明であることや、その屈折

火山ガラス比



第78図 火山ガラス比ダイヤグラム

第12表 火山ガラス比分析結果

地点・土層	試料	bw(cl)	bw(pb)	bw(br)	md	pm(sp)	pm(fb)	その他	合計
A地点 V層	1	28	0	0	2	1	1	218	250
	2	22	0	0	3	1	1	223	250
A地点 VI層	3	15	0	0	0	0	1	234	250
	4	10	0	0	1	0	1	238	250
	5	8	0	0	1	0	1	240	250
	6	8	0	0	2	0	4	236	250

数字は粒子数。bw：バブル型、md：中間型、pm：軽石型、cl：透明、pb：淡褐色、br：褐色、sp：スポンジ状、fb：繊維束状。

第13表 屈折率測定結果

地点	試料	火山ガラス (n)
A地点 V層	2	1.498-1.501

屈折率の測定は、温度変化型屈折率測定装置（MAIOT）による。

率などから、約2.4～2.5万年前*1に南九州地方の姶良カルデラから噴出し、日本列島一帯のみならず朝鮮半島や中国さらにロシアからも検出されている姶良Tn火山灰（AT, 町田・新井, 1976, 1992, 松本ほか, 1987, 村山ほか, 1993, 池田ほか, 1995）に由来すると考えられる。この無色透明のバブル型ガラスは、最下位の試料6でも認められ、今回分析の対象となった土層全体が、AT降灰後に最終的に形成されているように思われる。ただ、送付されたブロック状試料には細かいクラックが多く入っており、クラックの形成に伴う上方からのテフラ粒子の混入も完全には否定できない。AT起源の火山ガラスの明瞭な濃集層準が認められないことも合わせ、ATの降灰層準に関するこれ以上の言及は難しい。テフラの研究者による土層の観察と試料採取の実施を望みたい。

なお、本遺跡とその周辺では、やはりテフラ分析により、約6,300年前*1に南九州の鬼界カルデラから噴出した鬼界アカホヤ火山灰（K-Ah, 町田・新井, 1978）も検出されている（たとえば米子市域）。したがって、今回の分析でもK-Ahの存在の有無についても注意が払われた。しかしながら、K-Ahに多く含まれる褐色のバブル型ガラスは今回の分析では検出されなかった。したがって、今回の分析対象層準については、ATより上位でK-Ahより下位にあると思われる。とくに、AT起源の火山ガラスの比率がより高いV層については、その可能性が高いと言えよう。このことは、V層について、考古学的な立場から縄文時代草創期の可能性を考えられていることと矛盾しない。

まとめ

坂長村上遺跡・坂長道端中遺跡A地点において採取された試料を対象として、火山ガラス比分析と火山ガラスの屈折率測定を行った。その結果、後期旧石器時代の重要な指標テフラである姶良Tn火山灰（AT, 約2.4～2.5万年前^{註1}）に由来する火山ガラスを検出することができた。少なくとも尖頭器が検出された遺物包含層（V層）については、AT降灰後で鬼界アカホヤ火山灰（K-Ah, 約6,300年前*1）降灰前に形成された土層である可能性が高いと推定される。

（註1）：放射性炭素（C¹⁴）年代。暦年較正年代については、ATが約2.6～2.9万年前、K-Ahが約7,300年前と考えられている（町田・新井, 2003）

文献

- 池田晃子・奥野 充・中村俊夫・筒井正明・小林哲夫（1995）南九州、姶良カルデラ起源の大隅降下軽石と入戸火碎流中の炭化樹木の加速器質量分析法によるC¹⁴年代。第四紀研究, 34, p.377-379.
- 町田 洋・新井房夫（1976）広域に分布する火山灰—姶良Tn火山灰の発見とその意義。科学, 46,p.339-347.
- 町田 洋・新井房夫（1978）南九州鬼界カルデラから噴出した広域テフラーアカホヤ火山灰。第四紀研究, 17, p.143-163.
- 町田 洋・新井房夫（1992）火山灰アトラス。東京大学出版会, 276p.
- 町田 洋・新井房夫（2003）新編火山灰アトラス。東京大学出版会, 336p.
- 松本英二・前田保夫・竹村恵二・西田史朗（1987）姶良Tn火山灰（AT）のC¹⁴年代。第四紀研究, 26, p.79-83.
- 村山雅史・松本英二・中村俊夫・岡村 真・安田尚登・平 朝彦（1993）四国沖ピストンコア試料を用いたAT火山灰噴出年代の再検討—タンデトロン加速器質量分析計による浮遊性有孔虫のC¹⁴年代。地質雑, 99, p.787-798.

2. 花粉分析

はじめに

花粉分析は、一般に低湿地の堆積物を対象とした比較的広域な植生・環境の復原に応用されており、遺跡調査においては遺構内の堆積物などを対象とした局地的な植生の推定も試みられている。花粉などの植物遺体は、水成堆積物では保存状況が良好であるが、乾燥的な環境下の堆積物では分解されて残存していない場合もある。

試料

分析試料は、A地点より採取された試料1、試料2（ともにV層、ローム漸移層：暗黄褐色シルト）、試料3（VI層、ローム層：淡黄褐色土）の3点、B地点より採取された試料4、試料5（ともにV層、ローム漸移層：暗黄褐色シルト）、試料6（VI層、ローム層：淡黄褐色土）の3点の計6点である。試料採取箇所を分析結果の柱状図（第79図）に示す。

方法

花粉の分離抽出は、中村（1973）の方法をもとに、以下の手順で行う。

- 1) 0.5%リン酸三ナトリウム（12水）溶液を加え15分間湯煎
- 2) 水洗処理の後、0.5mmの篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法で砂粒を除去
- 3) 25%フッ化水素酸溶液を加えて30分放置
- 4) 水洗処理の後、冰酢酸によって脱水し、アセトトリシス処理（無水酢酸9：濃硫酸1のエルドマン氏液を加え1分間湯煎）を施す
- 5) 再び冰酢酸を加えて水洗処理
- 6) 沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色し、グリセリンゼリーで封入してプレパラート作成
- 7) 検鏡・計数

検鏡は、生物顕微鏡によって300～1000倍で行う。花粉の同定は、島倉（1973）および中村（1980）をアトラスとして、所有の現生標本との対比で行う。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類し、複数の分類群にまたがるものはハイフン（-）で結んで示す。イネ属については、中村（1974, 1977）を参考にして、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して同定しているが、個体変化や類似種もあることからイネ属型とする。

結果

(1) 分類群

出現した分類群は、樹木花粉7、樹木花粉と草本花粉を含むもの1、草本花粉7、シダ植物胞子1形態の計16である。これらの学名と和名および粒数を第14表に示し、花粉数が100個以上計数できた試料は、周辺の植生を復元するために花粉総数を基数とする花粉ダイアグラムを第79図に示す。主要な分類群は図版57に示す。なお、寄生虫卵についても観察したが検出されなかった。

以下に出現した分類群を記載する。

[樹木花粉]

ツガ属、マツ属複維管束亜属、ハンノキ属、クリ、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、

エノキ属-ムクノキ

[樹木花粉と草本花粉を含むもの]

クワ科-イラクサ科

[草本花粉]

ガマ属-ミクリ属、イネ科、チドメグサ亜科、セリ亜科、タンポポ亜科、キク亜科、ヨモギ属
[シダ植物胞子]

三条溝胞子

(2) 花粉群集の特徴

地点ごとに下位より花粉構成と花粉組成の変化の特徴を記載する。

1) A 地点

下位より、VI層（試料3）では花粉が検出されない。V層下位（試料2）は花粉密度が極めて低く、草本花粉のイネ科がわずかに検出される。V層上位（試料1）は花粉密度が極めて低い。

2) B 地点

下位より、VI層（試料6）では花粉が検出されない。V層下位（試料5）は花粉密度が極めて低く、樹木花粉のエノキ属-ムクノキと草本花粉のイネ科がわずかに検出される。V層上位（試料4）は花粉密度がわずかに高くなり、草本花粉が優占する。特にヨモギ属が優占し、次いでイネ科が多く出現する。他にチドメグサ亜科、セリ亜科、タンポポ亜科、キク亜科が出現する。樹木花粉では、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、ツガ属、マツ属複維管束亜属、ハンノキ属、クリが低率に出現する。

花粉分析から推定される植生と環境

地点ごとに下位より植生および環境の推定を行う。

1) A 地点

VI層（試料3）、V層下位（試料2）、V層上位（試料1）からはイネ科がわずかに検出されるのみで、花粉などの有機質の分解される比較的乾燥した環境が推定される。

2) B 地点

VI層（試料6）、V層下位（試料5）は花粉が検出されないかわずかな検出であり、花粉などの有機質の分解される比較的乾燥した環境が推定される。V層上位（試料4）では、ヨモギ属、イネ科を主にチドメグサ亜科、セリ亜科、タンポポ亜科、キク亜科の人里植物ないし耕地雑草が分布し、草本が優勢な乾燥した人為環境の分布が推定される。近隣に森林は分布せず、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、ツガ属、マツ属複維管束亜属、ハンノキ属、クリ等の樹木の分布が推定される。

まとめ

坂長村上遺跡・坂長道端中遺跡のA地点とB地点において花粉分析を行った。その結果、いずれの地点も花粉が検出されないかわずかな検出であり、草本の生育する比較的乾燥した環境が推定された。なおB地点のV層上位は、ヨモギ属、イネ科を主とする人里植物ないし耕地雑草が優勢に分布し、乾燥した人為環境の分布が推定された。

第1節 坂長村上遺跡・坂長道端中遺跡におけるテフラ分析

参考文献

金原正明 (1993) 花粉分析法による古環境復原. 新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法, 角川書店, p.248-262.

島倉巳三郎 (1973) 日本植物の花粉形態. 大阪市立自然科学博物館収蔵目録第5集, 60p.

中村純 (1973) 花粉分析. 古今書院, p.82-110.

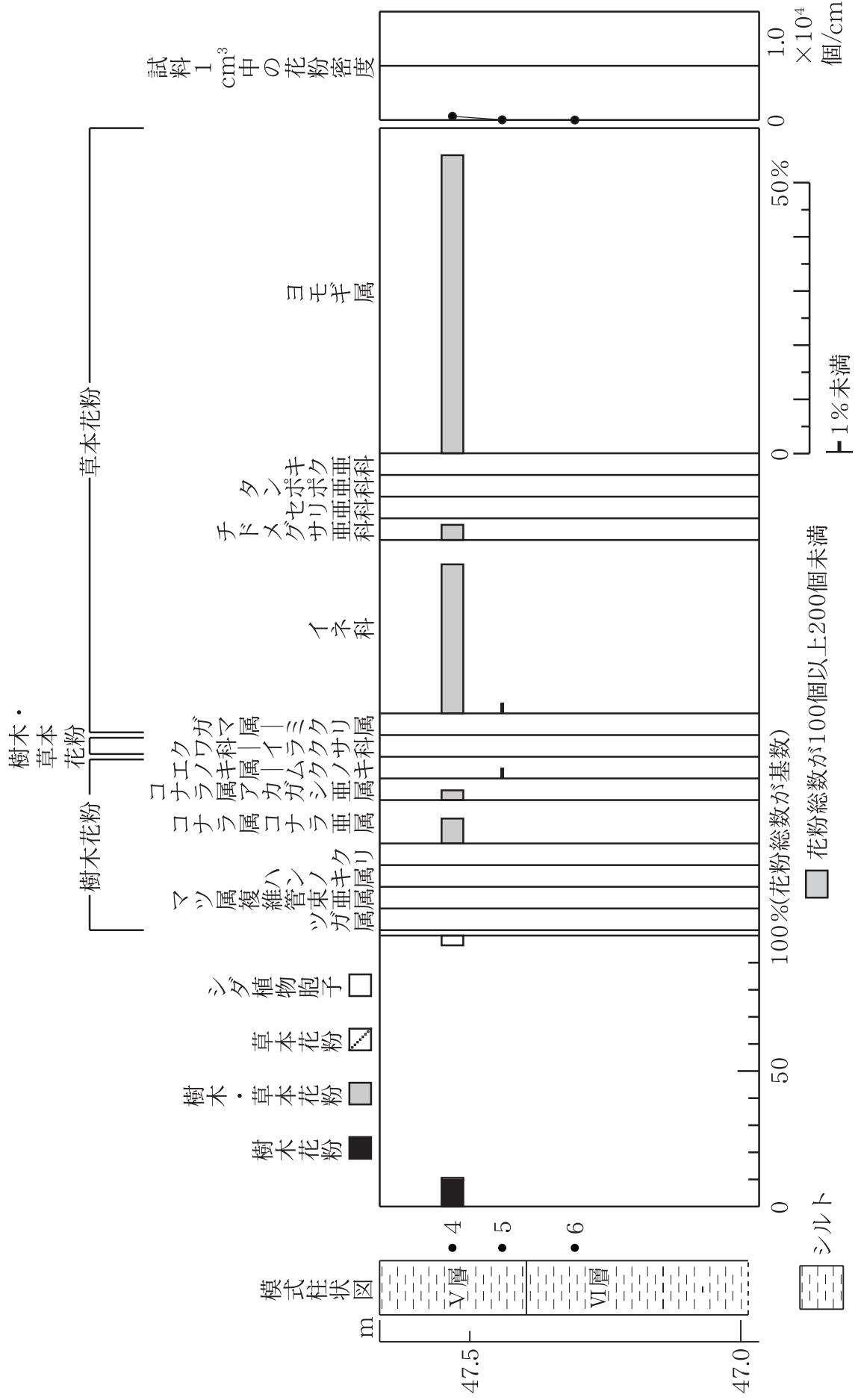
中村純 (1974) イネ科花粉について、とくにイネ (*Oryza sativa*) を中心として. 第四紀研究, 13, p.187-193.

中村純 (1977) 稲作とイネ花粉. 考古学と自然科学, 第10号, p.21-30.

中村純 (1980) 日本産花粉の標徴. 大阪自然史博物館収蔵目録第13集, 91p.

第14表 坂長村上遺跡・坂長道端中遺跡V・VI層における花粉分析結果

分類群	和名	A地点			B地点		
		V層 1	VI層 2	3	V層 4	VI層 5	6
学名							
Arboreal pollen	樹木花粉						
<i>Tsuga</i>	ツガ属				1		
<i>Pinus subgen. Diploxyylon</i>	マツ属複維管束亜属				1		
<i>Alnus</i>	ハンノキ属				1		
<i>Castanea crenata</i>	クリ				1		
<i>Quercus subgen. Lepidobalanus</i>	コナラ属コナラ亜属				5		
<i>Quercus subgen. Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属				2		
<i>Celtis-Aphananthe aspera</i>	エノキ属-ムクノキ					1	
Arboreal · Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉						
Moraceae-Urticaceae	クワ科-イラクサ科				1		
Nonarboreal pollen	草本花粉						
<i>Typha-Sparganium</i>	ガマ属-ミクリ属				1		
Gramineae	イネ科			1	30	1	
Hydrocotyloideae	チドメグサ亜科				3		
Apioideae	セリ亜科				1		
Lactucoideae	タンポポ亜科				1		
Asteroideae	キク亜科				1		
<i>Artemisia</i>	ヨモギ属				60		
Fern spore	シダ植物胞子						
Trilate type spore	三条溝胞子				4		
Arboreal pollen	樹木花粉	0	0	0	11	1	0
Arboreal · Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉	0	0	0	1	0	0
Nonarboreal pollen	草本花粉	0	1	0	97	1	0
Total pollen	花粉総数	0	1	0	109	2	0
Pollen frequencies of 1cm ³	試料1cm ³ 中の花粉密度	0.0	0.8	0.0	3.4	1.8	0.0
				×10	×10 ²	×10	
Unknown pollen	未同定花粉	0	0	0	5	0	0
Fern spore	シダ植物胞子	0	0	0	4	0	0
Helminth eggs	寄生虫卵	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)
Digestion rimeins	明らかな消化残渣	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)
Charcoal fragments	微細炭化物	(-)	(-)	(-)	(+)	(-)	(-)



第79図 B地点における花粉ダイアグラム

第2節 坂長村上遺跡・坂長道端中遺跡における土壤分析

株式会社 古環境研究所

1. 植物珪酸体分析

はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内に珪酸 (SiO_2) が蓄積したもので、植物が枯れたあともガラス質の微化石（プラント・オパール）となって土壤中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壤などから検出して同定・定量する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている（杉山, 2000）。また、イネの消長を検討することで埋蔵水田跡の検証や探査も可能である（藤原・杉山, 1984）。

試料

分析試料は、第27図のB-B'ラインのⅡ層（暗褐色シルト：古代包含層）、Ⅲ層（黒褐色シルト：古代包含層）、Ⅳ層（黒褐色シルト）から採取された計3点である。試料採取箇所を分析結果の柱状図（第80図）に示す。

分析方法

植物珪酸体の抽出と定量は、ガラスピーズ法（藤原, 1976）を用いて、次の手順で行った。

- 1) 試料を105°Cで24時間乾燥（絶乾）
- 2) 試料約1gに対し直径約40 μm のガラスピーズを約0.02g添加（電子分析天秤により0.1mgの精度で秤量）
- 3) 電気炉灰化法（550°C・6時間）による脱有機物処理
- 4) 超音波水中照射（300W・42KHz・10分間）による分散
- 5) 沈底法による20 μm 以下の微粒子除去
- 6) 封入剤（オイキット）中に分散してプレパラート作成
- 7) 検鏡・計数

同定は、400倍の偏光顕微鏡下で、おもにイネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体を対象として行った。計数は、ガラスピーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスピーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスピーズ個数の比率をかけて、試料1g中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重（1.0と仮定）と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位： 10^{-5}g ）をかけて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。これにより、各植物の繁茂状況や植物間の占有割合などを具体的にとらえることができる。イネの換算係数は2.94、ヨシ属（ヨシ）は6.31、ススキ属（ススキ）は1.24、メダケ節は1.16、ネザサ節は0.48、チマキザサ節・チシマザサ節は0.75、ミヤコザサ節は0.30である（杉山, 2000）。タケ亜科については、植物体生産量の推定値から各分類群の比率を求めた。

分析結果

検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を第15表および第80図に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を図版58に示す。

[イネ科]

イネ、キビ族型、ヨシ属、ススキ属型（おもにススキ属）、ウシクサ族A（チガヤ属など）、ウシクサ族B（大型）

[イネ科－タケ亜科]

メダケ節型（メダケ属メダケ節・リュウキュウチク節、ヤダケ属）、ネザサ節型（おもにメダケ属ネザサ節）、チマキザサ節型（ササ属チマキザサ節・チシマザサ節など）、ミヤコザサ節型（ササ属ミヤコザサ節など）、未分類等

[イネ科－その他]

表皮毛起源、棒状珪酸体（おもに結合組織細胞由来）、未分類等

[樹木]

その他

考察

(1) 稲作跡の検討

水田跡（稻作跡）の検証や探査を行う場合、一般にイネの植物珪酸体（プラント・オパール）が試料1gあたり5,000個以上と高い密度で検出された場合に、そこで稻作が行われていた可能性が高いと判断している（杉山、2000）。ただし、密度が3,000個/g程度でも水田遺構が検出される事例があることから、ここでは判断の基準を3,000個/gとして検討を行った。

B-B'ラインでは、Ⅱ層（試料1）からIV層（試料3）までの層準について分析を行った。その結果、これらのすべての試料からイネが検出されたが、密度は700～1,400個/gと低い値である。イネの密度が低い原因としては、稻作が行われていた期間が短かったこと、土層の堆積速度が速かったこと、採取地点が畦畔など耕作面以外であったこと、および上層や他所からの混入などが考えられる。

(2) 植物珪酸体分析から推定される植生と環境

イネ以外の分類群では、各層ともネザサ節型が多量に検出され、メダケ節型も比較的多く検出された。また、キビ族型、ヨシ属、ススキ属型、ウシクサ族A、ミヤコザサ節型なども認められた。おもな分類群の推定生産量によると、各層ともネザサ節型が優勢である。

以上の結果から、各層の堆積当時は、メダケ属（おもにネザサ節）を主体としてススキ属やチガヤ属、キビ族、ササ属（おもにミヤコザサ節）なども生育する日当たりの良い比較的乾燥した環境であったと考えられ、部分的にヨシ属などが生育する湿地的なところも見られたと推定される。

まとめ

植物珪酸体（プラント・オパール）分析の結果、古墳時代以前の包含層であるIV層と古代包含層のⅡ、Ⅲ層では少量ながらイネが検出され、調査地点もしくはその近辺で稻作が行われていた可能

第2節 坂長村上遺跡・坂長道端中遺跡における土壤分析

性が認められた。

各層の堆積当時は、メダケ属（おもにネザサ節）を主体としてススキ属やチガヤ属、キビ族、ササ属（おもにミヤコザサ節）なども生育する日当たりの良い比較的乾燥した環境であったと考えられ、部分的にヨシ属などが生育する湿地的なところも見られたと推定される。

文献

杉山真二（2000）植物珪酸体（プラント・オパール）。考古学と植物学。同成社, p.189-213.

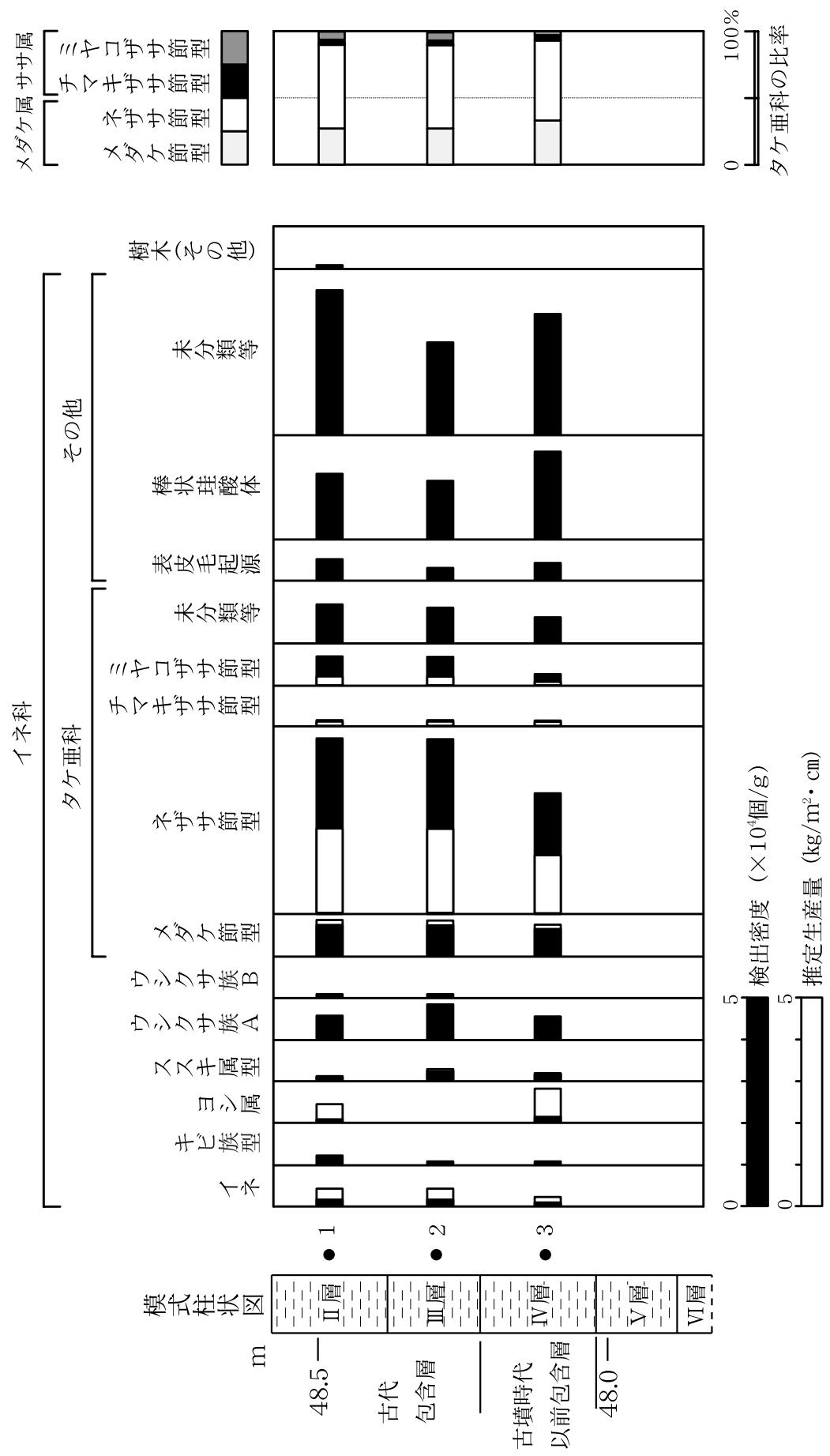
藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)－数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法－。考古学と自然科学, 9, p.15-29.

藤原宏志・杉山真二（1984）プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)－プラント・オパール分析による水田址の探査－。考古学と自然科学, 17, p.73-85.

第15表 坂長村上遺跡・坂長道端中遺跡における植物珪酸体分析結果

検出密度（単位：×100個/g）

分類群	学名	地点・試料	B-B'ライン		
			1	2	3
イネ科	Gramineae (Grasses)				
イネ	<i>Oryza sativa</i>		14	14	7
キビ族型	Paniceae type		21	7	7
ヨシ属	<i>Phragmites</i>		7		13
ススキ属型	<i>Miscanthus</i> type		7	21	13
ウシクサ族A	Andropogoneae A type		56	83	54
ウシクサ族B	Andropogoneae B type		7	7	
タケ亜科	Bambusoideae (Bamboo)				
メダケ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>ipponocalamus</i>		77	76	67
ネザサ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nezasa</i>		429	427	295
チマキザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Sasa</i> etc.		14	14	13
ミヤコザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Crassinodi</i>		70	69	27
未分類等	Others		91	83	60
その他のイネ科	Others				
表皮毛起源	Husk hair origin		49	28	40
棒状珪酸体	Rod-shaped		155	138	208
未分類等	Others		345	220	288
樹木起源	Arboreal				
その他	Others		7		
植物珪酸体総数	Total		1351	1184	1093
おもな分類群の推定生産量（単位：kg/m ² ・cm）：試料の仮比重を1.0と仮定して算出					
イネ	<i>Oryza sativa</i>		0.41	0.40	0.20
ヨシ属	<i>Phragmites</i>		0.44		0.85
ススキ属型	<i>Miscanthus</i> type		0.09	0.26	0.17
メダケ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nipponocalamus</i>		0.90	0.88	0.78
ネザサ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nezasa</i>		2.06	2.05	1.42
チマキザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Sasa</i> etc.		0.11	0.10	0.10
ミヤコザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Crassinodi</i>		0.21	0.21	0.08
タケ亜科の比率（%）					
メダケ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nipponocalamus</i>		27	27	33
ネザサ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nezasa</i>		63	63	60
チマキザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Sasa</i> etc.		3	3	4
ミヤコザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Crassinodi</i>		6	6	3



第80図 II～VI層における植物珪酸体分析結果

2. 花粉分析

はじめに

花粉分析は、一般に低湿地の堆積物を対象とした比較的広域な植生・環境の復原に応用されており、遺跡調査においては遺構内の堆積物などを対象とした局地的な植生の推定も試みられている。花粉などの植物遺体は、水成堆積物では保存状況が良好であるが、乾燥的な環境下の堆積物では分解されて残存していない場合もある。

試料

分析試料は、B-B'ラインのII層～IV層から採取された計3点である。試料採取箇所を分析結果の柱状図（第81図）に示す。これらは、植物珪酸体分析に用いられたものと同一試料である。

方法

花粉の分離抽出は、中村（1973）の方法をもとに、以下の手順で行った。

- 1) 0.5%リン酸三ナトリウム（12水）溶液を加えて15分間湯煎
- 2) 水洗処理の後、0.5mmの篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法で砂粒を除去
- 3) 25%フッ化水素酸溶液を加えて30分放置
- 4) 水洗処理の後、冰酢酸によって脱水し、アセトトリシス処理（無水酢酸9：濃硫酸1のエルドマン液を加え1分間湯煎）を施す
- 5) 再び冰酢酸を加えて水洗処理
- 6) 沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色し、グリセリンゼリーで封入してプレパラート作成
- 7) 検鏡・計数

検鏡は、生物顕微鏡によって300～1000倍で行った。花粉の同定は、島倉（1973）および中村（1980）をアトラスとして、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類し、複数の分類群にまたがるものはハイフン（-）で結んで示した。イネ属については、中村（1974, 1977）を参考にして、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して同定しているが、個体変化や類似種もあることからイネ属型とした。

結果

(1) 分類群

出現した分類群は、樹木花粉10、樹木花粉と草本花粉を含むもの3、草本花粉12、シダ植物胞子2形態の計27である。分析結果を第16表に示し、花粉数が100個以上計数された試料については花粉総数を基数とする花粉ダイアグラム（第81図）を示した。主要な分類群について顕微鏡写真を図版59に示す。以下に出現した分類群を記載する。

[樹木花粉]

モミ属、マツ属複維管束亜属、スギ、サワグルミ、ハンノキ属、クマシデ属－アサダ、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、ニレ属－ケヤキ、タニウツギ属

[樹木花粉と草本花粉を含むもの]

クワ科ーイラクサ科、マメ科、ウコギ科

[草本花粉]

イネ科、イネ属型、タデ属サナエタデ節、ソバ属、アカザ科ーヒユ科、ナデシコ科、アブラナ科、チドメグサ亜科、セリ亜科、タンポポ亜科、キク亜科、ヨモギ属

[シダ植物胞子]

单条溝胞子、三条溝胞子

(2) 花粉群集の特徴

IV層（試料3）からII層（試料1）にかけては、草本花粉のヨモギ属が卓越し、イネ科も比較的多い。また、アカザ科ーヒユ科、キク亜科、アブラナ科、タンポポ亜科などが低率に伴われ、IV層（試料3）ではイネ属型、III層（試料2）ではソバ属も認められた。樹木花粉では、マツ属複維管束亜属、コナラ属コナラ亜属などが検出されたが、いずれも低率である。

花粉分析から推定される植生と環境

古墳時代以前の包含層であるIV層と古代包含層のII、III層の堆積当時は、ヨモギ属を主体としてイネ科なども生育する日当たりの良い比較的乾燥した人里の環境であったと考えられる。また、IV層ではイネ属型、III層ではソバ属が認められ、周辺でこれらを栽培する農耕が行われていたことが示唆される。森林植生としては、周辺地域にマツ類やナラ類などが生育していたと考えられるが、遺跡近辺にはほとんど分布していなかったと推定される。

文献

金原正明（1993）花粉分析法による古環境復原。新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法、角川書店、p.248-262.

島倉巳三郎（1973）日本植物の花粉形態。大阪市立自然科学博物館収蔵目録第5集、60p.

中村純（1973）花粉分析。古今書院、p.82-110.

中村純（1974）イネ科花粉について、とくにイネ (*Oryza sativa*) を中心として。第四紀研究, 13, p.187-193.

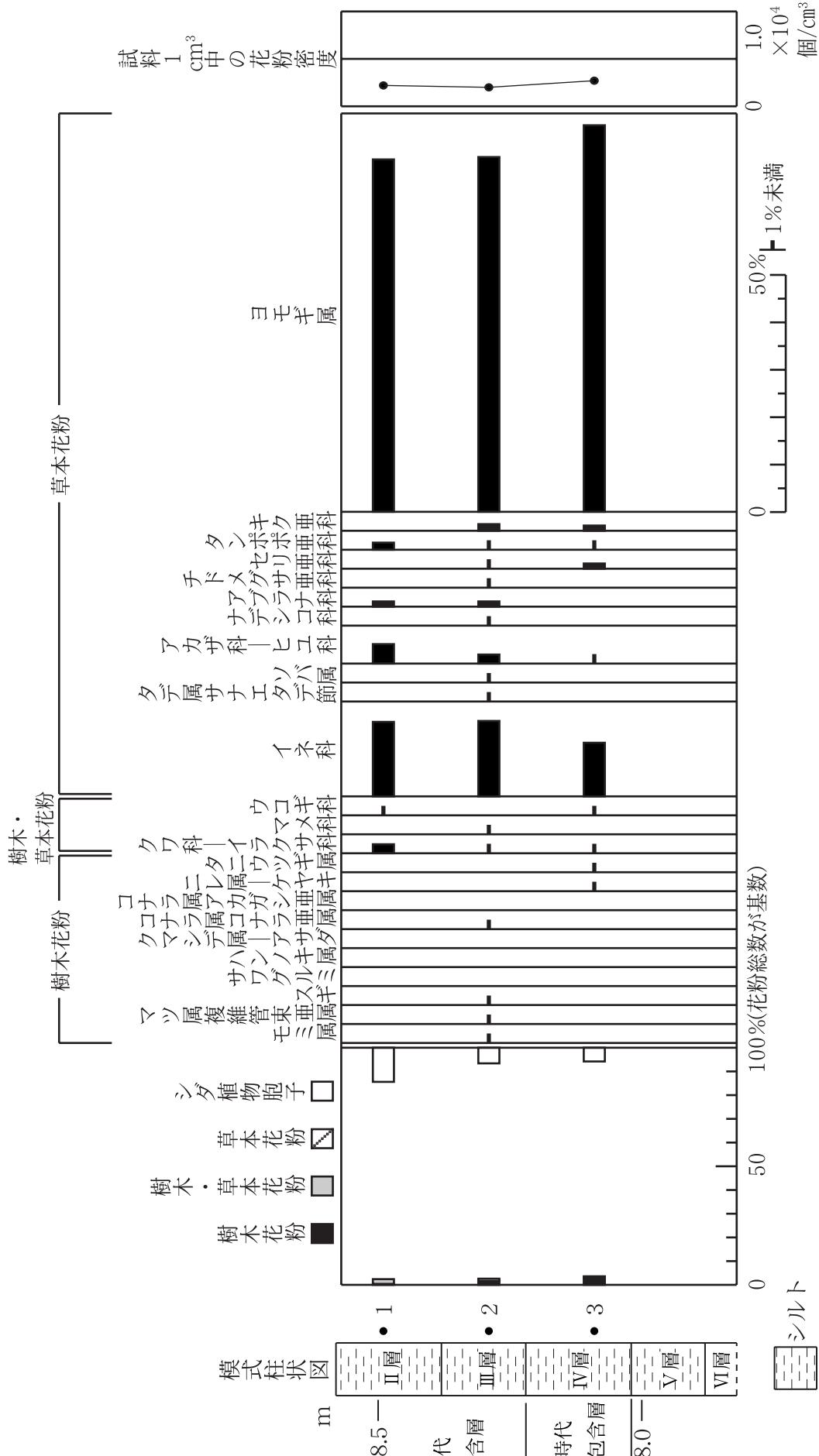
中村純（1977）稻作とイネ花粉。考古学と自然科学、第10号、p.21-30.

中村純（1980）日本産花粉の標徴。大阪自然史博物館収蔵目録第13集、91p.

第2節 坂長村上遺跡・坂長道端中遺跡における土壤分析

第16表 坂長村上遺跡・坂長道端中遺跡における花粉分析結果

学名	分類群	B-B'ライン		
		II層 1	III層 2	IV層 3
Arboreal pollen	樹木花粉			
<i>Abies</i>	モミ属		1	
<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxyylon</i>	マツ属複維管束亜属	1	2	1
<i>Cryptomeria japonica</i>	スギ		2	
<i>Pterocarya rhoifolia</i>	サワグルミ			1
<i>Alnus</i>	ハンノキ属			1
<i>Carpinus-Ostrya japonica</i>	クマシデ属-アサダ			1
<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i>	コナラ属コナラ亜属		1	2
<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属			3
<i>Ulmus-Zelkova serrata</i>	ニレ属-ケヤキ			1
<i>Weigela</i>	タニウツギ属			1
Arboreal · Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉			
Moraceae-Urticaceae	クワ科-イラクサ科	5	1	1
Leguminosae	マメ科		3	1
Araliaceae	ウコギ科	1		1
Nonarboreal pollen	草本花粉			
Gramineae	イネ科	42	58	41
<i>Oryza</i> type	イネ属型			1
<i>Polygonum</i> sect. <i>Persicaria</i>	タデ属サナエタデ節		1	
<i>Fagopyrum</i>	ソバ属		1	
Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科-ヒュ科	11	7	2
Caryophyllaceae	ナデシコ科		1	
Cruciferae	アブラナ科	3	4	
Hydrocotyloideae	チドメグサ亜科	1	1	
Apioideae	セリ亜科		2	4
Lactucoideae	タンポポ亜科	4	2	1
Asteroideae	キク亜科	1	5	4
<i>Artemisia</i>	ヨモギ属	199	273	295
Fern spore	シダ植物胞子			
Monolate type spore	单条溝胞子	3	3	9
Trilate type spore	三条溝胞子	42	23	13
Arboreal pollen	樹木花粉	1	6	11
Arboreal · Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉	6	4	3
Nonarboreal pollen	草本花粉	261	355	348
Total pollen	花粉総数	268	365	362
Pollen frequencies of 1cm ³	試料 1 cm ³ 中の花粉密度	2.2 ×10 ³	2.0 ×10 ³	2.7 ×10 ³
Unknown pollen	未同定花粉	4	3	6
Fern spore	シダ植物胞子	45	26	22
Helminth eggs	寄生虫卵	(-)	(-)	(-)
Digestion rimeins	明らかな消化残渣	(-)	(-)	(-)
Charcoal fragments	微細炭化物	(+)	(+)	(+)



第81図 II~VI層における花粉ダイアグラム